岩手県埋文センター文化財調査報告書第44集

金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書

―― Ⅲ ――

水沢市　竈堂遺跡

東大畑遺跡

大曽根遺跡

(財)岩手県埋蔵文化財センター

建設省岩手工事事務所

金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書

— Ⅲ —

水沢市　竈堂遺跡

東大畑遺跡

大曽根遺跡

序

岩手県は四国四県に匹敵する広大な面積を有し、その広大な県土に存在する埋蔵文化財包蔵地は、県教育委員会文化課調査によりますと4.719ヶ所の多きとなっております。この数は今後の精密な分布調査によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先の貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を守り伝えることが我々の責務と考えている所であります。

岩手県を南から北に縦断する国道4号線は181.8㎞の長きにわたっております。この国道4号線は自動車時代の到来により交通事情が悪化し、特に市街地における交道渋帯を引き起して市民生活へも影響をもたらしております。これの解消のため県下各地においてバイパス開通の要望が高まっております。

本報告書にかかわる金ヶ崎バイパスも金ヶ崎町中心部を通る国道4号線の交通渋滞緩和のため建設省岩手工事事務所によって建設されるものであります。このバイパス路線内に6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が存在しておりました。これらの包蔵地は建設省と県文化課との協議によって調査の上記録保存することとしました。本年度からセンターに新たに資料課を設置し、鋭意報告書作成に取り組みました。本報告書は昭和51年度と昭和52年度に発掘調査を行ないました大曽根遺跡、竈堂遺跡、東大畑遺跡の計3遺跡を収録いたしました。本報告書の内容については不十分な点が多々あるとは思いますが、いささかでも関係各位の参考に供され期学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教委、委託者をはじめ関係各位に多大のご協力、ご援助を頂きましたことを厚く感謝申し上げ、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和57年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

理事長　新　里　　盈

(財)岩手県埋蔵文化財センター役職員名簿

役　員

理事長	新里　盈	(県教育長)
副理事長	中原良一	(県教育次長)
常務理事	菅原一郎	(センター所長)
理　事	吉田良和	(県農政部次長)
〃	田代太志	(県林業水産部次長)
〃	後藤光雄	(県土木部次長)
〃	板橋　源	(県立博物館長)
〃	草間俊一	(県立盛岡短大学長)
〃	小形信夫	(県民俗の会々長)
監　事	白石丈雄	(県教委総務課長)
〃	及川久男	(県教委財務課長)

職　員

所　長	菅原一郎
副所長	小野寺　登
総務課長	小笠原喜一
庶務係長	岡沢成治
主　事	佐藤久四郎
〃	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男
調査課長	嶋　千秋
主任専門調査員	近藤宗光
〃	遠藤勝博
〃	国生　尚
専門調査員	村上達夫
〃	畠山靖彦
〃	朝野孝二
〃	菊池利和
〃	鈴木恵治
〃	小平忠孝
〃	大原一則
〃	渡辺洋一
〃	田鎖寿夫
〃	佐々木嘉直
〃	栃沢満郎
専門調査員	平井　進
	種市　進
	鈴木隆英
	三浦謙一
	岩渕　久
	光井文行
	佐藤　勝
	高橋義介
	佐々木清文
	酒井宗孝
資料課長	瀬川司男
専門調査員	高橋与右衛門
〃	四井謙吉
〃	本沢慎輔
〃	工藤利幸
〃	高橋文夫
〃	中川重紀
〃	松野恒夫
県立文化財専門員	渡辺洋一

例　　言

1．本書は金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書３分冊の第３分冊として、大曽根遺跡、竈堂、東大畑遺跡の３遺跡を収録したものである。

2．各遺跡の調査主体、調査年度、担当者は次の通りである。

竈堂遺跡	県埋文センター	昭和52年度	中川重紀
東大畑遺跡	県埋文センター	昭和52年度	高橋信夫、中川重紀、高橋文夫、三浦謙一 山口了紀
大曽根遺跡	県文化課	昭和51年度	高橋信夫、渋谷英保

3．本報告書の執筆分担は次の通りである。

Ⅰ序論	1．調査に至る経過	瀬川司男
	2．遺跡の環境・周辺の遺跡	山口　了紀
Ⅱ竈堂遺跡		中川　重紀
Ⅲ東大畑遺跡		瀬川　司男、中川　重紀
Ⅳ大曽根遺跡		高橋与右衛門

4．発掘調査において次の機関の御協力を頂いた。

水沢市教育委員会

5．石質鑑定は佐藤二郎氏（大船渡農業高校）に依頼した。

6．本報告書に使用した実測図、写真は担当者が分担し、当センター室内作業補助員の協力を得て作製した。

7．参考文献等は、紙数の関係上、割愛した部分もある。

8．発掘調査には、水沢市の方々に御協力いただいた。

本 文 目 次

序
例　言
調査に至る経過……1
遺跡の環境……4

竈 堂 遺 跡

Ⅰ　遺跡の位置……10
Ⅱ　調査方法……10
Ⅲ　基本層序……15
Ⅳ　検出された遺構と遺物……16
(1)　竪穴住居址……16
(2)　ピット……17
(3)　溝……18
(4)　遺構外の出土遺物……18
Ⅴ　まとめ……19

東 大 畑 遺 跡

Ⅰ　遺跡の位置……32
Ⅱ　調査方法……32
Ⅲ　基本層序……35
Ⅳ　検出された遺構と遺物……36
(1)　竪穴住居址……36
(2)　ピット……58
Ⅴ　まとめ……59
(1)　遺構……59
(2)　遺物……66

大 曽 根 遺 跡

Ⅰ　はじめに……183
Ⅱ　遺跡の位置と立地……183
Ⅲ　調査の方法と概要……183
Ⅳ　検出された遺構と遺物……187
Ⅴ　まとめ……206
Ⅵ　さいごに……208

図 版 目 次

第１図…… 2
第２図…… 3
第３図……6

竈 堂 遺 跡

図版１　竈堂、東大畑遺跡付近の地形図…11
図版２　グリッド遺構配置図……13
図版３　基本土層模式図……15
図版４　Bi０３住居址……20
図版５　ピット類……21
図版６　Bi０３住居出土遺物(1)……22
図版７　Bi０３住居址出土遺物(2)……23
図版８　遺構外出土遺物……24

東 大 畑 遺 跡

図版１　グリッド遺構配置図……33
図版２　基本土層……35
図版３～７　１号住居址遺構、遺物……89
図版８～11　２・24号住居址遺構、遺物…94
図版12～16　３号住居址遺構、遺物……98
図版17　４・５号住居址遺構、遺物· 103
図版18～20　６号住居址遺構、遺物…… 104
図版21～22　８号住居址遺構、遺物…… 107
図版23～24　９号住居址遺構、遺物…… 109
図版25～26　10・11号住居址遺構、遺物· 111
図版27　12号住居址遺構、遺物…… 113
図版28　13号住居址遺構、遺物…… 114
図版29　14号住居址遺構、遺物…… 115
図版30～31　15号住居址遺構、遺物…… 116
図版32～33　16号住居址遺構、遺物…… 118
図版34～35　17号住居址遺構、遺物…… 120
図版36　18号住居址遺構、遺物…… 122
図版37～38　19号住居址遺構、遺物…… 123
図版39　20号住居址遺構、遺物…… 125
図版40　21号住居址遺構、遺物…… 126
図版41　22号住居址遺構、遺物…… 127
図版42　23号住居址遺構、遺物…… 128
図版43　25号住居址遺構、遺物…… 129
図版44　26号住居址遺構、遺物…… 130
図版45　27号住居址遺構、遺物…… 131
図版46　28・29号址遺構…… 132
図版47　29号址、30号住居址遺構、遺物 133
図版48～50　31・32号住居址遺構、遺物· 135
図版51　33号住居址遺構、遺物…… 139
図版52　35・36号住居址遺構、遺物· 140
図版53～54　37号住居址遺構、遺物…… 141
合口甕棺２号遺物…… 142
図版55～56　38号住居址遺構…… 143
図版57～58　ピット、合口甕棺遺構…… 145
図版59　合口甕棺１号遺構、遺物…147
図版60　勾玉・小玉、石帯…… 148
図版61　紡錘車、鉄製品…… 149
図版62～64　石鏃、石ヒ、石ベラ、その他 150

大 曽 根 遺 跡

第１図　遺跡と調査範囲……182
第２図　遺構配置図……185
第３図　遺構実測図……210
第４図　遺構実測図……211
第５図　遺構実測図……212
第６図　遺構実測図……213
第７図　遺構実測図……214
第８図　遺構実測図……215
第９図　遺構実測図……216
第10図　遺物実測図（土器）……217
第11図　遺物実測図（土器）……218
第12図　遺物実測図（土器）……219
第13図　土器拓本図……220
第14図　土器拓本図……221
第15図　土器拓本図……222
第16図　遺物実測図（石器）……223
第17図　遺物実測図（石器）……224
第18図　遺物実測図（石器）……225
第19図　遺物実測図（石器）……226
第20図　遺物実測図（石器）……227
第21図　遺物実測図（石器）……228
第22図　遺物実測図（石器）……229
第23図　遺物実測図（石器）……230

写真図版目次

竈　堂　遺　跡

1　遺跡の遠景その他……25
2　Bi０３住居址平面……26
3　ピット、溝平面……27
4　Bi０３住居址遺物……28
5　Bi０３住居址、ピット出土遺物……29
6　その他の出土遺物……30

東　大　畑　遺　跡

1　遺跡の全景その他……153
2　１・２・24号住居址平面……154
3　２・24・３号住居址平面……155
4　５・６号住居址平面……156
5　８・９号住居址平面……157
6　10・11・13号住居址平面……158
7　14・15・16号住居址平面……159
8　17・19・20・21号住居址平面……160
9　22・23・25号住居址平面……161
10　26・27・30・31号住居址平面……162
11　32・33・36・38号住居址……163
12　合口甕棺４、６、９、11、12、14Pit……164
13　住居址遺物……165
14　住居址遺物……166
15　住居址遺物……167
16　住居址遺物……168
17　住居址遺物……169
18　住居址遺物……170
19　住居址遺物……171
20　住居址遺物……172
21　住居址遺物……173
22　住居址遺物……174
23　住居址遺物……175
24　住居址遺物……176
25　住居址遺物……177
26　合口甕棺１・勾玉・小玉・紡垂車・石帯……178
27　鉄製品・石鏃・石ヒ・石ベラ類……179
28　スクレーパー・石斧・その他……180

大　曽　根　遺　跡

写真図版１　完掘後全景……231
写真図版２　遺構（住居址）……232
写真図版３　遺構（住居址・土坑）……233
写真図版４　遺構（土坑）……234
写真図版５　遺構（土坑）……235
写真図版６　遺構（土坑）……236
写真図版７　遺物（土師器）……237
写真図版８　遺物（須恵器・縄文土器）……238
写真図版９　遺物（縄文土器）……239
写真図版10　遺物（縄文土器・石器）……240
写真図版11　遺物（石器）……241
写真図版12　遺物（石器）……242

Ⅰ　調査に至る経過

列島改造論が昭和40年代を支配し、開発の波が全国に押し寄せ、全国各地に工事の音が高々と響きわたっていた。この波の押し寄せの遅れていた岩手県にも、東北縦貫自動車道、東北新幹線の二大公共事業が同時に押し寄せてきた。これらの開発は当然埋蔵文化財包蔵地を内包することとなり、両工事伴せて、 150ヶ所余が予定地内で確認された。この予定地内の遺跡の調査を含む対応が文化財保護行政側に迫まられる事となった。

岩手県では、この二大公共事業に対応するため昭和47年４月岩手県教育委員会事務局社会教育課に埋蔵文化財調査班を設置し、調査専門職員４名と臨時職員４名を配置し、これに当たらせた。その後、10月２名、11月１名と調査専門職員を補充したが、48年以降の工事計画と、それに対応する調査は不可能であった。また二大公共事業の他に公共事業の見直しが必要となり、建設省関係の事業計画のうち、48年度において御所ダム建設が開始されること及びその予定地内に多くの遺跡のある事、49年度には二戸バイパス工事が開始され、これについても遺跡が存在する事も明らかになった。

これらの状勢をふまえて、岩手県教育委員会は事務局内に文化行政全般を統轄する文化課を新設し、一般文化行政、一般文化財と共に埋蔵文化財発掘調査に力点を置き、その専門職員を大幅に増員した。調査体制としては、縦貫道班２、新幹線班１、一般公共班１となった。

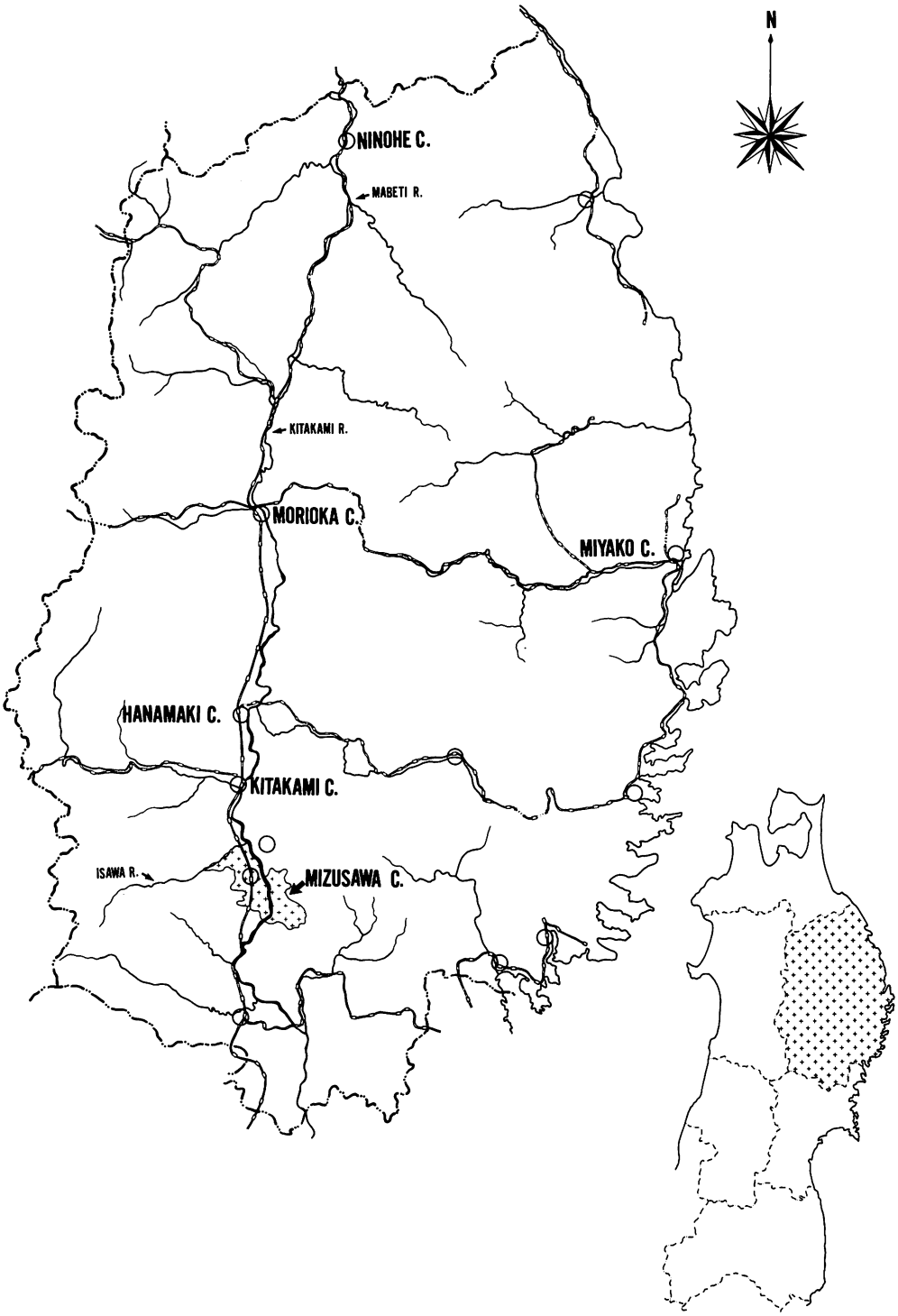
昭和48年に建設省岩手工事事務所より、金ヶ崎町教委を通して、金ヶ崎バイパス工事にかっる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての協議が持ち込まれた。県教委文化課においては、これの協議は一般公共班が当り、 路線内分布調査の結果６ヶ所の遺跡を確認した。この結果をふまえて、建設省岩手工事事務所、金ヶ崎町教委、県教委文化課の三者協議、金ヶ崎町を除く二者協議が断続的に行われた。この協議の中心は、西根古墳群の取扱いであった。協議の結果は、残存古墳は過去に伊藤玄三氏（現法政大学教授）によって調査済みである事から、調査記録保存することとなった。

この協議によって、工事行程と発掘計画が両者によって詰められ、一般道路の跨線橋、東北本線の跨線橋を優先調査し、次いで水沢流通団地取付けに関連するところとことなった。 この合意に基づいて、一般道路の跨線橋関係として大曽根遺跡が県文化課一般公共班によって調査された。

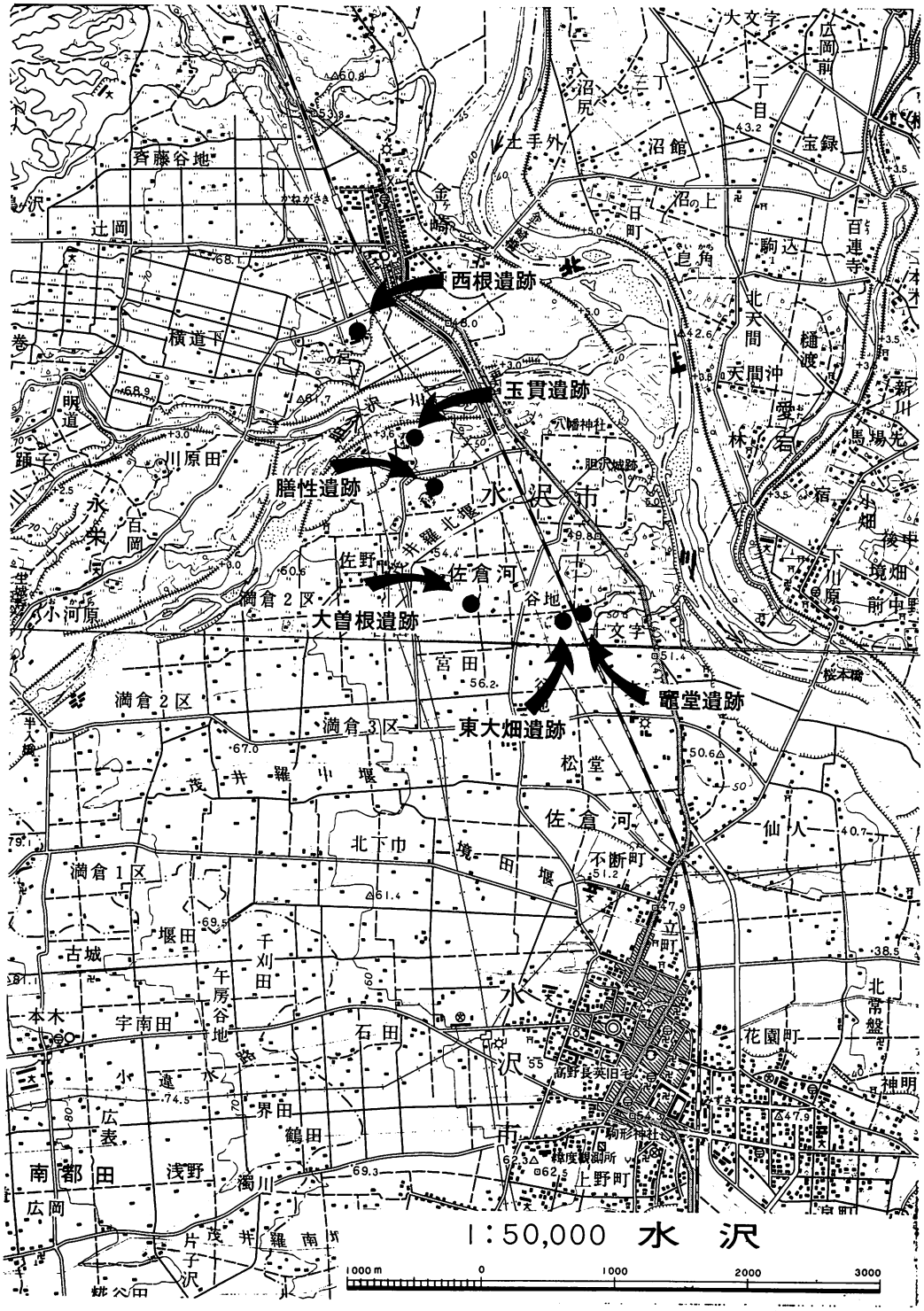
昭和52年４月（財）岩手県埋蔵文化財センターが設立されるに及んで、金ヶ崎バイパス関係調査も移行され、52年竈堂、東大畑遺跡、53年膳性遺跡（東西道路部分）54年膳性（南側部分）玉貫、西根古墳の各遺跡、55年膳性遺跡（残地関係）の調査が行われて終了した。

調査遺跡の時期は奈良時代か中心であり、水沢、金ヶ崎地方の当時の隆盛ぶりを示すものと考えられる。

（瀬川司男）


N
NINOHE C.
MABETI R.
KITAKAMI R.
MORIOKA C.
MIYAKO C.
HANAMAKI C.
KITAKAMI C.
ISAWA R.
MIZUSAWA C.

第１図　岩手県全図



第2図　金ケ崎バイパス関連遺跡位置図

遺跡の環境

（1）地形

北上川は、岩手県岩手町に源流をもち北上山地の西縁寄りに沿うて岩手県の中央から県南部を縦断した後、宮城県石巻湾で太平洋に注ぐ全流路 234km、長さでは日本で第５位の川である。その流域面積は、奥羽脊梁山脈、北上山地から流れ込む多数の支流域も合せて約11㎢である。

北上川流域は地理学的特性から５地区に大別され、金ヶ崎バイパス関連６遺跡の所在する金ヶ崎～水沢の地域は、そのうちの盛岡～前沢地区の西岸に属している。

金ヶ崎～水沢の地域では、夏油川によって形成された六原扇状地と胆沢川によって形成された胆沢扇状地が大部分を占め、残りは北上川流域及びその支流域に広がる氾濫原と沖積地である。扇状地は数階に段丘化しており、地形、構成層、被覆層の特徴から時期的に３群に分かれる。六原扇状地は、夏油川・黒沢川・北上川に囲まれた地域であり、新期の扇状地が、開析された中期・古期の扇状地を半ば埋める形で発達している。段丘区分では上位から下位へ西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘の３段丘に大別される。胆沢扇状地は、胆沢川・衣川・北上川に囲まれた地域で、多くの段丘面が形成されている。段丘区分では上位から下位へ一首坂段丘、胆沢段丘、水沢段丘に大別され、六原扇状地での段丘区分に対比される。中位の胆沢段丘は、東部でさらに細分され上野原・横道・堀切・福原の各段丘に、下位の水沢段丘も２面に分かれている。胆沢扇状地では南から北へ順次新期の段丘が配列しており、北端縁は東流する胆沢川の崖線となっている。

北上川を挟んで対峙している東岸の江刺市西部及び水沢市東部は、北上山地の西縁沿いの地域で、北上川流域の沖積平野が大部分を占めている。沖積平野には旧河道が数多く観察され、自然堤防とみられる微高地が多く形成されている。微高地は生活の場として広く利用されてきている。

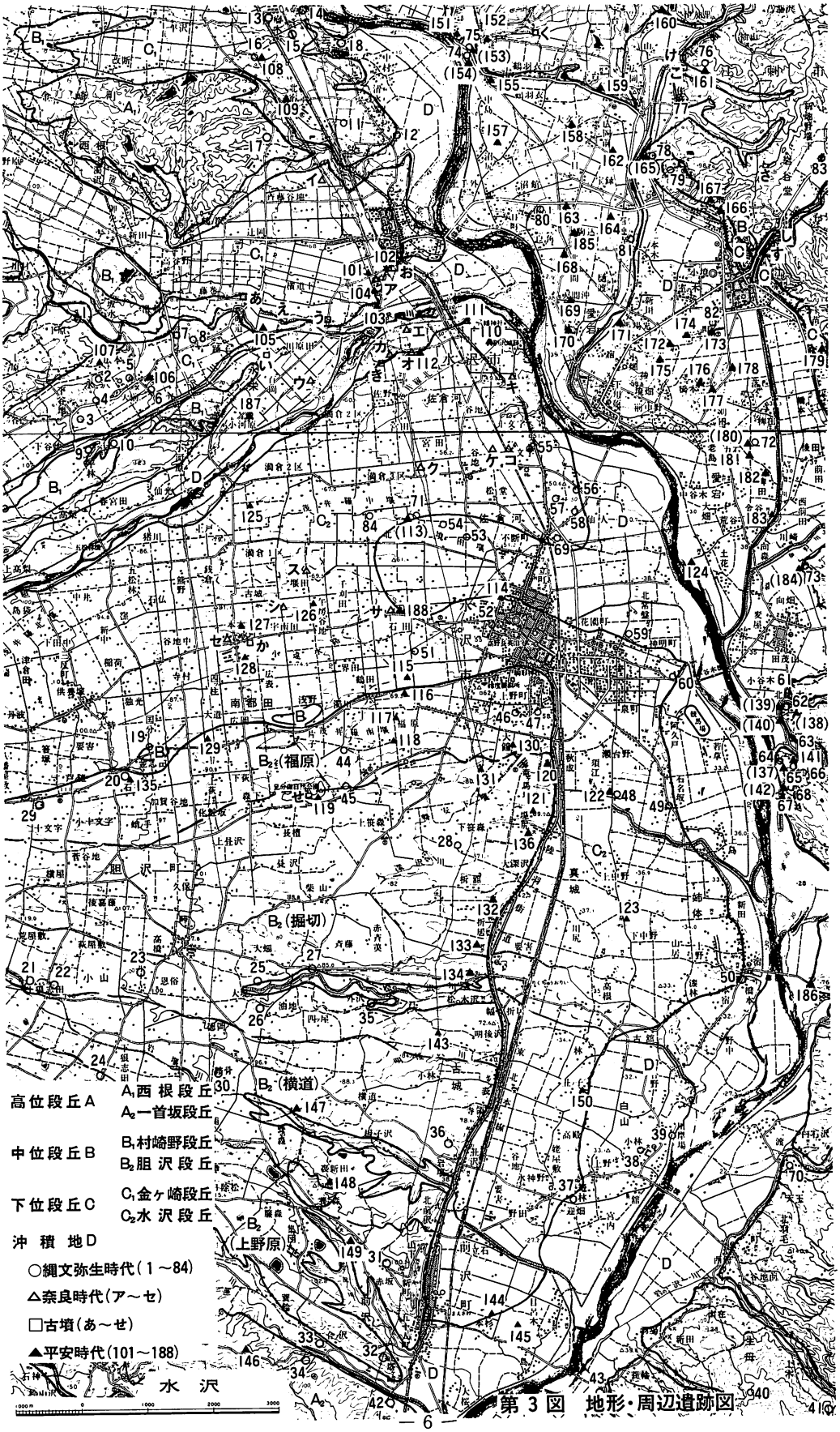
（2）周辺の遺跡

六原扇状地、胆沢扇状地、沖積平野の微高地及び山麓部は古くから人間の生活の場として利用されてきた。昭和49年３月岩手県教育委員会作成の埋蔵文化財分布地図から摘出した遺跡の分布が第３図である。中世以降を除いた時代毎でみると縄文時代83ヶ所、弥生時代６ヶ所、古墳14ヶ所奈良時代14ヶ所、平安時代88ヶ所合計 205ヶ所の多くを数える。 これらの遺跡の中には、既に発掘調査のなされた、西根原添下、膳性、東大畑、石田遺跡等でみられるように、複合遺跡もかなりある。

遺跡の分布状況を地形との関連でみていくと、縄文時代後期までの遺跡は、沖積平野には少

なく、沖積平野をとりまく北上山地西縁部や扇状地の各段丘を開析する小規模な河川に沿って分布している。縄文時代晩期から弥生時代になると低位の金ヶ崎段丘、水沢段丘さらに沖積平野の微高地に生活面が移動している。晩期では里槍、杉の堂、鵜ノ木遺跡、弥生時代では長坂下、清水、沼の上、兎Ⅱ、橋本、常盤広町遺跡があげられる。古墳時代に位置づけられる古墳は前方後円墳の北限として知られる胆沢町の角塚古墳のみで、円筒埴輪、形象埴輪が出土している。金ヶ崎町館山遺跡（柏山館）でも昭和55年調査で同類の円筒埴輪が出土したが、古墳に附随したものではない。この時期で竪穴住居址が検出されている遺跡は、高山、面塚遺跡で、水沢段丘の北端縁辺部に近い。道場古墳をはじめとする古墳は、円墳で末期古墳に属するものであり地形では金ヶ崎段丘の南端崖縁及び北上山地の西縁で確認されている。西根遺跡の古墳群もその１つである。奈良時代の遺跡は、北上川の東岸では顕著ではなくいずれも西岸にあり胆沢川を挾んで金ヶ崎、水沢段丘面で確認されているものが多い。金ヶ崎段丘では、西根原添下・上餅田遺跡、水沢段丘では、石田・今泉・権現堂遺跡、金ヶ崎バイパス関連遺跡の大曽根・竈堂・東大畑・膳性遺跡がそれぞれあげられる。大曽根遺跡では、竪穴住居址４棟、平安時代のもの１棟、竈堂遺跡では、勾玉・土玉を伴う竪穴住居址１棟、東大畑遺跡では、縄文早期の竪穴住居址１棟、奈良時代のもの26棟、平安時代のもの４棟が検出されている。膳性遺跡は、段丘の北端崖縁にあり、奈良時代から平安時代にわたる竪穴住居址が97棟、掘立柱建物跡などが重複して検出されている。その中で１辺が９ｍを越え、北カマドをもつ大型住居址から青銅製圭頭太刀の柄頭、須恵器の高坏などが出土している。平安時代になると胆沢段丘の東端縁ぞい及び北上川東岸の沖積平野の微高地に遺跡が集中している。水沢市の南矢中・真城が丘団地遺跡をはじめ、江刺市では力石Ⅱ・兎Ⅱ・落合Ⅲ・宮地遺跡などがあげられる。江刺の遺跡では、奈良時代末に比定される竪穴住居址から始まりその後平安時代の竪穴住居址が主力をなしている状況が報告されている。

岩手県の平安時代初期は、西暦 802年（延暦21年）に北上川と胆沢川の合流点の南西岸（水沢段丘の北東端に胆沢城が設置され、さらに志波城、徳丹城を拠点にして中央の勢力が岩手県北までおよんできた時代である。この時代に胆沢地方で、特に北上川東岸の沖積平野の微高地に住居地が増加した理由は、河川道の変化による自然的環境の変化、生産基盤の拠所の変化などによる可能性も上げられるが、より以上に政治的環境の変化によるとみるのが妥当であろう。伊藤氏は、「胆沢城周辺における古代村落について、奈良時代の村落を自然村落、平安時代のそれを計画村落と位置づけ、胆沢城の造営に伴なって自然村落はいったん解体され、律令的支配体系に再編されて計画村落が作られた。」としている。今後、遺跡の発掘調査が進むにしたがい集落と占地との関連がさらに明確にされていくものと期待される。　　（山口了紀）


高位段丘A
A₁西根段丘
A₂一首坂段丘
中位段丘B
B₁村崎野段丘
B₂胆沢段丘
下位段丘C
C₁金ヶ崎段丘
C₂水沢段丘
沖積地D
○縄文弥生時代(1～84)
△奈良時代(ア～セ)
□古墳(あ～ケ)
▲平安時代(101～188)
水沢
B₂(福原)
B₂(掘切)
B₂(横道)
B₂(上野原)

第3図　地形・周辺遺跡図

第1表　周辺の遺跡地名表

〔縄文時代・弥生時代〕

記号	遺跡名称	所在地
1	橇引沢	金ケ崎町
2	長坂前	〃
3	堀切	〃
4	横沢	〃
5	長坂下	〃
6	不動沢	〃
7	清水	〃
8	関谷	〃
9	平林後	〃
10	笹村	〃
11	二の台	〃
12	川口田	〃
13	西浦	〃
14	瘤木	〃
15	花沢	〃
16	北荒巻	〃
17	菖蒲沢Ⅱ	〃
18	後生平	〃
19	尼坂	胆沢町
20	小十文字	〃
21	北赤堰	〃
22	念仏塚	〃
23	恩俗長根	〃
24	小田切	〃
25	大畑	〃
26	油地	〃
27	船戸	〃
28	南笹森	〃
29	芦ノ随	〃
30	田中	前沢町
31	赤坂	〃
32	泊ケ崎	〃
33	櫓前	〃
34	白鳥永沢	〃
35	古城外ケ沢	〃
36	古城上野	〃
37	道場	〃
38	小林繁長	〃
39	川岸場	〃
40	赤岡	〃
41	大谷地	〃
42	新城	〃
43	生母宿	〃
44	合野	水沢市
45	小森	〃
46	東上野	〃
47	小山崎	〃
48	林前	〃
49	石名坂	〃
50	橋本	〃
51	梨田	〃

記号	遺跡名称	所在地
52	新小路	水沢市
53	里槍	〃
54	巾下	〃
55	八幡巾	〃
56	根岸	〃
57	互ケ田	〃
58	桐山	〃
59	常盤広町	〃
60	杉の堂	〃
61	沼尻南	〃
62	北鵜ノ木西	〃
63	鵜ノ木	〃
64	鵜ノ木住吉	〃
65	鵜ノ木新田	〃
66	鵜ノ木新田台地	〃
67	大沢	〃
68	鵜ノ木新田南	〃
69	下川原	〃
70	白石沢	〃
71	西館	〃
72	兎Ⅱ	江刺市
73	鹿野	水沢市
74	五十瀬神社前	江刺市
75	蔦の木	〃
76	寺岡	〃
77	板橋	〃
78	根岸洞窟跡	〃
79	宝生寺跡	〃
80	沼の上	〃
81	百連寺	〃
82	杉の町	〃
83	中野	〃
84	高山	水沢市
	〔古墳〕	
あ	道場	金ケ崎町
い	飛鳥田	〃
う	揚場	〃
え	三反田	〃
お	西根	〃
か	角塚	胆沢町
き	今泉	水沢市
く	稲瀬	江刺市
け	佐野山	〃
こ	神明館	〃
さ	四天坊	〃
し	裏手丘	〃
す	重染寺	〃
せ	見分森	水沢市
	〔奈良時代〕	
ア	西根	西ケ崎町
イ	上餅田	〃

記号	遺跡名称	所在地
ウ	寒入田	金ケ崎町
エ	玉貫	水沢市
オ	膳性	〃
カ	今泉	〃
キ	権現堂	〃
ク	面塚	〃
ケ	東大畑	〃
コ	へっついっ堂	〃
サ	石田	〃
シ	沢田	胆沢町
ス	杭地	〃
セ	二本木	〃
	〔平安時代〕	
101	西根	金ケ崎町
102	西根	〃
103	鳥海柵跡	〃
104	鳥海	〃
105	前谷地	〃
106	下田谷	〃
107	長坂裏	〃
108	北荒巻	〃
109	荒巻北	〃
110	胆沢城	水沢市
111	八ツ口	〃
112	膳性	〃
113	西館	〃
114	吉小路	〃
115	南矢中	〃
116	西田	〃
117	前谷地	〃
118	袖谷地	〃
119	見分森	〃
120	須恵	〃
121	大壇	〃
122	林前	〃
123	寺ケ前	〃
124	四丑	〃
125	キ入	〃
126	石田	〃
127	要害	〃
128	塚田	〃
129	国分	〃
130	片子沢北	〃
131	竜ケ馬場	〃
132	中林	〃
133	堤ケ沢	〃
134	折居	〃
135	小十文字	胆沢町
136	真城ケ丘団地	水沢市
137	鵜ノ木住吉	〃
138	北鵜ノ木	〃

記号	遺跡名称	所在地
139	北鵜ノ木西	水沢市
140	北鵜ノ木方八丁	〃
141	鵜ノ木新田	〃
142	鵜ノ木新田南	〃
143	明後沢	前沢町
144	目呂木本杉	〃
145	竹沢	〃
146	一首坂	〃
147	坂子沢	〃
148	養ケ森	〃
149	上の原	〃
150	古城方八丁	〃
151	谷地	江刺市
152	瀬谷子窯跡	〃
153	蔦の木	〃
154	五十瀬神社	〃
155	鶴羽衣台	〃
156	鶴羽衣柵跡	〃
157	沼尻	〃
158	十三	〃
159	稲瀬中学校	〃
160	大迫山居	〃
16	寺岡	〃
162	宝録	〃
163	別当	〃
164	東間	〃
165	根岸	〃
166	男力	〃
167	耳取	〃
168	北天間	〃
169	阿弥陀堂跡	〃
170	林	〃
171	馬場先	〃
172	宮地	〃
173	杉の町	〃
174	観音堂沖Ⅰ	〃
175	観音堂沖Ⅱ	〃
176	橋本	〃
177	落合	〃
178	朴の木	〃
179	豊田館	〃
180	兎Ⅱ	〃
181	力石	〃
182	鴻ノ巣舘	〃
183	中屋敷	〃
184	鹿野	〃
185	駒込	〃
186	鶴ケ館	〃
187	柏山館	金ケ崎町
188	石田	水沢市

註1　中川久夫「北上川西岸の投影面図について北上川低地帯の鮮新統第四系地形」日本地質学会第80年総会　1973年

註2　中川久夫他「北上川流沿岸の第四系および地形ー北上川流域　の第四紀地史1)」『地質学雑誌第69巻第 811号』　1963年

註1　註1に同じ

註4　水沢市教育委員会「林前遺跡」　1979年

註5　中川久夫他「北上川上流沿岸の第四系および地形ー北上川流域の地四紀地史(2)」『地質学雑誌第70巻第 812号』

註6　草間俊一「金ヶ崎町西根遺跡第一次調査報告」金ヶ崎町教育委員会　1959年
伊東信雄・伊藤玄三・草間俊一外「金ヶ崎町西根竪穴住居址第三次調査報告」『岩手県金ヶ崎町西根占墳と住居址』1968年

註7　(財)岩手県埋蔵文化財センター「膳性遺跡」『岩手県埋文センター文化財報告書第6集・第9集』1978・1979年

註8　(財)岩手県埋蔵文化財センター「東大畑遺跡」『岩手県埋文センター文化財報告書第1集』　1977年

註9　岩手県教育委員会「石田遺跡現地説明会資料」　1975年

註10　桜井清彦・杉山荘平「岩手県水沢市杉堂遺跡調査概報」『史観』61冊

註11　草間俊一・伊藤鉄夫他「鵜の木遺跡」『水沢の原始・古代遺跡』水沢市教育委員会　1965年

註12　伊藤陽夫「長坂下遺跡出土の合口土器について」『岩手史学研究』47

註13　伊藤鉄夫「沼ノ上遺跡調査報告書」江刺市教育委員会　1973年

(財)　岩手県埋蔵文化財センター「江刺市沼ノ上遺跡」『岩手県埋文センター文化財報告書第5集』　1977年

註14　財岩手県埋蔵文化財センター「兎Ⅱ遺跡」『岩手県埋文センター文化財報告書第8集』　1979年

註15　伊藤鉄夫「水沢の歴史ー平安以前」　水沢市教育委員会　1969年

註16　伊東信雄「岩手県佐倉河村発見の弥生式土器」『古代学三ー2』　1954年

註17　林謙作・伊藤鉄夫・高橋信雄「角塚古墳」胆沢町教育委員会　1976年

註18　筆者も調査に参加

註19　註6に同じ

註20　高山遺跡調査会「高山遺跡」　水沢市教育委員会　1978年

註21　西野　修「面塚遺跡発掘調査の成果」『みずさわ散歩　第24号』　1980年

註22　岩手県教育委員会「上餅田遺跡　現地説明会資料」　1975年

註23　岩手県教育委員会「今泉遺跡　現地説明会資料」　1975年

註24　調査者　高橋信雄氏の御教示による

註25　財　岩手県埋蔵文化財センター「竈堂遺跡」『岩手県埋文センター文化財報告書第1集』　1977年

註26　岩手県教育委員会「南矢中遺跡　現地説明会資料」　1975年

註27　水沢市教育委員会「上野団地遺跡緊急調査現地説明今資料」　1972年

註28・29　註13に同じ

註30　岩手県教育委員会「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ宮地遺跡」　1980年

註31　伊藤博幸「胆沢城と古代村落ー自然村落と計画村落ー」『日本史研究 215』　1 980年

• 参考文献

岩手県文化センター　「主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書」　1978年

経済企画庁　「土地分類基本調査地形分類水沢5万分の1　地形分類北上5万分の1　1968年

斉藤享治　「岩手県胆沢川流域における段丘形成」『地理学評論51ー12』　1978年

水沢市　「水沢市史Ⅰ　原始・古代」　1974年

圧野貞雄・小野剛志　「岩手県北上市付近の火山灰土壌の生成について」『第四紀研究　第16巻　第4号』　1978年

竈堂遺跡

遺跡所在地	水沢市佐倉河字竈堂
事業主体	建設省岩手工事々務所
調査主体	(財)岩手県埋蔵文化財センター
調査期間	昭和52年6月27日～9月30日
調査対象面積	12,000m²
調査面積	6,000m²
遺跡記号	HD77

Ⅰ 遺跡の立地

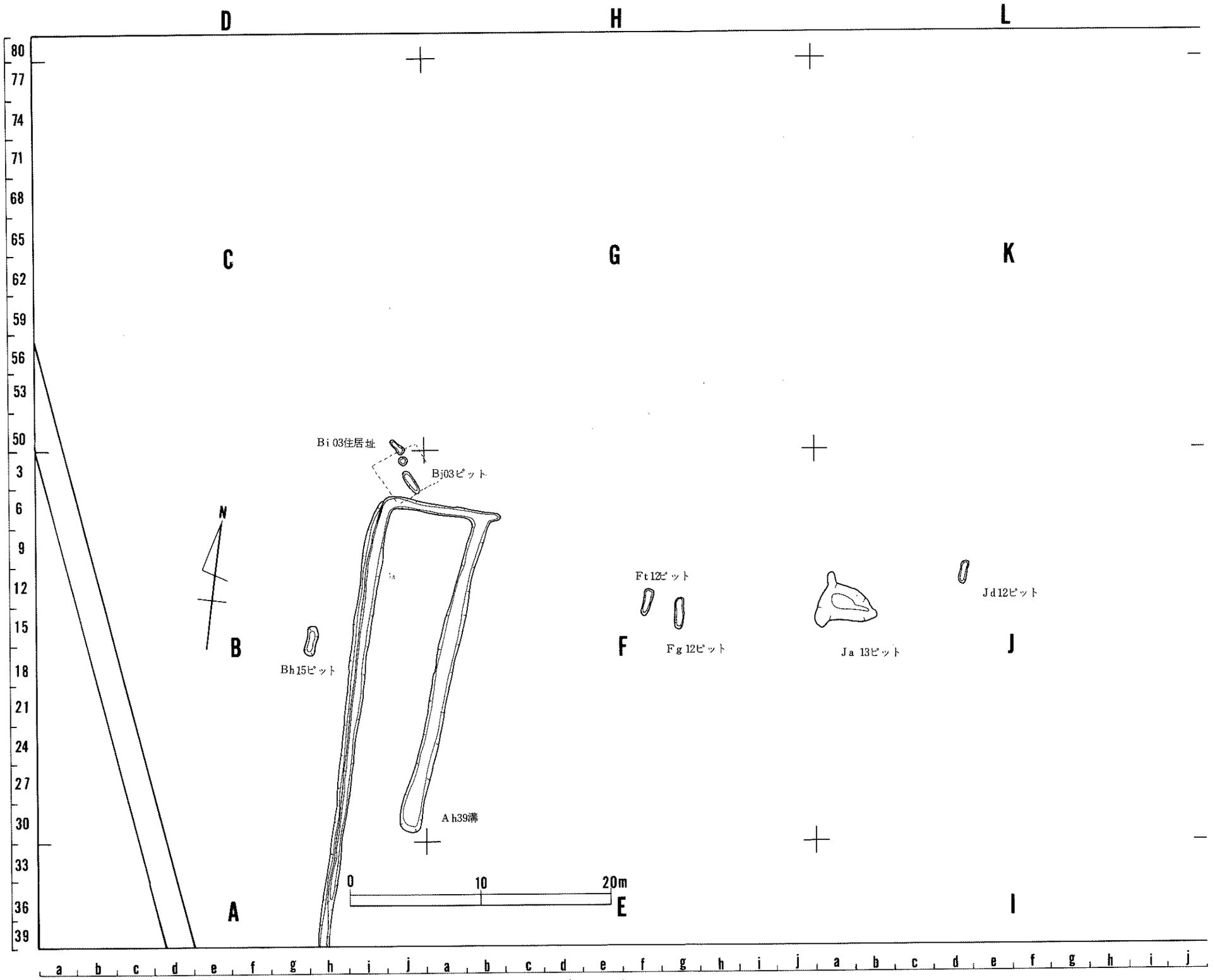
竈堂遺跡は水沢市佐倉河字竈堂地内に所在し、水沢市街地の北方で東北本線水沢駅北約3.8kmに位置する。遺跡は胆沢川によって形成された胆沢扇状地の新期水沢段丘上にあり、北2kmには胆沢川、東1kmには北上川が流れている。遺跡の標高は 52m～52.50m で西から東に緩やかに傾斜している。遺跡及び遺跡周辺の現状は水田、畑地、宅地であり、宅地は微地形状の所にみられる。発掘区の大部分は水田であり旧地形は、その原形を届めていないことが、調査によって確認され、黄褐色シルト上面まで削られ、盛土などをしていることが確かめられた。

周辺の遺跡としては、特別史跡胆沢城跡、常盤遺跡、西大畑遺跡、杉の堂遺跡、下河原館遺跡、里槍遺跡などがある。

Ⅱ 調査方法

調査は先ず調査区にグリッドを組むことから始め、グリッドの基点は金ヶ崎バイパス道路センター杭No. とNo. の2点を基準として東西中軸線を設定し、それに直交する南北線を設け、3m×3mのグリッドを組んだ。南北軸は磁北に対して7度西に偏している。各グリッドの名称は、東西、南北各30mを1ブロックとし、各ブロックにA、B、C等の記号を附しさらに各3mおきに東西方向は各ブロックにa、b、cの記号を附し、南北方向に3mおきに中心線より北側は50から80まで、南側は3から39まで数字を附し、北西隅地点でAa 03グリッド、Ba 53グリッドと呼称した。遺構の名称は北西部の属する地点名をあて、Bi03住居址、Bg 18ピットとした。粗掘は3m×6mを一区画としてすべて人手によって行ない、畑地部分は格子状に行ない遺構検出後周辺を拡張することとし、水田部分は稲が植生していることより地権者の了解を得たのち3m幅のトレンチを東西に数本入れ、遺構検出後及び稲の刈り入れ後に周辺を粗掘することにした。検出された遺構は、上部を削られているが、住居址1棟、ピット2基、溝1条が畑地部分でピット5基が水田部分で検出されている。これらの遺構は、2分法あるいは4分法による精査を行ない、実測は遣り方と、平板実測を行なった。遺物は住居址内出土のものは個体別にとりあげ、遺構外のものは地点ごとに取り上げ、調査期間中の雨天の日には、遺物の洗浄、ナンバーリング等を行なった。

図版1　竈堂・東大畑遺跡附近の地形図



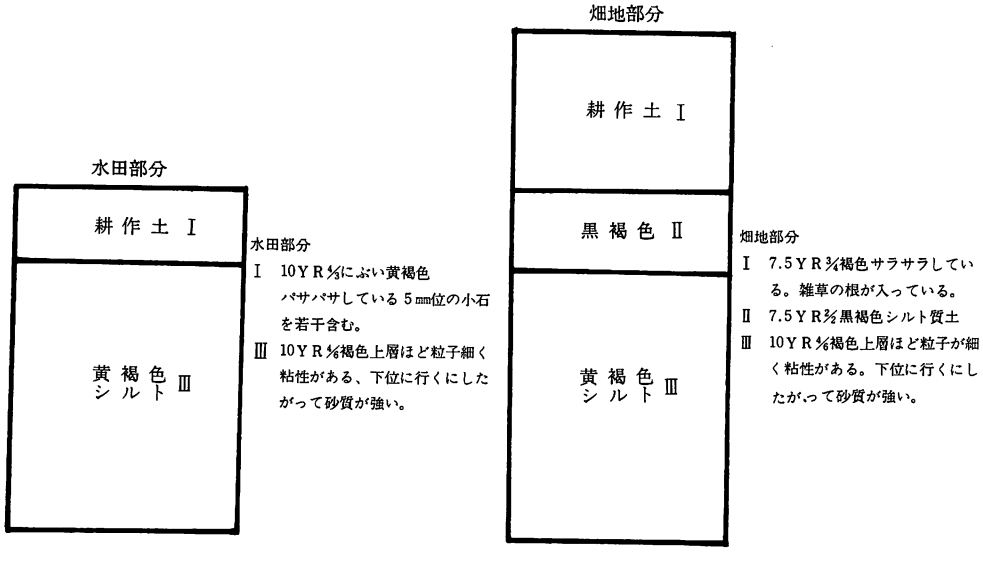
図版2　グリッド遺構配置図

整理作業

整理作業は現地での遺物洗浄、ラベル記入とセンター内での遺物仕分、復元作業と遺物の実測、トレース、遺構のトレースに分けて行った。各遺構の図は調査時に作成した図面をトレースし、住居址平面図は$\frac{1}{20}$と$\frac{1}{60}$の平面図、断面図は$\frac{1}{40}$と$\frac{1}{60}$、溝は縮尺不定で載せたが、各図版にスケールを付しておいた。

Ⅲ 基 本 層 序

本遺跡の基本層序は、畑地部分と水田部分とは若干異なっている。畑地部分では、Ⅰ層は耕作土である表土、Ⅱ層は暗褐色土であり、畑地でも部分的にしかみられないもので本層まで耕作が及ぶ所もある。Ⅲ層は黄褐色シルトとなっている。水田部分ではⅠ層は水田耕作土でその下位にⅢ層の黄褐色シルトがある。なおⅠ層とⅢ層の間には水酸化鉄の沈澱層が2cm～5cm位の厚さで堆積していたが2層として捉えた。遺構は、畑地部分でⅡ層上面において検出され、水田部分ではⅢ層上面である。



図版3　竈堂基本層序模式図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は畑地部分で、住居址一棟、溝１条、ピット２基、水田部分で、ピット４基である。

１）住居址

Ｂｉ 03住居址（図版４、写真図版２）

発掘区の西端、Ｂ区の畑地部分のⅠ層を除去したⅡ層上面に床面として検出された。耕作等による攪乱や削剝等によってすでに住居址、床面上部は削られ壁等の存在も確かめられなかった。重複は住居址の南中央部分に床面を切って検出されたＢｉ 03ピットがあり、住居址の方がピットより古いことが確認できた。平面形は以上のことから摑み得ないが、床面には黄褐色シルトによって貼り床が施されておりその貼り床の範囲より推定でき、一辺約３ｍ前後の住居址と推定される。床面は比較的固く、黄褐色シルト土によって貼り床され厚さ11㎝である。ピットはカマドの南側の床面上に１基検出されて平面形は直径 61 ㎝の円形を呈し、床面よりの深さ 55 ㎝である。埋土は３層に分れ、１層は褐色土であり固く、焼土粒や炭化物粒が極僅かに混じっている。２層は黒褐色土で層中には灰が極僅かに入っている。３層は黒褐色土であり比較的柔かい。遺物は出土しない。柱穴は床面下部まで掘り下げたが検出されない。カマドは北壁中央部と推定される位置にあり、燃焼部底と煙道底部が僅かに残っている。燃焼幅は 76 ㎝であり燃焼部床面は僅かであるが、焼成を受け赤変している。煙道部は北西方向へ 80 ㎝延びており、床面は煙出し部分まで平担である。煙出し部分も焼成を受け赤変している。

出土遺物

当住居址の遺物は土器と土製品である。土器は坏と甕があり、カマド内より甕が検出され、住居址と思われる床面上より、坏と甕が出土している。土製品は床面上より勾玉、小玉が出土している。

土器（図版６、写真図版４）

坏（図版６－１）ロクロ未使用の丸底風の平底で内外面とも陵を有しない。体部から口縁部にかけては内湾気味の立ちあがりをもつ。器内外とも再酸化もしくは摩耗を受けているためか調整技法は判然としないが、器内外面の口縁部付近にヨコナデがみられる。器内面は黒色処理が施されていた痕跡が僅かにみられる。

甕（図版６－２、３、４）すべてロクロ未使用の甕で長胴形と球胴形がある。２は外傾する口縁部をもち、肩部に僅かに段を有する長胴の甕である。口縁部はヨコナデで体部は外面に縦方向へのヘラナデ、内面に横方向へのヘラナデがみられる。底部は僅かに外に張り出している。底部は無文である。３は外傾する口縁部をもち、肩部に僅かに段を有する。体部は外面に下方向

へのヘラケズリ、内面にヘラナデがみられる。４は頸部部分より底部の一部が残っているもので体部は球胴形を呈する。頸部には段を有し体部には、内外面ともヘラナデがみられ、内面には部分的に巻き上げ痕もみられる。底部は僅かに外に張り出し床面には木葉痕がみられる。

土製品（図版７、写真図版５）

勾玉８個、小玉22個である。勾玉は２、３、８以外は完形品で、形態はＣ字形を呈する。表面は部分的にミガキ痕が観察され、上部には小穴があげられている。大型のもので 3.5cm、小型のもので 2.2cmである。小玉はいずれもいびつな球形を呈する完形品で、１個の小穴があけられている。表面はミガキ痕が観察され、大型のもので直径 1.3cm、小型のもので 0.6cmである。

2）ピット

Ｂｊ 03ピット

Ｂｊ 03住居址の床面を切って作られているピットである。検出面上部で長軸２m×短軸0.55cm前後の平面形が長方形状を呈する。検出面よりの深さ58cm前後である。埋土は４層よりなり１層は暗褐色土のシルトで固くしまっている。２層は極暗褐色シルトで黄褐色シルトが混入し微量の炭化物が入っている。３層は黒褐色シルトで黄褐色シルトが２層より多くみられ、炭化物が混入している柔らかい土である。４層は黒褐色土で炭化物が多く入り、柔らかい土である。壁は垂直に立上がり比較的固い。床面は平担であり、北側に15cm大の平たい石が１個あり、その周囲に炭化物が多く見られた。出土遺物は、ピット北端の床面上に土師器ロクロ未使用の内黒杯１片とカメ破片が12片検出されたが、図化できるものはないため図化しなかった。

Ｂｈ 15ピット（図版５、写真図版３）

Ｂｈ 15グリッドの基本層序２層上面で検出されたものである。検出面上縁で長軸2.15m ×短軸75cm前後の平面形か長方形状を呈する。検出面よりの深さは深い所で25cm前後である。埋土は３層に分れるが１、２層は黒褐色土の混土の量より分れたものである。１、２層とも黒褐色土であり固くしまり、１層は黄褐色土の混入が少なく、２層は多くなっているものである。３層は褐色土であり、極僅かであるが黒褐色土が入っている柔らかい土である。床面は東側にゆるく傾斜している。出土遺物はない。

Ｆｆ 12ピット（図版５、写真図版３）

水田部分のＦｆ 12グリッドより水田耕作土を除去したⅢ層上面で検出されたものである。検出面上縁で長軸 1.9m、短軸最初幅で40cm、最大幅65cmの平面形は長方形状を呈する。検出面よりの深さは10cm前後と浅い。埋土は１層で黒褐色土と暗褐色土の混土で固くしまっている。床面は平担である。出土遺物はない。

Fg 12ピット（図版５、写真図版３）

Ｆｇ 12グリットで、Ｆｆ 12ピットと同一の面で検出されたものである。検出されたピットは

一番長い検出面上縁で長軸2.25m、短軸60cmの平面形か長方形状を呈する。深さは20cmである。埋土は単層で、黒褐色土で柔らかい、床面は平担である。出土遺物はない。

Ｊｄ 12ピット（図版５、写真図版３）

Ｊｄ 12グリットのⅢ層上面で検出された。検出面上縁で長袖 1.5m、短軸60cmである。埋土は暗褐色土の単層で固くしまっている。床面は木根等の根によって攪乱を受けているが、平担である。出土遺物はない。

Ｊａ 13ピットNo 1

水田耕作土下のⅢ層上面で検出された。検出面上部で長軸3.80m、短軸3.00mの平面形か不整形を呈する。検出面よりの深さは 0.7mである。壁は外傾して立上がるが柔らかい。下部でグライ化している。埋土は６層に分れ、１層は黒褐色土で黄褐色土が僅かに混入している。２層は極暗褐色土で黄褐色土が１層よりも多く入っている。３層は黒褐色土で上層よりもいく分固く黄褐色土が混入している。４層は黒褐色土で層中には酸化鉄が沈澱しているのがみられる。５層は黒色土で柔らかく他の混入物はみられない。６層は粘性のある土で黄褐色土がグライ化した土と思われ、色調はオリーブ灰である。この層の色調が壁や床面にもみられる。床面は検出面上よりみれば狭く丸みを帯びているが柔らかい。出土遺物はピット上部に一点みられた須恵器の蓋だけであり、このピットの時期を決定する資料とはなり得ない。重複は、北側にあるＪａ 13ピットNo.２を切っている。

Ｊａ 13ピットNo 2（図版５、写真図版３）

Ｊａ 13ピットNo.１に南側を切られているピットである。形状は長方形状を呈する。南北軸で0.45mを測る。埋土は黒褐色土の単層で柔らかい。壁は外傾しているが凸凹がある。床面は平担で柔らかい。出土遺物はない。

Ａｈ 39溝（写真図版３）

Ａ区、Ｂ区、Ｆ区の水田から畑地にかけて１条検出され、南側の調査区域外に延びている溝である。検出面は水田部分でⅢ層上面、畑地部分でⅡ層上面である。上縁部の最大幅1.20m～最小幅0.80m、検出面よりの深さは0.10～0.30mで溝は南から北に向って深くなっている。

西から東に走る溝には東北コーナー部分において20cm大の礫が数個検出され、そこよりさらに東側に溝が延びているようであるが、水田部分によって切られているため詳細は不明である。床面は平らな面でありいく分固い。また、西側の溝は段を有していることから溝が２回位造りかえられていると思われる。出土遺物はない。

3）遺構外出土遺物（図版８、写真図版６）

遺構外より出土した遺物は土器、石器があり、土器は図化できたものは２点でその他はいずれも細片で、土師器と須恵器である。

土器

土器は土師器と須恵器であり、１はロクロ未使用の小形甕である。口縁部は外傾しており肩部に僅かに段を有する。体部は肩部より底部にかけて細くなり、底部近くになって急に細くなり底部に達している。器面調整は口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラナデが行なわれ、底部近くはヘラケズリが行なわれている。内面はヘラナデ痕がみられる。２は須恵器の蓋であり、つまみ部分の一部と口縁部分を欠いている。

石器

石器は、石鏃と石ベラ、石斧（磨製）がある。

石鏃

石鏃はいずれも基部が僅かに快り込みのあるものである。３は正三角形状を呈し、側縁は直線的になっている。細部調整は入念に行なわれている。４は先端部分を欠損している。表裏両面とも細部調整は入念に行なわれている。５～７は大型の石鏃であり、５は先端部分を欠き、７は先端部分を欠いている。側縁は直線的で細部調整は入念に行なわれている。

石ベラ

石ベラは１点の出土であり、完形品である。表裏両面とも入念な加工がなされ、刃部部分は特に入念に行なわれている。横断面形は凸レンズ形を呈する。

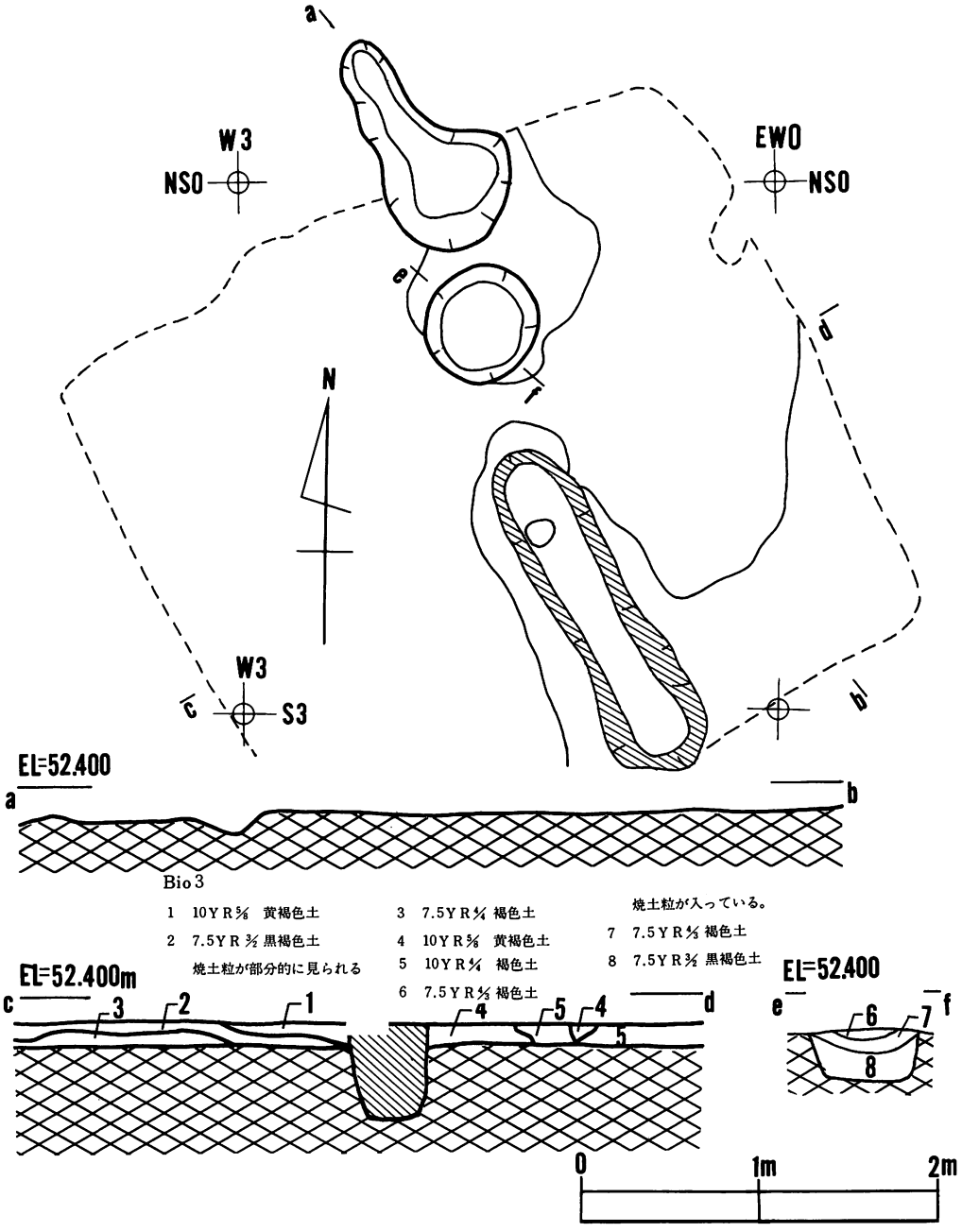
磨製石斧

磨製石斧は基部を欠損しているものである。両面とも整形痕の痕がみられ、側縁は特に入念に行なわれている。刃部は使用の際に欠損したと思われる痕跡がある。

ま　と　め

本遺跡から検出された遺構は住居址１棟、ピット７基、溝１条であり、遺跡の広がりをつかみ得なかった。遺構はいずれも水田改田の際や耕作等によって削られ、下部を僅かに残す程度であり、畑地、水田とも遺存状態はよくなかった。時期のわかる遺構としては、Ｂｉ 03住居址、ＢＪ 06ピットのみであり、住居址は出土遺物より国分寺下層式併行である。ピットは、住居址を切って造られ、ピット中より土師器片が出土していることなどから住居址よりは新しく、住居址廃絶後に造られたものであることが確かめられている。またピットの性格であるが、平面形か長楕円形状であること、ピット底部より炭化物が多く検出されていることなどから墓坑的性格のものかもしれない。他の遺構に関しては時期、性格とも不明である。

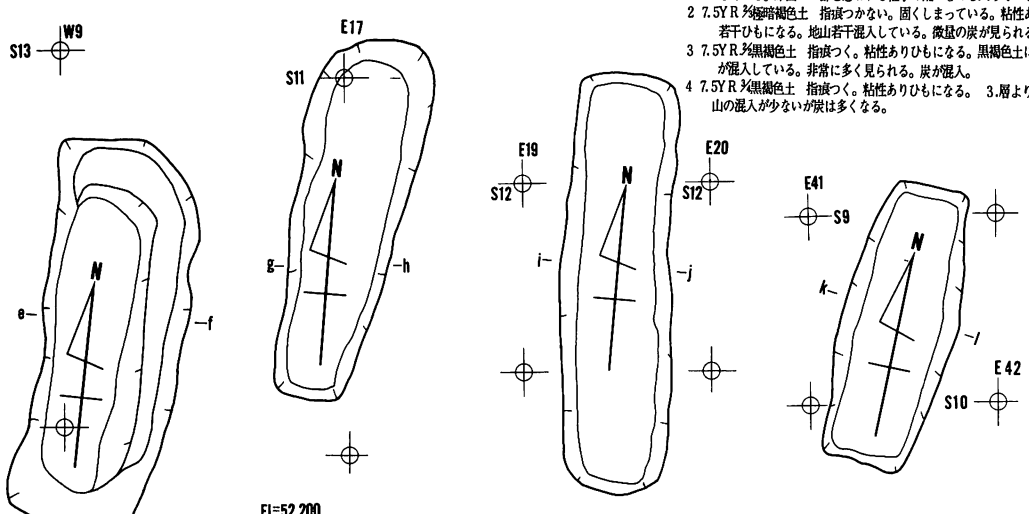
なお本遺跡は、東北本線によって東大畑遺跡と区別されているが、両遺跡より縄文時代から奈良・平安時代の遺構、遺物が出土していることなどより、東大畑遺跡の住居址が多く検出された地区より 100m 以上離れているが、同一視してもよいと思われるが、現況では定かでない。


a
W3
NS0
EW0
NS0
e
f
d
N
W3
c
S3
b
EL=52.400
a
b
Bio3
1 10YR5/6 黄褐色土
2 7.5YR 3/2 黒褐色土
焼土粒が部分的に見られる
3 7.5YR4/4 褐色土
4 10YR5/6 黄褐色土
5 10YR4/4 褐色土
6 7.5YR4/3 褐色土
焼土粒が入っている。
7 7.5YR4/3 褐色土
8 7.5YR3/2 黒褐色土
EL=52.400m
c
3
2
1
4
5
4
5
d
EL=52.400
e
6
7
f
8
0
1m
2m

図版4　Bio3住居址

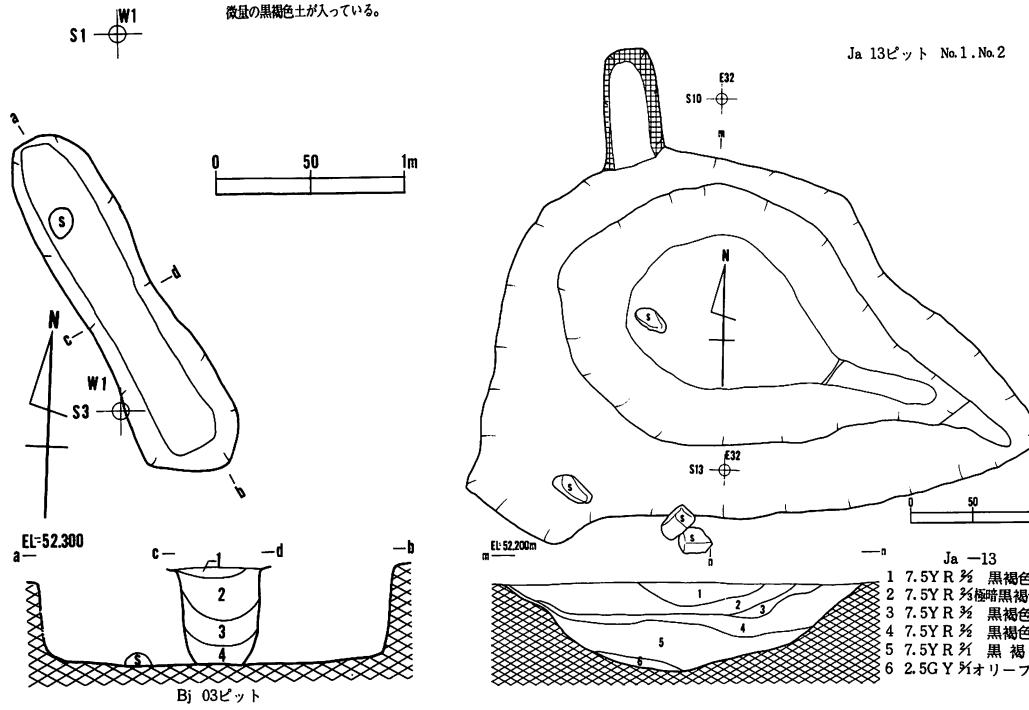
Bj 03ピット 注記

1 7.5YR 3/4暗褐色土　指痕がつかない、固くしまっている。ザラザラしている。床面の一部と思われる粒子の荒いものも入っている。
2 7.5YR 3/3極暗褐色土　指痕つかない。固くしまっている。粘性あり若干ひもになる。地山若干混入している。微量の炭が見られる。
3 7.5YR 3/4黒褐色土　指痕つく。粘性ありひもになる。黒褐色土に地山が混入している。非常に多く見られる。炭が混入。
4 7.5YR 3/4黒褐色土　指痕つく。粘性ありひもになる。　3.層よりは地山の混入が少ないが炭は多くなる。

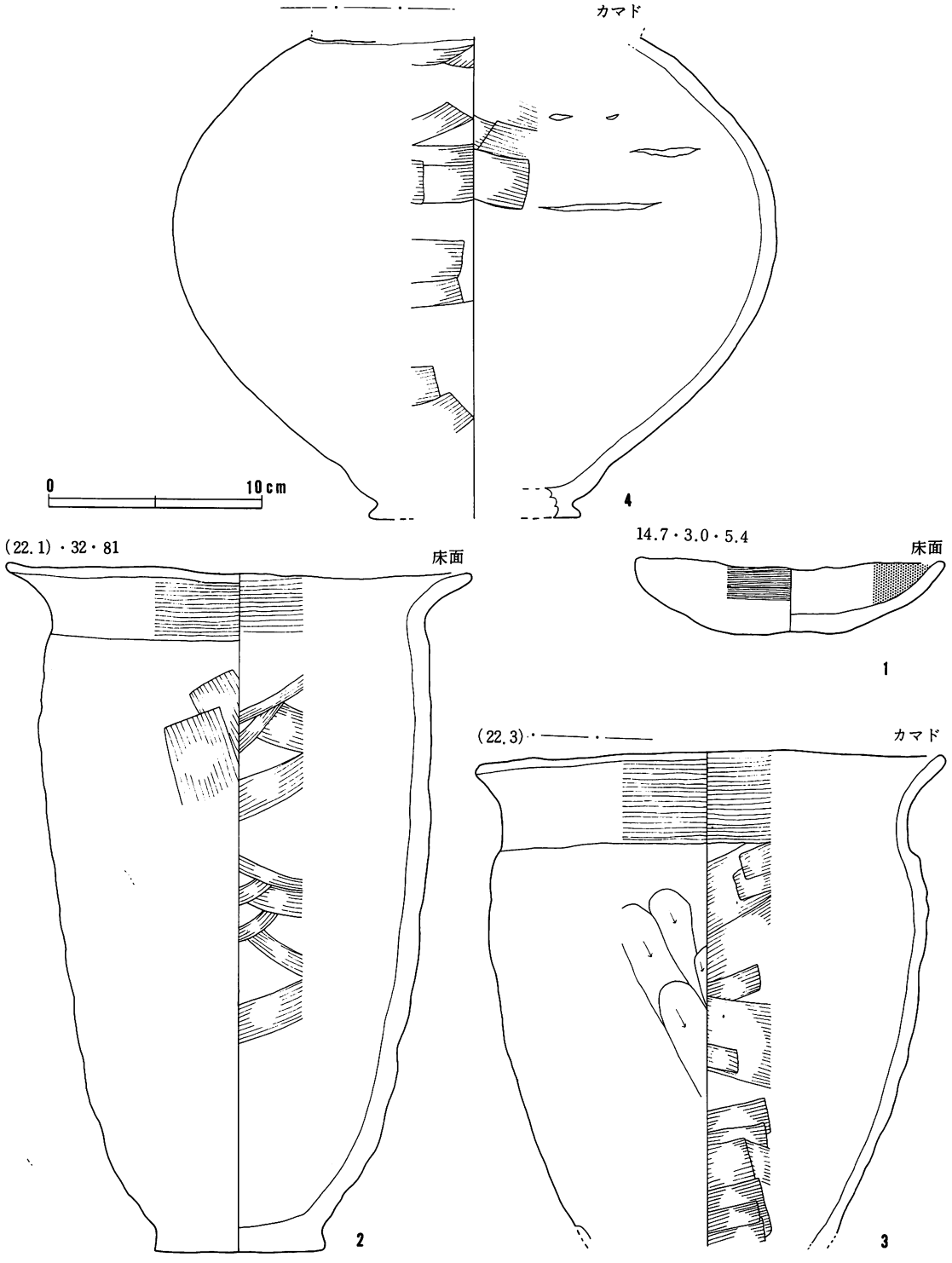


Bh 15ピット 注記

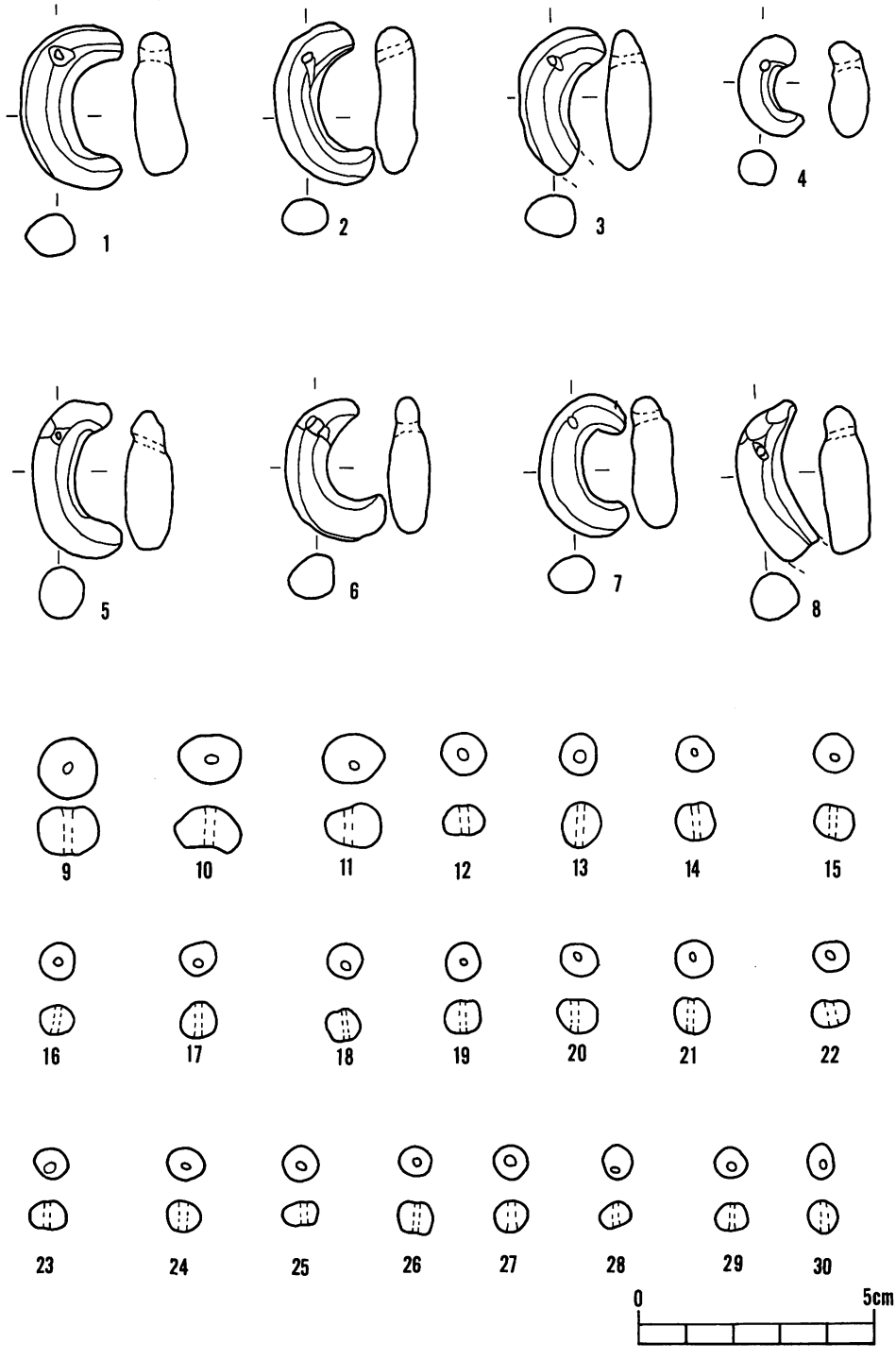
1. 10YR 3/4黒褐色土　指痕つかず、サラサラしている。少々の地山色が入り混じっている。
2. 10YR 3/4黒褐色土　粘性有り、地山色が1. より若干多く入っている。
3. 10YR 3/4褐 色 土　粘性有り、ひもになる。微量の黒褐色土が入っている。



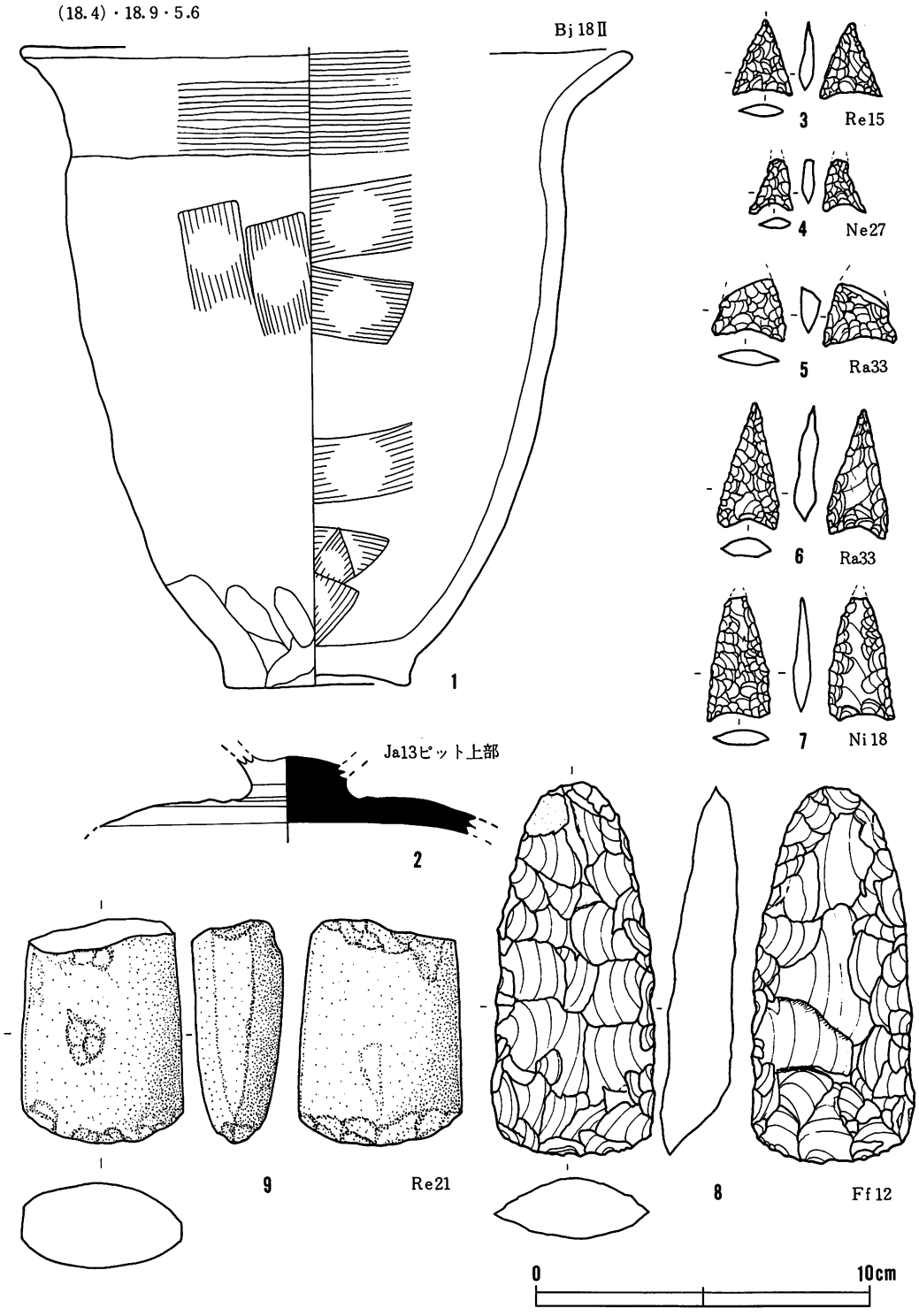
図版5ピット



図版6　Bi 03住居址出土遺物 1

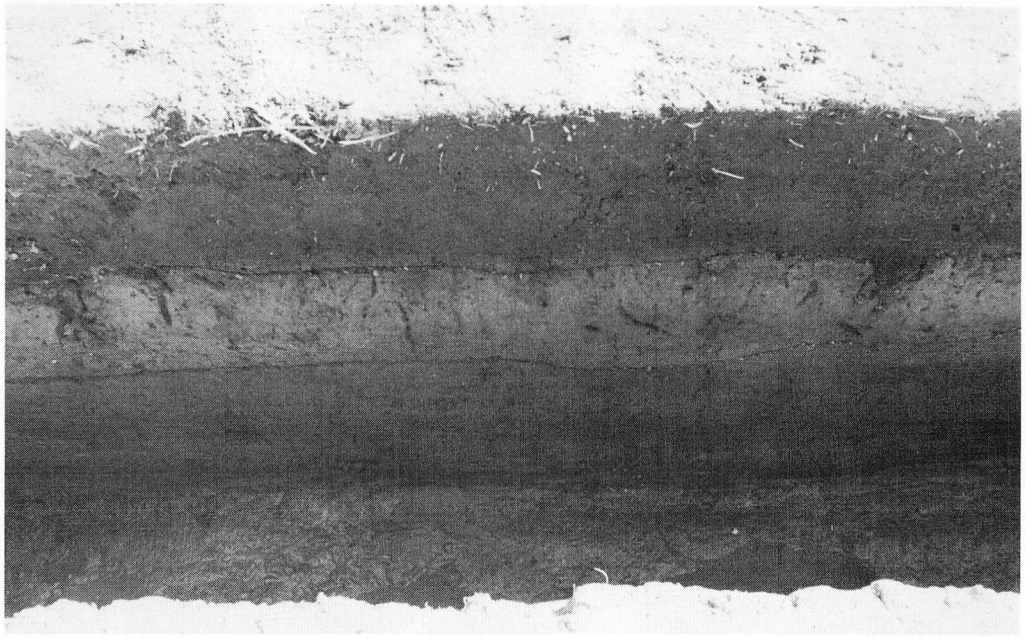


図版７　Bio３住居址出土遺物、勾玉、小玉２


(18.4)・18.9・5.6
Bj18Ⅱ
1
3
Re15
4
Ne27
5
Ra33
6
Ra33
7
Ni18
Ja13ピット上部
2
9
Re21
8
Ff12
0
10cm

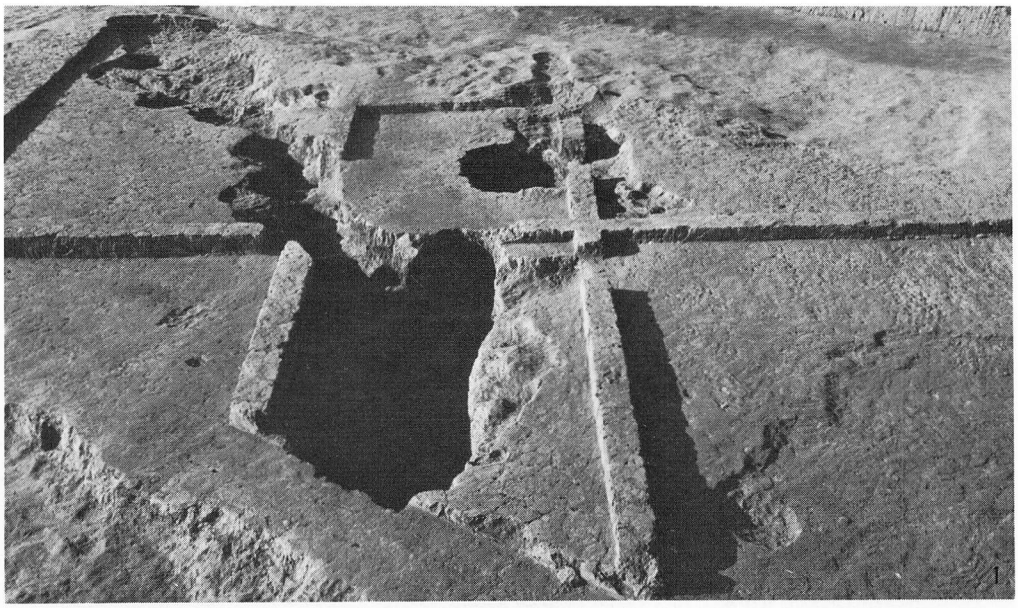
図版 8　遺構外出土遺物

遺跡の遠景　東→西



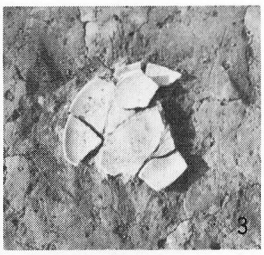
基本層序

写真図版 1

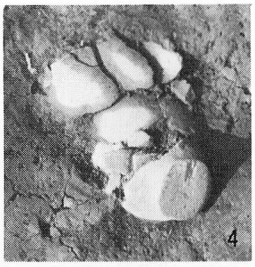


Bi03住居址平面　完堀後　南→北

カマド内



床面上

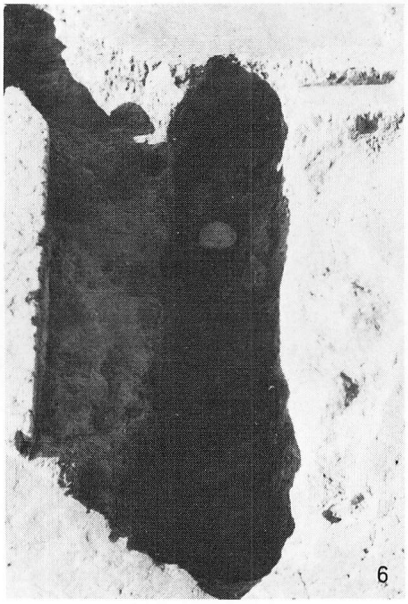


床面上

2～5，Bi03
住居址遺物
出土状況

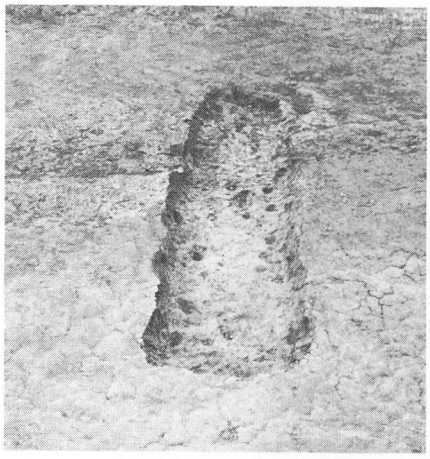
床面上　南→北

6 BJ03ピット
南→北

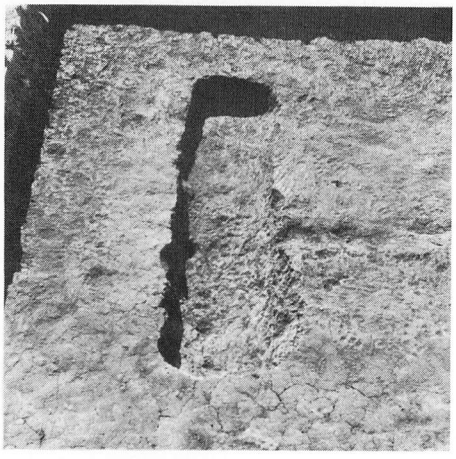


写真図版 2

Bh15ピット　北→南



Ff12ピット　北→南



Fg12ピット　北→南

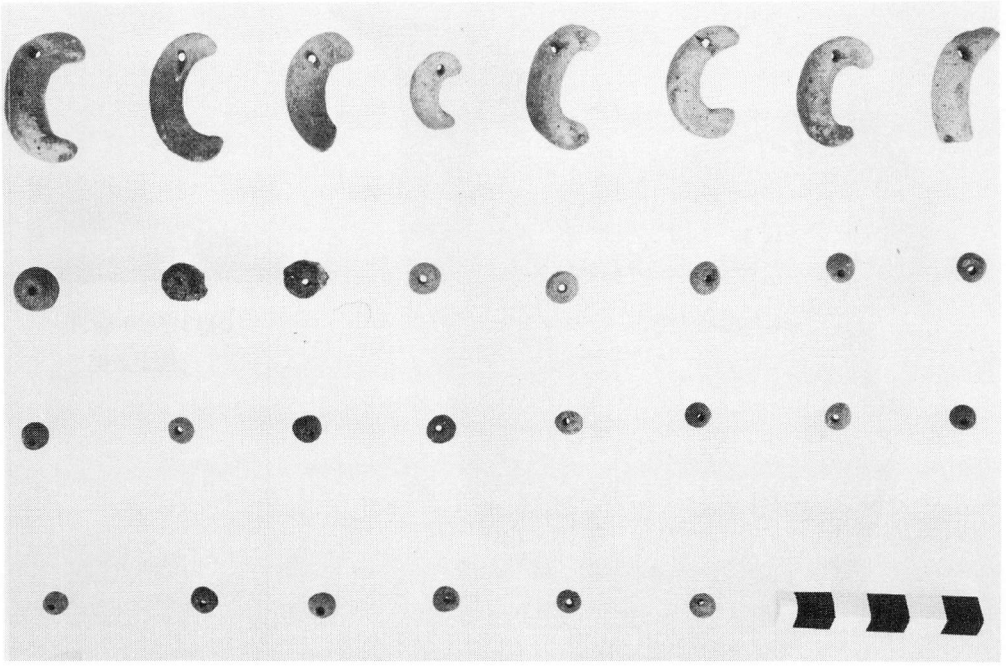
Ja13ピットNo．1，No．2　北→南

Jd12ピット　北→南

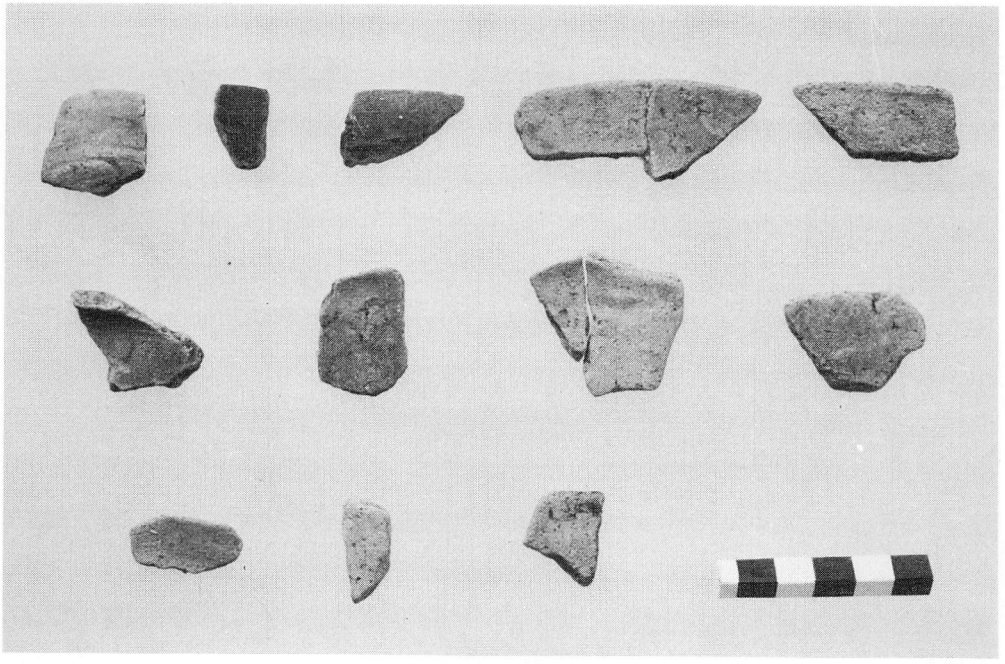
Ah39溝　北→南

写真図版 3

写真図版 4　Bi03住居址出土遺物



Bi03住居址出土遺物勾玉，小玉



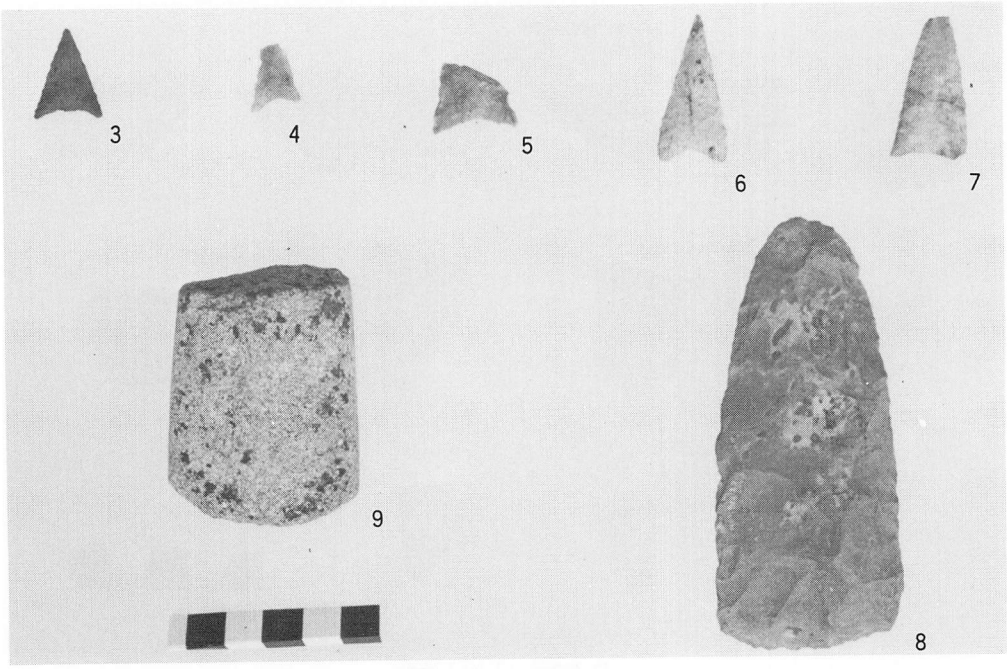
BJ03ピット出土遺物

写真図版 5

1

2

Ja13ピットNo.1
埋土上部



遺構外出土石器

写真図版 6

東大畑遺跡

遺跡所在地	水沢市佐倉河字東大畑
事業主体	建設省岩手工事々務所
調査主体	(財)岩手県埋蔵文化財センター
調査期間	昭和52年10月1日～12月10日
調査対象面積	12,500m²
調査面積	12,500m²
遺跡記号	HOH77

Ⅰ 遺跡の位置

東大畑遺跡は水沢市佐倉字東大畑地内に所在し、先の竈堂遺跡の西側に位置し、竈堂遺跡とは東北本線で切られている。遺跡は竈堂遺跡と同じ新期水沢段丘上にあり遺跡の標高は53m～52.50 mで西から東に緩やかに傾斜しており、遺跡の現状は水田で、西側に茂井羅中堰が流れている。

Ⅱ 調査方法

調査方法

当遺跡の発堀調査は竈堂遺跡の調査に引き続いて行なわれた。調査の開始は、竈堂遺跡調査の事前打合せにおいて地権者から秋の収穫後の調査が強い要望として出され、建設省岩手工事々務所からもその要望に沿うよう要請された。従って10月１日調査が開始されるように秋の収穫を行うことで受ける事とした。

竈堂調査は６月27日から開始し、中川技師を常駐させてこれに当らせ、高橋主任専門調査員は都南村湯沢遺跡に随時応援に当らせた。東大畑遺跡調査に当っては10月、11月の２ヶ月間で終了させるために、高橋主任専門調査員、中川技師の他、雫石町下平遺跡の担当から高橋(文)専門調査員と三浦技師を派遣して調査に当らせた。

調査は12.500㎡を２ヶ月という短期間で終了させるため、次の様な方法をとった。

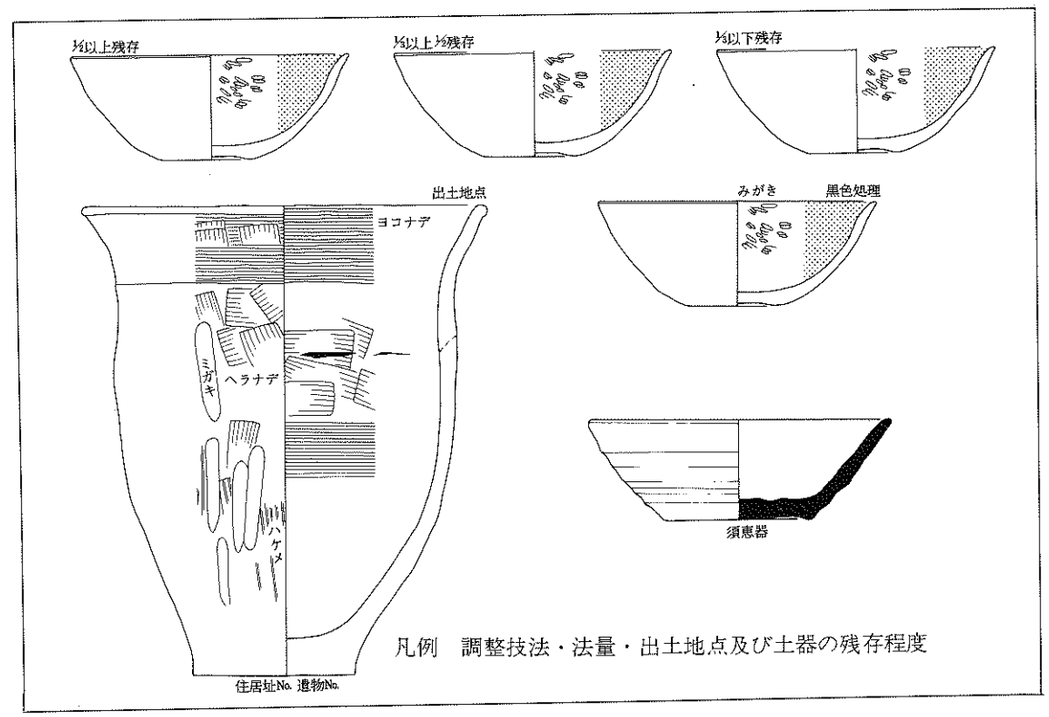
表土の除去はバックホウを用いて行なった。これはバックホウのバケットに鉄板をつけさせ約10cmぐらいづつの深さで表土を除去し、遺構検出面のシルト層まで下げていった。遺構検出は人力によって行なった。

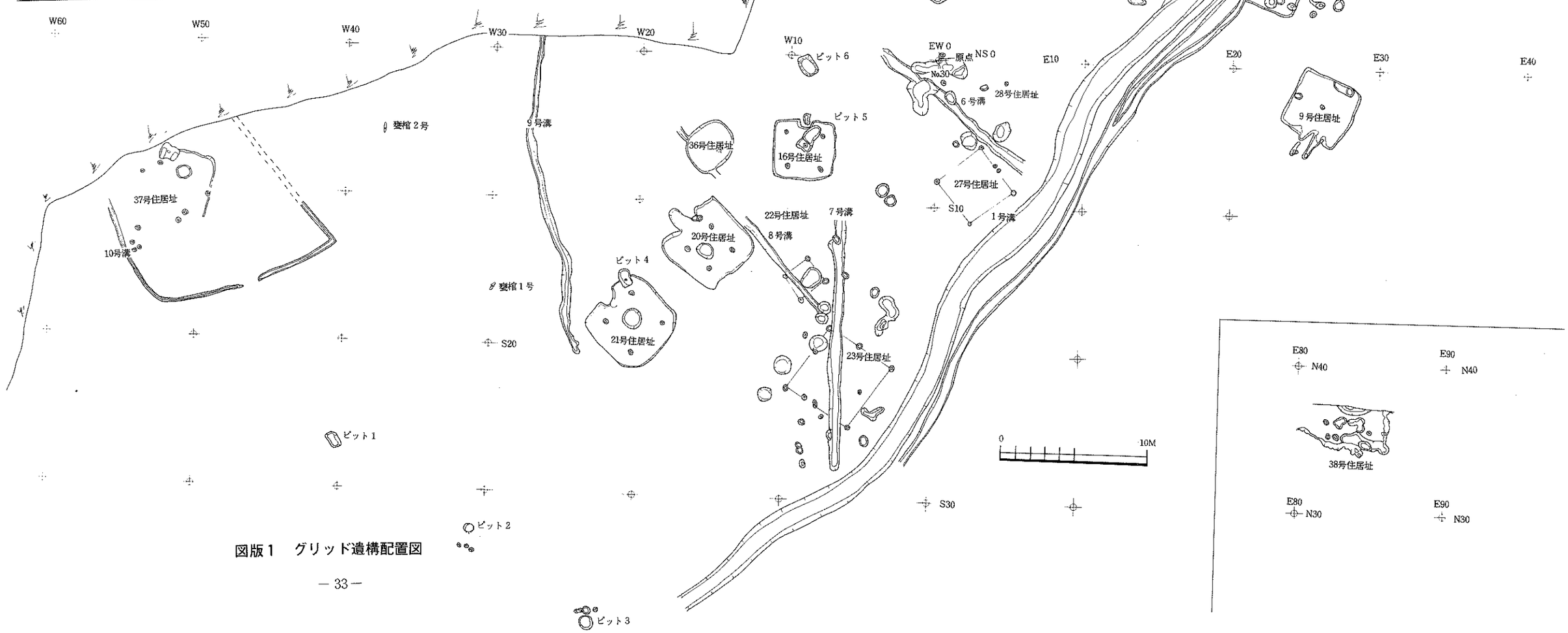
表土の除去によって、遺構が存在する面積は5,000m²に絞られた。この検出が一応終了後、基準線の設定を行なった。基準線は建設省設置の中心杭№30と№39を結んだ線とした。この基準線は磁北より西に7度ずれている。この基準線上の中心杭№39から10m間隔に基準点を設置し、№39よりどの方向に位置するのかを示すN 10、N 20……S 10……E 10……W10…というように呼称した。

遺構名については確認順序によって１号住居址、２号住居址というように命名した。

調査員の役割は都南村湯沢遺跡（1978）の方式を採用して行なった。掘り上げ、実測等についても作業員を班編成を行なって実施した。写真については調査員が交代で行なった。

掘り上げは住居址については４分法、ピットについては２分法又は必要によって４分法を併用した。セクション図については削平が強いもの、単層のものについてはフィルドカードに記載して省略した。





図版1　グリッド遺構配置図

実測は、住居址貼床面で一度行い、貼床除去後同一図面に赤で記入することとした。実測者は前述のように作業員のうち選抜し２名１組で５組ほど編成し、調査員がチェックした。

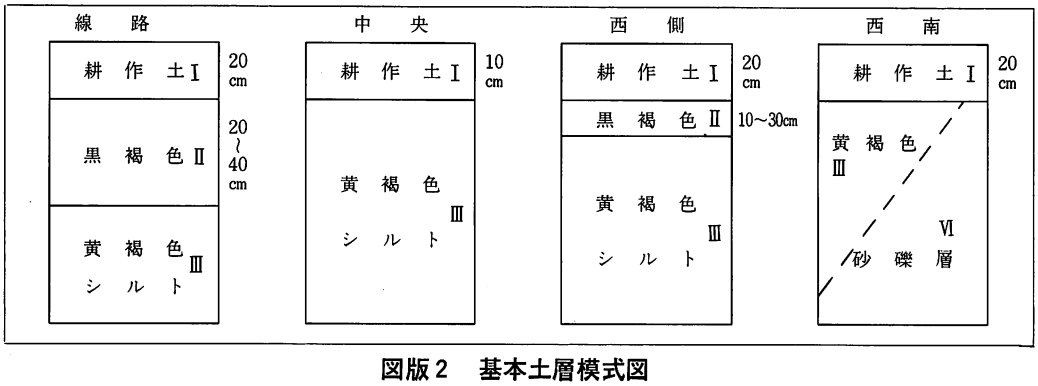
遺物の取上げは個体別に記号を付して行ない、雨天時に現場で水洗、注記をできる限り行なった。

整理作業

整理作業は現地での遺物洗浄、ラベル記入とセンター内での遺物の仕分、復元、拓本、鉄器の錆落し作業等と、遺物の実測、トレース、遺構のトレースに分けて行った。各遺構の図は、調査時に作成した図面をトレースし、遺物はできるだけ実大実測にした。各図版中の遺構の住居址平面、断面図は1/60、一部のカマド断面は1/40とし、ピット類も1/40に縮尺したが、すべて図版中にスケール等を付した。土器は復元可能なもの、復元出来たもの、反転復元可能なものを出来るだけ実測、トレースし、載せてある。縮尺は1/3であるがスケールを付しておいた。土製品石製品、鉄製品、石器は原寸もしくは、1/2縮尺で載せたが、各図版にスケールを付し、法量値等は表および図版１の左上にある凡例に示したように表わしてある。

Ⅲ　基　本　層　序

東大畑遺跡の基本土層はⅣ層からなり、Ⅰ層は水田耕作土である表土層、Ⅱ層は層厚20cm～30cmの黒褐色土層、Ⅲ層は黄褐色シルト層、Ⅳ層は礫層よりなり、その内Ⅱ層は東側線路より部分と、西側段丘縁近くにだけみられるもので、遺構が集中して検出された中央部分では削られており、みられないもので竪穴住居址の埋土中にみられる。Ⅳ層は調査区の西南に露出して見られるもので、本遺跡の基底礫層と思われるものである。遺構検出面は、住居址が密集している地区ではⅢ層上面であり、段丘縁および、東側線路付近ではⅡ層上面である。以上のよう土層の状況および遺構の埋土の状況から、かつては、Ⅱ層の黒色土が厚く堆積していたものと思われ、各遺構ともⅡ層の黒褐色土から切り込まれていたと思われ浸食作用および、水田耕作等の人為的な攪乱等によって遺構が密集している地区では削失してしまったと思われる。



図版２　基本土層模式図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

竪穴住居址

本遺跡は水沢段丘の西縁部から約60mの幅をもち南北に帯状の広がりを示す集落址である。この集落址における住居址は後世の水田耕作によって削平され、床面と僅かな壁高が認められるにすぎない。そのため、規模などの正確な数値をつかみ得ないものもあり、壁高は正確な数値は望むべきもない。又南西から北東に遺跡内を縦断する大溝によって住居址が破壊され、その大溝から東西に水を取入れる水路跡によってこわされるなど後世の営力による破壊が進行している。路線幅による制約と共に集落の全容解明に大きな支障となった。

以下　遺構について記載するが、規模の記載は東西長×南北長×壁高（深）の順であり、単位は記載ある場合を除き全て「m」である。単位はcmまで表示しているが、誤差のあることは勿論であるが繁雑になることを避けるため土は付記しない。出土遺物の特徴については、各遺構に含めず、一括して遺物の項でふれている。

1号住居址（図版8、写真図版2）

西部段丘崖から45m東に位置し、検出住居址群の東端部に存在する。北西コーナー部分を2号大溝で上部を削られているが、規模、形状とも判明する比較的残りのよいものである。規模は4.5×3.82×0.23で形状は長方形を呈する。床面は平担でしまりがよい。西側にはベット状の高まりが認められやや内側に中央部が張り出している。周溝は認められなかった。柱穴も認められない。カマドは東壁ほぼ中央部に構築されている。袖は地山部分を残してつくったもので、袖部芯ん間0.85、燃焼部は 0.6× 0.7で煙道部は長軸0.70、短軸0.40、煙出し部は0.38×0.35×0.11である。本集落址ではこの住居址のように煙道部、煙出し部まで残存する例は珍しい。その他の施設はない。

出土遺物（図版3～7、写真図版13、14－1～21）

出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器である。出土地点は、カマド燃焼部に土師器小型甕が倒立した状態で出土し、明らかに支脚として用いられたと考えられる。煙出し部分からは須恵器の甕片が出土しているが、用途は不明である。おそらく煙出し部の壁の崩れを防ぐのに用いたのであろう。カマド右袖部西南方向に土器片が集中しており、一種の土器溜めと考えられる。南西コーナー附近にいわゆる須恵系土器赤褐色（灰白色須恵器と区別する）の坏2個体が完形で正立の状態で出土している。

当住居地址から出土した土師器は、ロクロ使用内面黒色処理の底部切り離し糸切り後手持ヘラケズリ坏1、糸切り後ヘラ調整坏2である。須恵器は坏1、甕片1であり、須恵系土器は坏4である。埋土からは刃子1点が出土した。個々についての詳細は後述するが、ロクロ使用内面

黒色処理の土師器坏の内面に「大」を２字と斜面部中央部分に横走する直線と底部に四角形を画き、その両者を縦走するいくつかの直線で結んでいる刻字と刻線画が画かれている。

本住居址の時期は、出土遺物、カマド位置から平安時代に属し、９世紀代と思われる。

２号住居址（図版８、写真図版２）

１号住居址の西側に位置し、１号大溝を隔だてている。24号址とは重複しており上位に位置している。形状、規模は削平されて不明である。西側と南側に周溝状の溝が残っており、これが２号住居址の周溝と考えている。これから推定すると形状は方形で規模は 4.5m 位と考えられる。壁高は残存部がないためまったく不明である。

床面は、24号住居址を埋め立てシルト混りの暗褐色土で貼床を行っており、固く締っている。又貼床土には炭化物、焼土等が混入していた。カマドは東壁に構築されていたと考えられ、袖部に用いたと思われる土師器の甕が２個倒立して埋められていた。この甕も後世の削平や、バックホウによる表土削ぎの段階で口縁部のみを残すだけとなっていた。袖部、燃焼部とも削平されており、燃焼部と思われる甕と甕の間にかすかに焼土が認められた。煙道部、煙出し部は１号溝によって完全に破壊されている。

柱穴は貼床面における検出において手違いが生じていることから、この面での検出は不確かであるが、約８㎝下の24号住居址床面においても検出されなかったことから柱穴は床面上にはないものと考えた。

出土遺物（図版９、10、写真図版15―22～30、33）

遺物の出土地点はカマド袖部と考えられる東側と周溝状の溝、南側周溝東端の貯蔵穴状のピットからである。大部分は貯蔵穴状のピットから出土している。器種はロクロ使用土師器と須恵器と須恵系土器とその他に分けられる。ロクロ使用土師器は内面黒色処理で糸切り切離し後ヘラ調整をしている坏５個とロクロ使用の甕の口縁部２個である。須恵器はロクロ使用糸切後調整の坏７個、内１個は内外に火ダスキが認められる。甕、壺が破片で出土している。須恵系土器はその他として鉄製品のヤリカンナ１、土製品の土製紡錘車1、石製品の石製円形板状紡錘車（未完成品）１が出土している。

本住居址の時期は出土遺物とカマド位置から平安時代に属し９世紀代と思われる。

３号住居址（図版12、写真図版３）

１号住居址の南側、１号溝東側に位置し、１号、９号、18号、33号住居址と共に集落の東端部に存在する。本住居址は１号溝と重複し、１号溝によって西側部分を掘りとられている。新旧関係では本住居址が古い。

形状は１号溝によって西側部分を掘りとられているため正確なものは不明であるが、残存している部分より推定すると方形であったと考えられる。規模は残存部の計測値から、3.10（残

存）×4.92×0.14となる。床面はほぼ平担で堅く締っており特に南から$\frac{2}{3}$程度の所までの床面が堅く締っている。周溝は認められない。柱穴状のピットは次の10個が認められた。単位cm

P_1＝20×15×6　P_2＝45×55×24　P_3＝25×28×18　P_4＝15×15×13　P_5＝40×60×14

P_6＝50×36×20　P_7＝75×80×25　P_8＝25×33×？　P_9＝25×20×20　P_{10}＝30×35×9

このうち柱穴と認められるのはP_1とP_8であるが、本遺跡においては東壁にカマドを持つ住居址のほとんどは柱穴を持たないものであり、不整形を呈すると思われる配置から考えても間違った判定になる可能性もある。他のピットのうちP_5、P_7は小規模な貯蔵穴ピットとも考えられる。それは、このピット内及び周辺部から多くの土器片が出土しているからである。その他のピットは後世の柱穴ではないかとも考えられる。カマドは東壁の中央部よりやや南よりに構築されておる。袖部は造り出しでシルトを基盤に白色粘土で補強している。袖と袖の間が比較的広く芯々で70cmある。従って燃焼部も広く0.50×0.60ある。煙道部は1.25×0.22と考えられるが、住居側の部分は削平を受けており、煙出し部側において残存が認められる。これは住居側において一旦あがり、煙出し部に向って下がっていく作りとなっているからである。煙出し部はピット状を示し、0.50×0.35×0.29で煙道部から一旦落ち込む。煙出し部底部より上約5cmの埋土中に多量の土器片が出土し、その土器片にススが付着しているのが認められた。この土器片の上部には焼土塊、シルト混じりの暗褐色土が覆っている。

出土遺物（図版12—16、写真図版15、16—34～49）

遺物の出土地点は煙出し部及び、カマド南側の貯蔵穴状ピット周辺部が主で、カマド北側からロクロ使用土師器坏（完形）が1点検出されている。遺物はロクロ使用土師器、須恵系土器、須恵器に分けられる。ロクロ使用土師器は内面黒色処理底部回転糸切り再調整の坏4点、調整のない坏7点、甕片9点である。須恵系土器はロクロ使用糸切り再調整の坏2点と全面的にロクロ成形の小鉢2点、全面的にロクロ整形された小型甕6点である。この小鉢及び小型甕を須恵系土器とした事については遺物のまとめの項で後述する。須恵器は糸切り再調整の坏3点（完形）、甕の口縁部1点が出土している。その他の出土遺物として石帯1個がある。出土地点は竪穴住居址南西隅のP_{10}附近からである。石質はアルコース砂岩で、2個1対のクグリ穴が3個所に穿かれている。住居址の時期は出土遺物、カマド位置から平安時代に属し9世紀代と思われる。

4号住居址（図版17、写真図版4）

本住居址は路線北端に位置し5号、26号住居址と同様に大部分が路線外に存在するため全容は不明である。北端部に存在する三住居址のうち最東端に位置する。形状、規模については、前述通り不明であるが、検出部分より推定すると形状はほぼ方形を呈し規模は検出部分で南辺2.30×東辺4.00×壁高0.10である。これから一辺5～6mの規模の群に属すると思われる。

床面はほとんど削平され掘り方のみ存在し、底面は凹凸が見られる。周溝は東辺で１部検出されている。上幅0.24、下幅0.14、深さ0.03である。掘り方埋土はシルト粒、シルトブロックを含む黒褐色土である。柱穴は１個検出されている。0.24×0.28×0.　である。しかし位置が南コーナーであることからおそらく４個以上の柱穴をもつものと考えられる。カマドは、調査時のフィルドカードの記載によると南コーナーとしているが、実測図の記載では、ピットが住居址コーナーを切っており、又床面上に袖部、燃焼部等カマド施設も見当らず焼土が南側ピットから検出されてはいるが、カマドと断定しかねた。更に付言すると本遺跡で検出された住居址で柱穴を有するもののカマド位置は西壁か北壁で、カマド位置か東壁、南壁の住居址ではまったく検出されていない。更に形状の判明した24号住居址カマドをコーナーにもつものは４号址しかなくしかも対角線上の方向を指している。又実測図の表現も別遺構としていることから、カマドとして取り扱わない。遺物は埋土から須恵器甕の口縁部１点のみである。時期は出土遺物がないので不明であるが、柱穴を持つことから奈良時代に属するのではないかと思われる。

５号住居址（図版17、写真図版４）

４号住居址同様路線北端で検出され、遺構の大部分が路線外となっており、東辺と南辺の一部を調査したにすぎない。西側の崖線と１号溝の丁度中間に位置している。

形状、規模については、前述の通り不明であるが、検出部分より推定すると形状はほぼ方形を呈し、規模は検出部分で東辺3.50×南辺3.60×壁高0.06である。床面は黒褐色土とシルトによって貼り床されており、一部固く締っている。貼り床をはがすと掘り方があり底部は凸凹があるが工具痕までは判明しない。周溝はない。カマドは不明である。南壁に焼土が僅かに存在する。柱穴状ピットはP_1=0.25×0.25×0.28　P_2=0.45×0.45×0.52　P_3=0.45×0.45×0 25の３個検出されておる。このうち柱穴と認められるのはP_2だけである。位置が南コーナーであることからおそらく４個以上の柱穴をもつものと考えられる。埋土は約0.05で黒褐色土と半径２㎜程度のシルト混じりの層で微量の炭化物と焼土が入っている。単層であることからセクション図は省略した。

出土遺物（図版18、写真図版17―50、52）

遺物は全てロクロ未使用土師器で完形の皿１と壺の一部が出土している。出土地点は皿、壺とも東壁際である。時未は出土遺物から奈良時代に属し８世紀後半と考えられる。

６号住居址（図版18　写真図版４）

本住居址は調査時には２棟の切り合いと考え、６号住居址・７号住居址とされていたが、整理において同一住居址とされた。従って６号住居址と称し、７号住居址は欠番とした。本住居址は路線北端で５号住居址のすぐ西側に位置する。他住居址との重複はない。比較的残存状態が良く、形状、規模もカマド部分を除き把握できた。形状は方形を呈し、規模は7.35×7.10×

0.10である。床面はシルトで貼床をし、掘り方をもっており掘り方底面は凸凹が激しい。掘り方埋土は黒褐色土である。東壁の北よりに 1.4m 程の張り出した溝が認められたが周溝は認められない。カマドは北壁中央部に構築されていたと思われ焼土が２ヶ所に所在する。袖部をはじめ煙道部、煙出し部も削平破壊されており検出されなかった。柱穴状ピットはP_1=0.45×50×66　P_2=0.45×0.35×0.34　P_3=0.32×0.50×0.64　P_4=0.35×0.42×0.60　P_5=0.20×0.25×0.33　P_6=0.43×0.50×0.48　P_7=0.60×0.55×0.11　P_8=0.37×0.34×0.23　P_9=0.50×0.49×0.17の９個である。このうち柱穴と思われるものはP_1・P_2・P_3・P_4・P_5・P_6の６個でP_1・P_3・P_4・P_6が主柱穴と考えられる。P_7～P_9については不明である。貼り床を取り除き、掘り方埋土を取り払った所、掘り方床面に黒色の落ち込み２ヶ所が認められた。黒色土を掘り上げるとピットとなった。このピットの記載は柱穴状ピットと区別するためBP（Bigpitの略）とする。BP_1は住居址ほぼ中央に位置し形状は円形を示し規模は口縁部で1.35×1.20×45、底径 110×103 であり、埋土は黒褐色に若干のシルトが入っている。出土遺物はない。BP_2はP_4とP_5の中間地点やや東よりに位置し形状は長惰円形を示す。規模は口径1.15× 0.7×0.17底径0.91×0.52の比較的浅い皿状ピットと言えるものである。出土遺物はない。住居址との前後関係及び機能についてはまとめの項で後述する。

出土遺物（図版18～20、写真図版17－51、53～57、18－58～62）

遺物の出土地点は焼土附近とP_2附近である。遺物はロクロ未使用土師器、須恵器、土製品である。土師器は有段丸底内面黒色処理の坏３点、無段丸底内面黒色処理坏５点、皿１点、手づくね１点、甑１点、長胴甕完形３点、口縁部７点、底部３点が出土している。須恵器は甕の底部１点が出土している。土製品は土製の勾玉で色調が白色のもの２点、黒色のもの１点である。当住居址の時期は出土遺物、カマド位置から奈良時代に属し、８世紀後半と考えられる。

８号住居址（図版21・22、写真図版５）

当住居址は調査区域北側中央部附近に位置し、６号住居址の南東に存在する。17号住居址及び２号溝と重複する。17号住居址によって北壁中央部から西側と、西壁中央部から北側を掘り取られており、２号溝によって東壁北側から床面中央部、北西コーナーにかけて掘り込まれている。形状はほぼ方形で規模は6.10×6.25×0 06である。床面はシルトと黒色土の混合土による貼床であり、掘り方をもつ、セクション図は単層なので省略した。周溝は認められなかった。

カマドは北壁中央部に構築されているが、右側袖部と0.30×0 35のほぼ円形に残っている焼土しか存在していない。他の部分は17号住居址によって削平破壊されている。残存の袖部は砂質シルト土によって構築されている。柱穴状ピットはP_1=0.40×0.30×0.36　P_2=0.35×0.35×0.62　P_3=0.30×0.35×0.52　P_4=0.25×0.25×0.54　P_5=0.40×0.35×0.33　P_6=0.40×0.40×？の６個であり、このうち柱穴と認められるのはP_1、P_2、P_3、P_4とP_6である。P_6はP_3の

古いものであると考えられる。柱間の距離はP_1～P_2＝3.72 P_2～P_3＝3.25 P_3～P_4＝3.35 P_4～P_1＝3.20である。掘り方埋土を掘り上げるとP_1附近の掘り方底部から黒色土の落ち込みが認められ、不正方形のピット１基が検出された。規模は口径1.50×1.10×0.11、底径1.24×0.90で西南部附近に小ピットを持っている。埋土は黒色土の単層である。セクション図は省略した。性格等については６号住のものと同一と考えられる。

出土遺物（図版22、写真図版19～63、64）

遺物はP_1附近とP_3東南部の壁際から出土している。遺物は全てロクロ未使用土師器で有段丸底内面黒色処理の坏１点、長胴の甕１点が復元された。その他甕の破片が出土している。

当住居址の時期は出土遺物、カマド位置から奈良時代に属し８世紀後半と考えられる。

９号住居址（図版23、写真図版５）

当住居址は調査区域住居址群の中央部東端に位置し１号溝の東側で、３号住居址の東南に存在する。形状は方形で規模は4.30×4.25×0.10である。床面は貼り床で黒褐色土に焼土、炭化物の混じった土を固くたたきしめている。周溝は認められない。柱穴状ピットはP_1＝0.30×0.30×0.35とP_2＝0.55×0.35×0.15の２個でP_1は床面中央部に位置、P_2は西壁中央部附近に位置する。柱穴と考えられるのはP_1のみである。カマドは南壁に２基構築されている。１号カマドは南壁の東側よりに構築されている。袖は地山を残しての削り出しで芯々の距離は0.75mである。燃焼部はφ0.40である。煙道部は焚き口からやや上り、煙出し部に向けてダラダラと下がっていく。煙道部長1.70、煙道幅は0.35である。煙出し部はピット状になるか煙道部から斜めに掘り込まれ、壁側にややえぐり込まれている。煙道部は直線的に延びているが、煙出し部はやや東側に傾いている。煙道部の埋土は黒褐色シルト土を主体に焼土、炭化物が混入する。色調や混入物によって層区分される。焚き口部の埋土も黒褐色土を主体としている。焚き口部の焼成は強くない。２号カマドは南壁中央部に構築されており東側袖部は１号カマドと共用しておる。西側袖部は僅かに痕跡をとどめている。袖部の芯幅は1.10であるが、残存部は外側部分であると考えられることから正確な数値とは言えない。燃焼部は不明である。煙道部は1.75であるが焚き口部から延びた部分が削られて切れている。これは１号と同様に焚き口部からゆるやかに立ち上がり、最も高位を示す部分が削られたものと考えられる。煙出しはピット状に凹みφ0.35、深さ0.21である。埋土、焼成土についての記載がフィルドカード、実測図にない。１号、２号の新旧関係は２号カマドが古く、２号から１号カマドにつくりかえが行なわれたと考えられる。なお、今回調査の住居址で南壁にカマドを持つものは本住居址のみである。

出土遺物（図版23・24、写真図版19―65、66）

遺物はカマド周辺、煙道、床面から出土している。遺物は土師器と須恵系土器、須恵器、石製品である。土師器はロクロ使用内面黒色処理底部糸切り、底部は摩耗しているが調整が行

なわれたと思われる坏2点、ロクロ未使用長胴甕1点で底部は木葉痕がついている。須恵系土器は全面にロクロを使用した小型の甕片6点が出土している。須恵器は甕口縁部片6点が出土した。石製品は細粒凝灰岩製の砥石が1個出土している。時期は出土遺物とカマド位置から平安時代に属し9世紀代と考えられる。

10号住居址（図版25、写真図版6）

当住居址は調査区中央部の西側段丘崖と1号溝との中間附近に位置する。形状は胴張りの方形状を呈し21号住居址と共に特異な形状を呈する。規模は最終的には6.20×5.76×0.06を示すが、数回の建換え拡張が考えられる。床面は削平されており掘り方のみであるが周溝部分が残存していた事から床面の削平は深くないものと思われる。周溝は3重に検出されたが、最終図面実測までに2重の周溝が床面内側だったために、掘りとられてしまい記載が不可能となった。このため、最大壁を示す部分についてのみ記載されている。周溝は東壁から南壁にかけてめぐり、南壁中央部分を抜いて西側から西壁中央部分までめぐる。周溝部の上幅は0.25、下幅0.10深さ0.08mである。この周溝の内側3ケ所に坑状のピットがある。このピットは同時期のものと考えられる。柱穴状ピットはP_1=0.23×0.16×0.42 P_2=0.28×0.17×0.43 P_3=0.27×0.23×0.43 P_4=0.47×0.31×0.48 P_5=0.33×0.18×0.29 P_6=0.30×0.32×0.30 P_7=0.35×0.37×0.36 P_8=0.35×0.34×0.17 P_9=0.32×0.35×0.26 P_{10}=0.36×0.35×0.36 P_{11}=0.29×0.28×0.25 P_{12}=0.28×0.25×0.26 P_{13}=0.30×0.30×0.27 P_{14}=0.27×0.30×0.27 P_{15}=0.26×0.25×0.18 P_{16}=0.25×0.30×0.13 P_{17}=0.47×0.50×0.17 P_{18}=0.30×0.18×0.18 P_{19}=0.29×0.25×0.13 P_{20}=0.25×0.21×0.22 P_{21}=0.14×0.19×0.21 P_{22}=0.25×0.25×0.13 P_{23}=0.50×0.39×0.19 P_{24}=0.20×0.18×0.16 P_{25}=0.56×0.32×0.22 P_{26}=0.56×0.70×0.5 P_{27}=0.52×0.53×0.15の27個が検出されている。このうちのほとんどの形状は円形であるが、P_5、P_9の2個は方形である。P_4とP_{11}は切り合い関係にあるがP_{11}の方が新しい。P_{12}とP_{13}も切り合い関係にあるがP_{12}が新しい。P_{23}とP_{25}も切り合い関係にあるがP_{23}が新しい。P_{24}～P_{27}は住居址外にある。27個のうち柱穴と思われるのはP_1・P_2・P_3・P_4・P_5・P_6・P_7・P_8・P_9・P_{10} P_{11}の11個である。この組合せは「P_1・P_2・P_3・P_4」「P_4・P_5・P_6P_7」「P_4・P_8・P_6・P_7」「P_8・P_9・P_{10}・P_{11}」の4通りと考えられる。4通りの柱間距離は「P_1～P_2=2.10 P_2～P_3=1.80、P_3～P_4=2.23」「P_4～P_5=2.71、P_5～P_6=2.80、P_6～P_7=2.15、P_7～P_8=2.63」「P_4～P_8=2.60、P_8～P_6=2.57、P_6～P_7=2.15、P_7～P_4=2.63」「P_8～P_9=3.45、P_9～P_{10}=2.65、P_{10}～P_{11}=3.45、P_{11}～P_8=2.77」となっている。これらの新旧関係は小規模の柱間から大規模の柱間と移行したと考えられ、それをめぐると思われる周溝は小規模のものほど不鮮明であった。この事は小→大への移行を裏付けるものであろう。カマド位置は拡張しても殆んど動かなかったと考えられ、北壁中央部に構築されている。袖部をはじめとして構築部分が殆んど削平破壊さ

れており、燃焼部と思われる所に若干の焼土が認められるだけである。掘り方底面から９号住居址で検出された大型のピットが５基検出された。ＢＰ$_1$はＰ$_5$の南側に検出され形状は不正惰円形で口径0.55×0.80×0.19の浅いもので底径は0.40×0.65で埋土は黒色土出土遺物はない。ＢＰ$_2$はＢＰ$_1$の南東の位置にあり形状は円形で口径0.84×1.05×0.40　底径0.70×0.76で埋土は黒色土出土遺物はない。ＢＰ$_3$はＢＰ$_2$の南東で住居址の周溝部分に位置する。形状は不正惰円形で口径1.01×1.21×0.51、底径0.55×0.90、埋土は黒色土出土遺物はない。ＢＰ$_4$はＰ$_3$とＰ$_4$の中間地点に位置しＢＰ$_5$と切り合っている。形状は円形で口径0.65×0.65×0.32、底径0.60×0.60埋土は黒色土出土遺物はない。ＢＰ$_5$より古い。ＢＰ$_5$はＢＰ$_4$の北東に連結し、ＢＰ$_4$の北東辺を掘り込んで作られている。形状は不正円形で口径1.00×0.94×0.40、底径0.60×0.80である。

出土遺物（図版26、26、写真図版19―68～71・20―72）

ロクロ未使用土師器有段内面黒色処理坏１点、土師器甕片６点である。住居址からの遺物の出土はない。時期は柱穴、カマド位置から奈良時代と思われる。

11号住居址（竪穴遺構）(図版26)

本遺構は遺構群の北端にあり５号住居址と31号住居址の中間やや５号住居址よりに位置する。当初遺物が出土した事から住居址と呼称したが以下述べるように住居址としての構造を持たない事から竪穴遺構とした。形状は円形で規模は2.17×1.97×0.34で小型なものである。ピットとするには浅い。埋土は黒褐色を主体にシルト、炭化物が入ってくる。床面は凹凸があり、中央部に小ピットをもつ。この小ピットはシルトで貼っている。周溝はない。柱穴、カマド共にない。

出土遺物（図版26、写真図版20―74、75）

遺物は土師器と須恵器が出土した。土師器はロクロ使用の内面黒色処理坏片１点と甕片２点須恵器壺の胴部１点である。時期は出土遺物から平安時代と考えられる。

12号住居址（図版27）

柱穴状ピットが集中し、壁、床の削平された住居址と考えたが、柱穴配列がとれなかったため住居址と認定できなかった。

出土遺物（図版27）

周辺からの出土遺物はロクロ未使用土師器の内面黒色処理坏片１点、ロクロ未使用土師器甕片２点である。

13号住居址（図版28、写真図版６）

当住居址は遺構群の中央部の東側に位置し14号住居址と１号溝と重複関係にある。当住居址は１号溝によって東半分を掘り込まれ、14号住居址によって西壁の上部を削られ埋めたてられている。形状はほぼ方形を呈していたと考えられ、規模は残存部で東西1.95×南北3.34×深さ

0.58である。床面は固く締っている。周溝、炉、柱穴共に確認されなかった。

出土遺物（図版28）

遺物は床面から縄文土器の深鉢片２片が出土した。この縄文土器は地文の縄文のみで、その縄文は単節縄文と撚糸文である。この土器片の胎土を観察すると繊維が混入された形痕がある。石器は縦形石匙３点が出土している。時期は出土遺物から本遺跡唯一の縄文時代住居址であり、繊維の混入から縄文時代前期に比定されるものと考えられる。

14号住居址（図版29、写真図版７－１）

当住居址は13号住居址の西側に位置し、13号住居址と重複する。13号住居址の西壁を削り、埋め立てて床として使用している。形状は方形を示すが東壁は耕作等によって削平されて消滅し、他の壁も不整形を示し、本来の形状ではないように思われる。規模は6.66×5.73×0.08である。床面は耕作等によって削平を受けて掘り方のみ存在したため床の状態は不明である。掘り方埋土は黒褐色土の単層なのでセクション図は省略した。周溝については不明である。カマドは西壁中央部に構築されたものと思われるが、袖部、燃焼部も削平されており不明であるし、焼土も存在しない。煙道部、煙出し部は削平を免がれて残存しているが、他住居址のものと比較をした場合煙道部が短いと思われる。 煙道部は西側に延びているが0.25しかない。幅は0.20である。煙出し部は0.35×0.45×0.13で煙出し底部に土器が検出された。柱穴状ピットは、P_1=0.70×0 65×0.62　P_2=0.45×0.25×0.42　P_3=0.40×0.70×0.61　P_4=0.42×0.45×0.52　P_5=0.50×0.47×0.21 P_6=0.40×0.37×0.11　P_7=0.77×0.80×0.10　P_8=0.25×0.27×0.14の８個である。このうち柱穴と思われるピットはP_1～P_4である。柱間距離はP_1～P_2=3.35 P_2～P_3=3.28　P_3～P_4=3.28　P_4～P_1=33.2である。掘り方底面から黒色土の落込みが2ケ所検出された。埋土は黒色土の単層である。セクション図は省略した。ＢＰ$_1$はほぼ住居址内部の中央部に位置する。形状は円形を呈する。口径1.03×1.16×0.20底径0.57×0.52のスリバチ形の断面を示す浅いものである。出土遺物はない。ＢＰ$_2$はＢＰ$_1$の南に位置し、長惰円形の形状を呈する。口径は0.52×1.08×0.29、底径0.40×0.95で底面中央部がもりあがっている。出土遺物はない。

出土遺物（図版29、写真図版20―76、77、79、80）

遺物は全てロクロ未使用土師器で、内面黒色処理の有段丸底坏片２点、無段丸底坏片１点、長胴甕片５点が得られている。住居址の時期は出土遺物から奈良時代に属し８世紀後半に位置するものと考えられる。

15号住居址（図版30、写真図版７－２）

当住居址は遺構群ほぼ中央部の両側段丘崖に近く位置する。30号住居址と重複関係にあり30号住居址の東壁部分を掘り込んでいる。形状は北辺に最大長をもつややゆがんだ形の方形を示

す。規模は中央部で6.25×6.25×0.14で壁は直に立ち上がる。床面は削平され掘り方の埋土のみである。埋土は黒色土で単層のためセクション図は省略した。周溝は床面が削平されているため不明である。柱穴状ピットはP_1=0.35×0.30×0.57 P_2=0.35×0.30×0.55 P_3=0.40×0.30×0.77 P_4=0.30×0.15×0.61の4個でいずれも柱穴と考えられる。この柱穴ピットは短形の形状を示し柱痕も短形を示すことから角柱を用いたと思われる。柱間距離はP_1～P_2=3.70 P_2～P_3=3.50 P_3～P_4=3.75 P_4～P_1=3.60である。カマドは西壁中央部に位置すると思われる。カマド袖部、煙道部、煙出し部共削平されている。西壁中央部に東西 1.0m 南北0.55mの焼土が存在してカマド位置が判明した。住居内施設としてカマド北側に貯蔵穴状のピットが存在する。形状は不正楕円形で規模は口径1.15×1.45×0.24 底径0.85×1.28である。このピットからロクロ未使用土師器長胴甕片2点が出土した。掘り方埋土を掘り取ると黒色土の落ち込みがあらわれる。この黒色土を掘り上げるとやや大型のピットとなる。このピットは4個検出されている。ＢＰ$_1$は貯蔵穴状ピットの東側に位置し、不正円形の形状で口径 158× 125×0.23 底径 126×0.75 埋土は黒色土の単層、皿状の断面を呈し、出土遺物はない。ＢＰ$_2$は東壁やや北寄りに位置し長方形の形状で口径1.20×0.70×0.80 底径1.00×0.56の規模で他のＢＰよりも深い。埋土はフイルドカードに記載がないため不明である。出土遺物はない。形状と深さから他のＢＰと性格を異にするものと考えられる。ＢＰ$_3$は2個の切り合いであるが古いＢＰは記載を省略する。このＢＰは東壁中央部に位置しやや方形の形状で口径 123× 108×0.17 底径 0.90×0.75の規模である。埋土はフイルドカードに記載がないので不明、出土遺物はない。ＢＰ$_4$は南壁やや東寄りにつくられ、不整楕円形の形状で口径 190×0.73×0.07 底径 146×0.23底部中央部はややくびれている。埋土はフイルドカードに記載がないので不明。出土遺物はない。

出土遺物（図版30・31、写真図版 20―78・21―81）

住居址からの遺物は、カマド左側からロクロ未使用土師器の胴長甕片11点が出土している。時期は出土遺物から奈良時代に属し、8世紀後半に位置するものと考えられる。

16号住居址（図版32、写真図版７－３～４）

当住居址は遺構群の南側、西側段丘縁部近くに位置する。重複関係はない。形状はほぼ方形を呈し規模は4.20×4.10×0.06である。床面は平担で黒褐色土を主体とした土で貼床をしている。掘り方をもち、掘り方底面は凸凹が見られる。掘り方埋土はシルト混じりの黒色土である。セクション図は単層で浅いため省略した。周溝は存在しない。柱穴状ピットはP_1=0.25×0.22×0.60 P_2=0.26×0.20×0.51 P_3=0.25×0.24×0.49 P_4=0.22×0.35×0.44の4個であり、このいずれも柱穴であると考えられる。柱穴の上部掘り方は、やや方形状を示している。柱間距離はP_1～P_2=2.30 P_2～P_3=2.25 P_3～P_4=2.40である。カマドは北壁中央部に構築されて

いるが、袖部は完全に削平されている。北壁の状況が中央部で壁線が内側に張り出すことから地山面を残存させてのいわゆる削り出しによって袖部が作られたと考えられる。燃焼部も破壊されている。煙道部はかすかに残っており、住居址に近い部分は削平を受けているが煙出し部に近いほど残りが良い。この事は他住居址のカマドでも見られた。焚き口部からの立上がり部分が煙道の最高位点を示すものと考えられる。煙道の規模は長軸0.80　短軸0.20である。煙道は北の方向に直に延びておる。煙出し部は0.34×0.32で煙道部から落ち込みピット状になっている。煙道部、煙出し部の総延長が1.00で本遺構群における煙道部分では短い数に入る。貼床部分を除去するとほぼ中央部とそれの北東に連結するように2個のピットが検出された。中央部のＢＰ$_1$は方形の形状を呈し底部中央部に小ピットを持っている。規模は1.00×0.75×0.59である。底部は1.00×0.75で底部小ピットはφ0.20深さ0.40でV字状を示す。埋土は粘土質の黒色土である。ＢＰ$_2$はＢＰ$_1$北壁部に接して掘られており台形状の形状を呈し規模は1.46×0.85×0.26で底部は1.10×0.62で底部小ピットは持たない。埋土はＢＰ$_1$と同様である。ＢＰ$_1$、ＢＰ$_2$共に出土遺物はない。

出土遺物（図版32・33、写真図版21―83～86・22―87～90）

遺物は、カマド東側と床面の中央部より東側において出土している。出土遺物はロクロ未使用土師器と土製品である。土師器は有段丸底杯1点、無段丸底杯1点と無底の瓶片1点、甕片9点である。土製品は紡錘車1点である。時期は出土遺物から奈良時代に属し8世紀後半と考えられる。

17号住居址（図版34、写真図版8―1）

当住居址は遺構群の北端部に位置し、1号溝と西側段丘崖との中間に所在する。重複関係は8号住居址と2号溝がある。新旧関係では、17号住居址が8号住居址の南西コーナー部分を掘り込んでつくっている事から17号住居址が新しく、2号溝が17号住居址南壁を掘り込んでいる事から2号溝が新しい。形状は残存の三辺から推察して方形である。規模は4.68×4.60×0.21である。床面は平担で周溝は存在しない。埋土はシルト質の暗褐色土の単層でありセクション図は省略した。柱穴状ピットはＰ$_1$＝0.20×0.22×0.13　Ｐ$_2$＝0.25×0.15×0.30　Ｐ$_3$＝0.24×0.24×0.20　Ｐ$_4$＝0.24×0.25×0.33　Ｐ$_5$＝0.22×0.24×0.20の5個検出されている。この5個のうち4個はカマド北側の床面に、1個は西壁寄りで検出されており、位置、深さから柱穴にはならない。カマドは南壁の南東コーナー近くに構築されている。カマドの大部分は溝によって削平を受けているが、部分的に残存している。袖は黒色土の上にシルトを載せており、芯材として土師器甕を用いている。袖と袖の間は約0.70で燃焼部から立上がりの壁までは深いピットになっている。焼土の堆積は床面に僅かに見られるだけであり、ピット底部は黒褐色土の堆積であり、おそらく溝によって焼土も押し流されたものと考えられる。全体図上8号西壁の点

線部分及び鍵状に見える部分が17号住居址の煙道部分及び、煙出し部である。遺物はロクロ使用土師器と須恵器である。土師器は内面黒色処理底部糸切無調整の坏片３点、上部ロクロ、体部ケズリの甕片５点、須恵器底部糸切坏片３点、鉄製品の刃子片１片がそれぞれ床面から出土している。時期は出土遺物から平安時代に属し９世紀後半から10世紀前半と考えられる。

18号住居址（ピット群）（図版36）

当住居址は遺構群東端の１号住居址と33号住居址の近くに存在するピット群で、調査時には柱穴配置がとれるものと考え、住居址の呼称を与えたが、整理段階において住居址としての配列がとれないし、出土遺物（図版36）がロクロ使用の須恵系土器（坏２、甕２）であり、今次調査部分における須恵系土器出土の住居址は柱穴をもたないもののみである事から住居址とせず柱穴群とした。

19号住居址（図版37、写真図版８－２）

当住居址は遺構群ほぼ中央部の西側段丘縁近くに位置し、25号住居址、30号住居址の中間に存在する。重複関係は認められない。形状はやや菱形を呈し、東壁、北壁の辺形が直線ではなくジグザグ状を呈する事から正確な数値ではない。床面は削平されて掘り方のみである。しかし、西部において焼土が検出され、遺物が出土していることから部分的には床面と思われるものが残存していたようである。周溝、カマドとも不明である。埋土は黒褐色土を主体としている。埋土掘り上げ後の底面はやや凸凹がある。この底面においても柱穴と思われるものは検出されなかった。掘り方底面において黒色土の落ち込みが南西部分で検出された。形状は楕円形で規模は 120×0.90×0.28で埋土の詳細は不明である。出土遺物はない。

出土遺物（図版37、38、写真図版23―104、105）

遺物は焼土周辺から出土しており、ロクロ未使用土師器で甕完形１点、破片８点である。時期は出土遺物から奈良時代に属し８世紀後半と考えられる。

20号住居址（図版39、写真図版８－３）

当住居址は遺構群南端に位置し16号住居址、21号住居址の中間に存在する。特に21号住居址とは同一方向に向けて並列しており規模もほぼ同じである。重複関係はない。形状はほぼ方形を呈し、規模は4.60×4.90×0.09である。床面はすでに削平され掘り方部分のみである。埋土は黒褐色の単層であるためセクション図を省略した。周溝は不明である。柱穴状ピットは、P_1 =0.30×0.30×0.33　P_2=0.25×0.30×0.33　P_3=0.28×0.26×0.30　P_4=0.25×0.25×0.32 の４個検出されており、このいずれも柱穴と判断された。柱穴間の距離はP_1～P_2=2.15　P_2～P_3=2.03　P_3～P_4=2.05　P_4～P_1=2.15である。ピットの形状は円形である。カマドは西壁中央部に構築されているが、袖部、焚き口部、燃焼部等は削平されている。煙道部、煙出し部は崩落等で形状は変化していると思われるが、残存している。煙道部から煙出し部までの長さは

1.05m、幅0.80mで、北方向に曲線を画くように延びている。掘り方埋土を取り除くと床面中央部に黒色土の落ち込みが検出された。このピットは円形の形状を示し、規模は1.07×0.96×0.36で底部は0.78×0.74である。出土遺物はない。

出土遺物（図版39、写真図版24—112）

遺物は埋土中から出土している。全てロクロ未使用土師器で高台付坏の高先部分2点、甕2点が出土している。時期は出土遺物から奈良時代に属し、8世紀末と思われる。

21号住居址（図版40、写真図版8－4）

当住居址は遺構群南端に位置し、住居址においては最南端に位置する。前述の20号住居址とは同一方向に向けて並列している。重複関係はない。形状は一部胴張りの方形で、特に東壁の胴張りが強い。規模は5.10×5.10×0.02である。床面は東壁と西壁の南側で壁の立ち上がりが認められるのみであるから、当然掘り方を持つのであれば床面は残存しないと思われるが、炭化材、焼土が多く検出されている。この分布面を床と考えれば掘り方を持たないものと考えなければならず、又炭化材や焼土が埋土中に埋め込まれたとすれば貼床の存在を考えなければならない。薄い埋土の層状は他の住居址の掘り方埋土で認められる黒褐色土にシルトが混在するものである。周溝は不明。柱穴状ピットはP_1=0.23×0.24×0.46　P_2=0.25×0.27×0.53　P_3=0.26×0.27×0.58　P_4=0.30×0.24×0.62の4個で形状はいずれも方形を呈する。柱穴はP_1～P_4であり、柱穴間の距離はP_1～P_2=2.75　P_2～P_3=2.30　P_3～P_4=2.80　P_4～P_1=2.65である。カマドは西壁中央部に構築されていたと考えられ、西壁中央部が内側に入り込みその部分にのみ焼土が堆積している。袖部、煙道部、煙出し部は削平されて消滅している。焼土部分は燃焼部と思われる。床面中央部には黒色土の落ち込みが検出され掘り上げるとピットとなった。又西壁北側に住居址内外にかかって同様なピットが検出された。BP_1は形状が円形で底部に一部くびれ部を持っている。規模は1.24×1.08×0.30で底部 104×0.94である。出土遺物はない。BP_2は形状は長方形で底部中央部に小ピットをもっている。規模は1.24×0.75×0.65、底部108×52である。小ピットは0.25×0.20×0.40である。出土遺物はない。埋土の記載がないので不明。

出土遺物（図版40、写真図版23—107）

遺物は東南コーナー附近の壁に貼り込められた状態で出土したものと床又は埋土と思われる部分から出土している。出土遺物はロクロ未使用土師器である。土師器は無段丸底内面黒色処理の坏片1点と、甕（東南コーナー壁出土）胴部である。時期は出土遺物から奈良時代末に属し、8世紀末と思われる。

22号住居址（図版41、写真図版9－1）

当住居址は遺構群の南側に位置しておる。重複関係では5号溝と重複していると思われる。

壁、床、掘り方共後世の耕作によって完全に削平されており、柱穴部分によってその存在が確認されたものである。柱穴以外は全く検出されていない。柱穴はP_1＝0.30×0.40×　P_2＝0.4 ×0.20×　P_3＝0.35×0.45×　P_4＝0.25×0.30×　で、柱間距離はP_1～P_2＝2.00　P_2～P_3＝2.10　P_3～P_4＝2.00　P_4～P_1＝2.00である。この柱間距離は当住居址内では狭い。時期は不明である。平安時代と思われる住居址からは柱穴が検出されておらない事から、奈良時代の可能性が強い。

23号住居址（図版42）写真図版９－２）

22号住居址の南側に検出されたもので、22号住居址同様、柱穴を除いて全てを削平された住居址である。重複関係ではP_5の一部が４号溝によって切られている。柱穴はP_1＝0.30×0.30×0.43　P_2＝0.22×0.20×0.38　P_3＝0.25×0.25×0.31　P_4＝0.30×0.30×0.39　P_5＝0.25×0.20×0.45　P_6＝0.25×0.35×0.33である。柱穴間距離はP_1～P_2＝5.00　P_2～P_3＝2.75　P_3～P_4＝2.25　P_4～P_5＝5.00　P_5～P_6＝2.40　P_6～P_1＝2.60である。前述当遺跡では少ない６本柱であり、P_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴でP_3・P_6が支柱穴であろう。

出土遺物（図版41、写真図版24－108、111、113）

遺物は土師器ロクロ未使用無段丸底内外黒色処理坏１点、甕片３点が周辺から出土しているが、住居址に伴なうかどうかは不明。

24号住居址（図版８、写真図版３）

当住居址は２号住居址の南直下に存在する。検出時においては、２号住居址の殆んどが削平され、カマド袖部に用いた土師器長胴の甕が２個東南部分にあり２号住居址の存在が確認されたのである。従って24号住居址は２号住居址が構築される段階で埋められたものと考えられるが、今回の調査時では２号住居址が削平され24号住居址が検出されたものである。

当住居址は精査時においては１棟と考えられたが、整理時において検討した結果、ほぼ同規模のものの重複による２棟と考えられる。しかし精査時における記録が１棟としているため、詳細については不明の点が多い。

Ⅰ期

新旧関係から言うと、古い方であり、シルト質の地山を床面としている。形状はほぼ方形を呈しやや隅丸となっている。規模は2.92×3.20×0.20である。壁の上面をⅡ期の住居址によって削られているが、直に立上がっている。

床面は東側中央部付近が大きく掘り込まれている以外は平坦でしっかりしている。

柱穴は床面上では見当らない。図面上には表現されていないが、写真には北壁に２ヶのピットが写し出されているが性格、規模等不明である。カマドについても不明である。遺物の出土もない。

時期も不明である。Ⅱ期のカマドが北壁に構築されていることから平安時代以前である可能性が強い。

Ⅱ期

新旧関係から言うと新しく、攪乱で不明な東壁を除き他の三壁を僅かに拡張している。

形状はⅠ期と同様に隅丸方形で規模は3.10×3.32×？である。床面は精査時において1棟と考えた事からⅠ期床面まで一気に掘り下げているためつかんでいないが、セクション間を見ると貼り床らしい線が一部見られる。前述の事から床面の状況については不明である。

柱穴状ピットについては図面に記載がない。写真では北壁に2ヶのピットが写し出されているが、性格、規模時期等不明である。

カマドは北壁の中央部に構築されておる。カマドの構築状況を見ると、黒褐色土の埋土の上にシルトで袖部を築いている。これは、第Ⅰ期の住居址を全体的に一様に埋めその上にシルトによって袖部を構築したものと考えられる。この黒褐色土面を燃焼部としていたものと思われるが焼土の堆積が薄かったために、燃焼部も第Ⅰ期床面まで掘り下げてしまい記録がない。袖部の芯々は0.70である。煙道部、煙出し部は削平されて検出されない。

遺物は破片が出土したが、伴うかどうかは不明である。参考までに図版11で示した。

時期は遺物の出土がないから不明である。カマドが北壁中央部に構築されている事から平安時代以前である可能性が強い。

25号住居址（図版34、写真図版9－3）

当住居址は遺構群北側の最西端に位置し、19号住居址の北側に所在する。重複関係は6号溝と切り合っており、6号溝か北西コーナーから南壁中央部やや西寄りの所まで掘り込んでいる。新旧関係では6号溝が新しい。

検出時には殆んど削平されており、かすかに竪穴の輪郭が解る程度である。形状は南西コーナーが削平されているが、残存する輪郭からやや胴張りの感じがする方形である。残されている北西コーナー、北東コーナー、南東コーナーのうち直に屈折するのは北西コーナーだけで、他の2コーナーは隅丸状を呈する。しかし壁の状態が不明なために一応方形とした。規模は6.08×6.43×0.01であるが、壁高については無きに等しい状態である。床面については、フイルドカードの記載によれば西側部分に暗褐色土の上をシルトで貼った貼床が存在したとされている。それが正しいとすると掘り方を持つ住居址となる。掘り方底面の検出面は比較的平担である。

柱穴状ピットは7ヶ検出されているが、このうち柱穴と思われるのは、P_1＝0.45×0.30×0.39 P_2＝0.32×0.32×0.48 P_3＝0.30×0.40×0.41 P_4＝0.40×0.30×0.52である。このうちP_4はシルトで柱支えを行なっている。この柱間距離はP_1～P_2＝3.70 P_2～P_3＝3.37 P_3～P_4＝3.70 P_4～P_1＝3.65である。 形状はいずれも円形である。 カマドは西壁中央部に構築されておっ

たと思われるが、袖部、煙道部、煙出し部等一切が削平されており、燃焼部であったと推定される位置に焼土の堆積が見られる。検出面において、他住居址では検出されたＢＰが検出されている。ＢＰ$_1$は住居址中央部に位置し、形状は円形を呈する。規模は1.30×1.20×0.32で底部は1.06×0.91で底部小ピットはない、埋土はシルトがラミナ状に入るが途切れ、黒色土が主体。出土遺物はない。

出土遺物（図版42・43、写真図版23—106）

遺物は薄い埋土中から出土し、ロクロ未使用土師器、土製品、鉄製品、黒曜石片である。ロクロ未使用土師器はいずれも破片であるが、甕７点である。土製品は土玉１点、鉄製品は鎌片１点である。黒曜石片は２点出土している。時期は出土遺物から奈良時代末で、８世紀末から９世紀初頭と考えられる。

26号住居址（図版44、写真図版10—１）

当住居址は路線幅北端で西側段丘縁に位置している。重複関係は７号溝、８号溝と重複している。７号溝とは西側において切り合い、８号溝はほぼ中央部の床面を掘り込んでいる。新旧関係ではいずれも溝が新しい。

形状は、路線外に西壁、北壁が延びておるため全容は把握できないが、東壁、南壁から推定するとほぼ方形と考えられる。南東コーナーはほぼ直角に曲がるが、北東、南西コーナーは、やや曲線を画いている。本住居址も床面を削平されているので、上部の構造が不明であるから隅丸方形かどうか不明である。規模は4.25×4.55×0.03である。床面は削平されており、掘り方のみ残存しており、周溝は不明である。掘り方底面は比較的平担である。

柱穴状ピットはP_1＝0.30×0.35×0.33　P_2＝0.30×0.30×0.21　P_3＝0.25×0.20×0.28　P_4＝0.26×0.24×0.09　P_5＝0.26×0.26×0.11　P_6＝0.17×0 20×0.07の６ヶ検出されている。このうち柱穴と思われるのはP_1～P_3の３ヶである。これらはいずれも形状は円形を示し、0.20m以上の深さを持っている。柱穴間距離はP_1～P_2＝2.30　P_3～P_2＝3.00である。他の住居址から検出されるBig Pitは検出されない。カマドは検出されていない。

出土遺物（図版44）

遺物はロクロ使用土師器と須恵器が出土している。土師器は内面黒色処理の坏の破片１点と甕片５点、須恵器は甕の口縁部１点、底部破片１点である。時期は出土遺物から平安時代に属し９世紀と考えられる。

27号住居址（図版45、写真図版10—２）

当住居址は遺構群の中央部やや南寄りに位置し、１号溝の西側、３号溝の南側に所在する。

壁、床、掘り方等は耕作によって削平されており、形状、規模は不明である。住居址と考えたのは、ほぼ同一形状の柱穴状ピットが柱配置と考えてよい状態で検出されたからである。

その柱穴はP_1=0.30×0.35×0.65　P_2=0.30×0.30×0.49　P_3=0.35×0.30×0.59　P_4=0.28×0.28×0.65の4ヶである。形状は円形で、比較的深い。柱穴間距離は、P_1～P_2=5.20、P_2～P_3=3.60　P_3～P_4=5.20　P_4～P_1=3.70である。

この柱穴から推定した場合東西軸6mを越す住居址規模となるようである。

出土遺物（図版45、写真図版24—109）

遺物は柱穴埋土からロクロ未使用土師器小型甕木葉痕底部破片1点が出土した。時期はP_4出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。

28号住居址（図版46）

精査時に、27号住居址の柱穴北側で数ヶの柱穴状ピットが検出され、27号住居址同様の柱配置が判明するものと考えたが、整理段階においても柱配置がとれないため、欠番とした。

29号住居址（図版46）

当住居址も28号住居址同様調査時に27号住居址北西部の不正形ピット類を住居址と想定したが、整理段階においても柱配置が判明しないので欠番とする。

出土遺物（図版47、写真図版24—115、116）

不正形ピット埋土からロクロ未使用土師器の内面黒色処理丸底の坏片1点と長胴甕口縁部片3点が出土している。

30号住居址（図版47、写真図版10）

当住居址は遺構群ほぼ中央部の西側に位置し15号住居址の西側に所在する。15号住居址と重複関係にあり、15号住居址によって東壁の大部分と北壁の半分を掘り取られている。新旧関係では15号住居址が新しい。

形状は、現状では台形状を呈するが、本来的には胴張り方形を呈したものと考えられる。規模は3.32×4.06×0.05である。床面は削平されて掘り方のみである。掘り方埋土は黒褐色単層であり、セクション図を省略した。周溝については検出されなかった。柱穴状ピットは4ヶ検出されたが、位置、深さから柱穴と考えられない。カマドは北壁中央部よりやや東寄りに構築されたと考えられるが、袖部をはじめ煙道部、煙出し部共に削平されており正確には不明である。ただ北壁からやや離れた床面に焼土が掘り込まれた所に存在し、おそらく燃焼部の底部のみが残存したものと考えられる。この事が正しければ、北壁中央部やや東寄りに構築されていた事になる。

出土遺物（図版49）

遺物は掘り方埋土中よりロクロ未使用土師器の甕破片4点が出土した。時期は出土遺物から奈良時代に属し8世紀末と考えられる。

31号住居址（図版51）

当住居址は遺構群北端部、１号溝西側に付着する形で所在する。重複関係にある遺構は32号住居址、１号溝である。32号住居址とは南側において切り合い、西壁はピットと切り合うかあたかも連続するように見える。新旧関係は不明である。１号溝とは東側で切り合い、東壁部分を全面的に掘り取られている。新旧関係では溝が新しい。

形状は北壁と西壁の一部を残すのみであり、コーナーも北西コーナーのみであるが残存部及び柱穴配置からはやや長方形を呈すると考えられる。規模は残存部では北壁7.70×西壁4.00×壁高0.10であるが、推定式規模は7.70×8.20である。床は耕作によって削平されて掘り方埋土部分を残すに過ぎない。この埋土部分を掘り上げると掘り方底面が現われるが、凸凹が激しい。埋土セクションは、墨褐色土の単層のため省略した。

柱穴状ピットは北側において32号住居址と重なることから、さらに所属するか不明であるがP_4を除き、32号住居址の推定部分にあるものは全部32号住居址において記載することにした。従ってP_1～P_{11}までを31号住居址で記載する。

P_1=0.20×0.31×0.20　P_2=0.40×0.38×0.30　P_3=0.21×0.21×0.41　P_4=0.20×0.22×0.46　P_5=0.25×0.25×0.47　P_6=0.20×0.26×0.06　P_7=0.21×0.29×0.16　P_8=0.45×0.35×0.42　P_9=0.30×0.22×0.10　P_{10}=0.25×0.25×0.11　P_{11}=0.20×0.20×0.26の11ヶである。このうち配置及び深さから確実に柱穴と思われるのはP_2、P_4、P_4、P_5、P_8の５ヶである。この他に配置からいうとP_6、P_7が柱穴となる可能性が強い。しかしP_5とP_8を結ぶ柱筋からP_6、P_7共にはずれるし、深さがP_6は0.06m、P_7が0.17mと他の５ヶに比して極端に浅く、一応柱穴から除外して記載した。柱穴間距離はP_2～P_3=2.20　P_3～P_4=2.25　P_4～P_5=3.40　P_5～P_8=4.50である。これらの柱穴掘り方はP_2を除いてやや方形を呈する。

カマドは北壁中央西寄りに凹みがあり、その凹みに現地性焼土が堆積し、燃焼部と考えられた。従ってカマドは北壁中央西寄りに構築されたと考えたが袖部、煙道部、煙出し部は削平されており規模は不明である。焼土の範囲は0.46×0.42である。その他に焼土が２ヶ所存在した。１ヶ所は住居址ほぼ中央部で0.30×0.26位の範囲でもう１ヶ所は東側で0.30×0.40範囲である。厚さはフィルドカードにも記載がないので不明である。埋土を掘り上げると掘り方底面に黒色落ち込みのピットが検出された。このピットは32号住居址検出のものと通りで記名したのでそれを用いる。本住居址に関係するピットはＢP_1、ＢP_2、ＢP_3、ＢP_5の４基である。ＢP_1はカマド西側の北壁際にありほぼ円形の形状を呈する。規模は0.62×0.54×0.61で底径は0.50×0.50で埋土は黒褐色で出土遺物はない。ＢP_2はＢP_1の南側に位置しほぼ長方形を呈する。断面は壁、下位に中段を設けており、規模は口縁部で1.04×0.70×0.41、中段で0.86×0.60×0.25、底面で0.77×0.50である。埋土については不明。出土遺物はない。ＢP_3はP_6とP_8の中間に位置し、ほぼ円型の形状を呈する。規模0.50×0.56×0.10、底径0.37×0.38である。埋土につ

いては不明、出土遺物はない。B P_5は推定住居址の南東コーナー付近に位置し、長方形を呈する。規模は0.54×0.85×0.23で底径0.36×0.60である。埋土については不明。出土遺物はない。B P_6はB P_3の西側に位置し不正円形を呈する。規模は1.20×1.00×0.48で底径0.81×0.54である。埋土については不明、出土遺物はない。

出土遺物（図版48・49、写真図版24—117～130）

遺物は掘り方埋土から出土している。ロクロ未使用土師器、ロクロ使用土師器、須恵器、須恵系土器である。ロクロ未使用土師器は内面黒色処理坏4、甕の破片9点で底部木葉痕もある。須恵器は坏片4点須恵系土器坏1点である。時期は出土遺物が混在しているため奈良時代～平安時代までの幅があり、床面が削平されており耕作時による遺物の移動等も考えられることから時期を特定できない。しかしカマド位置や、規模、柱穴からすると奈良時代に属する可能性が大である。

32号住居址（図版51、写真図版11—1）

当住居址は31号住居址南側に位置し、31号住居址、24号住居址と重複関係にある。31号住居址とは北壁及び東壁で切り合っているがほとんど削平され、埋土等が薄いため新旧関係はつかめなかった。24号住居址が新しい。形状は南西コーナーと、西壁の南側、南壁の西側のみしか残存していないので正確な形状は不明であるが、残存部と柱穴配置から推定すると東西方向が長い隅丸長方形を示すものと考えられる。規模は残存部は西辺2.30×南辺3.40×壁高0.10である。柱穴配置から推定すると6.00×4.70となる。床は耕作等で削平され掘り方を残すのみである。埋土は黒褐色土の単層であり、セクション図は省略した。掘り方底面は凸凹が激しい。

柱穴状ピットは31号住居址と重なる部分に集中、どちらに所属するのか不明なものが多いがP_4を除き32号住居址部分にあるものは全て記載した。P_{12}=0.22×0.22×0.20　P_{13}=0.22×0.25×0.20　P_{14}=0.23×0.26×0.19　P_{15}=0.22×0.23×0.29　P_{16}=0.20×0.21×0.18　P_{17}=0.21×0.18×0.28　P_{18}=0.18×0.18×0.20　P_{19}=0.24×0.14×0.13の8ヶである。このうち柱穴と考えられるのはP_{13}・P_{15}・P_{18}の3ヶである。もう1ヶの柱穴は24号住居址によって掘り取られたものと考えられる。柱穴間距離はP_{13}～P_{15}=2.14　P_{13}～P_{18}=2.92である。カマドは削平されて痕跡もない。掘り方底部に黒色の落ち込みが検出され、掘り上げたら浅いピットとなった。形状はほぼ円形で規模は口径0.85×0.91×0.18で底径は0.58×0.56である。埋土は黒色で出土遺物はない。

出土遺物（図版50、写真図版24—133～138）

遺物は埋土からロクロ未使用土師器、ロクロ使用土師器、須恵系土器、須恵器が出土している。ロクロ未使用土師器は内面黒色処理有段丸底の坏片2点長胴甕片2点ロクロ使用土師器は内面黒色処理糸切り底部切り離し調整の坏片1点、甕片5点で、須恵系土器は坏片1点、須恵器

は坏片１点である。時期は出土遺物より見ると奈良時代から平安時代にかけての時期幅がある。埋土からの出土であり、他からの混入も考えられ、時期は不明である。

33号住居址（図版52、写真図版11－２）

本住居址は遺構群東端にあり１号住居址の南側、18号住居址の西側に位置する。重複関係は１号溝とある。１号溝によって西壁全てと南壁半分、北壁の大部分を掘りとられている。新旧関係は１号溝が新しい。形状は残存部分が少ないため正確なものは不明であるが、残存部と柱穴から推定すると東西にやや長い隅丸長方形と考えられる。規模は残存部では、東辺2.40×南辺3.10×壁高0.10である。推定規模は東西6.00×南北5.60である。床面はほとんど削平されており掘り方壁も南東コーナー付近が残っておるに過ぎない。従って床面のみならず、掘り方底面の状況も不明である。埋土は南東コーナー部分に僅か見られるが黒褐色が主体である。周溝は認められなかった。柱穴状ピットはP_1＝0.42×0.38×0.16　P_2＝0.22×0.28×0.26（形状は角）P_3＝0.16×0.18×0.04　P_4＝0.21×0.24×0.16　P_5＝0.25×0.25×0.44　P_6＝0.17×0.19×0.24　P_7＝0.15×0.18×0.10　P_8＝0.30×0.32×0.34　P_9＝0.25×0.28×0.03の９ヶでP_2を除いては形状は円形である。このうち柱穴と思われるのはP_2・P_5・P_8の３ヶであり、柱穴間距離はP_2～P_5＝3.20　P_2～P_8＝3.10である。柱穴は北西部分が欠除しているが、これは１号溝によって掘り取られたものと考えられる。従って基本的には４本柱である。１号溝底部のP_5東側にやや大きめなピットが検出されている。住居址との関連については不明だが、住居址範囲と考えられることから前述した住居址内に存在するピットと同様に記載する。形状は楕円形で規模は0.95×1.05×0.34である。埋土については記載がないため不明である。出土遺物はない。

出土遺物（図版52）

遺物はロクロ未使用土師器、須恵器、玉類である。ロクロ未使用土師器は内面黒色処理坏片１点、甕片２点、須恵器は坏片１点である。玉類はメノウ製の勾玉１点である。時期は出土遺物から奈良時代に属し、８世紀末と考えられる。

34号住居址

34号住居址としたのは遺構群北側に位置する６号住居址と25号住居址にはさまれた不正形ピットである。当初このピットからロクロ未使用土師器甕片１点が出土したので住居址の名称を与えた。しかしその後の精査、整理から住居址とする根拠が見出しえないので欠番とする。

35号住居址（図版53）

35号住居址としたのは遺構群中央部の14号住居址北側に位置するピット群であるが、整理中において柱穴配置が得られないので欠番とする。

36号住居址（図版53、写真図版11－３）

36号住居址は西側段丘縁が北から南に延びて西に屈折する部分の南側に位置し20号住居址の

北に所在する。重複関係は５号溝ともっている。５号溝が南東から北西に延びているが、36号住居址の南側部分を通っている。溝付近が浅いことから36号住居址の壁上部を掘り込んでいるに過ぎず、床面まで達していない。新旧関係では５号溝が新しい。形状は円形状を呈し規模は3.27×2.95×0.05である。埋土についてはフィルドカードにも記載がないため不明である。床面はほぼ平担であるが、張り床、掘り方についても不明である。柱穴は検出されなかった。カマド、炉、焼土についても検出されない。

出土遺物（図版53）

遺物は、床面直上からロクロ未使用土師器の甕片２点が出土している。時期は出土遺物から奈良時代に属し、８世紀末と考えられる。遺構の性格としては柱穴、カマド、炉などが検出されないことから住居とは断定できず、竪穴住居址状遺構と呼ばざるを得ない。

37号住居址（図版54）

当住居址は、西側段丘縁が北から南に延び西に屈折し、北側段丘縁と変化するその西端に所在し、全遺構の中では最西端である。遺構の所在する部分は、黒色土が深く、本住居址も黒色土中においてカマドが検出され、住居址と判明したものである。重複関係は10号溝ともっていると思われるが、南壁、西壁の確認が不可能であったため、正確の所は不明である。形状は、カマドから西側の北壁は段丘崖の崩落のため不明であり、僅かに東側北壁と北東コーナーとそれに続く東壁の一部が確認されただけである。西壁、南壁は全く検出不能であった。図上南壁のように画かれているのは、調査時において壁検出のために掘り込まれたものであり壁と確認されていない。規模は残存確認された東壁は4.82×北壁3.73であり、壁高は不明である。床面も黒色土のためはっきりしない。

柱穴状ピットはP_1＝0.27×0.24×0.38（住居外）P_2＝0.16×0.20×0.12　P_3＝0.30×0.32×0.51　P_4＝0.30×0.30×0.51　P_5＝0.25×0.20×0.20　P_6＝0.20×0.22×0.19　P_7＝0.28×0.30×0.27　P_8＝0.28×0.28×0.43　P_9＝0.21×0.20×0.28　P_{10}＝0.25×0.21×0.40の10ヶである。このうち当住居址の柱穴と考えられるのは、P_3のみで他のピットは柱穴配置から考えて柱穴とするのは無理と考えられる。カマドは北壁に構築されておるが、北壁における位置はカマド西側の壁が破壊されているため不明である。カマド袖部は芯に川原石を用い、シルトを張りつけている。袖部の端に土師器長胴甕を例立させて補強材として用いている。袖部芯々間は0.85である。燃焼部には支脚として土師器小型甕を倒立させて用いている。燃焼部は比較的焼成を受けており規模は0.40×0.90である。煙道部煙出し部共削平されて不明である。

出土遺物（図版55、写真図版25―140～144）

遺物は、カマドと埋土から出土しているが、全てロクロ未使用土師器である。器種は無段丸底内面黒色処理の坏片１個、長胴の甕４個小型甕１個、高坏の脚部１個である。時期は出土遺

物から奈良時代に属し、８世紀末と考えられる。

38号住居址（図版56、写真図版11－４）

当住居址は遺構密集地区より約50mほど東に離れて検出され、北側が路線外となっており全体を精査できなかった。重複関係は検出された部分ではない。形状は全体を検出できなかったので正確には不明であり検出された東壁の一部と南壁の壁線のジグザグが激しく壁の崩落が甚だしかった事を物語っており、この面からも正確な形状をつかみ得ない。しかし検出した部分から推定するとおそらく方形状を呈するものと考えられるがどのような方形かは推定し得ない。規模は東壁3.00×南壁5.50×壁高0.07であり西壁は削平されて不明、東壁北側と北壁は路線外である。床面は削平され、掘り方底面のみである。この掘り方底面は凸凹が激しく、他の自然面と明らかに異なっており、壁が確認されなくとも掘り方範囲は確認できない。

柱穴状ピットはP_1＝0.22×0.24×0.19　P_2＝0.29×0.29×0.32　P_3＝0.25×0.24×0.22　P_4＝0.26×0.29×0.23　P_5＝0.75×0.50×0.13　P_6＝0.40×0.45×0.23　P_7＝0.33×0.35×0.06　P_8＝0.50×0.50×0.09　P_9＝0.55×0.49×0.07　P_{10}＝0.45×0.45　P_{11}＝0.48×？×0.08の11ヶであるが、このうち柱穴と考えられるのはP_2・P_4の２ヶである。柱穴ピットの形状はP_2が円形でP_4の底面は方形を呈する。カマドは検出部分においては見当らなかった。又焼土も検出されなかった。

出土遺物（図版56、写真図版25－145～151）

遺物は埋土からロクロ使用土師器、須恵器、須恵系土器、土製品が出土している。ロクロ使用土師器は、内面黒色処理糸切底の坏片２点、盤片２点、長胴甕片８点、須恵器は坏片６点、甕片１点、須恵系土器は坏１点、赤坏１点、土製品は紡錘車１点、土師器坏底部（糸切り）を再利用した紡錘車１点が出土している。時期は出土遺物から平安時代に属し、９世紀末から10世紀と考えられる。

埋甕遺構

埋甕遺構は２ヶ所から検出されている。遺構群の西側に２ヶ所ともあり、９号溝の西側になる。この地区は、21号住居址と37号住居址の中間地帯で約27mにわたって住居址の途切れる部分である。

１号埋甕（図版58・59、写真図版12－１）

北側段丘縁から南側に約14mの所、９号溝西側に位置する。水田耕作下約20cmのシルト上面において、ほぼ類似した土師器長胴甕を２ヶ口縁部を合わせて横位の状態で水平に埋置されていたが掘り方は確認されなかった。長胴甕は２個とも耕作によって上位部分が破壊散逸し、シルト面に接していた下位部分のみが残存している。２個のうち南側の個体は口縁部から30cmほどまで残存し、北側の個体は口縁部から底部まで残存している。２個共も口縁部外面に叩き目

をつけたのちロクロ整形された下半部は太いヘラケズリをしている。内面はハケ目調整である。上部にススらしいものが付着している。２個の口縁は密着した状態で検出されており、主軸方向は北東方向である。この埋甕は沼山（1981）が言う所の土師器合口甕棺であろう。伴出遺物はない、時期は長胴甕の時期と長胴甕同一と考えると平安時代に属し、10世紀と考えられる。

２号埋甕（図版54、58、写真図版11－２）

北側段丘から南側に3.5 mの所に位置し37号住居址と９号溝のほぼ中間点に所在する。検出面は耕作土下の黒褐色土中で２個体分の土師器長胴甕破片が南北70cm×東西25cmの範囲に密集した状態で検出され、南北70cmの中間地点では２個の土師器長胴甕口縁部が一部密着した状態で確認された。掘り方は確認されなかった。２個の甕は１個の口縁部の１部、１個が口縁部と体部の一部が残存するのみで全体は把握できない。２個とも口縁部はロクロ成形であり、体部残存部は太い幅のヘラケズリである。胎土は粗く小砂利混じりである。

主軸方向は北東方向と思われる。

この埋甕も１号埋甕と同様の土師器合口甕棺であろう。伴出遺物はない。

時期は長胴甕の時期と同一と考えると平安時代に属し、10世紀と考えられる。（瀬川司男）

ピット（図版57、58、写真図版12－３～12）

検出されたピットは総計22基であり、それらのピットの内訳は土師器を伴うもの５基、縄文土器を伴うもの１基、遺物を伴わないもの16基である。土師器を伴うピットは、平面形は円形で断面の形は鍋底状を呈し、埋土は黒褐色土でシルト細粒、焼土を僅かに含んでいるもの３基と焼土を多量に含んでいるもの２基である。これらのピットは規模の違いはあるものの他の土師器を伴なう住居址に見られるピット（ＢＰピットとしてあるもの）と同一の性格を有するものと思われるが、これらピットの検出された場所で住居址等の痕跡が発見されなかった。縄文土器を伴うピットは平面形が円形で断面の形は浅皿状を呈し、埋土は黒褐色土でピット内全域に大洞C_1式粗製土器片が１個体分入っていた。遺物を伴わないピットは平面形が円形（４基）と長方形状のもの（12基）とに分けることができ、断面の形は部分的にオーバーハングして立ち上るピットもあるが、ほとんどのピットは垂直に立ち上り、ビーカー型、もしくは箱型状を呈する。なお本ピット中には住居址の頃でＢＰピットとしたものも含んでいる。長方形状のピットの内、底面中央付近に付帯施設として小ピットを１個有するものが３基見られる。埋土はどのピットも黒褐色土ないし、暗褐色土である。これらピットの内特に長方形状のピットについては、埋土が本遺跡で検出された縄文時代の住居址である13号住居址と近似していることなどから縄文時代に造られた遺構と思われ、その性格も陥し穴的性格の強いものと推察される。以下計測値等は表に示してあるのでそちらを参照されたい。（中川重紀）

ピット番号	平面形	断面形	大きさ 長軸(cm)×短軸	深さ(cm)土	遺物	遺物	重複関係	備考
1	長方形	箱型	122 × 73	43	暗褐色土			
2	円形	箱型	67 × 65	110	黒褐色土			
3	円形	鍋底状	90 × 90	26	黒褐色土	埋土中に土師器片		
4	長方形	箱型	124 × 74	64	暗褐色土		21号住居址、北西壁によって切られている。	
5	長方形	箱型状	100 × 77	57	暗褐色土		16号住居址の掘り方、底部より検出されP５ピットに切られている。	
6	長方形	箱型	143 × 110	98	暗褐色土			
7	長方形	箱型	120 × 70	78	暗褐色土		15号住居址の掘り方。底部より出土。	
8	長方形	箱型	116 × 69	50	暗褐色土		10号住居址の東壁によって切られている。	
9	円形	浅皿状	55 × 55	8	黒褐色土	ピット内全域に縄文晩期大洞C_1式		粗製土器
10	だ円形	ピーカー型	70 × 60	74	黒褐色土			
11	長方形	箱型	150 × 120	59	Ⅱ層に分かれる { Ⅰ層 黒褐色土 Ⅱ層 暗褐色土		32号住居址の南西壁によって一部切られている。	床面中央付近に直径23cm、深さ25cmの小ピット有。
12	長方形	箱型	128 × 100	57	基本的にⅡ層 { Ⅰ層 黒褐色土 Ⅱ層 暗褐色土		13号ピットを切っている。	
13	だ円形	箱型	150 × 100	103	黒褐色土　下層に暗褐色土		31号住居址、32号住居址、12ピットに切られている。	
14	長方形	箱型	115 × 80	60	Ⅱ層に分かれる { Ⅰ層 黒褐色土 Ⅱ層 暗褐色土		32号住居址。掘り方。底部より検出された。	
15	円形？	フラスコ型	75 × ？	60	不明			ピット周辺80cmに柱穴状のピット有
16	長方形	箱型	108 × 77	56	不明		４号、32号住居址、掘り方。底部より検出され15号ピットと重複関係にあるが、新旧関係は不明。	
17	円方形	ピーカー型	62 × 56	82	不明		４号住居址、北壁沿いの掘り方。底部より検出。	
18	長方形	ピーカー型	100 × 68	71	暗褐色土		31号住居址、掘り方。底部より検出。	床面中央付近に直径20cm、深さ30cmの小ピット有

番号	現存長	主軸方位	備考
合口棺棺１号	70cm × 27cm	N－33度－E	伴出土遺物なし
合口棺棺２号	75cm × 28cm	磁北に併行する	〃

第１表　東大畑遺跡ピット

ま　と　め

遺構

検出遺構の項においては、調査時において使用した名称に従って記述をしたが、本項においては時期別に一括して述べる。なお本項においては一部考察を加えながらまとめとする。

１ .遺構の占地

本遺跡の遺構群の時期を一切無視して見た場合その占地は、段丘崖周辺に集中する。31棟の住居址のうち29棟までが、西側段丘縁から50m の範囲内に帯状に占地している。この遺構群は帯状に北に延びるものと考えられる。西端の37号住居址、東端の38号住居址は、おそらく29棟の住居址群と異なった住居址群に属するものと考えられる。水沢市金ヶ崎町の奈良・平安時代の遺跡において、道路建設予定地等で集落を縦断する形で調査された報告を見ると、いずれもいずれも段丘縁辺部に遺構が集中し、段丘縁から奥に 120m の範囲までである。しかしこの120 m の範囲を示すのは水沢市石田遺跡であるが、石田遺跡は約 120m の幅で帯状に延びる段丘状の高まりとなっており、両縁辺部からは60m 間隔となる。水沢市金ヶ崎町の奈良・平安時代の既調生遺跡の段丘縁辺部からの占地幅は次の通りである。

水沢市	今泉遺跡	約50m
	西大畑遺跡	約50m
	南矢中遺跡	約20m
	袖谷地遺跡	約50m

	石田遺跡	約 120m
	玉貫遺跡	約70m
	膳性遺跡	約60m
金ヶ崎町	上餅田遺跡	約80m
	西根遺跡	約50m
	鳥海A 遺跡	約40m
	鳥海B 遺跡	約50m

これで見られるように水沢市石田遺跡を除いては80m の範囲内を占地している事が判る。他地区においてもほぼ同様の傾向が見られる。この占地は、当時の集落立地の条件に合致するものであろう。その立地の条件とは、経済基盤としての農業を考えなければならないだろう。即ち、水稲耕作、畑作耕作の両方を行ないやすく、共同生活を行ない易い所ということになると必然的に段丘縁辺部に集落立地を求められてくるのであろう。相原（1981）が言う。自然村落的性格をもつ集落立地である。

2．時期と特性

検出住居址31棟の時期を大別すると縄文時代１棟、奈良時代17棟、平安時代10棟、時期不明３棟である。

〈縄文時代〉

縄文時代に属する住居址は13号住居址である。本住居址は１号溝によって東半分を掘り取られ、残存部の上部を14号住居址によって削られており全容は不明であるが3.55m 程度の方形のものと考えられる。床面は他の住居址より深く掘り込まれており床面は平担である。柱穴等の施設は検出されておらない。遺物は床面から繊維含む土器片と石匙が出土しており縄文時代前期のものと考えている。縄文時代前期の住居址はほとんどの場合、柱穴と地床炉を持っているが、本遺構においてはそれらの施設が見当らず、或いは竪穴遺構なのかも知れない。

〈奈良時代〉

奈良時代に属する住居址は４、５、６、８、10、14、15、16、19、20、21、22、23、24のⅠ、24のⅡ、27、30、33、36、37号住居址の20棟である。住居址の形状は方形が主体と為しており、正方形を呈するものはなく、辺長に多少の差が生じている。これは壁の崩落によって生じた差か、構築時の差か不明である。又四隅についても丸味を持つものが多い。方形の中に明らかに辺が外側に張り出すいわゆる胴張り方形のものが10号、21号、30号、36号住居址４棟ある。これら４棟は１辺が５m 以上のもの10号、21号住居址２棟、１辺４m 以下のもの30号、36号住居址２棟であり柱穴を持たないものである。これは10号、30号住居址が主軸方向がほぼ同じで中心間で約12m 離れており、21号、36号住居址が主軸方向がほぼ同じで、中心間が約12.5m 離れ

ており、それぞれ対になっている様に考えられる。出土遺物も同時期と考えてよいと思われその配置が注目される。おそらくこれらは対になる関係であろう。又菱形を呈する住居址は19号住居址で検出住居址中最大の床面積を示す。奈良期に属すると考えられる住居址間での重複は24のⅠ号と24のⅡ号住居址か、上位、下位という同一場所による建換えを思わせる重複であり、15号住居址と30号住居址は15号住居址か、30号住居址を掘り込む新旧関係を表わす重複である。他の住居址は縄文、平安時代の住居址と近世との溝による掘り込みは見られるが、同時期の遺構との重複はない。住居址の記載で述べたＢＰとの重複についてはＢＰの項で詳述する。規模については、形状を菱形をなす19号住居址の7.25×7.75を最大とし、24のⅠ号の2.92×3.20を最大とする。路線外に一部かかるものを除いた住居址を床面積でまとめると50m²以上のもの２棟49～40m²のもの０、39～30m²のもの５棟、29～20m²のもの２棟、19～10m²のもの４棟、10m²以下のもの２棟である。この規模とカマド方向による主軸によってまとめると、６号住居址（52.1m²）を最大とするグループは８号、部分検出ではあるが４号となるであろう。15号住居址（39.0m²）を最大とするグループは14号、20号、21号、36号住居址である。ただしこのグループは後述する柱穴配置のみの23号住居址グループに20号、21号36号がまとまる可能性が強い。19号住居址（56.1m²）を最大とするグループは10号、16号、30号住居址である。これらは、相原（1981）の言う石田遺跡における奈良時代半ば以降の住居址大、中、小の組合せ配置が認められる。床面は17棟のうち14棟が掘り方を持っており、床面を削平されたものも含めて、14棟全て貼り床であったと考えられる。この貼り床を構築した土は、黒褐色土とシルト粒との混合土が多い。地山面をそのまま床面として用いたものは36号住居址である。この住居址はカマド、柱穴とも検出されず住居として使用されたかどうか疑問がある。又一応平担とした24のⅠ号住居址は24のⅡ号住居址構築の時に掘り方底面を再掘した可能性が強い。

柱穴は基本的には４本で、床面積の大きい６号住居址は６本検出されている。しかし最大の床面積を持つ19号住居址は全く柱穴を持たないし、同様に柱穴を持たない住居址は全部で６棟を数える。カマドの存在が確認された11棟は北壁（方位としては北一北北西）９棟、西壁（北西一西）４棟である。方向の範囲としては北西西から北までの間に全てがおさまる。先にグループに分けた19号住居址グループは北方向で、６号住居址グループは北北西で、15号住居址グループは北西西である。袖部、煙道部、煙出しは残存しているものが少なくないため述べられないが、袖部はシルトで構築しているものが多い。いわゆる地山部分を残して作られたものは少なく、殆んどが黒色土上にシルトを盛ってつくられている。

床下ピット、掘り方埋土を除くと地山面を掘り込んだピットが検出される。このピットは埋土がある状態でその輪郭が解るのは１例ぐらいである。住居址内における位置を見ると、中央部６、東辺中央部６、西辺部中央３、北辺中央部２、北東コーナー部５、北西コーナー部３、

南西コーナー部４、柱穴のみのため不明５である。このうち住居との切り合い関係にあるのは21号住居址のＢＰ２である。このピットは住居址西辺によって切られており新旧関係では21号住居址が新しい。形状は円形を呈するもの15、不正形４、楕円形１、不正楕円形６、長楕円形１、方形３、長方形２、不正方形１である。このうち16号住居址のＢＰ１の方形と、21号住居址ＢＰ１の長方形のピットは底面に小ピットを１ヶ中央部に持っている。住居址床下ピットではないが、32号住居址南壁外のピットも同様の小ピットを持っている。規模は最大口径は15号住居址ＢＰ２の1.58×1.25で、最小口径は31号住居址ＢＰ３の0.50×0.56である。深さは15号住居址ＢＰ３の0.08を最高に15号住居址ＢＰ５の0.07を最低としている。

この床下ピットの時期、性格は何であろうか。まず検出の状態であるが、フィルドカードの記載によれば殆んど掘り方が埋土を除いた状態で検出されたとしている。これから見ると明らかに住居址より古い事になる。埋土の多くは黒色土との記載からも、掘り方埋土と異なっていると思われる。この事からは住居址との関係はないと考えられる一方位置の問題がある。奈良時代と考えられた住居のうち完掘した15棟のうち床面内にこの種のピットの存在が認められないのは24号のⅠ、24号のⅡ、36号住居址だけであり、完全に遺構外と考えられるのは32号住居址南壁外に存在するものである。他の遺構外のものは、住居址の削平状況から完全に遺構外とは断定できない。このように大部分が床面内に含められることから偶然と言えるか疑問が生じ、住居となんらか関連する施設として用いられ、後に埋められたという考え方も残る。ただ21号住居のＢＰ１は切り合いから新旧関係のある事は先述した。

形状では円形と楕円形を基調としたものが多く、方形を基調としたものは６基と少ない。又底部に小ピットを持つものは、方形を基調としたものである。いずれも断面形でフラスコとなるものはない。規模は口径平面19.7㎡～ 2.8㎡まで存在する。掘り方底面からの深さは0.80m～0.07mまで大きく差がつくが、深さについて述べて見る。掘り方底面からの深さを10cm代で区分すると80cm１、70cm 0.60cm１、 50cm２、40cm６、30cm７、20cm８、10cm６、１cm１の分布を示し、圧倒的に40cm代以下に集中する。形状と深さでは50cm以上に方形を基調としたものが比率から見るとやや多いが、全体的には種々の形状がバラまかれている。規模はさる事ながら深さによる用途が異なる事は当然であると考えた時、50cmを超えるものと以下のものについて性格を異にするとも考えられる。時期決定の資料となる遺物は18号住居址ＢＰ２の埋土上部からロクロ未使用土師器片数点が出土しているに過ぎず決定的なものとはならない。

水沢市、金ヶ崎町における同時代と考えられる遺跡においては全く同例の検出はない。

以上の事を総括すると、住居址との新旧関係については検出の状況からすると明らかに床下ピットであり、住居址が新しいと考えられる。性格としては50cmを超える深さを有し、旦つ長方形で底部に小ピットを持つものは、水沢市南矢中遺跡、袖谷地遺跡、金ヶ崎町館山遺跡で検

出された陥し穴遺構で瀬川（1981）の言うＤⅠ型に属するものと考えたい。円形のものについてもＣ型に属するものもあるように考えられる。しかし40cm以下の深さしか有しないものについては不明である。しかし、住居址床面中央部にピットをもつ6 号、10号、14号、20号、21号、25号住居址の６棟は、８世紀後半から９世紀初期と考えられる時期である。口径面積1.62㎡～0.88㎡で深さは0.45m ×0.20m であり、ほぼ似通っている事も考えて、周辺遺跡と異なる集落形態を持つ事も捨てきらない所もある。

奈良時代住居址についてまとめて述べると、時期は８世紀後半から末の間につくられたと考えられ、その構築法は県南地方では珍しい掘り方を持ち埋土の上に床を貼るものである。時期的には四つのグループ（四時期の集落）に分けられると考えられ６号住居址グループ（６号、８号、30号、４号が考えられる）15号住居址グループ（15号、14号、柱穴のみの27号、22号）柱穴のみの23号住居址グループ（23号、20号、21号）19号住居址グループ（19号、10号、16号、24号のⅠ、24号のⅡ、36号）である。このグループの新旧関係は19号住居址グループ、６号住居址グループ、15号住居址グループ、23号住居址グループと思われるが時期的には大きな差はないと考えられる。37号住居址は他の住居址より古く８世紀中頃と考えられ、別集落に属するものであろう。この時期別グループはカマド位置が磁北から西に次第に移行する傾向を示している。柱穴配置によってのみ住居址と確認できたものは３棟で、22号住居址、23号住居址、27号住居址である。柱穴は23号住居址が６本、他は４本であり、柱穴間の距離も23号住居址が最大である。主軸を推定するといずれも北西方向であるが、23号住居址がより西に偏している。これらの時期は正確には不明であるが、主軸方向から奈良時代とした。

〈平安時代〉

平安時代に属する住居址は１号、２号、３号、９号、17号、25号、26号、31号、32号、38号住居址の10棟である。

形状は方形を基調としており、奈良時代住居址とは異なって不正形状を示したり、胴張りを示すものはなく、方形又は長方形である。平安時代に属すると考えられる住居址間の切り合い重複は31号住居址と32号住居址であるが壁高が殆んどないため新旧関係は不明である。
他の住居址は溝との切り合い重複は見られるが同時期ではない。
規模は31号住居址の7.70×8.20を最大に１号住居址の3.82×4.50を最小とする。路線外に一部かかるものを除いた住居址を平面積でまとめると60㎡代のもの１棟（31号住居址）30㎡代のもの１棟（25号住居址）20㎡代のもの３棟（２号、17号、28号住居址）10㎡のもの３棟（１号、３号、９号住居址）である。

床面は10棟のうち９号、25号、26号、32号、38号の５棟が明らかに掘り方を持ち31号も掘り方をもっていたと考えられる。このうち貼り床の一部が残存しているのは９号と25号であるが

埋土は薄い。掘り方を持たない住居址は地山シルトを直接床面としている。床面上に周溝を持ったと思われるのは２号住居址であるが西側と南側の部分が残存し、他の部分は削平されたと思われる。又この住居址は24号住居址を埋めて構築した部分もあることから掘り方とは別な意味の貼り床が為されていたと考えられる。この貼り床をもつものは25号、26号、32号住居址と南壁にカマドをもつ９号と、離れ住居址の38号である。25号住居址等はより８世紀に近い時期に位置すると考えられるが９号は10世紀と考えられ一時途絶えた掘り方構築が復活した事になる。柱穴を有するのは25号、26号、31号、32号の４棟で31号の６本以外は検出数は３本でも本来的には４本であると考えられる。他の６棟は全く検出されなかった。

カマドは路線外にかかる26号と38号、１号溝や31号と重複し更にピット等で攪乱されている。32号住居址以外はその位置が判明している。判明した７棟のカマド位置は北壁１棟―31号住居址、西壁１棟―25号住居址、東壁３棟―１号、２号、３号住居址、南壁２棟―９号、17号住居址である。カマド袖部は粘土又はシルトを貼りつけて作っているものが多いが１号住居址は地山削り出しで作っている。２号住居址は袖と思われる部分に長胴の甕を１個体づつ埋め込んであった。煙道はいずれも１ｍを越え、燃焼部よりやや上り、煙出し部に向って下がっており、煙出し部はやや浅いピットとなっている。

床下ピットは奈良時代のピットの項で述べているので、ピットを持つものだけ述べると25号31号、32号住居址である。

出土遺物はロクロ未使用の土師器、須恵器、須恵系土器が主で、鉄器は２号住居址からヤリカンナ、石製品としては３号住居址から石帯、９号住居址から砥石、土製品として38号住居址から紡錘車がある。

住居規模、カマド位置、掘り方の有無、柱穴の有無、出土遺物などから総合的に時期を考えた時、住居規模が大きく、北壁又は西壁にカマドを持ち、掘り方、柱穴を有するものが８世紀により近いと考えられ、住居規模が小さく、東壁、南壁にカマドを持ち、柱穴を持たないものは８世紀から遠去かるものと考えられる。又須恵系土器を有するものは更に遠去かる事になろう。

（瀬川司男）

No.	形　状	規　模	床　面	柱穴	カマド壁	袖	袖　巾	煙道長	煙出し	床下ピット	出　土　遺　物
4	方　形	2.30×4.00×0.10	掘り方	1+α							須恵器坏
5	方　形	3.50×3.60×0.06	貼り床、掘り方	3+α							未、皿壺
6	方　形	7.35×7.10×0.10	掘り方、埋土	6	北壁中央					中央1 カマド東1南西1	未、有段、丸底、甕、甑、壺、勾玉
8	方　形	6.10×6.25×0.04	貼り床、掘り方	4	北壁中央	砂質シルト				カマド東1	
10	方形(胴張り)	6.20×5.76×0.06	掘り方	4	北　壁					5	未、甕、坏
14	不整方形	6.66×5.73×0.08	掘り方	4	西　壁			0.25	0.35×0.45×0.13	中央部1	未、坏、甕
15	方　形	6.25×6.25×0.14	掘り方	4	北　壁					5	未、坏、甕
16	方　形	4.20×4.10×0.06	貼り床、掘り方	4	北　壁					2	未、甕
19	菱　形	7.25×7.75×0.10	掘り方	ナシ						1	未甕、壺
20	隅丸方形	4.60×4.90×0.09	掘り方	4	西　壁					1	未坏、高台
21	胴張方形	5.10×5.10×0.02	貼り床、掘り方焼失?	4	西　壁					1中央	未坏、須恵器坏
24のⅠ	方　形	2.92×3.20×0.20		ナシ							
24のⅡ	方　形	3.10×3.32×　?	貼り床、掘り方	ナシ	北　壁	黒色土の上にシルト	0.70				
33	方　形	6.00×5.60×　?	掘り方	3						1	未坏、メノウ製勾玉、刃子片
36	胴張方形	3.27×2.95×0.05	平担	0							未甕
37	方　形	4.82×3.73×　?		?	北　壁	シルト	0.85			1	未、坏、盤、須恵坏
30	胴張方形	3.32×4.06×0.05	掘り方	0	西　壁						未甕

第2表　奈良期(17棟)住居址一覧表

No.	形　状	規　模	床　面	柱穴	カマド壁	袖	袖　巾	煙道長	煙出し	床下ピット	出　土　遺　物
1	方　形	3.82×4.50×0.23	平面、掘り方ナシ	ナシ	東	つくり出し	0.85	0.70	0.38×0.35×0.11	ナシ	須恵坏、内黒坏
2	方　形	4.50×4.50	岡溝、掘り方ナシ	ナシ	東南より					ナシ	ロクロ坏、甕
3	方　形	3.10×4.92×0.14	平面	ナシ	東南より	粘土とシルト	0.70	1.25	0.50×0.35×0.29	ナシ	須恵坏、壺、甕、ヤリガンナ ロクロ坏、須恵坏、壺、石帯
9	方　形	4.30×4.25×0.10	貼り床、掘り方	1	南壁A	シルト	0.75	1.70	0.30×0.35	ナシ	ロクロ坏、甕、砥石
					B	シルト	1.00	1.75	0.35×0.21		
17	方　形	4.68×4.60×0.21	平担	ナシ	南一東より	黒色シルト				ナシ	ロクロ甕、坏
25	方　形	6.08×6.43×0.01	貼り床	4	西壁					1	ロクロ坏、須恵器坏、甕
26	方　形	4.25×4.55×0.03	掘り方	3							ロクロ坏、須恵坏、未もある
31	方　形	7.70×8.20		6	北					8	ロクロ甕、坏、須恵器坏
32	長 方 形	6.00×4.70	掘り方	3						1	ロクロ坏、盤、須恵器坏
38	方　形	3.00×5.50×0.7	掘り方	ナシ							紡錘車

第3表　平安期(10棟)住居址一覧表

No.	形　状	規　模	床　面	床面小ピット	出　土　遺　物
6	ほぼ円形	1.35×1.20×0.45	中央		
〃	楕円形	1.15×0.7　×0.17	西南		
8	不正方形	1.50×1.10×0.11	北東		
10	円形	0.84×1.05×0.40	中央や、西		
〃	不正円形	0.55×0.80×0.19	北東		
〃	不正楕円形	1.01×1.21×0.51	東中央		
〃	円形	0.65×0.65×0.32	北西		
〃	不正円形	1.00×0.94×0.40	北西		
14	円形	1.03×1.16×0.20	中央		
〃	長楕円形	0.52×1.08×0.29	中央東		
15	不正楕円形	1.15×1.45×0.24	北東		
〃	不正円形	1.58×1.25×0.23	北中央		
〃	長方形	1.20×0.70×0.80	東中央		
〃	方形	1.23×1.08×0.17	〃		
〃	不正楕円形	1.90×0.73×0.07	西中央		
16	方形	1.00×0.75×0.59	中央	1	
〃	不正楕円形	1.46×0.85×0.26	中央北		

No.	形　状	規　模	床　面	床面小ピット	出　土　遺　物
18	不正楕円形	0.85×1.45×0.24	?		
〃	長楕円形	0.82×1.32×0.33	?		埋土上部、土師器片
19	円形	1.20×0.90×0.28	西南		
20	円形	1.07×0.96×0.36	中央		
21	長方形	1.24×0.75×0.65	北西	1	切り合い
〃	円形	1.06×1.14×0.32	中央		
23	円形	1.05×1.07×0.41	西	柱穴のみ	
〃	円形	1.20×1.11×0.33	西		
〃	円形	1.00×0.88×0.33	西南		
25	円形	1.30×1.20×0.32	中央		
31	方形(2段)	1.04×0.70×0.41	西側		
31	円形	0.62×0.54×0.61	北側		
31	円形	0.50×0.56×0.10	東北		
31	不正円形	1.20×1.00×0.48	東		
32	円形	0.85×0.91×0.18	西南		
32	円形	0.54×0.85×0.23	西南		

第4表　Big Pit一覧表

遺物

本遺跡内から検出された遺物は、土器、土製品、鉄製品、石製品、石器がある。

土器は、縄文前期末葉頃の土器破片と、縄文晩期大洞C_1式に相当する土器破片、奈良、平安時代に位置づけられる土器であり、奈良、平安時代の土器類は、坏、高坏、甕、甑等の器種であり、土師器、須恵器である。

土製品は、紡錘車、勾玉、小玉である。

鉄製品は、刀子、ヤリカンナ状鉄器があり、　具的なものと、農耕用鉄器とである。

石製品は、勾玉、石帯石であり、勾玉はメノウ製、石帯はアルコース砂岩の石質のものであり、石帯は丸とものものである。

石器は、砥石と縄文時代の遺物に属する、石鏃、石ヒ、石ベラ、石斧等である。このうち石ヒは、縄文の竪穴から出土しているもの３点がふくまれている。

以上の他には、１号溝内より、尾根、として使用されているスレート破片が出土している。

以下土器から述べる。

土器

１．縄文時代の土器

縄文時代の土器は13号住居址から出土した土器片２片と９号ピットより出土した土器がある。

前者の土器は１片が単節斜縄文ＲＬを施しているもので、他の１片は撚糸文である。胎土は微量の繊維を含むもので器表裏面とも脆くなっている。色調は暗褐色を呈しているものである。時期は胎土に微量の繊維を含んでいるところから縄文時代前期末葉頃と思われる。後者は深鉢形の土器で口縁部に沈線とすり削しによって雲形を施し、体部に単節の斜縄文ＲＬが施されている。胎土は粗砂が混じるが、表面はよく整えられている。色調は黒褐色を呈する。時期は文様からみて大洞C_1式に相当するものであろう。

２．奈良、平安時代の土器

奈良、平安時代の土器は本遺跡において主体をしめるもので、器種として、坏形土器、甕形土器、鉢形土器、甑等があり、土師器と須恵器、須恵系土器に分けられる。

遺物の大半は破片であり、反転復元したものが多いが、以下器種毎に分類を試みた。

坏型土器

本遺跡出土の坏型土器は破片が主であるが、その内実測できたものは 105点である。しかし、これらの多くは反転復元によるものであり、口縁部破片や底部破片のものも実測してある。

分類は、成形技法の相違、調整技法、計測値、器形等を考慮して次のように試みた。まず焼成技法より、ロクロを使用しないもの（Ａ）とロクロを使用しているもの（Ｂ）に大別できロクロを使用しているものは、さらに焼成、色調等より、環元焔焼成で焼成良好の典型的な須恵

器のもの、（Ⅰ）、赤褐色、あるいは黄褐色を呈し、器内面に黒色処理、ミガキ等の調整痕をもたない酸化焔焼成のもの（須恵系土器として本項のP80～P83に特に項を設けて述べてある）（Ⅱ）、酸化焔焼成で、内面に黒色処理、ミガキ等の調整をもつもの（Ⅲ）に細分され、これらは等　表に示した土器分類規準表の口径値の項の数値の内反転復元されたものについては反転復元された数値をそのままあてはめてあり、正確なものとはいい難いが、一応の目安としては取り上げてある。また、ロクロ使用坏の口径と器高の関係については、完形品が少ないために法量値は作成しなかった。

	段・沈線の有無	口縁～体部特徴	調整の組合せ 体部～底部	口径値	
A類ロクロ不使用坏類・その他	a．有段丸底	1．内湾	イ．ヨコナデーミガキ	あ．7～10cm以下	①内面黒色処理
	b．有段平底	2．外傾	ロ．ヨコナデーケズリ	い．11～14cm以下	②内外面黒色処理
	c．丸底	3．口縁部外反	ハ．ミガキーハケメ	う．14～17cm	③黒色処理を施こさないもの
	d．平底風	4．不明	ニ．ミガキーケズリ	え．18～20cm	
	e．皿状		ホ．ミガキーミガキ	お．20cm以上	
	f．手捏		ヘ．不明		
	g．高　坏				

ロクロ不使用坏分類規準

第5表　坏A類分類表

		底部切離し	再調整の有無	体部～口縁	口　径　値
B類ロクロ使用坏	Ⅰ類	a．糸切り	イ．再調あり	1．内湾ぎみ	あ．12cm以下
	Ⅱ類	b．ヘラ切り	①体部下端	2．直立	い．12cm～15cm以下
	Ⅲ類	c．不明	②床面のみ	3．端部外反	う．15cm以上17cm以下
			③底部外周		え．17cm～20cm以内
			ロ．無調整		お．20cm以上
			ハ．不明		

※口径と底径の比は完形品が少ないために計測は行なわなかった。

第6表　坏B類分類表

甕型土器

甕型土器も坏型土器同様破片が多く、反転復元実測を行なったものが多く、なおかつ口縁部より底部まで残すものは11点であり、他は口縁部破片、体部破片、底部破片である。この甕型土器にも酸化焔焼成による土師器と環元焔焼成による須恵器があるが、いずれも破片でありその全容を知り得るものがないため分類にあたっては省略した。これらは製作技法より分類され土師器は、Ⅰロクロを使用しないもので、最大径が口縁部にある（もしくはあると思われる）もの　Ⅱロクロを使用しないで最大径が体部中央付近にあり、いわゆる壺型土器に近いもの等Ⅲロクロ使用のもので、最大径が口縁部にある（もしくはあると思われる）もの　Ⅳロクロ使用のもので最大径が体部にあると思われるものに大別されるが、これらはさらに頸部特徴、口縁部形状、口唇部の特徴等によって細分が可能であり、第7表に示した分類規準に沿って分類され、第9表の分類の項では、記号化して表わしてある。須恵器は、いずれも破片でありその全容を知り得るものがないため、分類にあたっては、省略したが器形は壺形土器に近いものと

思われる。

また底部片については、底部突出の状態、木葉痕の有無等についても考慮したが、分類の段階では省略した。

	頸部特徴	大きさ	口縁部形状	口唇部特徴
Ⅰ ロクロ不使用（最大径口縁部）	A．有段 B．無段 C．不明	1．大 器高が30cm以上のもの 2．中 器高が15cm～30cm以内のもの 3．小 器高が10cm～15cm以内のもの 4．不明	a．外湾 b．内湾 c．外傾 d．直立し、口唇部で内湾 e・不明	イ．丸みのもの ロ．角ばっているもの ハ．角ばっているもので口唇部に沈線状のへこみがあるもの ニ．不明
Ⅱ ロクロ不使用（最大径体部）				

	大きさ	口縁部形状	口唇部特徴	調整痕の有無
Ⅲ ロクロ使用（最大径口縁部）	1．大 口径より器高が大きく器高が30cm以上のもの 2．中 口径が器高より大きく器高が14～16cm以内のもの 3．不明 器高は不明のものであるが口径値より以下の様となる。 あ．大 口縁部20cm以上 い．中 口縁部20cm～15cm以内 う．小 口縁部15cm以下	a．外折 b．外湾 c．不明	イ．丸みのもの ロ．上方にひきだされているもの ハ．上方にひきだされ、沈線が巡るもの ニ．上下にひきだされ、沈線が巡るもの ホ．不明	A．有るもの タタキ、ケズリ等 B．無いもの c．不明
Ⅳ ロクロ使用（最大径体部）				

第7表　甕類分類表

鉢型土器

鉢型土器としたものは、口径に比して器高が半分以下のものを当てた。いずれもロクロ使用のもので、酸化焔焼成のもの（1—36、3—15、16）と還元焔焼成のもの（2—22）がある。器形は、大型で体部は内湾ぎみに外傾し、口縁部で外折するもの（1—36）と小形で、体部は外傾し口縁部で、外湾するもの（3—16）と、口縁部が外折し口唇部が上方にひきだされているもの（2—22、3—15）があり、大形のものには、器外面にタタキ痕、内面にミガキ痕調整が施されている。小形のものは、ロクロ成形痕だけのもので、底部には糸切り切離し痕が残されているもの（3—15、16）がある。

盤型土器

盤型土器としたものは2点ある（26—11・12）がいずれも口縁部破片であり、器形全容は摑め得ないものであるが、反転復元実測の結果盤といわれるものに近い形状を示すことから本項を設けたものである。製作技法は、いずれもロクロを使用しているもので、体部は外傾し、口縁部で外注しているもので、口唇部は上方にひきだされて、沈線が巡っているものである。焼成は酸化焔焼成である。

甑

甑は復元出来たもの２点がある（16—24、16—５）。両方とも垂底式の土師器のものであり頸部に僅かな段を有している。６号住居址出土の甑は体部が内湾ぎみに外傾し、口縁部で弱く外湾するもので、器面は内外面とも比較的丁寧にミガキ調整が施されている。16号住居址出土の甑は、体部から口縁部まで内湾ぎみに外傾しているもので、器面は口縁部の内外面をヨコナデ、体部の内外面をハケメによる調整が施されている。

以上、東大畑遺跡の奈良、平安時代の土器について器種毎に述べたが、これらの内特に細分を試みた坏、甕についてみると、坏型土器にはＡ類ロクロ不使用のものと、Ｂ類ロクロ使用のものがみられ、Ａ類31点についての分類結果を第５表に示した。口縁が内湾するタイプでは、有段丸底のもの、丸底のもの、平底風のものに多く、有段平底のものは、外傾するタイプがある。　また丸底で黒処理を施していないと思われるもので口唇部で外反するタイプが１例みられる（37—１）。次に調整技法でみると、ミガキ—ミガキのものが見られないが、他はすべてにみられ、ａ—１タイプすなわち、有段丸底で口縁部が内湾するものには、ヨコナデ—ミガキ、ヨコナデ—ケズリ、ミガキ—ハケメ、ミガキ—ケズリがみられるが、ヨコナデ—ミガキの調整をもつものはＣ—１タイプとＣ—３タイプに共通してみられる。またＤ—２タイプ１点であるが、ミガキ—ケズリの調整痕をもつものがある。これらを調整技法毎に住居址をみると、ヨコナデ—ミガキ調整痕の坏を伴出する31、32、37号住居址の４棟ミガキ—ケズリの調整痕の坏を伴出する８、10号住居址の２棟ヨコナデ—ケズリ、ヨコナデ—ミガキの調整痕の坏を伴出する16号住居址、ヨコナデ—ケズリ、ミガキ—ケズリの調整痕の坏を伴出する14号住居址、ヨコナデ—ミガキ、ヨコナデ—ケズリ、ミガキ—ハケメの調整痕の坏を伴出する６号住居址に分けられる。しかしこれら調整痕と器形の関連については、第８表に示した如く不明のものが多いことから詳細は不明である。次にＢ類Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの各類について述べると、Ｂ—Ⅰ類では、ヘラ切りと思われるものは１点であり、他は糸切りによるもので、再調整のものが多くをしめている。Ｂ—Ⅱ類ではヘラ切りと糸切りのものがあり、再調整のもの、無調整のものが見られ同一住居址内で糸切りのもの、ヘラ切りのものが３：１の割合で共伴している１号住居址を除けば他は18号のヘラ切り以外は糸切りのものである。Ｂ—Ⅲ類では糸切りのものでしめられて、無調整のもの７点、再調整のもの12点である。再調整のものと無調整の坏が１住居址に入っているものとしては３号住居址があり、他には再調整のものと無調整のものが住居址内では共伴して出土していない。住居址におけるＢ類の共伴関係でⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類を伴出する住居址１、２、３、31、38号住居址の５棟であり、Ⅰ類とⅡ類だけを伴出する住居址は９、17、24号住居址の３棟であり、Ⅰ類とⅡ類を伴出する住居址は32号住居址、Ⅱ類だけを伴出するもの18

号址、Ⅲ類だけを伴出する住居址は21、26号住居址の２棟である。

甕型土器は、製作に際してロクロを使用していないタイプとロクロ使用のタイプに分けられそれぞれ最大径の位置が口縁部にあるものと体部にあるものに分けられる。またロクロを使用していないもので最大径が口縁部にあるものには頸部に段を有するものと（Ａ）、ないものがあり（Ｂ）、口縁部の形状は外湾するもの、内湾するもの、外傾するものがみられ、１例であるが直立し、口唇部が内湾するものがある（６－20）。ロクロ使用のものは、最大径の位置が口縁部にあるものは、外折するもの、外湾するものがほぼ同数ほどみられる。体部に最大径のあるものは、外湾するものだけである。ロクロを使用していないものと、ロクロ使用のものの遺構共伴関係よりみると、ロクロを使用しないものと、ロクロ使用のものが共伴して出土している住居址として１、２、３、９、24、33号址があるが、ロクロを使用しているものだけを共伴する住居址として、38号住居址があり、他はロクロを使用していない甕型土器以外の甕型土器を含んでいない住居址である。以上分類結果について概要を述べてみたが本遺跡出土の甕型土器には破片等が多く明確に捉えるものが少なく、各住居址における伴出状況も一様ではない。次に各遺構の遺物の伴出状況についてみると、ロクロ使用以前と以後に大きく分けられるが各遺構毎の遺物の出土は一様ではないためいちいち細かく触れないが、遺物のセット関係が比較的捉えられる遺構として次の住居址があげられる。１、２、３、６、８、９、10、14、16、17、21、23、26、37、38号住居址の15棟である。ロクロ使用以前の住居址として、６、８、10、14、16、21、23、37号住居址の８棟があり、それらは、ロクロ不使用の坏と甕の組合せであり、６、16号住居址の２棟には甑もみられる。ロクロ使用以後の住居址としては、１、２、３、９、17、26、38号住居址の７棟がある、ロクロ使用の坏と甕およびロクロ不使用の甕の組合せがあり、須恵器の甕も入っている。１、３号住居址にはロクロ使用の鉢もみられる。またロクロ使用以前の土器群を出す住居址は、遺構の項で細分を試みた結果とは遺物に差がほとんどみられないが、37号住居址の遺物と、他のロクロ使用以前の住居址とは差がみられ前者が本住居址の中では特に古い様相を呈するものである。後者に関しては、坏に段をもつものが多いことなどから国分寺下層式に併行するものであろう。ロクロ使用以後の土器を出す住居址は、Ｂ－Ⅱ類の須恵系土器を共伴する住居址のグループ（１、２、３、38号住居址）と共伴しない住居址のグループ（９、17号住居址）に分けることが出来、須恵系土器と共伴しない住居址の後に須恵系土器を伴なう住居址が続くようである。

（中川重紀）

遺構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	法量 cm 口径	器高	底径	調整（外面・内面） 口縁～体部上半	体部下半～底部	内面	底部調整	段沈線	底部形態	分類	備考
1号住居址	1－1	1	床面	土師器	ロクロ成形	17.0	5.2	7.2	ロクロ	ロクロ	ミガキ	糸切り ヘラ再調整		平底	B－Ⅲ c－ハ－2－え	完形、内黒、内面に大の字の刻線があり2ケ所見られる。
1号住居址	1－2	3	床面	土師器	ロクロ成形	(13.5)	3.6	6.3	ロクロ	ロクロ	ミガキ	回転糸切後 ヘラ再調整		平底	B－Ⅲ a－イ③－1－	完形 内黒
1号住居址	1－3	4	床面	土師器	ロクロ成形	(14.1)	4.6	6.0	ロクロ	ロクロ ヘラ再調	ロクロ	ヘラ再調整		平底	B－Ⅲ a－イ①－1－い	完形 内黒？
1号住居址	1－4	2	床面	土師器	ロクロ成形	(23.8)	－	－	ロクロ	ロクロ	ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－3－お	口縁部～体部上半 内黒
1号住居址	1－5		床面	土師器	ロクロ成形	14.4	5.0	5.8	ロクロ	ロクロ		ヘラ再調？		平底	B－Ⅲ a－イ－－－	体部下半～底部 内黒
1号住居址	1－6	6	床面	須恵系	ロクロ成形	－	－	(7.8)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り後 再調		平底	B－Ⅱ a－イ③－2－い	完形
1号住居址	1－7	8	煙出	須恵系	ロクロ成形	14.4	5.0	5.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り		平底	B－Ⅱ b－ロ－3－い	完形、外面にスス付着
1号住居址	1－8	7	床面	須恵系	ロクロ成形	14.7	4.4	5.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅱ a－ロ－1－イ	完形
1号住居址	1－9	5	カマド	須恵系	ロクロ成形	13.9	4.6	5.0	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅱ a－ロ－2－い	完形
1号住居址	1－10	9	床面	須恵器	ロクロ成形	13.3	4.4	6.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－ロ－2－い	完形
1号住居址	1－11		床面	須恵器	ロクロ成形	－	－	6.2	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り ヘラ再調		平底	B－Ⅰ a－イ③－－	体部下半～底部
2号住居址	2－1	22	埋土	土師器	ロクロ成形	(13.4)	5.0	6.5			ミガキ	糸切り		平底	B－Ⅲ a－ロ－3－い	口縁部～底部 内黒
2号住居址	2－2	25	埋土	土師器	ロクロ成形	(13.4)	4.8	(6.5)	ロクロ	ロクロ	ミガキ	糸切り		平底	B－Ⅲ a－ロ－2－い	口縁部～底部 内黒
2号住居址	2－3	26	埋土	土師器	ロクロ成形	(15.6)	6.2	(7.4)	ロクロ	ヘラケズリ	ミガキ	ヘラケズリ		平底	B－Ⅲ a－イ③－1●い	口縁部～底部 内黒
2号住居址	2－4		埋土	土師器	ロクロ成形	－	－	8.3				糸切り		平底	B－Ⅲ a－ロ－－	底部片 内黒
2号住居址	2－5	23	ピット	土師器	ロクロ成形	13.7	4.2	7.0	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅲ a－イ①－2－い	完形、内黒・外面にも黒色処理あり
2号住居址	2－6	24	ピット	須恵系	ロクロ成形	(17.2)	7.2	6.2	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅲ a－イ①－2－え	口縁部～底部
2号住居址	2－7	27	埋土	須恵器	ロクロ成形	12.6	4.5	6.0	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－イ①－2－い	完形
2号住居址	2－8	28	ピット	須恵器	ロクロ成形	15.5	6.5	7.0	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－ロ－3－う	完形
2号住居址	2－9		ピット	須恵器	ロクロ成形	(12.6)	6.0	(7.2)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－ロ－2－い	口縁部～底部
2号住居址	2－10		床面	須恵器	ロクロ成形	(13.0)	4.4	(6.6)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－イ－1－い	口縁部～底部
2号住居址	2－11		埋土	須恵器	ロクロ成形	(17.6)	5.1	(10.1)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り？		平底	B－Ⅰ c？－ハ－2－え	口縁部～底部
2号住居址	2－12		埋土	須恵器	ロクロ成形	(16.8)	－	－							B－Ⅰ c－ハ－2－う	口縁部～体部下半
2号住居址	2－13		埋土	須恵器	ロクロ成形	(16.5)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－2－う	口縁部～体部下半
24号住居址	24－1	31	埋土	土師器	ロクロ成形	(14.1)	4.8	5.6	ロクロ	ロクロ	ミガキ	糸切り		平底	B－3 a－ロ－2－い	口縁部～底部 内黒
24号住居址	24－2		埋土	土師器	ロクロ成形	(13.7)	－	－	ロクロ		ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－2－あ	口縁部片、内黒
24号住居址	24－3		カマド	土師器	ロクロ成形	－	－	(8.0)		ヘラケズリ	ミガキ	糸切り		平底	B－Ⅲ a－ロ	底部片、内黒
24号住居址	24－4		カマド	須恵器	ロクロ成形	(10.9)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ c－ニ－ハ－あ	口縁部片
3号住居址	3－1	35	床面	土師器	ロクロ成形	14.5	6.3	6.8	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ミガキ	ヘラ再調整		平底	B－Ⅲ a－イ①－1－い	内黒
3号住居址	3－2	34	床面	土師器	ロクロ成形	13.2	5.2	5.3	ナデ ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ミガキ	糸切り		平底	B－Ⅲ a－b－1－い	完形、内黒、外面の口縁部底部に黒斑あり
3号住居址	3－3	36	床面	土師器	ロクロ成形	12.9	4.7	6.5	ロクロ	ロクロ	ミガキ			平底	B－Ⅲ c－ハ－1－い	完形、内黒、外面口縁部に黒斑あり
3号住居址	3－4		床面	土師器	ロクロ成形	(14.4)	－	－	ロクロ		ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－1－い	口縁部片 内黒、外面口縁部に黒斑あり
3号住居址	3－5	39	床面	須恵系	ロクロ成形	13.7	4.9	5.0	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅱ a－イ①－1－い	完形
3号住居址	3－6	37	煙出し	須恵系	ロクロ成形	13.5	4.9	5.0	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅱ a－イ①－2－い	完形
3号住居址	3－7	38	床面	須恵器	ロクロ成形	12.8	4.8	5.5	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－イ①－2－い	完形
3号住居址	3－8	40	床面	須恵器	ロクロ成形	13.0	4.7	5.1	ロクロ	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－イ①－3－い	完形

第8表　坏型土器表　1

遺構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	法量 cm 口径	器高	底径	調整（外面・内面） 口縁～体部上半	体部下半～底部	内面	底部調整	段沈線	底部形態	分類	備考
3号住居址	3－9	41	床面	須恵器	ロクロ成形	(13.5)	4.5	6.0	ロクロ	ロクロナデ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－イ③－3－い	口縁部～底部
3号住居址	3－10		床面	須恵器	ロクロ成形	(13.3)	4.7	(6.3)	ロクロ	ロクロヘラナデ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－イ①－3－い	口縁部～底部
3号住居址	3－11		床面	須恵器	ロクロ成形	(12.5)	－	－	ロクロ	ロクロ					B－Ⅰ c－ハ－2－い	口縁部～体部上半
3号住居址	3－12		床面	須恵器	ロクロ成形	(14.8)	－	－	ロクロ						B－Ⅰ b－ハ－3－う	口縁部～体部下半
3号住居址	3－13		床面	須恵器	ロクロ成形	－	－	(8.5)	ロクロ	ロクロ		糸切り			B－Ⅰ －ロ－	底部片
5号住居址	5－1	50	床面	土師器	ロクロ不使用	7.5	2.5		ミガキ	ミガキ				丸底	A－ e－1－へ－あ－③	完形
6号住居址	6－1		床面	土師器	ロクロ不使用	(14.6)	－	－	ヨコナデ		ミガキ		有段		A－ a－1－ハ－う－①	口縁部～体部下半、口縁内部ミガキ内黒
6号住居址	6－2		床面	土師器	ロクロ不使用	(16.6)	－	－	ヨコナデ		ミガキ		有段		A－ a－1－ニ－お－①	口縁部片、内黒
6号住居址	6－3	53	床面	土師器	ロクロ不使用	(20.0)	4.8	－	ミガキ	ハケメ	ヨコナデミガキ		有段		A－ a－1－ハ－お－①	口縁部～底部、内黒、外面、口縁～体部上半、黒斑あり
6号住居址	6－4	51	床面	土師器	ロクロ不使用	12.3	4.0	6.0	ミガキ	ミガキ	ヨコナデミガキ	不明	有段	平底	A－ d－1－へ－い－①	完形、内黒
6号住居址	6－5		床面	土師器	ロクロ不使用	(11.3)	－	－	ミガキ		ミガキ		無段		A－ c－1－(へ)－い－①	口縁～体部下半、内黒
6号住居址	6－6		床面	土師器	ロクロ不使用	(13.3)	－	－	ミガキ	ミガキ	ミガキ		無段	丸底	A c－1－イ－い－①	口縁部～底部近く、内黒
6号住居址	6－7		床面	土師器	ロクロ不使用	(13.2)	－	－	ミガキ	ミガキ			無段	丸底	A c－1－へ－い－①	口縁部～底部近く、内黒
6号住居址	6－8		床面	土師器	ロクロ不使用	(12.8)	－	－	ヨコナデ		ミガキ		無段		A d－1－へ－い－①	口縁部～体部下半、内黒
6号住居址	6－9		床面	土師器	ロクロ不使用	(12.7)	－	－	ヨコナデ	ケズリ			無段	平底	A e－2－ロ－い－③	口縁部～底部
6号住居址	6－10		床面	土師器	ロクロ不使用	(8.6)	－	－						丸底	A f－へ－あ－③	口縁部～底部、手握
8号住居址	8－1	64	埋土	土師器	ロクロ不使用	(15.2)	2.4	(8.4)	ミガキ		ミガキ	ヘラ再調整	有段	平底	A b－2－ニ－う－①	口縁部～底部、内黒
9号住居址	9－1	65	床面	土師器	ロクロ成形	(13.3)	4.5	6.0				糸切り		平底	B－Ⅲ a－ロ－ニ－い	口縁部～底部、内黒
9号住居址	9－2		床面	土師器	ロクロ不使用	(18.4)	－	－			ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－2－う	口縁部～底部近く、内黒
10号住居址	10－1	69	床面	土師器	ロクロ不使用	15.8	－	－	ミガキ	ケズリ	ミガキ		有段		A a－1－ニ－う－①	口縁～底部近く　内黒
11号住居址	11－1	75	埋土	土師器	ロクロ成形	－	－	(7.3)		ケズリ		再調		平底	B－Ⅲ a－イ③－、－、	底部片　内黒
12号住居址	12－1		埋土	土師器	ロクロ不使用	(11.6)	－	－	ミガキ		ミガキ				A c－1－(へ)－い－①	口縁部片、内黒、外面に黒斑あり
14号住居址	14－1	77	埋土	土師器	ロクロ不使用	(23.3)	－	－	ヨコナデ	ヘラナデ	ミガキ		有段		A a－1－ハ－お－①	口縁部～底部近く、内黒
14号住居址	14－2	79	埋土	土師器	ロクロ不使用	(12.9)	－	－	ミガキ	ケズリ?	ミガキ		有段		A a－1－ニ－い－①	口縁部～体部下半、内黒
14号住居址	14－3		埋土	土師器	ロクロ不使用	(12.3)	－	－	ヨコナデ		ヨコナデ				A d－1－(へ)－い－①	口縁部～体部下半、内黒
16号住居址	16－1	83	床面	土師器	ロクロ不使用	(14.6)	3.4	－	ミガキ			ケズリ	有段	丸底	A a－1－へ－え－①	口縁部～底部　内黒
16号住居址	16－2	84	床面	土師器	ロクロ不使用	(11.3)	2.3	－	ヨコナデ	ケズリ		ケズリ		平底	A a－1－ハ－ラ－①	口縁部～底部　内黒、段痕有
17号住居址	17－1	95	埋土	土師器	ロクロ成形	(13.1)	4.1	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	ミガキ	糸切り後ヘラ調整		平底	B－Ⅲ a－イ③－1－い	口縁部～底部　内黒
17号住居址	17－2	92	煙出し	土師器	ロクロ成形	(12.5)	4.2	7.0			ミガキ	糸切り後ヘラ再調整		平底	B－Ⅲ a－イ②－2－い	口縁部～底部　内黒
17号住居址	17－3	93	床面	土師器	ロクロ成形	(13.3)	4.3	6.0			ミガキ	糸切り後ヘラ再調整		平底	B－Ⅲ a－イ②－2－い	口縁部～底部、内黒、外面底黒斑あり
17号住居址	17－4	96	床面	須恵器	ロクロ成形	(13.5)	(4.9)	6.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－ロ－1－い	口縁部～底部
17号住居址	17－5	103	カマド	須恵器	ロクロ成形	(17.0)	(6.0)	8.0	ロクロ	ロクロ		ヘラ再調整		平底	B－Ⅰ a－イ③－1－う	口縁部～底部
17号住居址	17－6	94	埋土	須恵器	ロクロ成形	(12.8)	4.4	6.2	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－ロ－2－い	口縁部～底部、底に十字の刻線あり
18号住居址	18－1	101	ピット	須恵系	ロクロ成形	(13.9)	3.9	6.4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り?		平底	B－Ⅱ b－イ③－1－い	口縁部～底部
18号住居址	18－2	100	ピット	須恵系	ロクロ成形	(14.7)	3.7	6.5	ロクロ	ロクロ		ヘラ切り		平底	B－Ⅱ b－ロ－1－い	口縁部～底部

坏型土器表　2

遺構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	法量 cm 口径	器高	底径	調整（外面・内面） 口縁～体部上半	体部下半～底部	内面	底部調整	段沈線	底部形態	分類	備考
20号住居址	20－1		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(9.0)		ケズリ	ミガキ				A g－	底部、高杯のスソ部
20号住居址	20－2		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(10.0)		ケズリ					A g－	底部、高杯のスソ部
21号住居址	21－1	107	床面	土師器	ロクロ成形	(16.5)	－	－	ミガキ		ミガキ				A －1－う－①	口縁部～体部上半、内黒
23号住居址	23-BP	108	埋土	土師器	ロクロ不使用	(15.4)	4.0	6.0	ミガキ	ミガキ	ミガキ	不明		平底	A d－1－へ－い－②	½残存、内外面とも内黒
26号住居址	26－1		埋土	土師器	ロクロ成形	(12.0)	－	－							B－Ⅲ c－ハ－2－い	口縁部片、内黒、外面口縁に黒斑あり
29号住居址	29－1	115	埋土	土師器	ロクロ不使用	(15.8)	－	－		ミガキ	ミガキ ハケメ	ミガキ	無段		A c－1－(へ)－う－①	口縁～体部下半、内黒
31号住居址	31－1	117	床面	土師器	ロクロ不使用	(12.7)	－	－	ヨコナデ	ナデ	ミガキ				A c－1－イ－い－①	口縁部～体部下半 内黒 外面に黒斑あり
31号住居址	31－2		床面	土師器	ロクロ成形	(10.5)	－	－	ヨコナデ		ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－1－あ	口縁部～体部下半 内黒 外面に黒斑あり
31号住居址	31－3	128	床面	土師器	ロクロ成形	(11.0)	－	－			ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－2－あ	口縁部～体部上半 内黒 外面に黒斑あり
31号住居址	31－4	132	床面	土師器	ロクロ成形	－	－	7.0		ケズリ	ミガキ	糸切 後再調整		平底	B－Ⅲ a－イ③－	底部片、内黒
31号住居址	31－5	119	床面	須恵系	ロクロ成形	(12.5)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅱ c－ハ－1－い	口縁～体部上半
31号住居址	31－6	124	床面	須恵器	ロクロ成形	(13.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－イ－1－い	口縁～体部下半
31号住居址	31－7	127	床面	須恵器	ロクロ成形	(14.2)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－2－い	口縁～体部上半
31号住居址	31－8	130	床面	須恵器	ロクロ成形	－	－	(5.5)		ロクロ	ロクロ			平底	B－Ⅰ －ロ－－－	体部上半～底部
31号住居址	31－9		床面	須恵器	ロクロ成形	－	－	(6.0)		ロクロ	ロクロ	再調整		平底	B－Ⅰ イ③－－	底部片
32号住居址	32－1	138	埋土	土師器	ロクロ不使用	(19.9)	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ？	ヨコナデ ミガキ		有段		A a－1－ロ－え－①	口縁部～体部下半、内黒
32号住居址	32－2		埋土	土師器	ロクロ不使用	(22.5)	－	3.0	不明	不明			有段		A b－2－へ－お－①	口縁部～底部近く、内黒
32号住居址	32－3		埋土	土師器	ロクロ成形	－	－	9.0		再調整	ミガキ	糸切 後再調整		平底	B－Ⅲ a－イ①－－	底部片、内黒
32号住居址	32－4	133	埋土	須恵器	ロクロ成形	(16.7)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅱ c－ハ－1－う	口縁部～体部下半
32号住居址	32－5		埋土	須恵器	ロクロ成形	(12.7)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－3－い	口縁部片
33号住居址	33－1		埋土	土師器	ロクロ不使用	(9.9)	－	－	ヨコナデ		ミガキ				A c－1－(へ)－あ－①	口縁部～体部下半、内黒
33号住居址	33－2		埋土	須恵器	ロクロ成形	(14.2)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－3－い	口縁部～体部下半
37号住居址	37－1	141	床面	土師器	ロクロ不使用	11.6	4.4	－	ヨコナデ	ケズリ ミガキ	ミガキ			丸底	A c－3－ロ－い－③	完形
37号住居址	37－2	144	床面	土師器	ロクロ不使用	－	－	－		ケズリ ナデ	ナデ				A g－③	高杯のスソ部 内黒
38号住居址	38－1		床面	土師器	ロクロ成形	(12.8)	－	－	ロクロ	ロクロ	ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－2－い	口縁部～体部上半 内黒
38号住居址	38－2		床面	土師器	ロクロ成形	(9.9)	－	－			ミガキ				B－Ⅲ c－ハ－2－あ	口縁部片 内黒
38号住居址	38－3		埋土	須恵系	ロクロ成形	(15.7)	－	－	ロクロ	ロクロ					B－Ⅱ c－ハ－2－う	口縁部～底部近く
38号住居址	38－4	145	埋土	須恵器	ロクロ成形	(14.0)	－	－	ロクロ						B－Ⅰ c－ハ－3－う	口縁部～体部上半
38号住居址	38－5	147	埋土	須恵器	ロクロ成形	(11.3)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－3－あ	口縁部～体部下半
38号住居址	38－6		埋土	須恵器	ロクロ成形	(13.1)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－2－え	口縁部～体部下半
38号住居址	38－7	148	床面	須恵器	ロクロ成形	(13.5)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－2－い	口縁部～体部下半
38号住居址	38－8	149	床面	須恵器	ロクロ成形	(15.3)	4.2	(7.1)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－ロ－3－う	口縁部～底部
38号住居址	38－9	146	埋土	須恵器	ロクロ成形	(17.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ				B－Ⅰ c－ハ－3－い	口縁部～体部下半
遺構外				須恵器	ロクロ成形	13.4	4.1	5.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		平底	B－Ⅰ a－ロ－2－い	完形

坏型土器表　3

道構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	口径 cm	器高 cm	底径 cm	最大cm 胴径	外面調整 口縁	外面調整 体部	内面調整 口縁	内面調整 体部	底部調整	分類	備考
1号住居址	1−12	12	カマド	土師器	ロクロ不使用	−	−	8.1			ケズリ		ナデ	ヘラ再調		体部中央〜底部
1号住居址	1−13	10	カマド	土師器	ロクロ不使用	−	−	(7.0)			ケズリ		ナデ	ヘラ調整		体部下半〜底部
1号住居址	1−14		床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	6.6			ケズリ ハケメ		ナデ	ヘラ調整		体部下半〜底部
1号住居址	1−15		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	(11.0)			ケズリ		ナデ	ヘラ調整		底部片
1号住居址	1−16		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	7.0			ケズリ		ナデ	ヘラ調整		体部下半〜底部
1号住居址	1−17		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	(12.3)			ケズリ		ハケメ	不明		体部下半〜底部
1号住居址	1−18		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	(8.0)			ケズリ		ナデ	ヘラ調整		体部下半〜底部
1号住居址	1−19		煙出	土師器	ロクロ成形	−	−	(10.2)			ケズリ			ヘラ調整		底部片
1号住居址	1−20		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	12.1			ケズリ		ナデ	不明		底部片
1号住居址	1−21		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	10.1			ケズリ					底部片
1号住居址	1−22		床面	土師器	ロクロ成形	(26.5)	−	−		ヨコナデ	ロクロ タタキメ	ヨコナデ	ロクロ			口縁部〜体部上半
1号住居址	1−23		床面	土師器	ロクロ成形	(11.6)	−	−		ロクロ	ナデ	ロクロ			Ⅲ−3ぅ−b−ロ−A	口縁部〜体部上半 最大径（口縁部） 口縁部にススが付着
1号住居址	1−24		床面	土師器	ロクロ成形	(20.1)	−	−		ヨコナデ	ロクロ	ヨコナデ			Ⅲ−3ぁ−b−ハ−B	口縁部〜体部上半 最大径（体部） 体部外面に十字の刻線あり
1号住居址	1−25		床面	土師器	ロクロ成形	(16.2	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅳ−3ぃ−b−ハ−C	口縁部〜体部上半
1号住居址	1−26	11	カマド	土師器	ロクロ成形	15.3	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ ヨコナデ	ヨコナデ		Ⅲ−3ぃ−a−ロ−B	口縁部〜体部上半、すごくもろい
1号住居址	1−27		床面	土師器	ロクロ成形	(17.5)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅳ−3ぃ−b−ロ−B	口縁部〜体部上半 頸がつぼむ形をしている
1号住居址	1−28		カマド	土師器	ロクロ成形	(22.7)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3ぁ−a−ロ−B	口縁部〜体部上半
1号住居址	1−29		カマド	土師器	ロクロ成形	(16.0)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3ぃ−b−ィ−B	口縁部〜体部上半 マメツしてボロボロ
1号住居址	1−30		カマド	土師器	ロクロ成形	(21.7)	−	−		ヨコナデ	タタキメ ケズリ	ヨコナデ	ナデ		Ⅲ−3ぁ−b−ハ−A	口縁部〜体部中頃、口頸に凹沈線あり
1号住居址	1−31		カマド	土師器	ロクロ成形	(16.8)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3ぃ−b−ロ−C	口縁部〜体部上半
1号住居址	1−32	21	カマド	土師器	ロクロ成形	(21.2)	−	−		ロクロ	ロクロ	ヨコナデ	ナデ		Ⅲ−3ぁ−b−イ−C	口縁部〜体部下半
1号住居址	1−33	20	カマド	土師器	ロクロ成形	(13.9)	−	−		ロクロ ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		Ⅳ−3ぅ−b−イ−A	口縁部〜体部下半 球胴形、最大径（体部中央）
1号住居址	1−34	19	床面	土師器	ロクロ成形	(22.8)	−	−		ロクロ	タタキメ		ナデ		Ⅳ−3ぁ−b−ハ−A	口縁部〜体部上半
1号住居址	1−35	17	床面	土師器	ロクロ成形	(16.5)	−	−		ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ			Ⅲ−3ぃ−b−イ−A	口縁部〜体部上半 内面にススの物が付着している
1号住居址	1−36		床面	土師器	ロクロ成形	(22.6)	−	−		ロクロ	タタキメ					口縁部〜体部上半
1号住居址		15	床面	須恵器	ロクロ成形		−				タタキメ		タタキメ			頸部〜体部下半
1号住居址	1−37	16	床面	土師器	ロクロ成形	(15.8)	−	−		ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	ヨコナデ		Ⅲ−3ぃ−b−イ−A	口縁部〜体部下半
1号住居址	1−38	18	床面	土師器	ロクロ成形	(23.7)	−	−		ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3ぁ−a−ロ−A	口縁部〜体部下半
1号住居址	1−40		煙道	須恵器	ロクロ成形	−	−	(7.2)					ヨコナデ			底部片
1号住居址	1−41	14	煙道	須恵器	ロクロ成形	−	−	−		−	タタキメ		タタキメ			体部中央〜底部・丸底
2号住居址	2−14	30	カマド	土師器	ロクロ成形	23.6	−	−		タタキメ	ヘラケズリ		ナデ		Ⅲ−3ぁ−b−ハ−A	口縁部〜体部中頃
2号住居址	2−15	29	カマド	土師器	ロクロ成形	(23.3)	−	−			タタキメ ナデ		ヨコナデ		Ⅲ−3ぁ−b−ロ−A	口縁部〜体部上半
2号住居址	2−16	33	カマド	土師器	ロクロ成形	(26.5)	−	−		ヨコナデ	タタキメ	ヨコナデ			Ⅳ−3ぁ−b−ニ−A	口縁部〜体部上半
2号住居址	2−17		埋土	土師器	ロクロ成形	(25.0)	−	−		タタキメ ヨコナデ		ヨコナデ			Ⅲ−3ぁ−b−ハ−A	口縁部片
2号住居址	2−18		カマド	土師器	ロクロ成形	(25.8)	−	−		ヨコナデ	タタキメ ヘラケズリ	ヨコナデ	ナデ		Ⅲ−3ぁ−a−ハ−A	口縁部〜体部上半
2号住居址	2−19		埋土	土師器	ロクロ成形	(21.5)	−	−		タタキメ					Ⅲ−3ぁ−b−イ−A	口縁部片
2号住居址	2−20		埋土	土師器	ロクロ成形	(13.6)	−	−							Ⅲ−3ぅ−a−ロ−C	口縁部片
2号住居址	2−21		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(6.6)						不明		底部片
2号住居址	2−23		埋土	須恵器	ロクロ成形	−	−	(8.1)						糸切り		底部片
2号住居址	2−24		埋土	須恵器	ロクロ成形	−	−	(10.0)						糸切り		底部片
24号住居址	24− 5		カマド	須恵器	ロクロ成形	−	−	(7.8)						糸切り		底部片
24号住居址	24− 6		埋土	須恵器	ロクロ成形	−	−	(8.3)						糸切り		底部片
24号住居址	24− 7		埋土	土師器	ロクロ成形	(26.8)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ			口縁部片
24号住居址	24− 8		埋土	土師器	ロクロ成形	(23.0)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3ぁ−b−ロ−B	口縁部〜体部上半
24号住居址	24− 9	32	埋土	土師器	ロクロ成形	(12.8)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3ぅ−a−ロ−B	口縁部〜体部上半

第9表　甕型土器表　1

遺構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	口径 cm	器高 cm	底径 cm	最大胴径 cm	外面調整 口縁	外面調整 体部	内面調整 口縁	内面調整 体部	底部調整	分類	備考
24号住居址	24−10		埋土	土師器	ロクロ不使用	(14.4)	−	−							Ⅰ−c−4−a−イ	口縁部片
24号住居址	24−11		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(9.8)			ハケメ		ナデ ハケメ			体部下半〜底部
24号住居址	24−12		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(8.5)			ハケメ		ハケメ			底部片
24号住居址	24−13		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(10.1)					ナデ			底部片
3号住居址	3−14		床面	土師器	ロクロ成形	(13.3)	−	−							Ⅲ−3う−b−イ−C	口縁部〜体部上半
3号住居址	3−17		床面	土師器	ロクロ成形	(15.3)	−	−							Ⅲ−3い−b−イ−C	口縁部〜体部上半
3号住居址	3−18		床面	土師器	ロクロ成形	(16.3)	−	−				ヨコナデ			Ⅲ−3い−a−ロ−C	口縁部〜体部上半
3号住居址	3−19	44	床面	土師器	ロクロ成形	(14.7)	14.5	7.4	13.3	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−2−a−ロ−B	口縁部〜底部
3号住居址	3−20	48	床面	土師器	ロクロ成形	(17.2)	15.5	(7.1)	(15.7)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	不明	Ⅲ−2−b−ロ−A	口縁部〜底部
3号住居址	3−21	46	床面	土師器	ロクロ成形	(14.9)	14.8	(6.3)	(14.2)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	不明	Ⅲ−2−b−ロ−A	口縁部〜底部
3号住居址	3−22	45	床面	土師器	ロクロ成形	15.8	15.5	7.1	14.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り	Ⅲ−2−a−ロ−B	完形
3号住居址	3−23	47	床面	土師器	ロクロ成形			6.9	14.0		ロクロ		ロクロ	糸切り	Ⅲ−2−c−ヘ−C	体部上半〜底部
3号住居址	3−24		床面	土師器	ロクロ成形	(14.7)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3い−a−ハ−B	口縁部〜体部上半
3号住居址	3−25		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	6.5			ロクロ		ロクロ	糸切り		体部下半〜底部
3号住居址	3−26		煙出し	土師器	ロクロ成形	(23.6)	−	−		ロクロ	タタキメ ケズリ		ナデ		Ⅲ−3あ−a−ハ−A	口縁部〜体部中頃
3号住居址	3−27		埋土	土師器	ロクロ成形	(21.4)	−	−		ヨコナデ	ケズリ	ヨコナデ	ハケメ		Ⅲ−3あ−b−イ−A	口縁部〜体部中頃
3号住居址	3−28		床面	土師器	ロクロ成形	(15.9)	−	−				ヨコナデ			Ⅲ−3い−a−ロ−C	口縁部片
3号住居址	3−29		床面	土師器	ロクロ不使用	(23.4)	−	−		ハクメ ヨコナデ		ヨコナデ			Ⅰ−c−4−a−ロ	口縁部片
3号住居址	3−30		床面	土師器	ロクロ成形	(28.0)	−	−			ケズリ				Ⅲ−3あ−a−ハ−A	口縁部片
3号住居址	3−31		床面	土師器	ロクロ不使用	(21.6)	−	−								口縁部片
3号住居址	3−39	49		須恵器	ロクロ成形	(17.4)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ			口縁部〜体部上半
5号住居址	5−2	52	床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	−			ナデ		ナデ		Ⅱ−B−4−e−ニ	頸部〜体部下半
6号住居址	6−11	54	床面	土師器	ロクロ不使用	(14.7)	15.2	6.4	12.5	ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	不明	Ⅰ−A−2−a−ハ	口縁部〜底部
6号住居址	6−12	59	床面	土師器	ロクロ不使用	18.2	26.1	7.0	16.5	ヨコナデ	ハケメ ミガキ ケズリ	ハケメ	ハケメ	不明	Ⅰ−A−2−a−イ	完形、長胴型
6号住居址	6−13	55	床面	土師器	ロクロ不使用	19.2	19.7	(8.5)	(16.3)	ヨコナデ	ミガキ			不明	Ⅰ−A−2−a−ロ	口縁部〜底部近く、長胴型
6号住居址	6−14		床面	須恵器	ロクロ成形	−	−	11.2					ナデ	不明		底部片
6号住居址	6−15		床面	土師器	ロクロ不使用	(18.1)	−	−		ヨコナデ		ヨコナデ ミガキ			Ⅰ−A−4−a−ハ	口縁部〜頸部、有段、長胴型
6号住居址	6−16		床面	土師器	ロクロ不使用	(18.6)	−	−		ヨコナデ		ヨコナデ			Ⅰ−A−4−a−ロ	口縁部〜体部上半、有段
6号住居址	6−17	62	床面	土師器	ロクロ不使用	(23.0)	−	−		ヨコナデ	ミガキ	ミガキ			Ⅰ−B−4−a−ハ	口縁部〜頸部近く
6号住居址	6−18		床面	土師器	ロクロ不使用	(17.7)	−	−							Ⅰ−c−4−a−ハ	口縁部片
6号住居址	6−19		床面	土師器	ロクロ不使用	(24.2)	−	−		ハケメ ヨコナデ		ヨコナデ			Ⅰ−A−4−a−ロ	口縁部片
6号住居址	6−20	56	床面	土師器	ロクロ不使用	(11.5)	−	−		ヨコナデ ミガキ	ミガキ	ハケメ ヨコナデ	ナデ		Ⅱ−A−4−d−イ	口縁部〜体部上半、頸部に有段あり、球胴型
6号住居址	6−21		床面	土師器	ロクロ不使用	(23.3)	−	−		ヨコナデ		ヨコナデ			Ⅱ−c−4−b−ハ	口縁部片
6号住居址	6−22	60	床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	(7.4)			ナデ		ナデ	木葉痕		体部下半〜底部
6号住居址	6−23	57	床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	(9.5)			ハケメ		ヨコナデ	木葉痕		体部下半〜底部、球胴型
8号住居址	8−2	63	カマド	土師器	ロクロ不使用	19.2	3.70	7.0	16.4	ナデ	ハケメ		ハケメ	不明	Ⅰ−A−1−a−イ	完形、頸部に有段
8号住居址	8−3		埋土	土師器	ロクロ不使用	(20.8)	−	−		ヨコナデ					Ⅰ−c−4−a−ロ	口縁部片
9号住居址	9−3		床面	須恵器	ロクロ成形	(23.7)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ			口縁部片
9号住居址	9−4	66	床面	土師器	ロクロ不使用	19.0	−	−		ナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ		Ⅰ−A−4−a−ハ	口縁部〜頸部、有段(2段)
9号住居址	9−5	75	床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	8.0			ハケメ		ハケメ	木葉痕		体部上半〜底部、外面にスス付着
9号住居址	9−6		床面	土師器	ロクロ成形	(16.3)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ−3イb−ハ−C	口縁部〜体部下半
9号住居址	9−7		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	6.9		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ヘラ再調?		体部中央〜底部
9号住居址	9−8		カマド	土師器	ロクロ成形	−	−	(8.8)		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		体部中央〜底部
9号住居址	9−9		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	7.8		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切後再調整		底部片
9号住居址	9−10		床面	土師器	ロクロ成形	−	−	(7.2)						不明		底部片

甕型土器表　2

遺構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	口径 cm	器高 cm	底径 cm	最大胴径 cm	外面調整 口縁	外面調整 体部	内面調整 口縁	内面調整 体部	底部調整	分類	備考
9号住居址	9−11		カマド	土師器	ロクロ成形	−	−	(6.9)					ハケメ	糸切り		底部片
10号住居址	10−2	68	埋土	土師器	ロクロ不使用	(20.8)	−	−			ハケメ	ヨコナデ	ナデ		I−A−4−a−イ	口縁部〜体部中央、頸部に有段、内面にスス付着
10号住居址	10−3	72	埋土	土師器	ロクロ不使用	(23.7)	−	−		ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ		I−A−4−a−イ	口縁部〜体部下半 頸部に段を二段持つ
10号住居址	10−4	71	埋土	土師器	ロクロ不使用	(25.0)	−	−				ヨコナデ			I−C−4−a−ロ	口縁部片
10号住居址	10−5	70	埋土	土師器	ロクロ不使用	(18.0)	−	−		ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		I−A−4−a−ロ	口縁部〜頸部 頸部に有段
10号住居址	10−6		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(6.6)								体部下半〜底部
10号住居址	10−7		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	8.6					ケズリ	木葉痕		底部片
11号住居址	11−2	74	埋土	須恵器	ロクロ成形	−	−	−								頸部〜体部上半
11号住居址	11−3		埋土	土師器	ロクロ成形	(24.2)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		III−3ぁ−a−ハ−C	口縁部片
11号住居址	11−4		埋土	土師器	ロクロ成形	−	−	(7.2)			ケズリ					底部片
12号住居址	12−2		埋土	土師器	ロクロ不使用	(19.8)	−	−		ハケメ		ハケメ			I−C−4−a−イ	口縁部片
12号住居址	12−3		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(7.9)						不明		体部下半〜底部
14号住居址	14−4	80	埋土	土師器	ロクロ不使用	(18.9)	−	−				ナデ			I−C−4−a−ハ	口縁部〜頸部外面に黒斑が見られる
14号住居址	14−5		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	−		ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ		I−A−4−e−ニ	頸部〜体部上半、内外面に黒斑が見られる
14号住居址	14−6		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	8.7			ハケメ					体部下半〜底部
14号住居址	14−7		埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(8.0)					ナデ			底部片 内面に黒斑あり
14号住居址	14−8	76	埋土	土師器	ロクロ不使用	−	−	(5.5)			ハケメ			木葉痕		体部下半〜底部
15号住居址	15−1		カマド	土師器	ロクロ不使用	(17.8)	−	−				ヨコナデ			I−C−4−a−ロ	口縁部片
15号住居址	15−2		カマド	土師器	ロクロ不使用	(17.9)	−	−							I−C−4−a−ロ	口縁部片
15号住居址	15−3		カマド	土師器	ロクロ不使用	(17.9)	−	−							I−C−4−a−ハ	口縁部片 口唇部に沈線あり
15号住居址	15−4		カマド	土師器	ロクロ不使用	(23.3)	−	−				ヨコナデ			I−C−4−a−ロ	
15号住居址	15−5		カマド	土師器	ロクロ不使用	(24.5)	−	−		ヨコナデ		ヨコナデ			I−C−4−a−ロ	口縁部片 口唇部に沈線あり
15号住居址	15−6		カマド	土師器	ロクロ不使用	(21.9)	−	−		ナデ		ナデ			I−C−4−a−ロ	口縁部片
15号住居址	15−7	81	カマド	土師器	ロクロ不使用	−	−	−		ヨコナデ		ミガキ			I−A−4−C−ニ	頸部〜体部下半 頸部に有段
15号住居址	15−8		カマド	土師器	ロクロ不使用	−	−	−					ナデ		I−B−4−e−ニ	頸部〜体部上半
15号住居址	15−9		カマド	土師器	ロクロ不使用	−	−	(8.9)			ナデ			木葉痕		底部片
15号住居址	15−10		カマド	土師器	ロクロ不使用	−	−	(8.9)			ナデ		ハケメ			底部片
15号住居址	15−11	78	カマド	土師器	ロクロ不使用	−	−	7.9			ナデ		ナデ	木葉痕		体部中央〜底部
16号住居址	16−3	85	床面	土師器	ロクロ不使用	(12.7)	−	−				ヨコナデ			I−A−4−a−ハ	口縁部〜頸部、頸部に有段
16号住居址	16−4	88	床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	7.9					ナデ	木葉痕		体部上半〜底部、内外面に黒斑あり
16号住居址	16−6	87	床面	土師器	ロクロ不使用	(15.1)	12.6	6.2		ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	不明	I−A−2−C−ロ	口縁部〜体部中央、頸に有段 球胴型
16号住居址	16−7	89	床面	土師器	ロクロ不使用	19.7	−	−			ハケメ	ヨコナデ			II−A−4−a−ハ	底部片
16号住居址	16−8		床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	(12.3)			ミガキ		ハケメ	不明		底部片、外面にスス付着
16号住居址	16−9		床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	(8.7)			ハケメ		ハケメ	木葉痕		
16号住居址	16−10	86	床面	土師器	ロクロ不使用	18.8	−	−		ハケメ	ハケメ	ナデ	ナデ		I−A−4−a−イ	口縁部〜体部上半、頸に有段
16号住居址	16−11		床面	土師器	ロクロ不使用	16.7	−	−		ミガキ	ナデ	ヨコナデ			II−A−4−b−イ	体部中央〜底部
16号住居址	16−12	90	床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	7.1			ミガキ		ナデ		II−C−4−e−ニ	口縁部〜体部中央 内面に黒斑あり
17号住居址	17−7	98	床面	土師器	ロクロ成形	(20.8)	−	−		ヨコナデ			ヨコナデ		III−3ぁ−a−ニ−B	口縁部〜体部上半
17号住居址	17−8	97	床面	土師器	ロクロ成形	(23.3)	−	−					ヨコナデ		III−3ぁ−b−イ−A	口縁部〜体部中央
17号住居址	17−9	99	床面	土師器	ロクロ成形	(22.0)	−	−			タタキメ		ヨコナデ		III−3ぁ−a−イ−A	底部片
17号住居址	17−10		床面	土師器	ロクロ不使用	−	−	(7.8)			ハケメ		ハケメ	不明		
17号住居址	17−11	91	床面	土師器	ロクロ成形	−	−	−			ケズリ		ヨコナデ			口縁部〜体部上半
18号住居址	18−3	102	ピット	土師器	ロクロ成形	(22.8)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		III−3ぁ−b−ロ−B	口縁部〜体部上半
18号住居址	18−4		ピット	土師器	ロクロ成形	(12.7)	−	−		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ナデ		III−3ぅ−b−ロ−B	
19号住居址	19−1	105	床面?	土師器	ロクロ不使用	−	−	−			ナデ				II−C−4−C−ニ	体部上半〜底部近く、内外面に黒斑あり

甕型土器表 3

遺構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	口径 cm	器高 cm	底径 cm	最大胴径 cm	外面調整 口縁	外面調整 体部	内面調整 口縁	内面調整 体部	底部調整	分類	備考
19号住居址	19－2	104	床面？	土師器	ロクロ不使用	(12.8)	15.8	5.5		ヨコナデ	ハケメ ミガキ	ヨコナデ	ナデ	木葉痕	Ⅱ－A－2－b－イ	口縁部～底部 頸部に有段
19号住居址	19－3		床面？	土師器	ロクロ不使用	(14.9)	－	－		ヨコナデ ミガキ		ヨコナデ			Ⅰ－C－4－a－イ	口縁部片
19号住居址	19－4		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(8.4)			ミガキ		ハケメ			底部片
19号住居址	19－5		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(8.8)			ハケメ		ハケメ			底部片
19号住居址	19－6		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	6.7			ナデ		ハケメ			底部片
19号住居址	19－7		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	5.8			ハケメ		ハケメ			底部片
19号住居址	19－8		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(8.8)			ハケメ			木葉痕		底部片
19号住居址	19－9		埋土	土師器	ロクロ成形	－	－	7.0			ケズリ			不明		底部片
20号住居址	20－3	112	埋土	土師器	ロクロ不使用	(17.5)	－	－		ヨコナデ	ナデ ヨコナデ ミガキ	ミガキ	ナデ ミガキ ヨコナデ ナデ		Ⅰ－A－4－a－ロ	口縁～体部上半、頸部に段を2段持つ
20号住居址	20－4		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	－							Ⅰ－C－4－e－ニ	頸部～体部中央
21号住居址	21－2		床面	土師器	ロクロ不使用	－	－	6.0						木葉痕		底部片
23号住居址	BP₂	111	埋土	土師器	ロクロ不使用	(22.3)	－	－		ヨコナデ ハケメ	ナデ	ヨコナデ	ナデ		Ⅰ－A－4－c－ハ	口縁部～頸部、段2段持つ
23号住居址	BP₁	113	埋土	土師器	ロクロ不使用	(22.5)	－	－		ハケメ ナデ	ハケメ	ヨコナデ			Ⅰ－A－4－a－ハ	口縁部～体部上半
23号住居址	BP₃		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	－			ナデ		ナデ		Ⅰ－A－4－e－ニ	頸部～体部上半
25号住居址	25－1	106	埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	－			ハケメ ケズリ		ミガキ		Ⅱ－C－4－a－ニ	頸部～体部中央、内面に黒斑あり
25号住居址	25－2		埋土	土師器	ロクロ不使用	(13.0)	－	－		ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ			Ⅰ－A－4－a－ロ	口縁部～体部上半、頸部に段を持つ
25号住居址	25－3		埋土	土師器	ロクロ不使用	(12.0)	－	－							Ⅱ－C－4－b－イ	口縁部片
25号住居址	25－4		埋土	土師器	ロクロ不使用	(14.1)	－	－							Ⅱ－B－4－b－イ	口縁部片
25号住居址	25－5		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(10.5)						木葉痕		底部片
25号住居址	25－6		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(9.4)						不明		底部片
25号住居址	25－7		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(6.5)			ナデ		ナデ			底部片
26号住居址	26－2		埋土	土師器	ロクロ不使用	(15.6)	－	－		ヨコナデ ハケメ	ケズリ	ナデ	ハケメ		Ⅰ－A－4－C－ロ	口縁部～体部上半 内面に黒斑あり
26号住居址	26－3		埋土	土師器	ロクロ不使用	(14.6)	－	－		ヨコナデ ハケメ		ヨコナデ			Ⅰ－c－4－a－イ	口縁部片 内外面にスス付着
26号住居址	26－4		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(9.3)						不明		底部片
26号住居址	26－5		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(7.2)			ハケメ			不明		底部片
26号住居址	26－6		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(5.8)			ハケメ			木葉痕		底部片
26号住居址	26－7		埋土	須恵器	ロクロ成形	(17.7)	－	－		ロクロ	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ			口縁部～頸部
26号住居址	26－8		埋土	須恵器	ロクロ成形	－	－	(10.7)			ナデ タタキメ			不明		底部片
27号住居址	27－1	109	埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(6.4)			ハケメ			不明		体部中央～底部 内外面に黒斑あり
29号住居址	29－2	116	埋土	土師器	ロクロ不使用	(18.6)	－	－		ヨコナデ ハケメ		ヨコナデ ミガキ			Ⅰ－C－4－a－イ	口縁部片
29号住居址	29－3	110	埋土	土師器	ロクロ不使用	(16.3)	－	－		ヨコナデ ハケメ					Ⅰ－A－4－a－ロ	口縁部片 頸部に段を持つ
29号住居址	29－4	114	埋土	土師器	ロクロ不使用	(20.5)	－	－		ヨコナデ ハケメ		ヨコナデ ミガキ			Ⅰ－A－4－a－ハ	口縁部片 頸部に段を持つ
30号住居址	30－1		埋土	土師器	ロクロ不使用	(13.0)	－	－		ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ				Ⅱ－C－4－b－イ	口縁部片
30号住居址	30－2		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	－					ヨコナデ		Ⅰ－A－4－e－ニ	体部片有段
30号住居址	30－3		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	－			ハケメ		ナデ			体部片
30号住居址	30－4		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(7.2)			ケズリ		ナデ	不明		底部片
31号住居址	31－10	122	床面	土師器	ロクロ不使用	(18.2)	－	－		ヨコナデ		ヨコナデ			Ⅰ－B－4－a－イ	口縁部片
31号住居址	31－11	120	床面	土師器	ロクロ成形	(13.2)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ			口縁部片
31号住居址	31－12		床面	土師器	ロクロ不使用	(14.5)	－	－							Ⅱ－C－4－e－イ	口縁部片
31号住居址	31－13	126	埋土	土師器	ロクロ不使用	(15.3)	－	－		ヨコナデ		ヨコナデ			Ⅰ－C－4－a－ロ	口縁部片
31号住居址	31－14		埋土	土師器	ロクロ不使用	(15.8)	－	－								口縁部片
31号住居址	31－15		埋土	土師器	ロクロ成形	－	－	8.1			ケズリ		ナデ	不明		底部片
31号住居址	31－16	118	埋土	土師器	ロクロ不使用	(13.8)	－	－							Ⅰ－A－4－c－ハ	口縁部片
31号住居址	31－17	129	埋土	土師器	ロクロ成形	－	－	(12.2)			ケズリ		ナデ			体部下半～底部
31号住居址	31－18		埋土	土師器	ロクロ成形	－	－	(8.4)								底部片

甕型土器表 4

遺構名	登録番号	写真番号	出土地点	種別	成形技法	口径 cm	器高 cm	底径 cm	最大胴径 cm	外面調整 口縁	外面調整 体部	内面調整 口縁	内面調整 体部	底部調整	分類	備考
32号住居址	32－6	137	埋土	土師器	ロクロ不使用	(14.0)	－	－		ヨコナデ					Ⅰ－A－4－c－イ	口縁部片
32号住居址	32－7		埋土	土師器	ロクロ成形	(20.4)	－	－							Ⅲ－3ぁ－b－ハ－C	口縁部片
32号住居址	32－8	136	埋土	土師器	ロクロ不使用	(15.7)	－	－		ハケメ					Ⅰ－C－4－a－イ	口縁部片 内外面に黒斑あり
32号住居址	32－9		埋土	土師器	ロクロ不使用	(16.7)	－	－							Ⅲ－3ぃ－b－ロ－C	口縁部片
32号住居址	32－10	134	埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	7.0			ケズリ		ナデ	木葉痕		底部片 底部に黒斑 内外面底にも斑あり
32号住居址	32－11	135	埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	8.2			ケズリ		ナデ	不明		底部片
33号住居址	33－3		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(5.9)			ナデ					底部片
33号住居址	33－4		埋土	土師器	ロクロ不使用	－	－	(6-9)			ナデ					底部片
36号住居址	36－1		床面	土師器	ロクロ不使用	(15.7)	－	－		ナデ					Ⅰ－c－4－a－イ	口縁部片
36号住居址	36－2		床面	土師器	ロクロ不使用	(15.0)	－	－							Ⅰ－C－4－a－イ	口縁部片 外面に黒斑あり
37号住居址	37－3	140	カ株	土師器	ロクロ不使用	11.8	－	－		ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ナデ		Ⅰ－A－3－c－ロ	口縁部～底部近く 外面に黒斑あり
37号住居址	37－4		床面	土師器	ロクロ不使用	(14.6)	－	－			ハケメ		ナデ		Ⅰ－A－4－c－イ	口縁部～体部上半、有段、内黒?
37号住居址	37－5	142	カマド	土師器	ロクロ不使用	16.6	－	－		ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ		Ⅰ－B－4－a－ハ	口縁部～体部上半
37号住居址	37－6	143	床面	土師器	ロクロ不使用	－	－	5.5			ケズリ		ナデ	木葉痕		底部片
37号住居址	37－7		床面	土師器	ロクロ不使用	－	－	(7.7)			ナデ			木葉痕		底部片
38号住居址	38－10	151	埋土	土師器	ロクロ成形	(33.1)	－	－		タタキメ	ナデ	ナデ	ナデ		Ⅲ－3ぁ－a－ハ－A	口縁部～体部上半
38号住居址	38－13		床面	土師器	ロクロ成形	(14.6)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ－ぃ－a－ハ－B	口縁部～体部上部片
38号住居址	38－14		床面	土師器	ロクロ成形	(20.0)	－	－			ハケメ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ－3ぁ－a－ハ－A	口縁部～体部上部片、口唇部に凹あり
38号住居址	38－15		床面	土師器	ロクロ成形	(12.5)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ－3ぅ－b－ロ－B	口縁部～体部上部片
38号住居址	38－16		床面	土師器	ロクロ成形	(19.9)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ－3ぁ－b－イ－C	口縁部～体部上部片
38号住居址	38－17		床面	土師器	ロクロ成形	(14.0)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		Ⅲ－3ぅ－a－ロ－B	口縁部～体部上半
38号住居址	38－18		床面	土師器	ロクロ成形	－	－	7.0			ケズ		ナデ	籾痕あり		体部中央～底部 外面に黒斑ありスス付着
38号住居址	38－19		床面	土師器	ロクロ成形	－	－	(7.9)			ロクロ		ロクロ	不明		底部片
38号住居址	38－20		床面	須恵器	ロクロ成形	－	－	－								体部片
合口甕棺	1－1	156		土師器	ロクロ成形	(24.8)	－	7.7		タタキメ	ケズリ	ヨコナデ			Ⅲ－3ぁ－b－ハ－A	口縁部～体部下半
合口甕棺	1－2	155		土師器	ロクロ成形	(26.5)	37.8	－		タタキメ	ケズリ	ヨコナデ	ナデ		Ⅲ－1－b－ハ－A	準完形
合口甕棺	2－1	157		土師器	ロクロ成形	(27.0)	－	－				ヨコナデ			Ⅲ－3ぁ－a－ハ－B	口縁部～体部上部片
合口甕棺	2－2	158		土師器	ロクロ成形	(25.0)	－			ロクロ	ケズリ	ヨコナデ	ナデ		Ⅲ－3ぁ－b－ニ－A	口縁部～体部中央

（甑）

6号住居址	6 24	58	床面	土師器	ロクロ不使用	20.5	19.9	10.0		ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ			完形、頸部に有段
16号住居址	16－5	82	床面	土師器	ロクロ不使用	(22.4)	21.1	－		ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			口縁部～底部近く頸部に有段

（鉢）

1号住居址	1－39	13	床面	土師器	ロクロ成形	(24.9)	15.9	11.7		ヨコナデ	タタキメ	ヨコナデ ミガキ		不明		口縁部～底部
2号住居址	2－22		カマド	須恵器	ロクロ成形	(10.2)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		口縁部～体部上半
3号住居址	3－15	42	床面	土師器	ロクロ成形	(10.7)	－	(5.0)		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		口縁部～底部外面にスス付着
3号住居址	3－16	43	床面	土師器	ロクロ成形	10.0	5.6	4.8		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	糸切り		完形

（盤）

38号住居址	38－11	152	床面	土師器	ロクロ成形	(33.5)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ			口縁部～体部中央 内外面に黒斑あり
38号住居址	38－12	150	埋土	土師器	ロクロ成形	(19.0)	－	－		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ			口縁部～体部

甕型土器、甑、鉢、盤表5

再調整の有無と口径値 ＼ 底部切り離し状態と口縁～体部の特徴	a－1	b－2	c－1	c－3	d－1	e－1	e－2	f	g	不明	合計
イ　ー　い			6–6 31–1								2
イ　ー　う	6–2 16–2										2
イ　ー　え	32－1										1
ロ　ー　い							6－9				1
ロ　ー　う	6－1										1
ロ　ー　お	14－1										1
ハ　ー　お	6－3										1
ニ　ー　い	14－2										1
ニ　ー　う	10－1	8－1									2
ヘ　ー　あ			33－1			5－1		6－10			3
ヘ　ー　い			6-5 6-7 12-1		6-4 6-8 14－3 23-1						7
ヘ　ー　う			29－1								1
ヘ　ー　え	16－1		9－2								2
ヘ　ー　お		32－2									1
不　明									37-2 20-1 20-2	21－1	4
合　計	9	2	8		4	1 黒色処理無	1 黒色処理無	1 黒色処理無	3	1	30

A　類

再調整の有無と口径値 ＼ 底部切り離し状態と口縁～体部の特徴		糸切り a				へラ切り b			不明 c			計
		1	2	3	不明	1	2	3	1	2	3	
再調整	イーい	2-10	3-7 2-7	3-9 3-8 3-10					31-6			7
	イーう	17-5										1
	イー				31-9 1-11							2
無調整	ローい	17-4	遺構外1-10 17-6									5
	ローう		2-9									2
	ロー			2-8 38-8								2
不明	ハーあ				31-8 3-13					24-4(24-13)	38-5	2
	ハーい									24-4(24-13)	38-5	6
	ハーう									38-7 3-11 31-7	33-2 38-9 32-5	4
	ハーえ							3-12		2-12 2-13	38-4	2
	ハー									38-6 2-11		
	計	3	6	5	4			1	1	8	5	33

B類Ⅰ　須恵器土器

再調整の有無と口径値 ＼ 底部切り離し状態と口縁～体部の特徴		糸切り a				へラ切り b			不明 c			計
		1	2	3	不明	1	2	3	1	2	3	
再調整	イーい	3-5	1-6 3-6			18-1						4
	イーえ		2-6									1
無調整	ローい	1-8	1-9			18-2		1-7				4
	ロー											
	ハーい								31-5			1
	ハーう								32-4	38-3		2
	計	2	4			2		1	2	1		12

B類Ⅱ　須恵系土器

再調整の有無と口径値 ＼ 底部切り離し状態と口縁～体部の特徴		糸切り a				へラ切り b			不明 c			計
		1	2	3	不明	1	2	3	1	2	3	
再調整	イーい	1-3 3-1 17-1 2-3	2-5 17-3 17-2									8
	イー	1-2			1-5 31-4 11-1 32-3							4
無調整	ローイ	3-2	24-1 9-1 2-2	2-1								5
	ロー				2-4 24-3							2
不明	ハーあ								31-2	24-2 31-3 38-2		4
	ハーい								3-3 3-4	26-1 38-1		4
	ハーう											
	ハーえ									1-1		1
	ハーお										1-4	1
計		6	6	1	6				3	6	1	29

B類Ⅲ　内黒土師器

第10表

須恵系土器

本遺跡において須恵系土器を出土させた住居址は、1号、3号住居址等7棟ある。この須恵系土器については種々の呼び方がなされ、統一した呼称は勿論、概念規定でも相当のずれがある。呼称について見ると須恵系土器（桑原－1976ほか）あかやき土器（小笠原－1976）赤褐色土器（秋田城）土師質土器（胆沢城）須恵器酸化焔焼成（三浦1981）などがあげられる。

本報告書において須恵系土器と称するのは、

窯を用いた酸化焔焼成であるとこ・・・黒斑がないこと、

内外面ともに黒色処理、ミガキがなされていないこと、

ロクロ成形であること、

の三要件をそなえているものである。従って桑原らがいうロクロ切り離し技法か糸切りであり再調整がなされていない事を要件とはしない。考え方としては岩手県文化課縦貫道班の坏B類と同様に考えている。時期的には二時期に大別される可能性がある。

須恵系土器の器種としては坏、高台付坏、皿、鉢、甕があげられ、多賀城跡から出土の片口鉢、三足鉢等も含まれるであろう。岩手県内では片口鉢、三足鉢は実見していない。

三要件をそなえるものを広義に須恵系器を考えた場合、当然ロクロ切り離し技法にヘラ切りが認められ、器面再調整が認められる事になる。湯沢A遺跡6号住居址の坏が回転ヘラ切り調整である。当遺跡においても1号住居址出土の坏は回転ヘラ切り無調整であり、3号住居址出土の坏は回転糸切調整、18号住居址出土の坏は回転ヘラ切り調整である。

須恵器との共伴関係については、小笠原（1976）は共伴し両者には密接な共通性はないとしている。桑原（1976）は須恵器とは共伴せずに内黒の土師器と共伴するとしている。県内の遺跡において、1978年以降報告された一般集落における須恵系土器の共伴関係を見ると30遺跡の住居址 100棟以上において須恵器と共伴している。勿論桑原の言う所の内黒の土師器と共伴することも多数ある。共伴関係で注目されるのは、盛岡市竹花前遺跡の検出5棟全てが共伴しうち2棟から須恵器長頸瓶が出土している。又都南村湯沢A遺跡は6棟中5棟が住居址と共伴している。内黒土師器との共伴関係で注目されるのは石鳥谷町大曲遺跡の住居址からロクロ未使用土師器の坏、甕、鉢とロクロ使用土師器内黒坏、高台付坏、甕と須恵器系土器の坏、高台付坏が出土している。これらの、共伴関係から見ると広義の須恵系土器の生産は須恵器生産の衰退によって行なわれたものではなく、岩手県内においてはそれ以前から生産されており大曲遺跡から時期を見ると9世紀前半まで逆上ることができそうである。共伴関係については後の機会に詳述したい。須恵系土器の坏についてはそれぞれ先学たちがふれているが、甕又鉢については殆どふれていない。須恵系土器の坏と共に出土する甕又は鉢を検討する必要があるのではないだろうか、今回本報告書作成に当って多くの報告書を見る必要が生じ、ひもといたが坏類に

ついては、須恵器と明瞭に区別して記載するが甕類については土師器と須恵器の区分のみで須恵系土器として扱っているものはわずかに盛岡市林崎遺跡報告書（1980）で大型のロクロ使用長胴甕をあかやき土器甕としており、江刺市力石Ⅱ遺跡（1980）で小型甕又は鉢の全体にロクロ痕を残すものを須恵系土器としている。

須恵系土器の坏と共に出土する甕類に大きく二つの形がある。一つは土師器の長胴の甕の流れを組む長胴の甕で、口縁部及び体部上部はロクロ成形で水びき痕を有し、体部下半はケズリ成形で胎土に含まれる小砂利が露呈し、ケズリによる小砂利の移動痕がつけられているものである。この種の甕は全く黒斑が見当らないし、時には須恵器を思わせる白色を呈し、硬く焼成温度の高いことを思わせる。他の一つは小型甕又は鉢型土器、小鉢と色々の呼び方をされているが、全体をロクロ成形で、糸切り切り離しで調整のないものが多いものである。これは須恵器においても見られるか、より土師器の糸位を引くものであり、焼成温度は前記甕と同様高温であることを思わせるものがある。又黒斑は皆無である。胎土は坏と長胴の甕との中間か、長胴の甕と同様のものが多い。この甕類は明らかに窯を用いて酸化焔焼成で須恵系土器の範ちゅうに入るものと考える。

以上のべたことをまとめると、須恵系土器は、坏類の技法から見た場合はより須恵器に近く甕類で見た場合より土師器に近いという事になり、坏類と甕類のまとまりで見た場合、どちらかの範ちゅうに組み入れることは無理であり、中間的位置を与えた方がより明確なのではないだろうか。即ち土師器→須恵系土器（名称として妥当かどうかは今後の検討課題）一須恵器となるのであろう。時期的には、ロクロ未使用土師器との共伴する大曲遺跡の９世紀前半から、他のものを含まない紫波町墳館遺跡２号住居址11世紀、そして平泉期まで含まれることになり、たしかに時期による須恵系土器の比率増加が認められる。県内におい る共伴関係はロクロ未使用土師器、ロクロ使用土師器、須恵器全てに渡っている。従って共伴関係による性格づけは難かしい。セット関係としては、坏、高台付坏、長胴の甕、小鉢が主であり、時期が下ることによってこれに皿がつく。片口鉢、三足鉢は特殊例である。

なお時期区分については、石田遺跡（相原1981）、林崎遺跡（八木、千田1978）の報告書は多賀城跡（桑原1976）でいう須恵系土器とは異なり、須恵系土器に先行するという見解を出しており鬼柳西裏遺跡（細谷、鈴木、1980）はこの種の土器、坏のみに硬、軟の二種類があり前者を須恵系土器、後者を土師質土器と規定している。又鴻１巣館遺跡（鈴木1980）では鬼柳遺跡と同様な考えから硬質土器、軟質土器と区分しそれぞれ軟質のものを先行するとしている。

遺跡調査において硬質、軟質双方が出土するが、その違いについての詳しい論考もないし、今回の報告において検討する時間もないので、後日まとめて見たい。　（瀬川司男）

市町村名	遺跡名	住居址名	出土須恵系土器	伴出土師器	伴出須恵器
都南村	下羽場	1号	坏、鍔釜		坏
		2号	坏	坏、甕	坏
		4号	坏、高台付坏	甕	坏
		5号	坏	甕	坏
		7号	坏		坏、甕
		9号	坏	甕	
		13号	坏、甕	坏、甕	坏
		14号	坏	坏	
		16号	坏	坏、甕	甕
		19号	坏	甕	坏、甕
		23号	坏		
		24号	坏	坏	
		27号	坏、甕	坏、甕	坏、壺、蓋
都南村	湯沢A	1号	坏、甕	坏、甕	坏、壺、蓋
		2号	坏、甕	坏、甕	坏、壺
		3号	坏	坏、甕、高台付坏	坏 壺
		4号	坏	坏、甕	坏
		5号	坏	坏、甕	坏、壺
		6号	坏、甕	坏、甕	坏、長頸瓶
都南村	稲荷	1号	坏		
		2号	甕	坏	坏、壺
		4号	坏	坏、甕	坏、壺
都南村	一本松	1号	坏、甕	坏、甕、高台付坏	坏
		2号	坏	坏、甕	坏、甕
		3号	坏	坏、甕	
衣川村	北館	2号	坏	坏、甕	
一関市	鈴ケ沢	2号	坏、甕	坏	甕
石鳥谷町	大地渡	Cf65	坏、甕	坏	坏
		De50	坏、甕	坏	
	大瀬川A	Mc45	坏、甕	坏、甕	
	梅の木Ⅳ	1号	坏	坏、甕	
		4号	坏	坏、甕	坏、甕
		5号	坏		坏
		6号	坏	坏、甕	坏、甕
		7号	坏、甕	坏、甕	坏、甕
		8号	坏	甕	坏
		9号	坏、高台坏、甕	坏	坏、甕
	梅の木Ⅵ	1号	坏、甕	坏	坏、甕
水沢市	石田	Cb21	坏、甕		坏
		Da56	坏、甕	坏、甕	坏、蓋、甕
		Da74	坏		坏、甕
		Dc71	甕		
		Dg50	坏	坏	坏、甕
	南矢中	1号	甕	坏	坏
		2号	坏		坏、甕
		3号	坏、甕		坏、甕
		4号	坏		壺
	袖谷地	5号	坏	坏、甕	甕
金ケ崎町	上餅田	21号	坏	坏、甕	坏、壺
	西根	1号	甕	坏	坏
		2号	坏、甕	坏、甕	坏、壺
		4号	坏、甕	坏、甕	
		5号	坏	坏、甕、高台付坏	坏
		6号	坏	坏、甕、高台付坏	坏
		7号	坏、甕	坏	坏、壺、
		8号	坏、甕	坏、甕	坏
天巾町	宮内B	1号	坏、甕	坏	坏、高台付坏
紫波町	宮平	Ah12	坏、甕	甕	坏
		Ai09	坏、甕	坏、甕、盤	坏、甕
		Be53	坏	坏、甕、浅鉢	壺
		Bb18	坏、甕	坏、甕	
		Bd62	坏、甕	坏、甕	坏、壺、
		Bc06	坏、浅、鉢、高台付坏	坏、高台付坏	坏
		Bf30	坏	坏、甕	坏、甕、壺

市町村名	遺跡名	住居址名	出土須恵系土器	伴出土師器	伴出須恵器
		Bi50	坏	坏、甕	坏、壺
		Bj21	坏、甕	坏、甕	坏、壺
		Cd21	坏	坏、高台坏	坏、壺
	上平沢新田	2号	甕	甕	坏
		5号	坏、ケズリ		
		6号	坏、甕	坏	
		7号	坏、ケズリ ヘラ切り	甕	坏、甕
		8号	坏、甕	甕	甕
		9号	坏	坏、甕	坏、甕
		10号	坏	甕、浅、鉢	坏、蓋、長頸壺
		11号	坏、高台坏、甕		
	墳館	1号	坏、甕	坏	
		2号	坏、甕		
		4号	坏	坏	
		7号	坏、甕	高台坏	
	鳥海B	1号	坏、高台坏、甕	坏	甕
		2号	坏、甕	坏	
		3号	甕	坏	
		4号	坏、甕、高台坏	坏、甕	坏
		5号	坏、甕、高台坏	坏	坏
		6号	坏、高台坏	坏	
		7号	坏、甕、高台坏	坏、甕	坏
		8号	坏、甕	坏	
		9号	坏、甕	坏	
		10号	坏、甕	坏	坏
	鳥海A	2号	坏		
		4号	坏		
		3号	坏		
一関市	機織山Ⅱ	BA50	坏	坏、甕、高台坏	坏、甕
江刺市	落合Ⅰ	BI 06	坏	坏、甕、高台坏	坏
		BJ 09	坏、高台坏台付	坏、甕	坏
	鵠羽衣	BC03	坏、高台坏	坏、甕	甕
		DC50	坏、甕	甕	坏、甕
	谷地	BH03	坏、甕	坏、甕	坏、甕、壺
北上市	西野	BG53	坏、甕	坏	
		CI 50	坏、甕	坏	坏、甕、壺
		CE36	坏、高台坏、甕	坏	坏、甕、壺、長頸壺
	野田Ⅱ	BG50	坏、甕	坏、甕	
花巻市	八幡	CG09	坏、甕	坏、甕	
石鳥谷町	大明神	BG50	坏、浅鉢	坏	
	大曲	DE65	坏、高台坏、甕		
紫波町	野上	BB50	坏、甕	坏、甕	
	田頭	AI 09	甕	甕	坏、高台坏
		BC12	坏、甕	甕	坏
		BJ 06	坏、甕	坏、甕	坏、高台坏、壺
	杉の上Ⅲ	EB50	甕	坏、甕	坏
		ED50	坏、甕		
		ED03	坏、甕		
	杉の上Ⅱ	GB03	坏、甕	坏、高台杯、甕	
		GD50	坏、高台坏	甕	
	杉の上Ⅰ	CA59	坏	坏、甕	
	古館駅前	BA50	坏、甕	坏、甕	坏、甕、長頸壺
	古館橋	AI 53	坏、甕	坏、甕	坏、甕、長頸壺
	下赤林Ⅰ	AB24	坏、甕	坏	
江刺市	宮地	1号	坏、高台坏、甕	坏、高台坏、	坏
		2号	坏、甕	坏、高台坏、甕	坏
		3号	坏、甕	坏、甕、鉢	坏
		5号	坏、高台坏	坏、甕、高台坏	坏、甕
		6号	鉢	坏、堝	甕
		7号	坏、甕、高台坏	坏、甕	
		8号	坏	坏、甕	
		10号	坏、甕	坏、甕	坏、甕
		15号	坏、甕、高台坏	坏、甕	甕
		17号	坏、甕		
		18号	坏、高台坏、甕	坏、高台坏、甕	坏、甕

第11表　須恵系土器出土住居址一覧表1

市町村名	遺跡名	住居址名	出土須恵系土器	伴出土師器	伴出須恵器
		No15	坏	甕	
		No16	坏	坏、高台坏	
		No19	坏、甕	坏、甕	
		No25	坏	坏、高台坏	
		No30	甕	甕	甕
		No34	坏、甕	甕	坏
		No35	坏、甕	坏、甕、高台坏	甕
		No36	坏		坏
		No40	坏	甕	
		No44	坏	坏、甕	
		No47	坏	甕	甕
		No51	坏		壺
		No52	坏		
		No54	坏、甕	坏、甕	
		No55	坏、甕	甕	
		No57	坏、甕	甕	
		No58	坏	坏、甕	甕
		No61	坏	甕	坏、甕
		No64-1	甕	甕	
		No64-2	坏	坏	坏
		No73-2	坏	坏	甕
		No75-2	坏	坏、高台坏	坏
		No78	坏	坏、甕	
盛岡市	林　崎	RA0.1	坏、甕	坏、甕	坏
		RA02	坏、高台坏	坏	坏
		RA09	坏、高台坏	坏、甕、壺	
		19号	甕	坏	壺
		20号	坏、甕	坏、甕、高台坏	
		23号	坏、甕	坏、甕	
江刺市	鴻ノ巣館	AF03	坏、甕	坏、甕、鉢	坏、長
		EI 53	坏	坏、壺	
		FA06	坏、甕	坏、甕	坏、甕
		EC09	坏、甕	坏、甕、浅鉢	坏、甕
		FG06	甕	坏、甕	甕
		FI 50	坏、甕、高台坏	坏、甕	坏、甕
		I H06	坏、高台坏、盤	坏、高台坏、甕、鍋	甕
		J G03	甕	坏、甕	坏、甕
		J I 50	坏、甕	坏、甕	坏、甕
紫波町	白　沢	BE06	坏	坏、甕	甕
		CC53	坏、甕	甕	
北上市	鬼柳西	XH09	坏、皿水、高台坏	坏	甕
		AC15	坏、高台坏	坏、甕	坏
		AE12	坏、高台坏	坏	甕
		AF24	坏、高台坏、甕		
		AG18	坏、高台坏	坏、高台坏	甕
		BC09	坏	坏	
		CH18	甕	坏、甕	
都南村	百目木	No 3	坏	坏、高台坏	坏、甕
		No 6	坏、甕	坏、甕	
		No10	坏	坏、甕	甕
		No11	坏、高台坏	甕	
		No14	坏	坏、甕	
		KA03		坏、甕	坏
		RA04		坏	甕
		RA07	坏、坏	坏	
		RA08	坏		
一戸町	北館B	DI 59	坏	坏、甕	
		BI 59	坏、甕	坏、甕	甕
	田中3	CJ 65	坏	坏	坏、壺
	田中4	BF68	坏	坏、甕、壺	甕
		BI56	坏		
江子村	高　橋	SI001	坏(甕の内から)甕	坏	
		SI006	坏、甕	坏、甕	坏
		SI007	坏、甕	坏	甕
安代町	扇畑Ⅰ	HI-1	坏、甕	坏、甕	

市町村名	遺跡名	住居址名	出土須恵系土器	伴出土師器	伴出須恵器
		BⅡ-1	坏	坏、甕、高台坏	甕
		CⅠ-1	坏、壺	甕	
		CⅠ-2	坏	坏、甕	
		CⅠ-2	坏、高台坏、鉢	甕	
		DⅢ-1	坏	坏、甕	
		EⅡ-3	坏	甕	甕
二戸市	上田面	D 37	甕	坏、甕	
江刺市	力石Ⅱ	B-1	甕		
		B-3	甕	坏、甕	
		B-4	坏、	甕	
		C-2	坏、高台坏	坏、甕	
		C-6	甕	坏、甕	
		D-1	甕	高台坏、甕	坏、甕
江刺市	力石Ⅱ	F-2	坏、高台坏、甕	坏	
		G-2	甕	高台坏、甕	坏、甕
		G-3	坏、高台坏	坏、甕	
	兎　Ⅱ	J-1	坏、甕		
	落合Ⅱ	A-1	甕	甕	
		J-1	坏、甕		
		J-2	甕	坏	
		J-5	甕	坏	坏、甕
		K-2	坏		甕
		L-1	甕		坏
		M-3	高台坏	坏、甕	
	朴ノ木	B-1	甕		坏
		C-1	坏、高台坏、甕		
		C-2	甕		
水沢市	東大畑	1号	坏、甕	坏、甕	坏
		2号	坏	坏、甕	坏
		3号	坏、甕	坏、甕	坏
		9号		坏、甕	
		18号	坏、甕	坏	坏
		24号	甕	坏	坏、鉢
		30号	甕		
		31号	坏	坏、甕	坏
		32号	坏	坏、甕	坏
		38号	坏、甕	坏、盤、甕	坏

付記

1．筆者の手元にある資料を中心にまとめた。
2．胆沢城、志波城、徳丹城の官衙及び平泉関係の資料は除き、一般集落のみにした。
3．既報告の資料にとどめた。この他に未報告資料としては、水沢市膳性遺跡、二戸市長瀬A・B遺跡、九戸村江刺家遺跡、安代町上の山田遺跡などがある。
4．須恵系土器としたのは
酸化炎焼成で、ロクロ使用、ミガキ、内面黒色処理がなく、黒斑のないものである。
黒斑については実測図では不明なのであやまりがある可能性もある。
5．甕については体部の半分以上にロクロ成形痕を残し黒斑のないものとしたが、4と同様である。る。
6．器種については、各報告書において異なっているため筆者の責任で記載した、特に甕、壺、鉢の分類である。

須恵系土器出土住居址一覧表2

勾玉、小玉

勾玉は４点出土している。土製のもの３点は６号住居址床面からの出土のものである。

石製のものは、33号住居址よりの出土で石質はメノウである。

小玉は１点出土している。土製のもので25号住居址より出土のものである。

石製銙帯

石製銙帯は３号住居址床面より出土したもので、形態は無文の丸鞆と呼ばれるもので、平面形は半円状を呈し、断面形は台形である。長さは上部で 3.2cm、下部で 3.4cm、幅は 2.8cm、3.0cm、厚みは５mmを測る。表裏とも研摩された痕跡が見られ、裏面には２孔１組のかがり穴が３ヶ所に穿れられており、これらの穴には留金具の一部と思われる針金状の物質が付いている。石質はアルコース砂岩である。

石製銙帯及び銙帯については、伊藤玄三氏（伊藤：1968）阿部義平氏（阿部：1976）佐藤興治氏（佐藤：1975）生江芳徳氏（生江：1979）らによって論じられている。それによれば銙帯は慶応４年（707）から延暦15年（796）そして大同２年(807)から弘仁元年（810）に使用された。銙帯が延暦15年に一度禁止され、かわって石帯が用いられているが大同２年から弘仁元年の４年間は雑石腰帯は古制にあらざるものとして禁止され、この４年間を除き石帯は延暦15年以後に使用された。銙帯金具と石製銙の着装方法は阿部義平氏によって詳細に説明されており、革帯を止める鉸具、半円状の丸鞆、方形の巡方、末端につける鉈尾から構成され、丸鞆巡方の数や順序及び種類、帯幅等に規則があり、官位制に基くものであろうとしている。

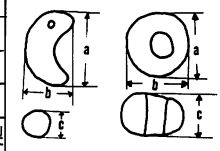
また石帯は、銅銙のかわりに使用されたもので、銅製の丸鞆、巡方には下方に横長の長方形のスカシがあり、石製の丸鞆、巡方にも同様のスカシを有するものがあり、このスカシは銙帯金具の影響を残すもので、古手のもののようであり、着装方法よりも鋲留のもの、本遺跡の出土例にもある２孔１組のかがり穴を穿ち、針金や糸で固定する方法、表面に十字のキザミを入れた針金や糸で十字に固定する方法があり、鋲留のものが古く、２孔１組が 810年以降のもの、十字にキザミを入れているものが中・近世にかけて使用されているものであるとされている。

古代においては、石帯を使用した官人として玉石帯、瑪瑙帯のように五位以上のものと、正六位以下の下級官人が使用した雑石腰帯に分けられているようである。

県内の集落跡からの出土例として、江刺市力石遺跡（丸鞆２、内１点には透孔がある）、九戸村江刺家遺跡（丸鞆）があり、他に鉄製のもので江刺市宮地遺跡（巡方１）があり、古墳からの出土例として、金ヶ崎町西根古墳、花巻市態堂古墳などが知られている。外に県外では、

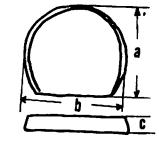
青森県上北郡六ヶ所村表館遺跡、下田町十三森付近出土のものなどもある。以上の他にも東北各県で、城冊跡、集落跡などからも出土しているが詳細は割合した。

遺構名	図版番号	写真番号	計測値 (mm)				その他
			a	b	c	d(g)	
6号住居址	60－1	165	27	17	11	4.25	床面 No.1
6号住居址	60－2	167	29	19	10	4.2	床面 No.2
6号住居址	60－3	166	26	18.5	10	3.1	床面 No.3
33号住居址	60－4	168	29	14	8	1.15	床面、メノウ製
25号住居址	60－5	164	24	24	7	4	床面



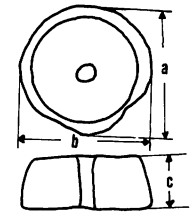
第12表　勾玉・小玉計測表

遺構名	図版番号	写真番号	計測値 (mm)				その他
			a	b	c	d(g)	
3号住居址	60－6	169	30	24	5	11.7	床面 アルコース砂岩



第13表　石帯計測表

遺構名	図版番号	写真番号	計測値 (mm)				その他
			a	b	c	d(g)	
16号住居址	61－1	159	56	58	23	90	床面 No.9
38号住居址	61－3	162	40	42	11	19.6	床面
32号住居址	61－2	160	26	49	15	25.8	埋土
38号住居址	61－5	161	32	35	6.5	11.6	埋土
2号住居址	61－4	163	51	47	10	29.5	床面 No.6

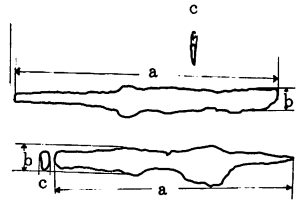


第14表　紡垂車計測表

遺構名	図版番号	写真番号	計測値 (mm)				その他
			a	b	c	d(g)	
9号住居址	61－6	—	50	41	35	90	

第15表　砥石計測表

遺構名	図版番号	写真番号	計測値 (mm)				その他
			a	b	c	d(g)	
1号住居址	61－11	170	235	18	3	110	埋土、刀子
17号住居址	61－10	—	158	18	6	—	埋土
33号住居址	61－8	171	49	19	—	12	埋土
2号住居址	61－9	172	234	15	7	110	槍先orヤリガンナ
25号住居址	61－7	—	79	30	4	—	埋土、鎌



第16表　鉄製品計測表

紡垂車（図版61－１～５、写真図版26）

紡垂車は、土製のもの４点、石製のもの（未製品）１点が出土している。土製のもののうち図版１～３、５は粘土を焼き上げてったものであり、完形品（１）を見る限り正面形は、円形を呈し、断面形は台形のもので表面は軽くナデつけられている。５は、土器の底部部分を利用したものであり、糸切り痕がみられ、厚みは6.5㎜と薄い、石製のもの(4)は手頃な偏平な円形状の石を利用しょうとしたものらしく表面は軽く研摩されている。穴は両面から加工しょうとしているものであるが、穴の位置がずれているために、製作を断念したようである。

鉄製品（図版61－７～11、写真図版27）

鉄製品としては、刃子、鎌、ヤリカンナ状のものがあり、腐蝕しており、従来の形状を呈していると思われるものは１号住居址の刃子だけであり、刃子は１号住居址埋土、17号住居址埋土、33号住居址埋土からの出土で１号住居址出土のものは、全長23.5㎝で鋒から茎先まで残り、刃身部で12.9㎝である。棟部は水平で幅は 0.4㎝である。茎部の長さは 9.5㎝、幅 0.4㎝であり、茎部には 1.1㎝幅で縁がまわっている。他の刃子は銹化が進んでおり、形状等については不明である。鎌は25号住居址からの出土であり、鎌の一部と思われる。ヤリカンナ状のものは２号住居址埋土中からの出土であり、一端が尖り、他の一端は先端部に向ってしだいに薄くなり、楔状を呈している。また器種は定かでないためヤリガンナ状としたが、ノミとしてみることもできるものである。

砥石（図版61－６）

砥石は９号住居址の床面より１点出土している。３方を欠損しているものが欠損していない面には研磨痕がみられるが光沢がいくらかある。石質は泥岩系のものであろう。

石器（図版62～64、写真図版27）。

本遺跡から出土した石器には、石鏃、石ヒ、石ベラ、スクレーパー、石斧等の器種のものが出土している。これらの石器は、奈良、平安時代の竪穴の埋土中などよりの出土のものが多いが、縄文時代の竪穴住居址、ピットなどが存在することより、縄文時代の遺物であろう。なお縄文時代の竪穴から出土した石器は、石ヒが３点ある（図版27）

以下形態別に記述する。

石鏃

石鏃は５点出土し形態としては小形三角形のもので、基部に扶り込みのあるもの（図版62－１、２、）三角形のもの（図版62－３、４、）柳葉形に近い形態のもの、基部近くの側縁がくびれているもの（５）であり、これらはいずれも細部加工が両面に入念に行なわれているものである。

石ヒ

石ヒは13号住居址の出土で床面上に検出されたもの３点と図版62－１、２、３のもの計５点が出土し、大形のものと小形のものがある。いずれもつまみを有するものでつまみ部分は明確な扶り込みによってわかる。細部加工は大形のもの１点は、正面に細い加工を残しているが、他は小形のもの１点（８）を除き縁辺部分に加工痕を加えた程度のものである。

スクレーパー

スクレーパーとしたものは不定形剥片の一部に加工を加えているものであり、一縁辺の刃部と思われるものに細部加工が施されているものである。

15は、縦長剥片の末端に細部加工を施しているもので、エンドスクレーパー様である。
他の剥片は、剥片の縁辺に細い細部加工を施しているものであり、サイドスクレーパー様である。

石ベラ

石ベラとして明確に形態、機能等のはっきりした形で分類しうる石器は９、12の２点のみである。この頃では石ベラ及びこれに類似する石器として一括して表わした。９、12は横断面形が三角形状を呈し、継断面形は台形状のもので刃部と目される部分は急角度で剥離加工が加えられているもので正面は全面にわたって加工が施され、裏面は等１次剥離面の部分を残すものである。13、14は刃部側が欠損しているものであるが、形態より石ベラの類に入れたが11は残された先端部分の加工の状況より石槍となる可能性もある。また10、11は完全な両面加工であり、11は欠損品のために形態は不明であるが、10は石槍もしくは打製石斧と考えられるものである。

石斧

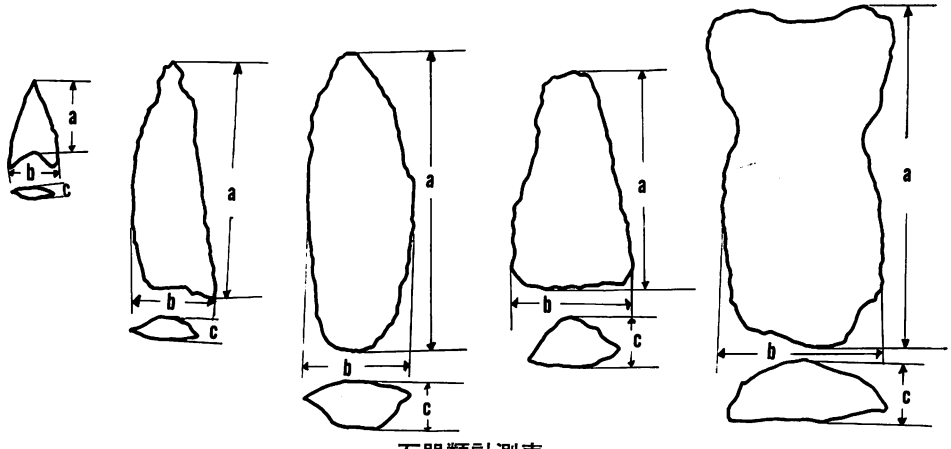
石斧は２点出土している。21は粘板岩系の石の表面と荒く加工したものであり、刃部側はいくらか欠損しているようである。技を装着する部分とみられる所には、両側がくびれており、いくらか加工が加えられている。横断面形はカマボコ型を呈している。22は磨石石斧で頭部を欠損しているものである。表面は研磨されており、両側縁は僅かに研磨されているだけであり面取りらしき、研磨痕が認められず、稜が丸みをもつものであり、横断面形は楕円形を呈している。刃部は刃状である。

有孔石

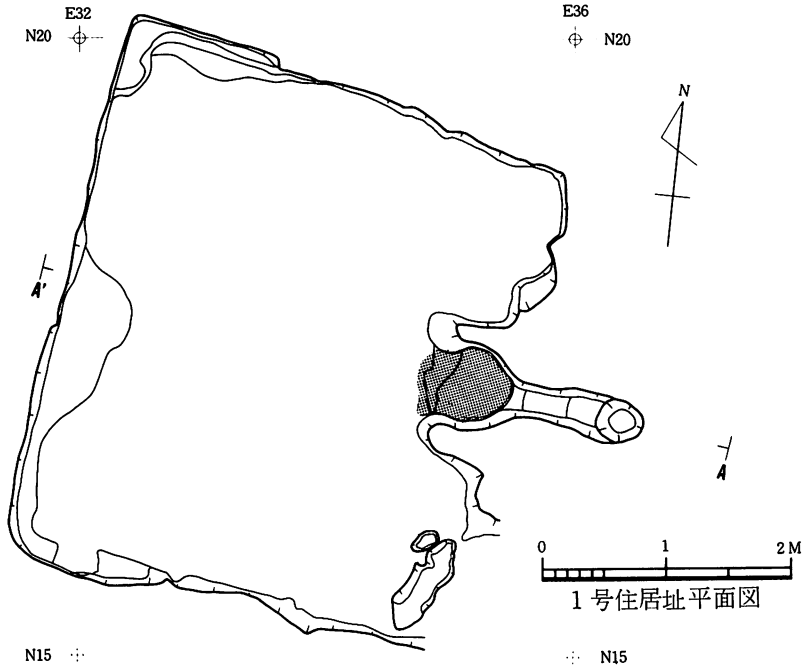
自然石の一部に穴ののうがたれた石で自然の状態で混入物が脱落したものである。時期、用途とも不明である。

（中川重紀）

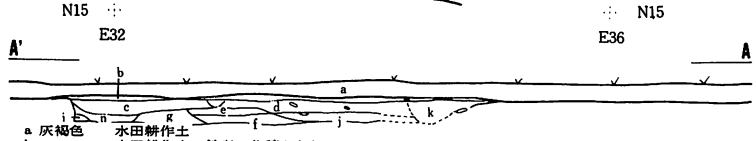
遺構名	図版番号	写真番号	計測値				器種	その他
			a	b	c	d		
1号住居址	62－1	173	16	11	1.5	0.35	石鏃	黒曜石
6号住居址	62－2	174	18	13	3.5	0.56	〃	埋土
6号住居址	62－4	175	25	11	2.5	0.85	〃	埋土
14号住居址	62－3	176	26	13	2	0.95	〃	埋土
表採	62－5	177	35	12	3	1.65	〃	
13号住居址	28－1	178	74	20	3.5	7.6	石ヒ	埋土
13号住居址	28－2	179	45.5	19	6	6	〃	
13号住居址	28－3	180	56	20	3.5	5.3	〃	埋土
6号住居址	62－6	181	84	25	6	16.4	〃	
表採	62－7	182	63	33	4	11.15	〃	
表採	62－8	183	35	21	4	4.4	〃	
25号住居址	63－9	185	76	41	18	50	石ベラ	埋土
26号住居址	63－12	184	56	40	15	37.65	〃	埋土
16号居址	63－10	186	105	38	17	70	〃（ポイント）	
3号住居址	63－14	187	83	30	9	23	〃	
2号住居址	63－13	188	60	33	11	22.3	〃	埋土
26号住居址	63－11	189	74	42	22	70	打製石斧or石ソウ	埋土
19号住居址	63－15	190	52	36	15	28.4	エンドスクレーパー	
14号住居址	64－17	191	66	42	9.5	36.8	スクレーパー	埋土
25号住居址	63－16	192	68	25	9	23.1	〃	埋土
25号住居址	64－18	193	48	36	6	18.7	〃	埋土
表採	64－20	195	50	41	12	24.3	〃	埋土
6号住居址	64－19	194	32	44	15	24.6	〃	埋土
25号住居址	64－21	197	114	56	22	25	打製石斧or石グワ	埋土
表採	64－22	196	121	56	35	410	磨製石斧	
37号住居址	64－23	198	73	60	2.7	90	有孔石	



石器類計測表



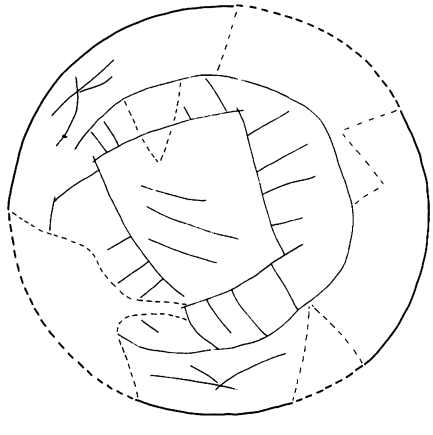
1号住居址平面図

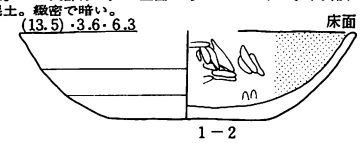


1号住居址 注記

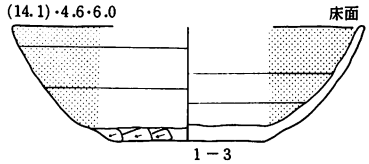
a	灰褐色	水田耕作土
b	〃	水田耕作土、鉄斑の集積みられる。
c	黒褐色	植土はシルト質（微細5mm土粉径）が多量に混入、カーボン、焼土微量、緻密で非常に硬い。
d	黒褐色	胎土はc と同じシルト質土。細粒霜降状に見られるが顕著ではない。カーボン、焼土粒少量、緻密で非常に硬い。
e	黒褐色	土胎はほぼc.d.と似るがシルト質土の粒径が大きくなる。（5mm～1cm土）色調はやや暗い。
f	黒褐色	土性はほぼc.d.と似るがシルト質土は大ブロック状混土（1cm土～5cm土）で顕著に見られる。
g	黒褐色	無理に細分化されるものではない。胎土はc ～f と同様シルト質土の粒径（細～2cm土）やや顕著。
h	〃	
i	黄褐色	粘土質、シルト。
j	黒褐色土	上層d とほぼ同カーボン粒、焼土粒やや多く混入。
k	黒褐色土	カーボン粒、焼土粒、シルト質、粘土粒著しく混土。緻密で暗い。

このレベルで土器片多数出土
大部分がj の上面からi にかけての水平質積

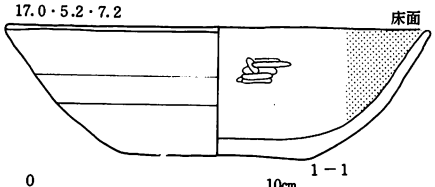




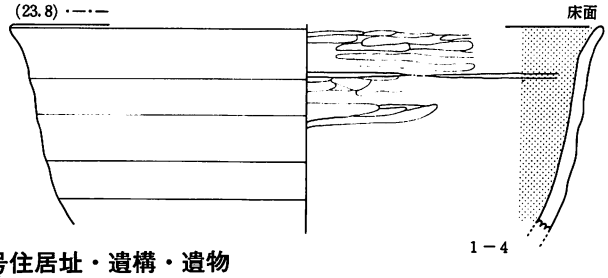
1－2



1－3



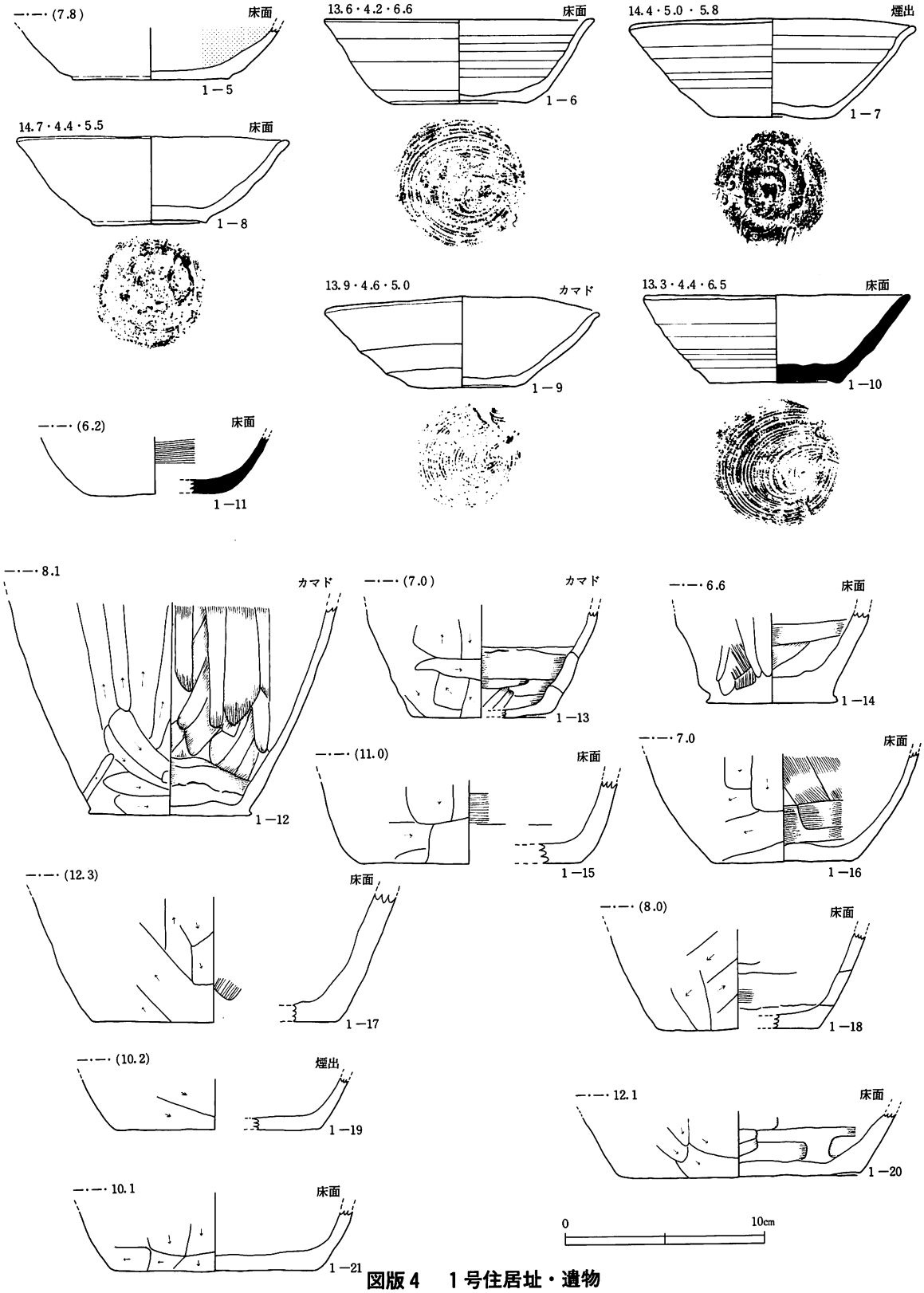
1－1



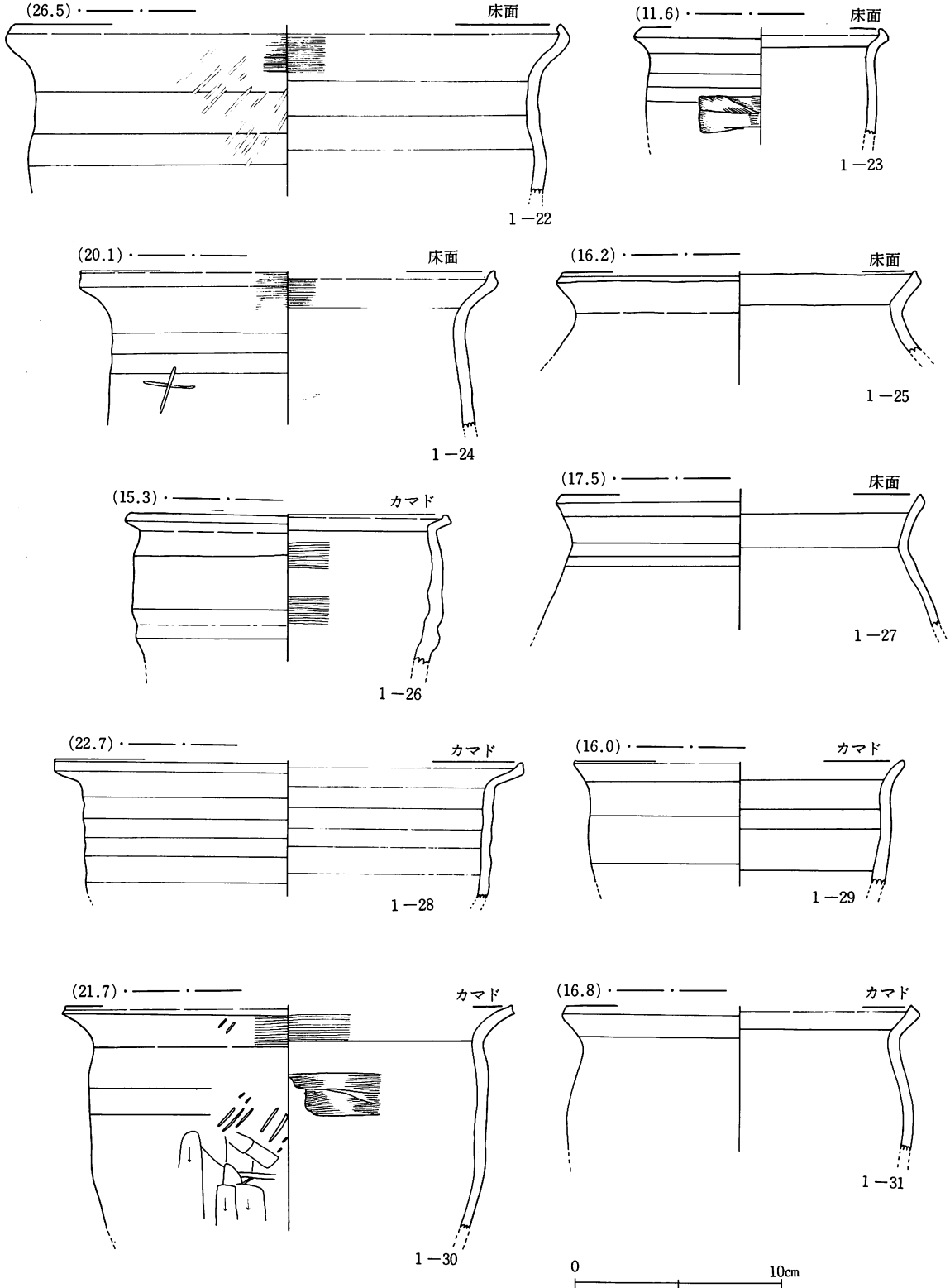
1－4

0　10cm

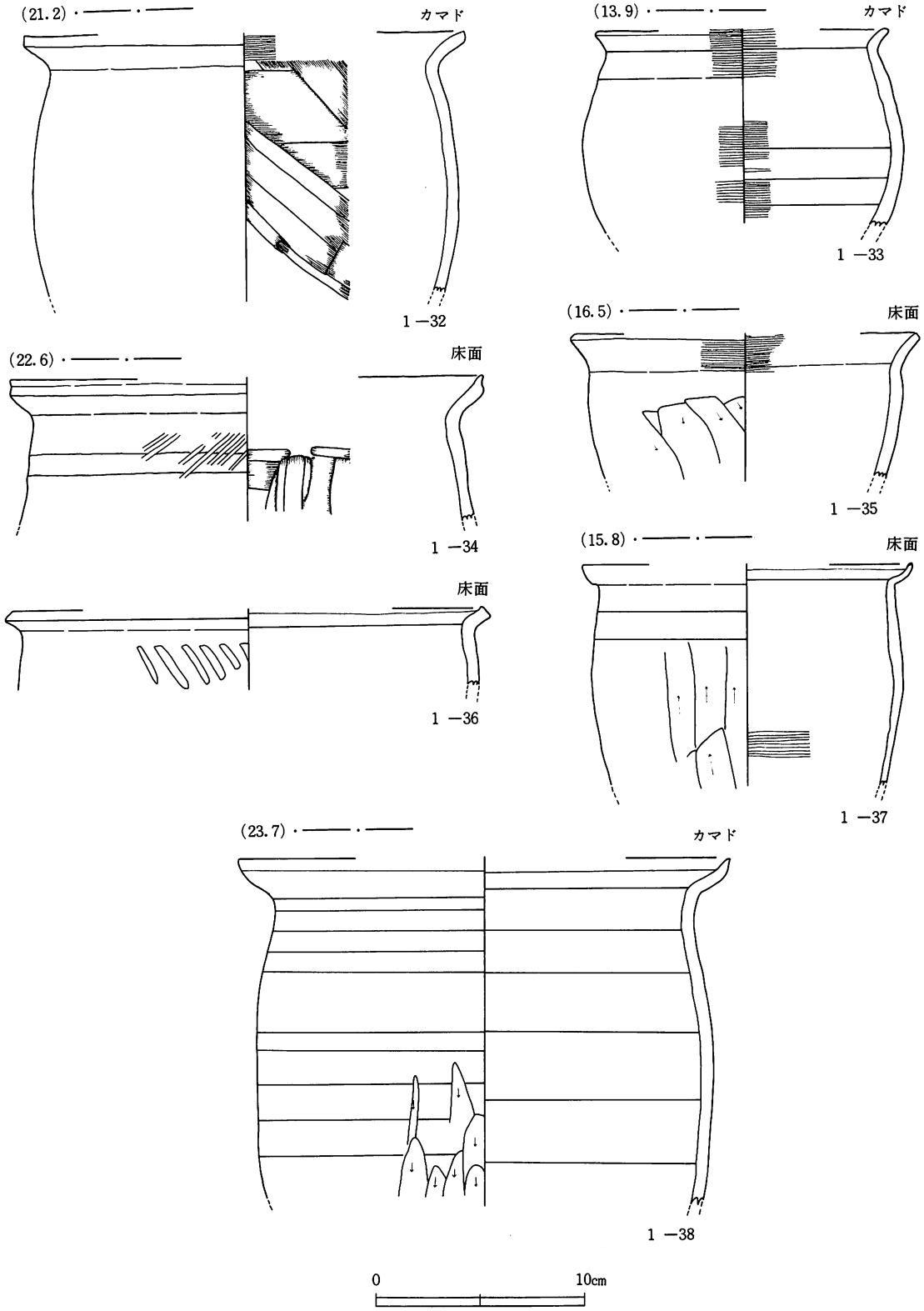
図版3　1号住居址・遺構・遺物


—・—・(7.8)
床面
1－5
13.6・4.2・6.6
床面
1－6
14.4・5.0・5.8
煙出
1－7
14.7・4.4・5.5
床面
1－8
13.9・4.6・5.0
カマド
1－9
13.3・4.4・6.5
床面
1－10
—・—・(6.2)
床面
1－11
—・—・8.1
カマド
1－12
—・—・(7.0)
カマド
1－13
—・—・6.6
床面
1－14
—・—・(11.0)
床面
1－15
—・—・7.0
床面
1－16
—・—・(12.3)
床面
1－17
—・—・(8.0)
床面
1－18
—・—・(10.2)
煙出
1－19
—・—・12.1
床面
1－20
—・—・10.1
床面
1－21
0
10cm

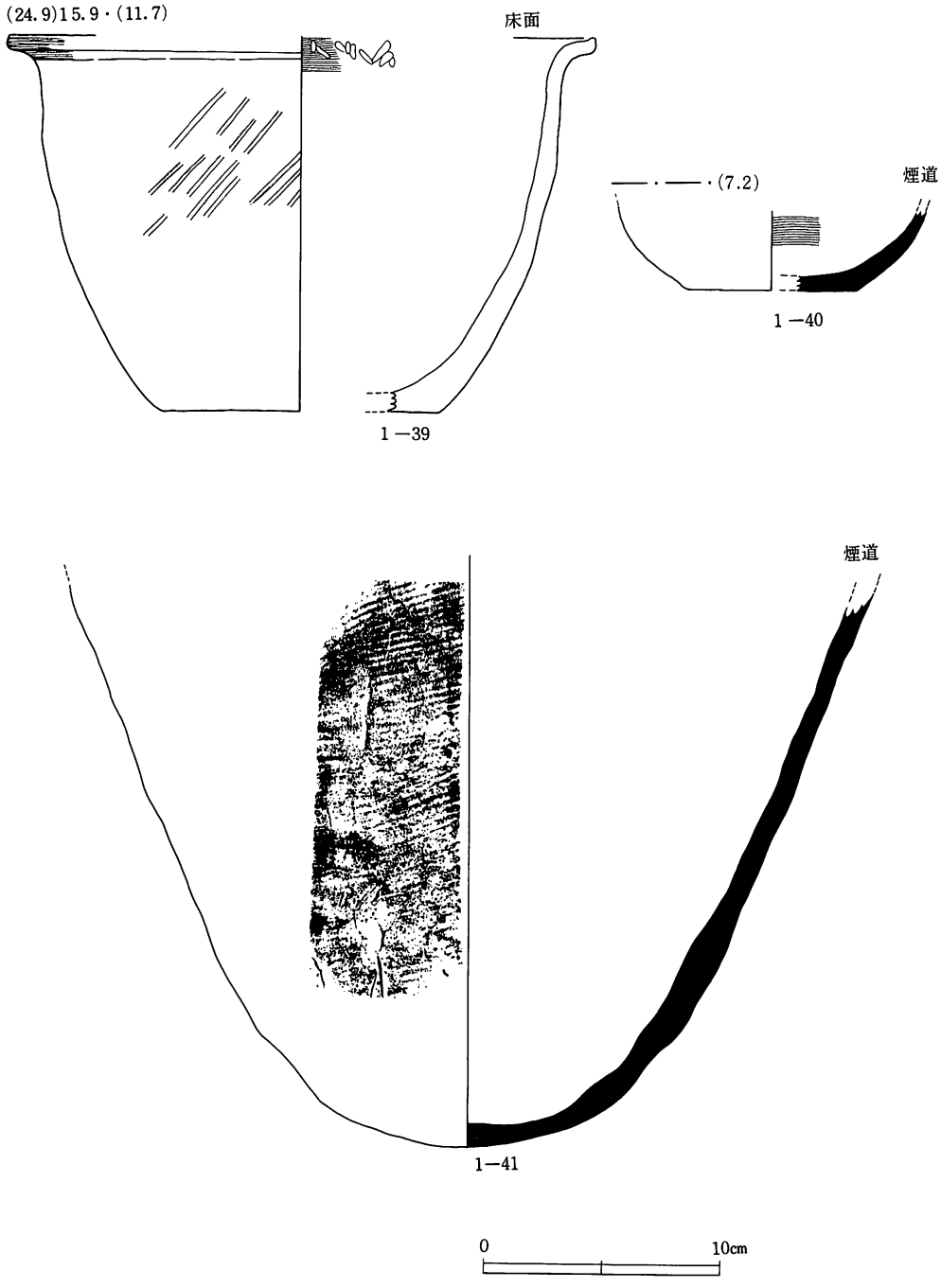
図版4　1号住居址・遺物


(26.5)
床面
1－22
(11.6)
床面
1－23
(20.1)
床面
1－24
(16.2)
床面
1－25
(15.3)
カマド
1－26
(17.5)
床面
1－27
(22.7)
カマド
1－28
(16.0)
カマド
1－29
(21.7)
カマド
1－30
(16.8)
カマド
1－31
0
10cm

図版5　1号住居址・遺物


(21.2)
カマド
1 —32
(13.9)
カマド
1 —33
(22.6)
床面
1 —34
(16.5)
床面
1 —35
床面
1 —36
(15.8)
床面
1 —37
(23.7)
カマド
1 —38
0
10cm

図版 6　1 号住居址・遺物



図版７　１号住居址・遺物

2号カマド 注記

a 灰褐色　植生によるもの、軽いグライ化層。

b にぶい黄橙～明黄褐色　非常に硬い。焼土粒、シルトの固まり（細粒1cm土大）大量混入、暗く緻密で良好。

c 黒褐色　非常に硬い。熟土粒、シルト固まり（細粒～5mm土）混入するが、それほど著しいものではない。緻密でしまり好。

2号住居址 注記

a 灰褐色　弱いグライ化土層。

b 灰褐色　非常に硬い。マンガン斑少量、小斑状にみられる。a よりは暗い。

c 黒褐色　非常に硬い。マンガン斑及びシルト塊入る。

d 黒褐色　非常に硬い。シルト塊の粒径5mm土大の混入、マンガン斑も著しい。

e 黒褐色　非常に硬い。マンガン、鉄の集積が著しい。シルト塊、土大霜降状混入、非常に硬い。

f 灰褐色～暗褐色　シルトの固まり2～3mm～5mm土大霜降状混入顕著。カーボン粒、焼土粒微量。全体に散見されるマンガン斑（細かい）著しい。非常に硬い。

g 黒褐色　非常に硬い。上層に比べシルト塊混入全く少なく、細粒5mm土全体に散る。焼土細粒、微量散見される。マンガン斑、鉄斑の集積著しい。非常に硬い。

h 赤褐色　非常に硬い。g 層と焼土ブロックの混土カマドからの焼土の流れこみ床面（貼床として）。

i 黒褐色　g 層にシルト塊、5mm～1cm土大ブロック多量。そのシルト塊若干と変成受けているものもあり。

j 黒褐色　上層g と色調、土性ほぼ同じ。シルト塊混入の粒径大きく多くなる。

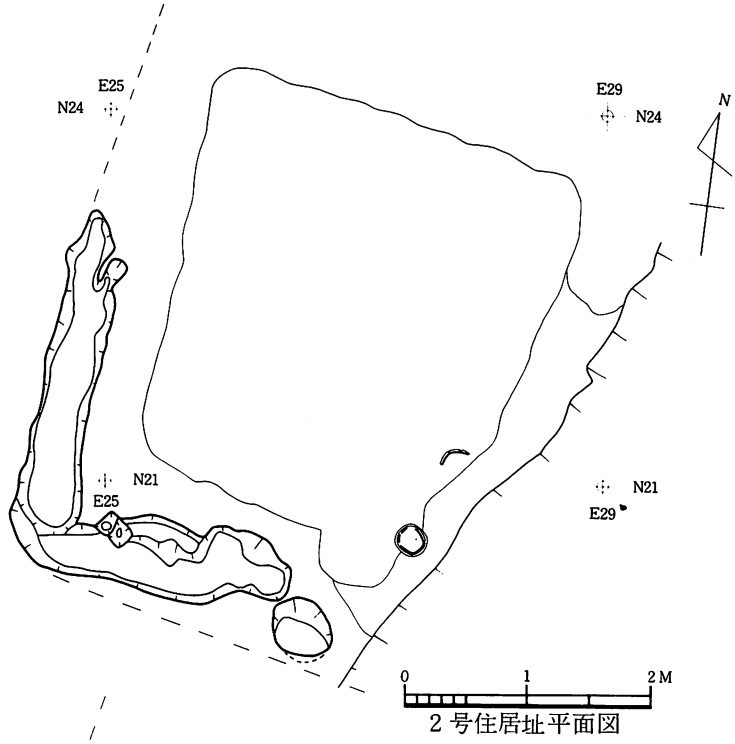
k 黒褐色　f 層に焼料粒（1～2cm土大）シルト塊が混入するが非常に硬い。

l 黒褐色　土性はg 層とほぼ同じ。シルト塊の1～3cm土大ブロック混入著しい。焼土粒1cm土微量入、非常に硬い。

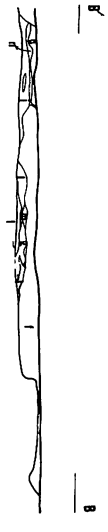
m 灰褐～黒褐色　シルト塊多量に混入している。

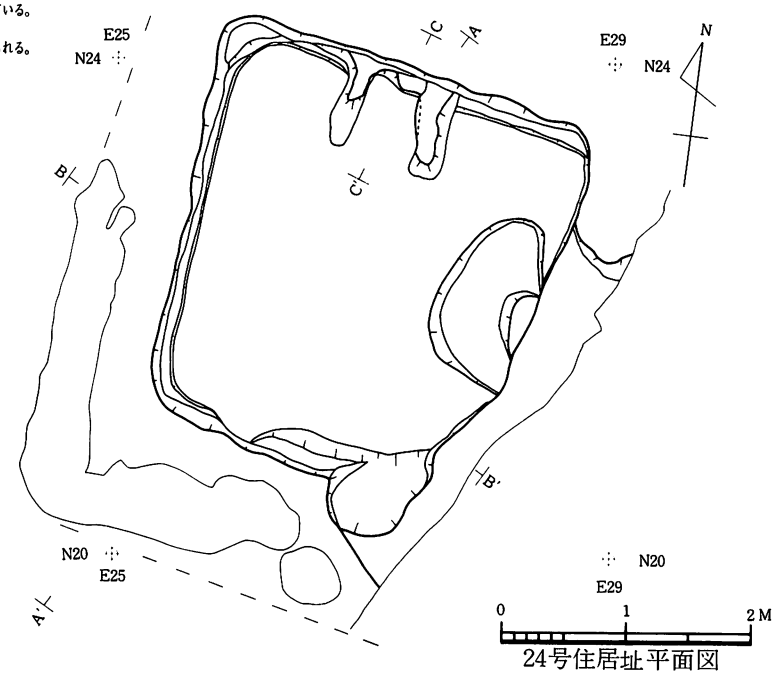
n 暗赤褐色　鉄の集積層もろい。

o 黒褐色　焼土粒の混入が比較的多く見られる。シルト塊ややもろい。



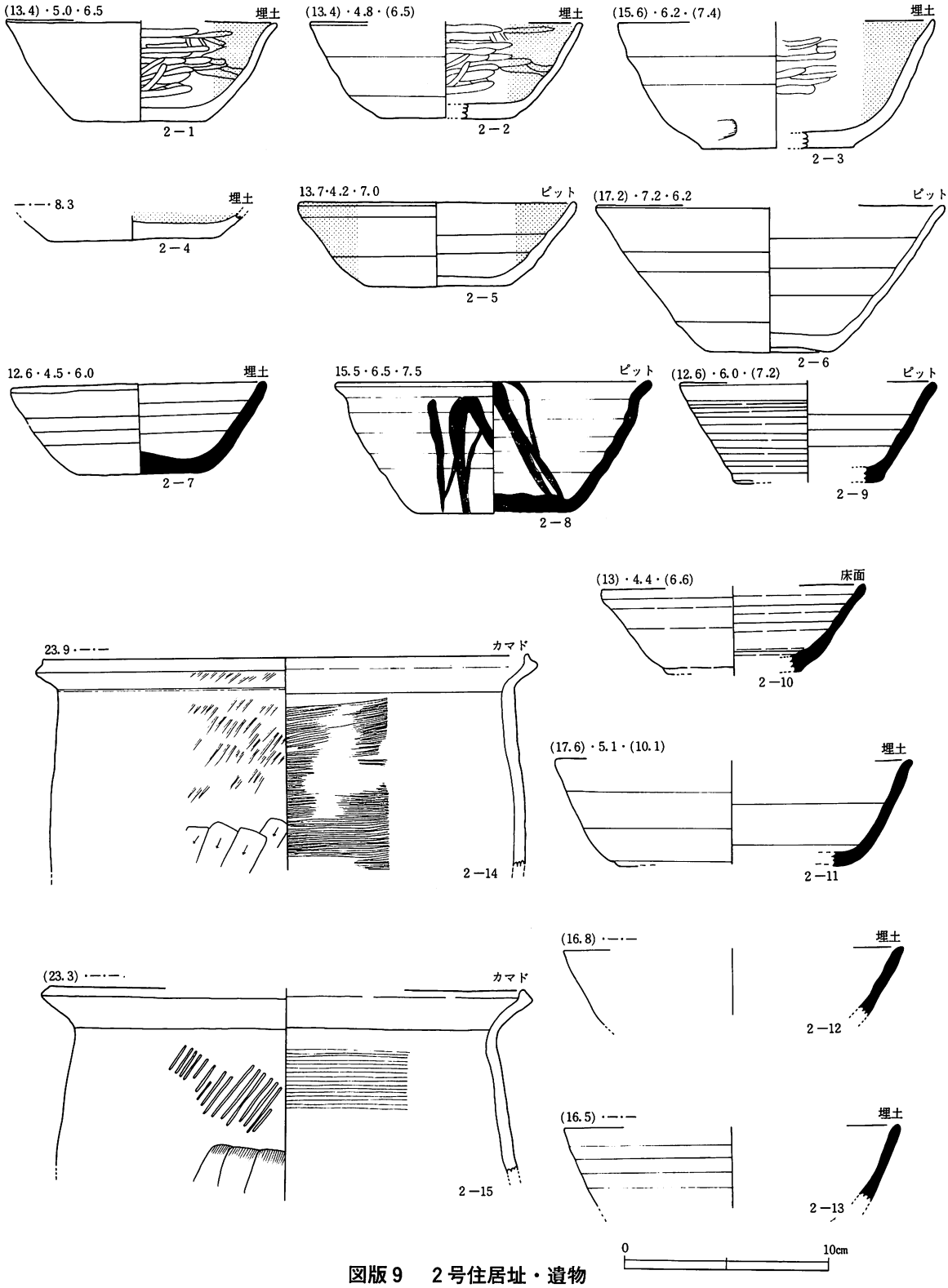
2号住居址平面図



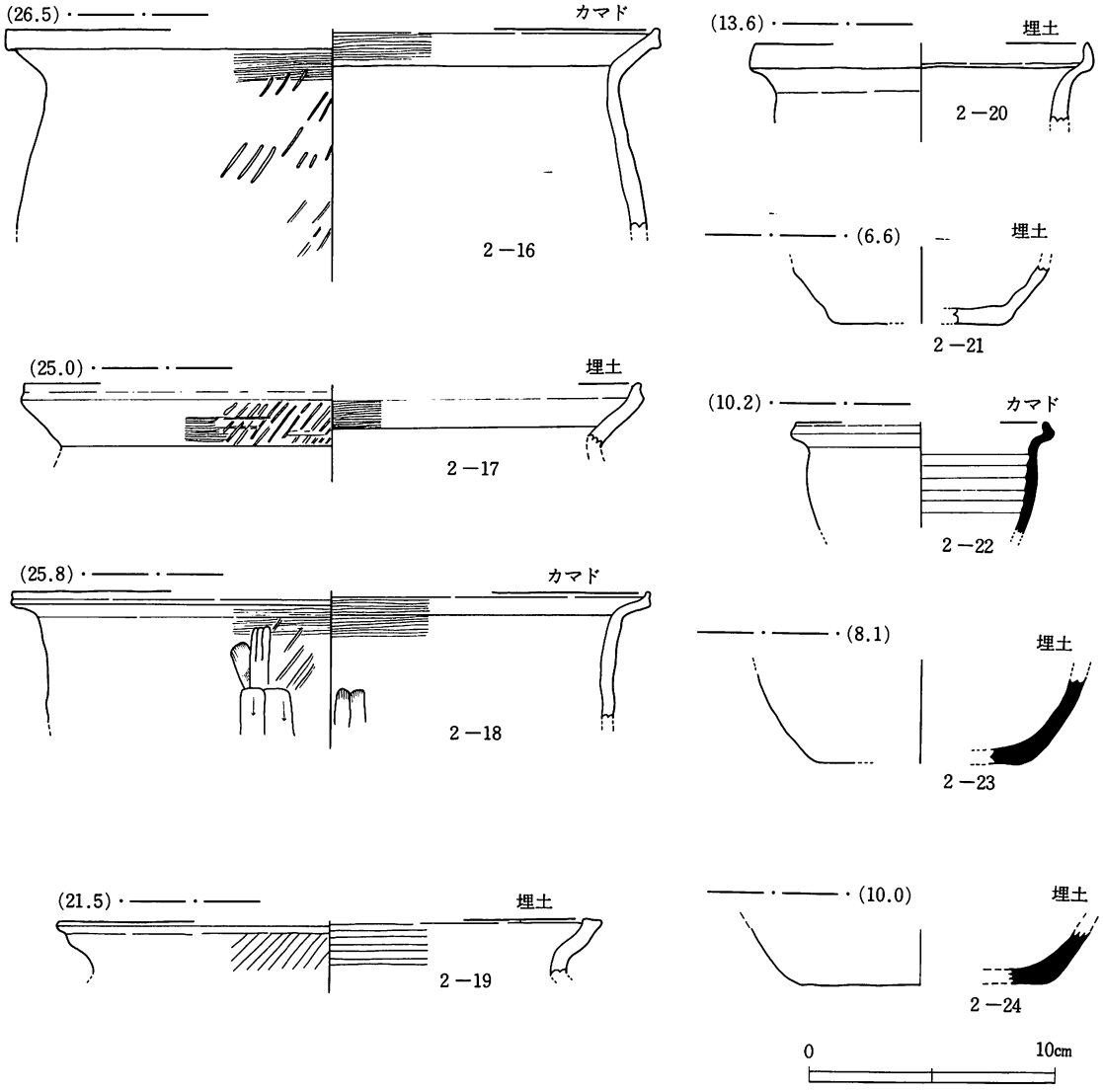


24号住居址平面図

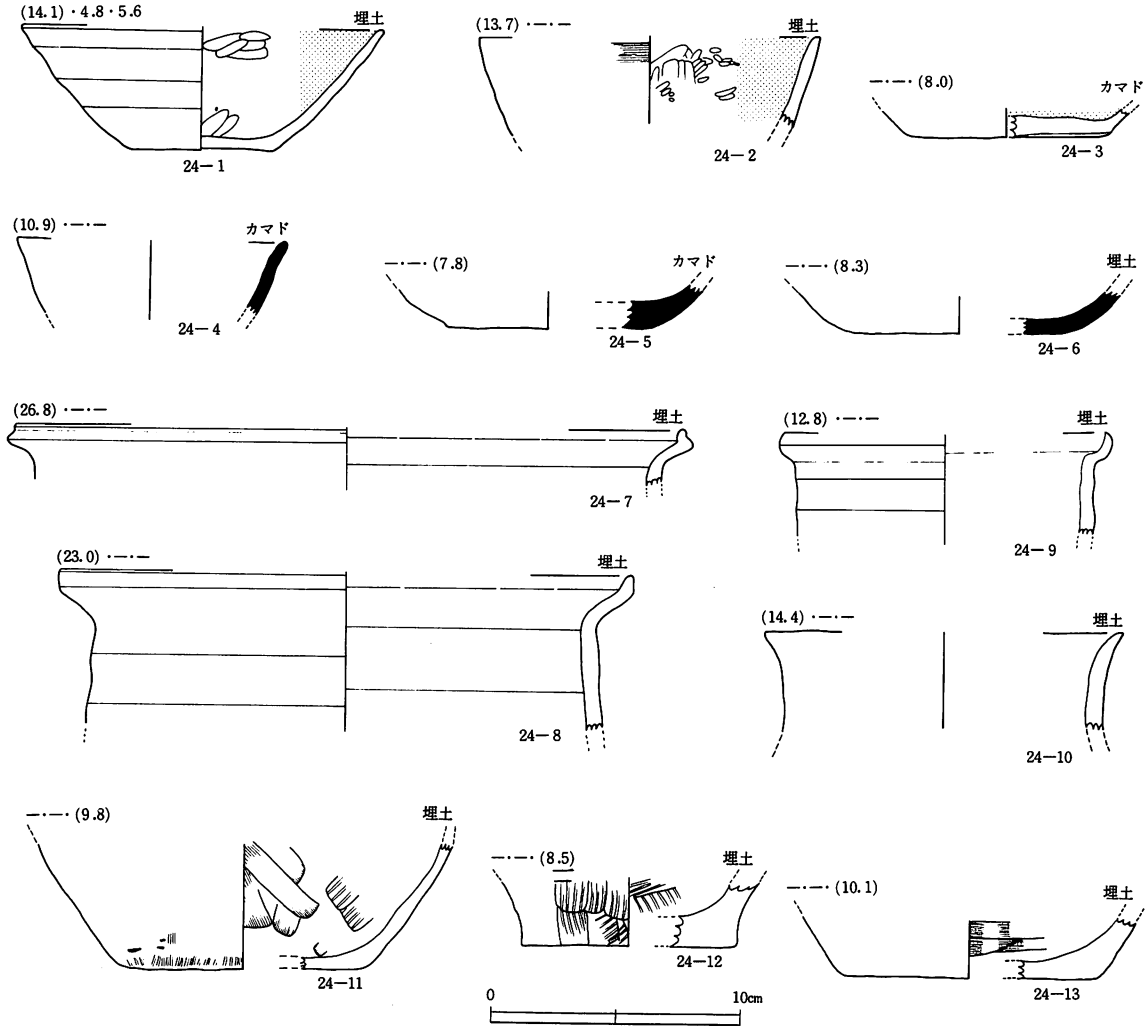
図版8　2号住居址遺構・24号住居址遺構


(13.4)・5.0・6.5
埋土
2－1
(13.4)・4.8・(6.5)
埋土
2－2
(15.6)・6.2・(7.4)
埋土
2－3
—・—・8.3
埋土
2－4
13.7・4.2・7.0
ピット
2－5
(17.2)・7.2・6.2
ピット
2－6
12.6・4.5・6.0
埋土
2－7
15.5・6.5・7.5
ピット
2－8
(12.6)・6.0・(7.2)
ピット
2－9
(13)・4.4・(6.6)
床面
2－10
23.9・—・—
カマド
2－14
(17.6)・5.1・(10.1)
埋土
2－11
(16.8)・—・—
埋土
2－12
(23.3)・—・—
カマド
2－15
(16.5)・—・—
埋土
2－13
0
10cm

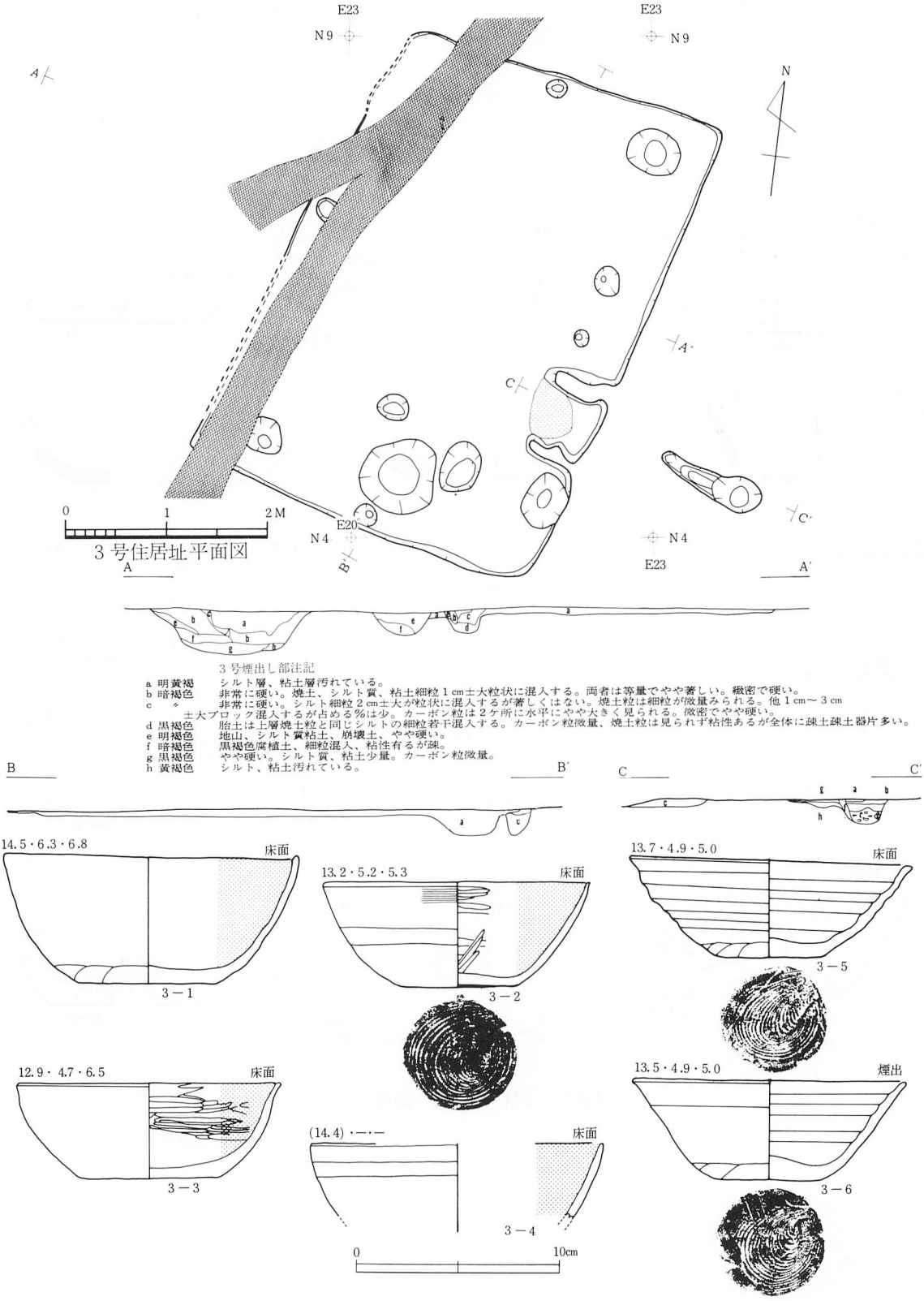
図版9　2号住居址・遺物



図版10　2号住居址・遺物



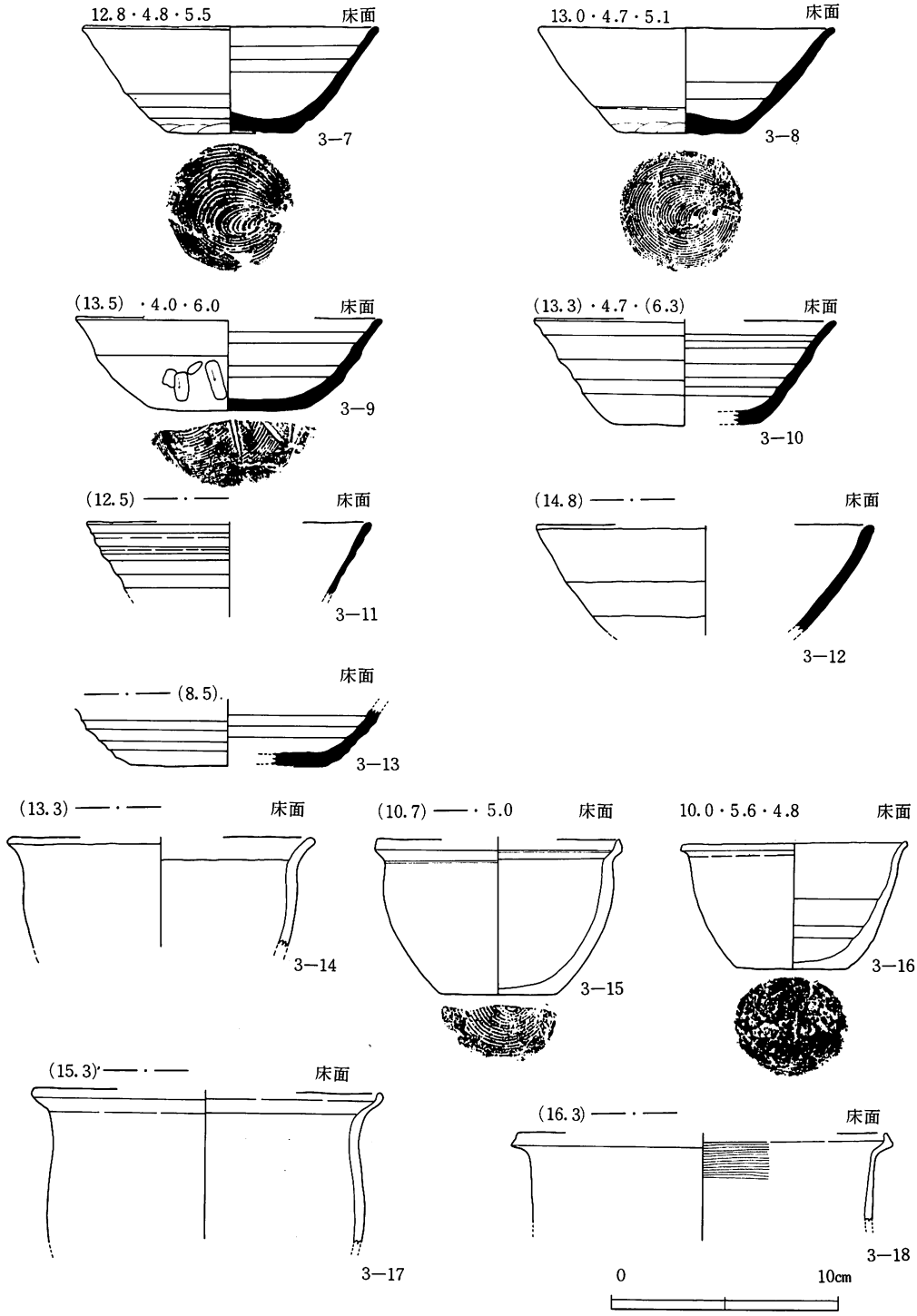
図版11　24号住居址・遺物



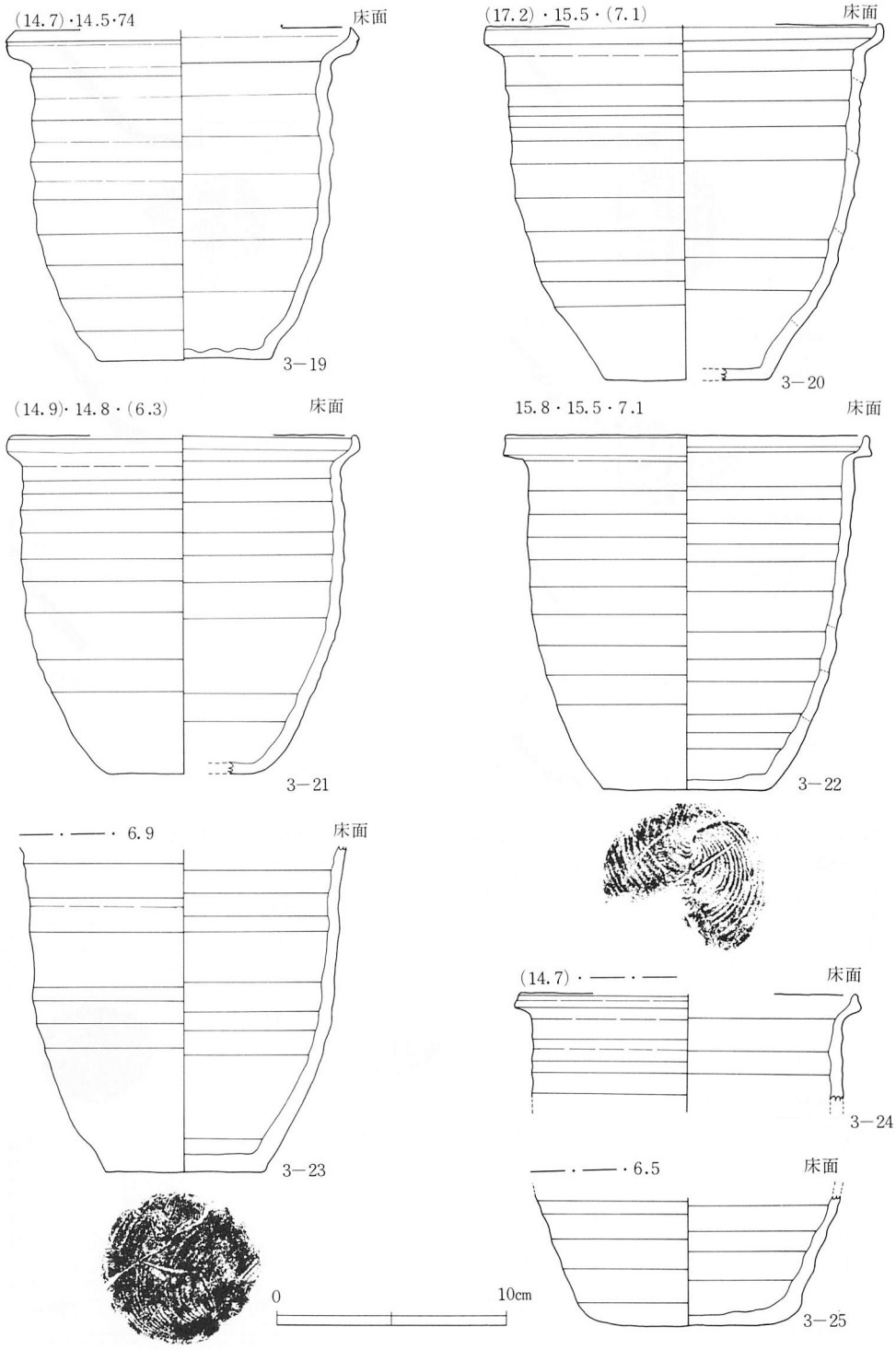
3号煙出し部注記

a 明黄褐　シルト層、粘土層汚れている。
b 暗褐色　非常に硬い。焼土、シルト質、粘土細粒1cm±大粒状に混入する。両者は等量でやや著しい。緻密で硬い。
c 〃　非常に硬い。シルト細粒2cm±大が粒状に混入するが著しくはない。焼土粒は細粒が微量みられる。他1cm～3cm±大ブロック混入するが占める%は少。カーボン粒は2ケ所に水平にやや大きく見られる。微密でやや硬い。
d 黒褐色　胎土は上層焼土粒と同じシルトの細粒若干混入する。カーボン粒微量、焼土粒は見られず粘性あるが全体に疎土疎土器片多い。
e 明褐色　地山、シルト質粘土、崩壊土、やや硬い。
f 暗褐色　黒褐色腐植土、細粒混入、粘性有るが疎。
g 黒褐色　やや硬い。シルト質、粘土少量。カーボン粒微量。
h 黄褐色　シルト、粘土汚れている。

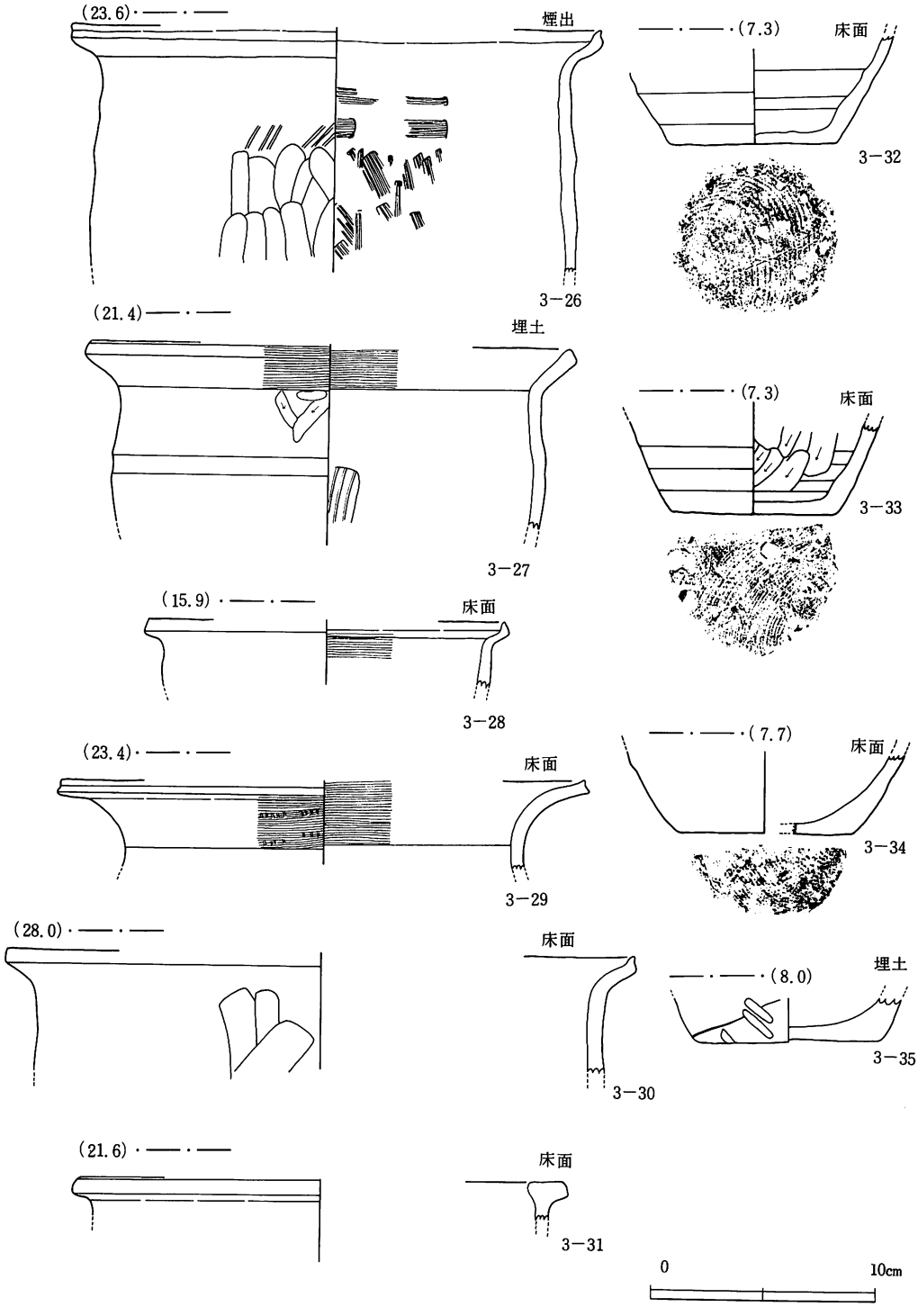
図版12　3号住居址・遺構・遺物



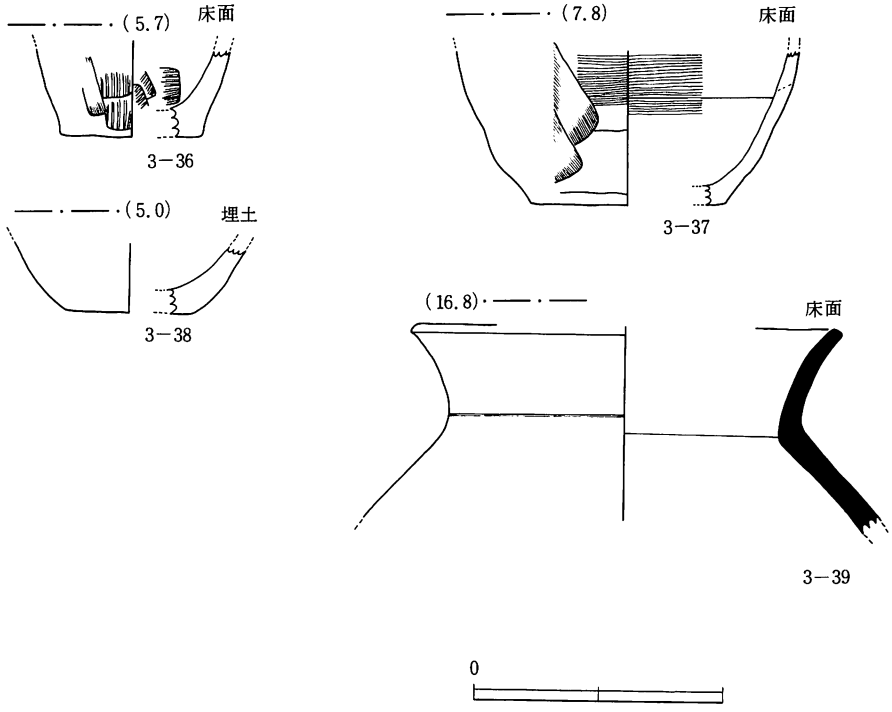
図版13　3号住居址・遺物



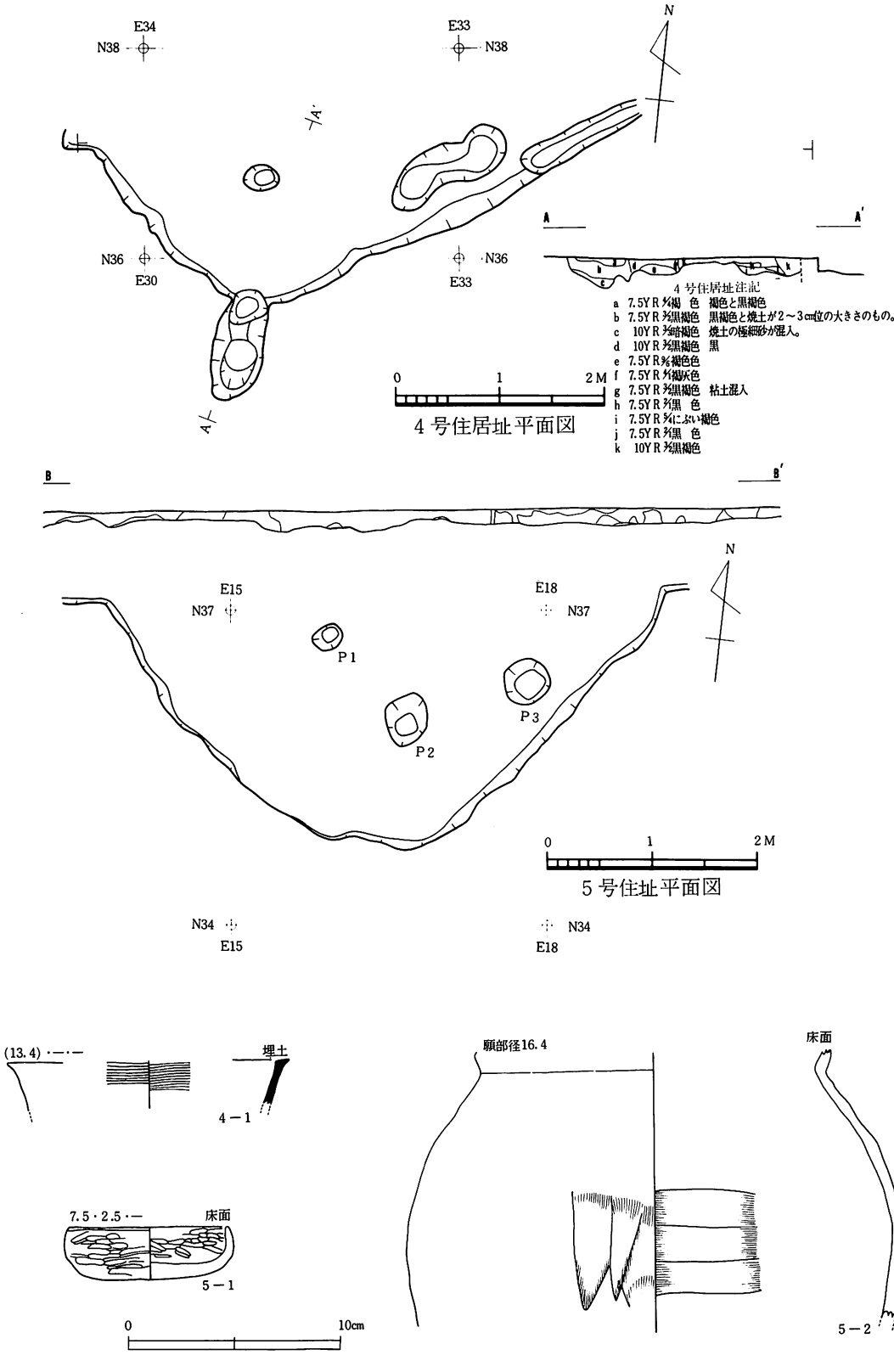
図版14　3号住居址遺物



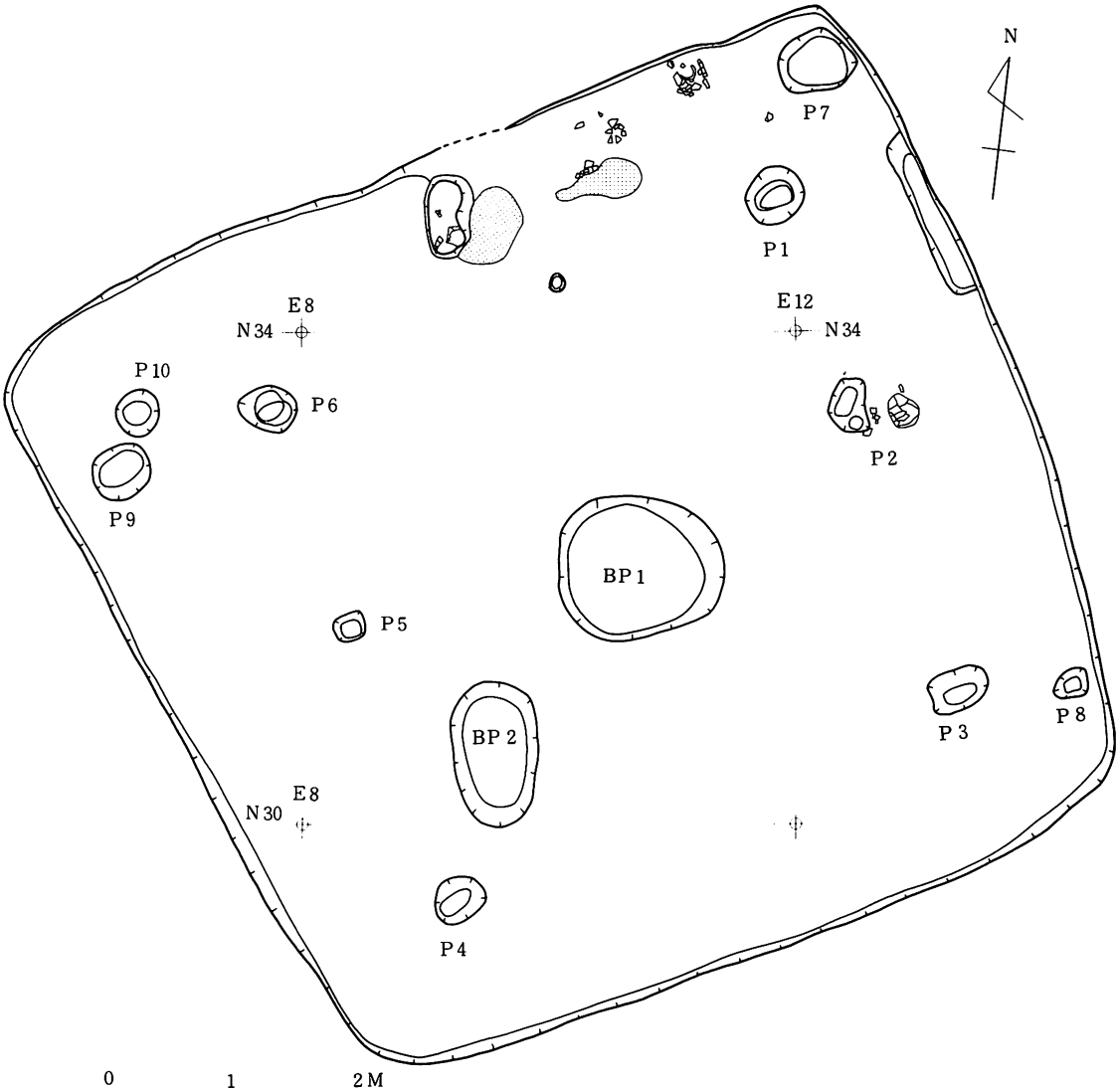
図版15　3号住居址遺物



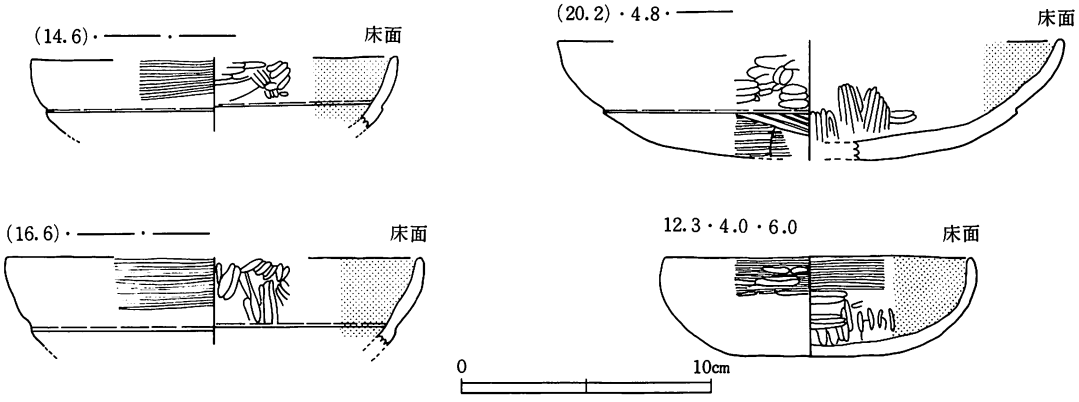
図版16　3号住居址・遺物



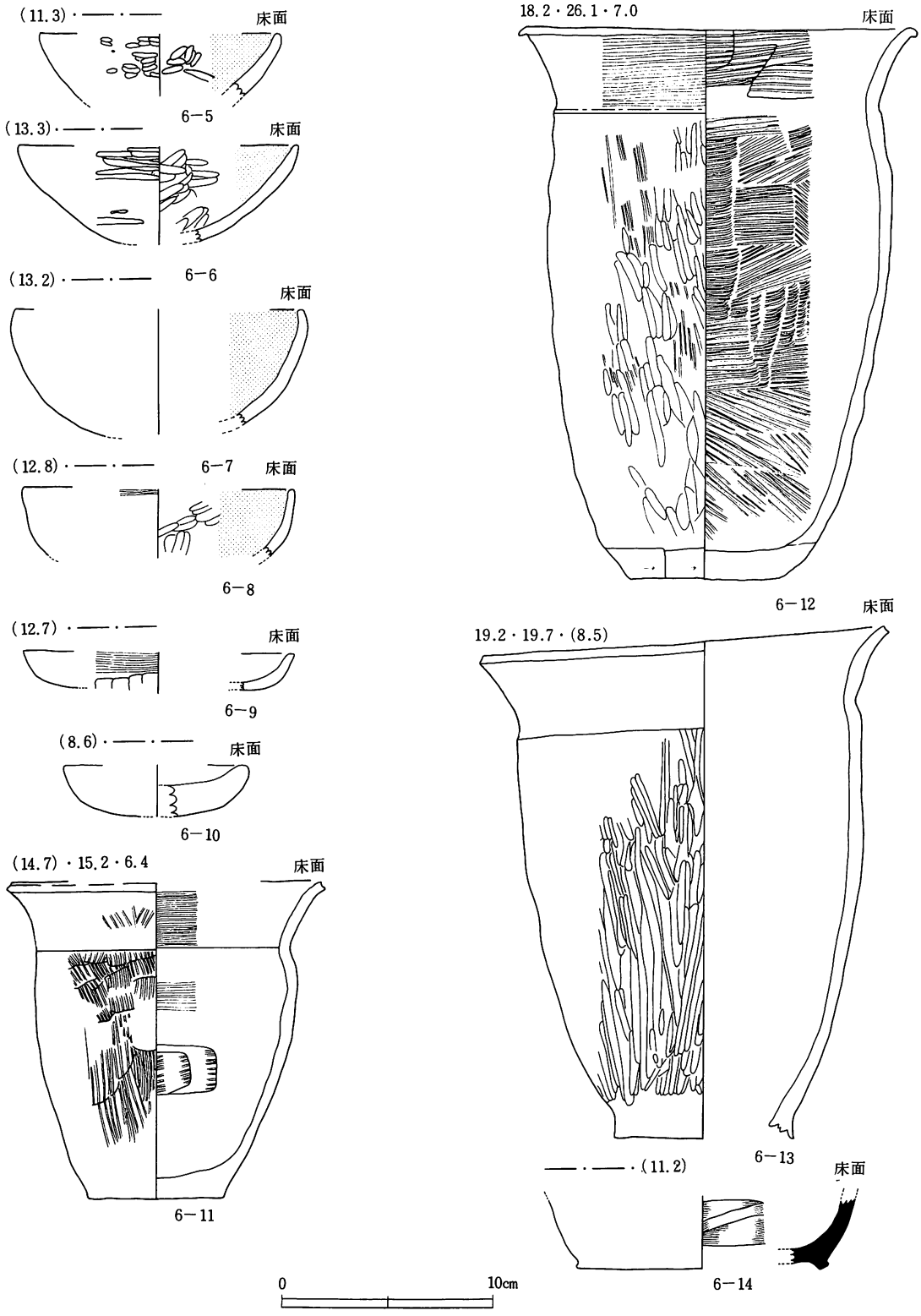
図版17　4号住居址・遺構・遺物・5号住居址・遺構・遺物



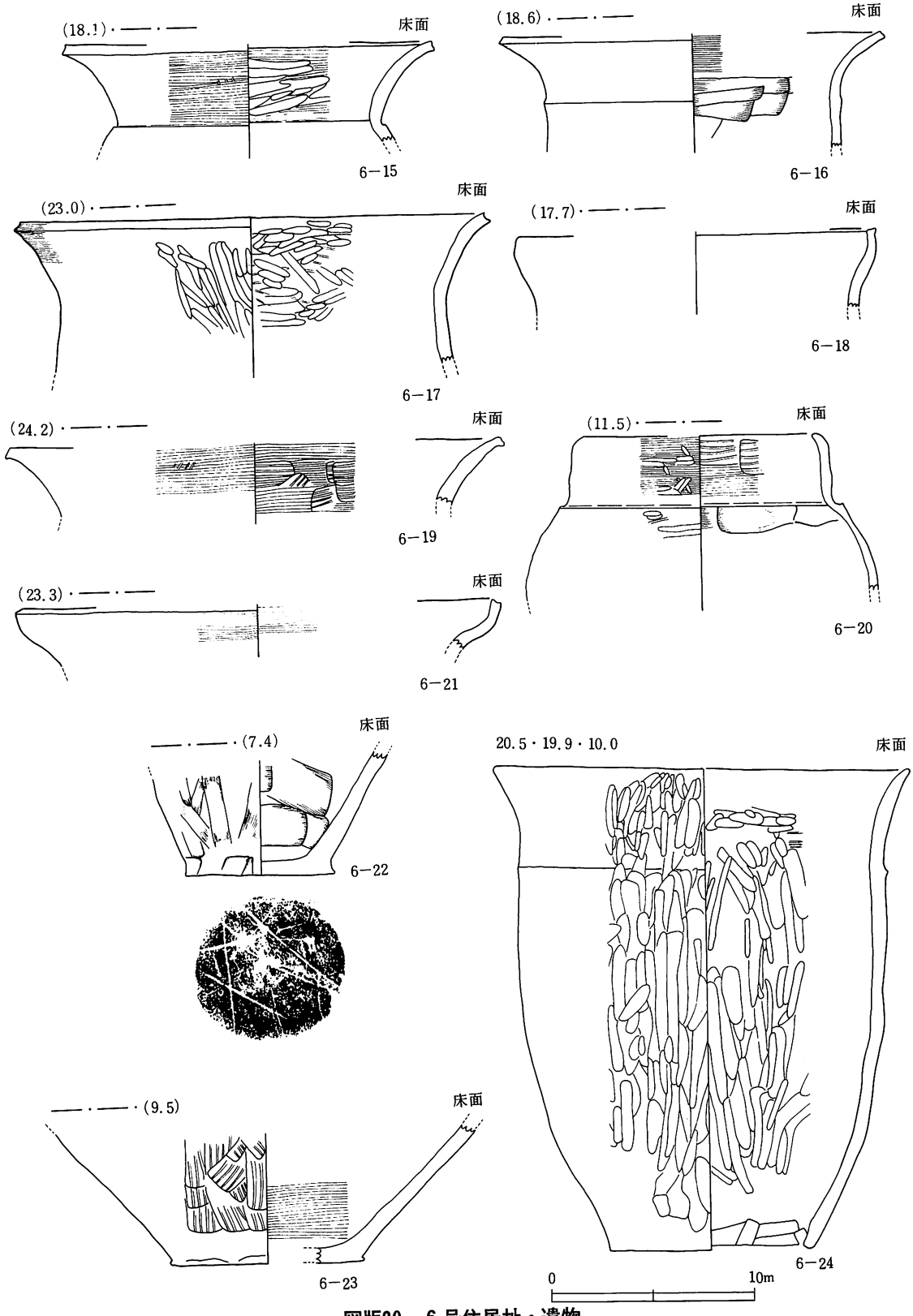
6号　住居址平面図



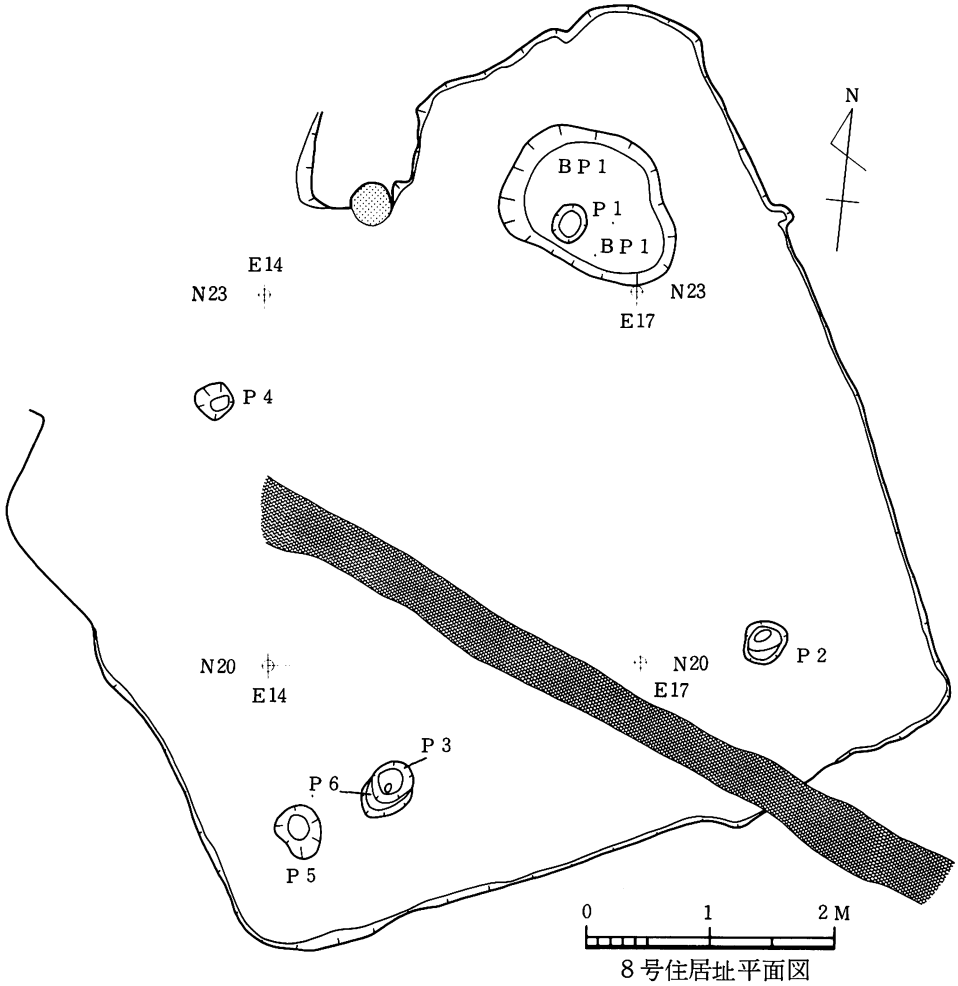
図版18　6号住居址・遺構・遺物



図版19　6号住居址・遺物

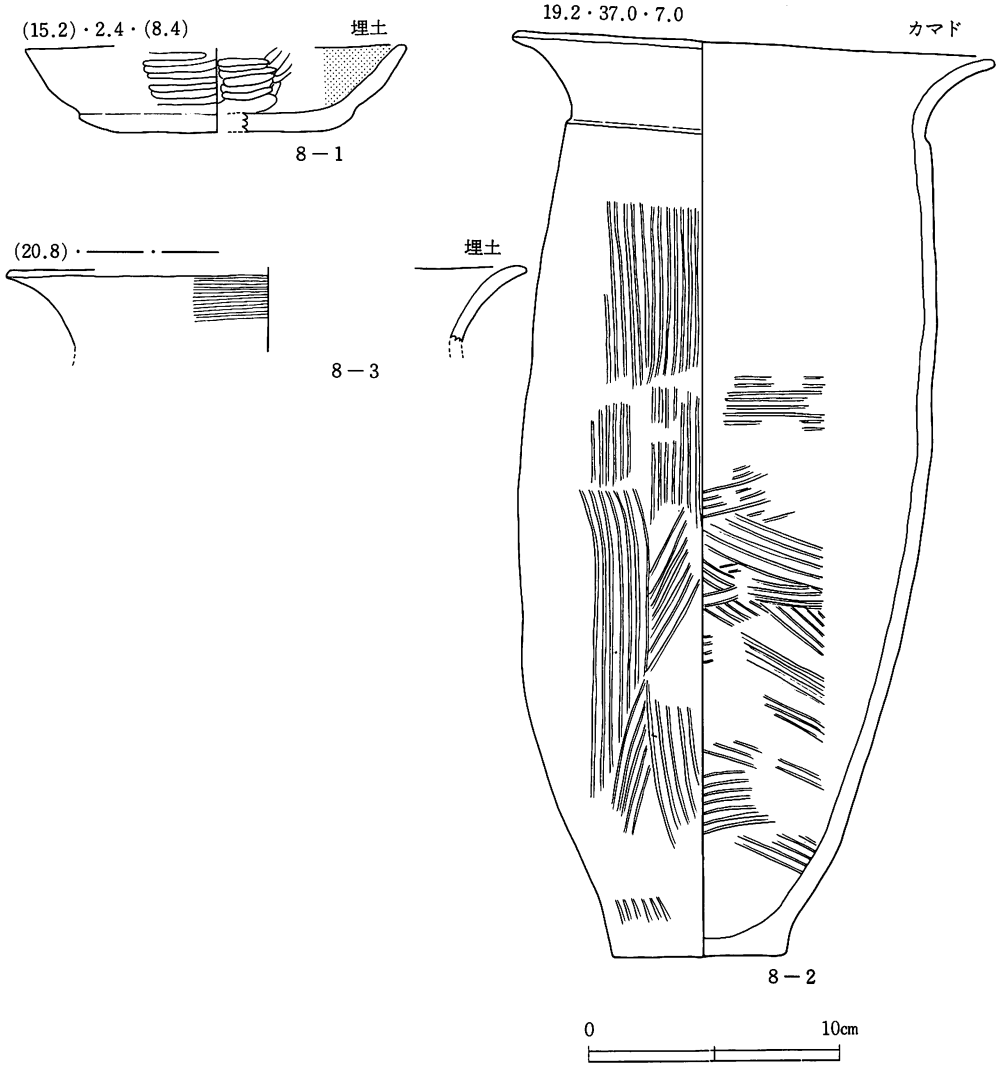


図版20　6号住居址・遺物



8号住居址平面図

図版21　8号住居址・遺構



図版22　8号住居址・遺物

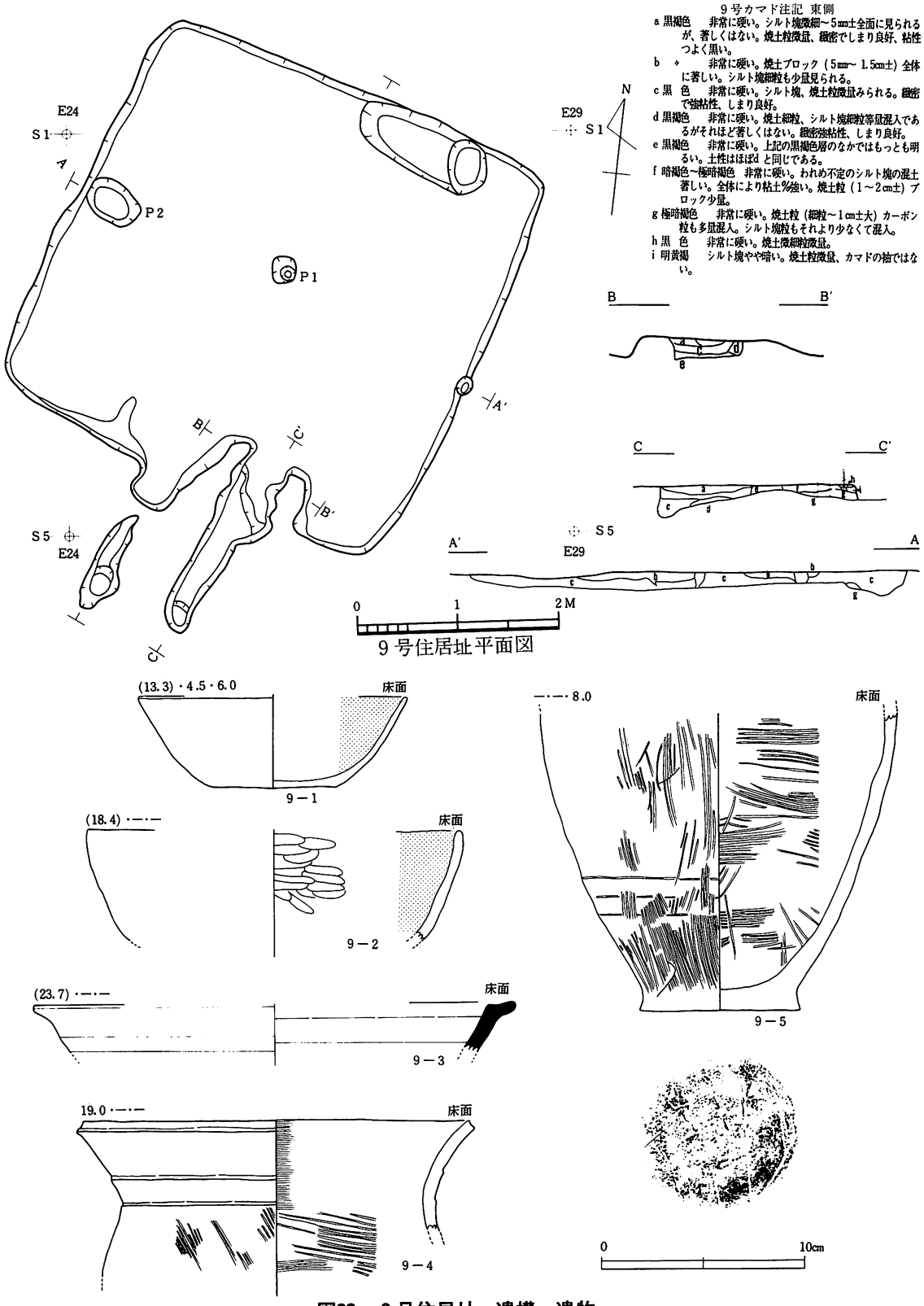
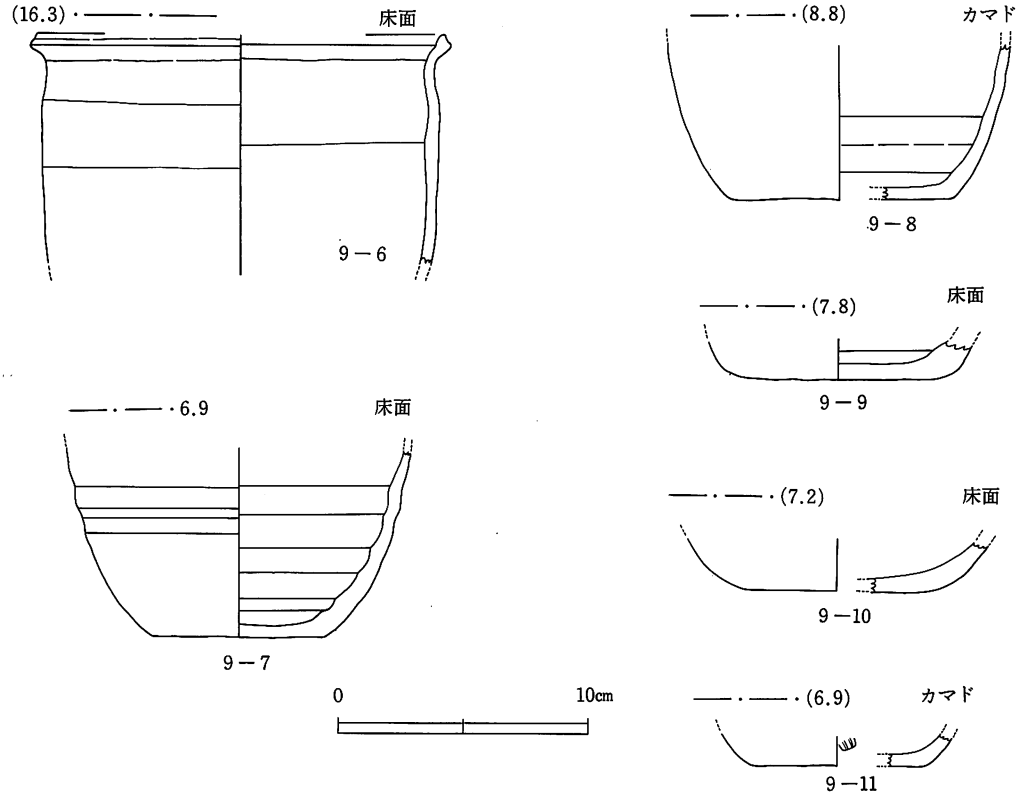


図23　9号住居址・遺構・遺物



図版24　9号住居址・遺物

10号住居址注記

a 7.5YR 2/2 黒褐色 指痕つかず。粘性若干だんごになる。細かいシルトが全面に入っている。炭少々混入。

b 7.5YR 2/2 黒褐色 指痕つかず。粘性若干だんごになる。細かいシルトが全面に入っている。耕作工（4cm）が見られる。

c 7.5YR 2/3 極暗褐色 指痕ややつく。粘性だんごになる。細かいシルトが全面に入っている。シルトブロックが2ケ所に見える。炭と焼土少々混入している。

d 7.5YR 2/2 黒褐色 指痕つく。粘性ひもになる。シルト全面に入っている（cより少ない）シルトブロック入っている。焼土少々石1個。

e 7.5YR 3/4 褐色 粘性若干だんごになる。極暗褐色が全体に見られる。

f 7.5YR 2/2 黒褐色 指痕ややつく。粘性だんごになる。シルトブロック、細かいシルト全面に見られる。

g 7.5YR 2/1 黒色 指痕ややつく。粘性だんごになる。シルトが入っている。耕作工。

h 7.5YR 3/3 暗褐色 指痕ややつく。粘性だんごになる。シルトと炭が入りまじっている。焼土1。

i 7.5YR 2/2 黒褐色 指痕ややつく。粘性だんごになる。シルトブロック2ケ所、シルトが粒状にまだらに入っている。炭がごく少量入っている。

j 7.5YR 2/2 黒褐色 指痕ややつく。粘性ややだんごになる。シルトがうすく帯状に入っている。焼土と炭が微量入る。

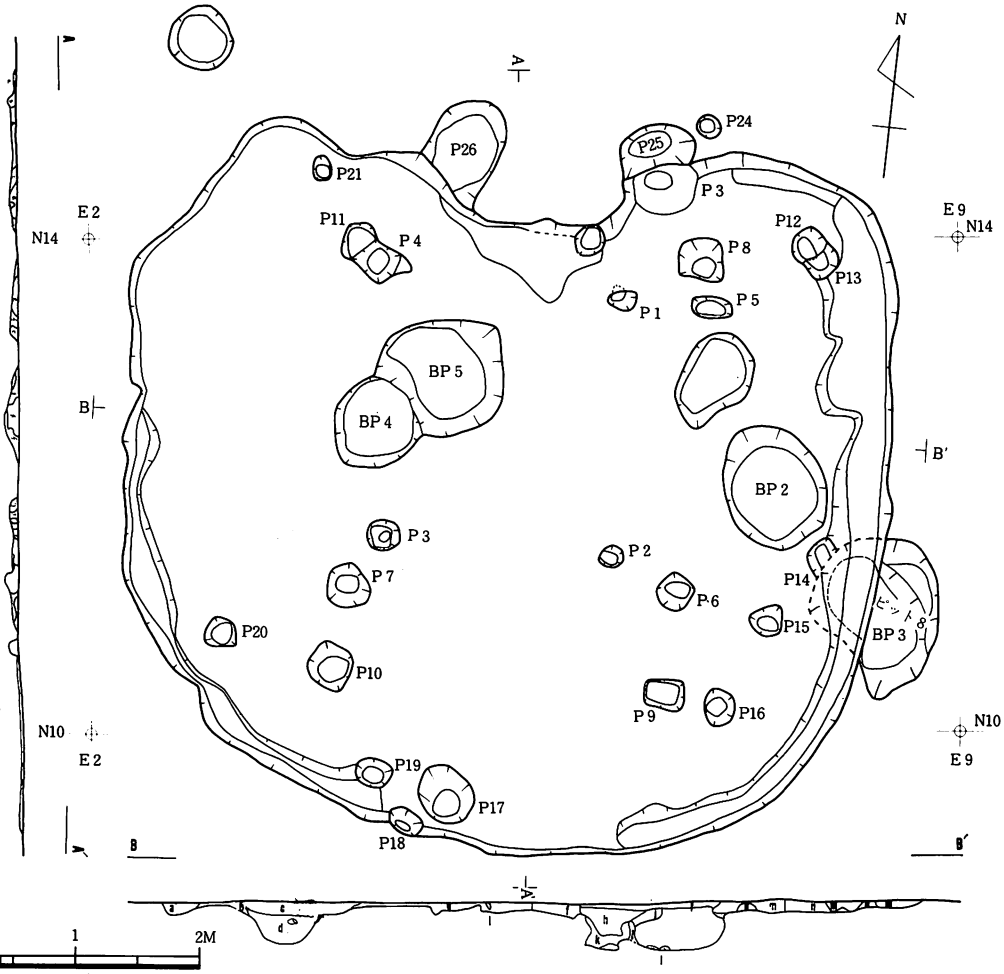
k 7.5YR 2/2 黒褐 指痕つく。粘性ややだんごになる。シルト（1cmと粒状）がまだらにまじっている。炭が微量入る。

l 7.5YR 3/6 明褐色 指痕つく。粘性だんごになる。（k）の色がいりまじっている。

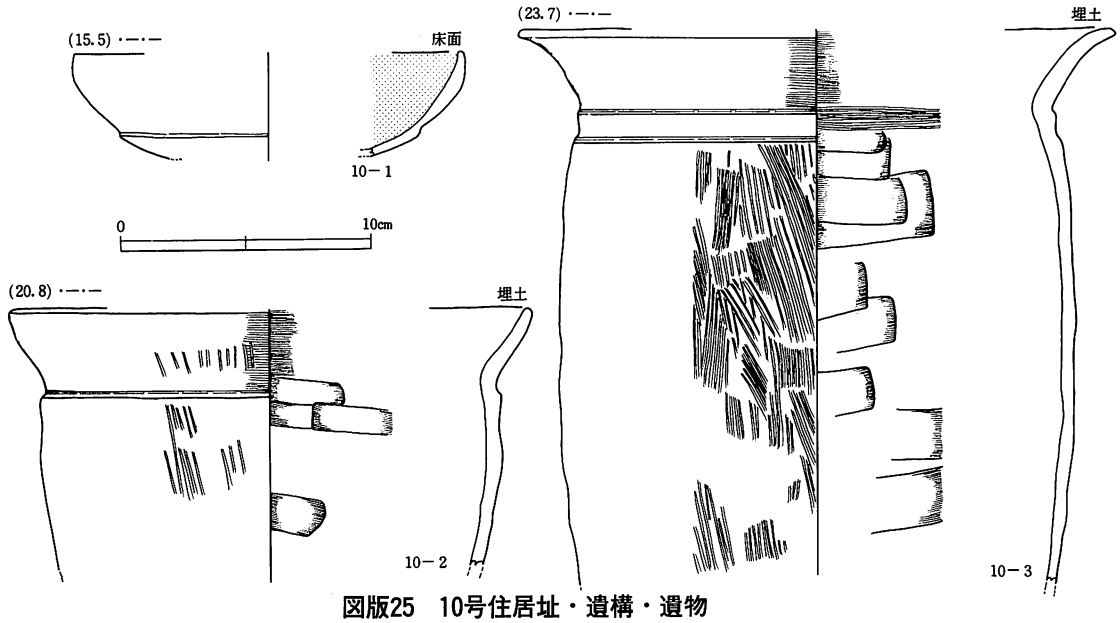
m 7.5YR 2/2 黒褐色 指痕つかず。粘性ややだんごになる。シルトがまだらに入っている。耕作土1ケ所入っている。

n 7.5YR 3/3 暗褐色 指痕つく。粘性だんごになる。（o）が全面に混入。

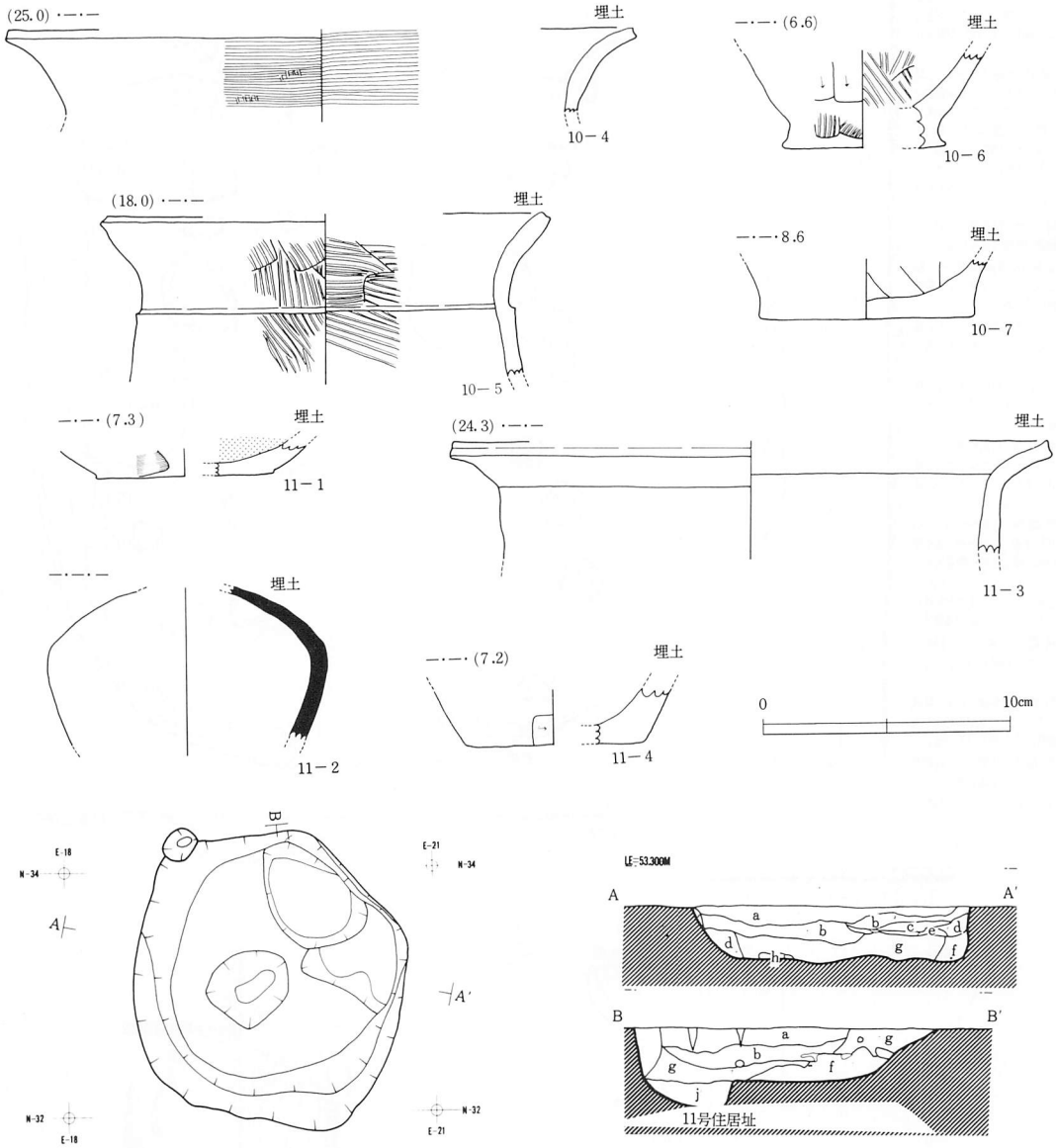
o 7.5YR 4/4 褐色 指痕つく。粘性、砂っぽい。

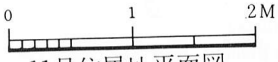


10号住居址平面図



図版25　10号住居址・遺構・遺物



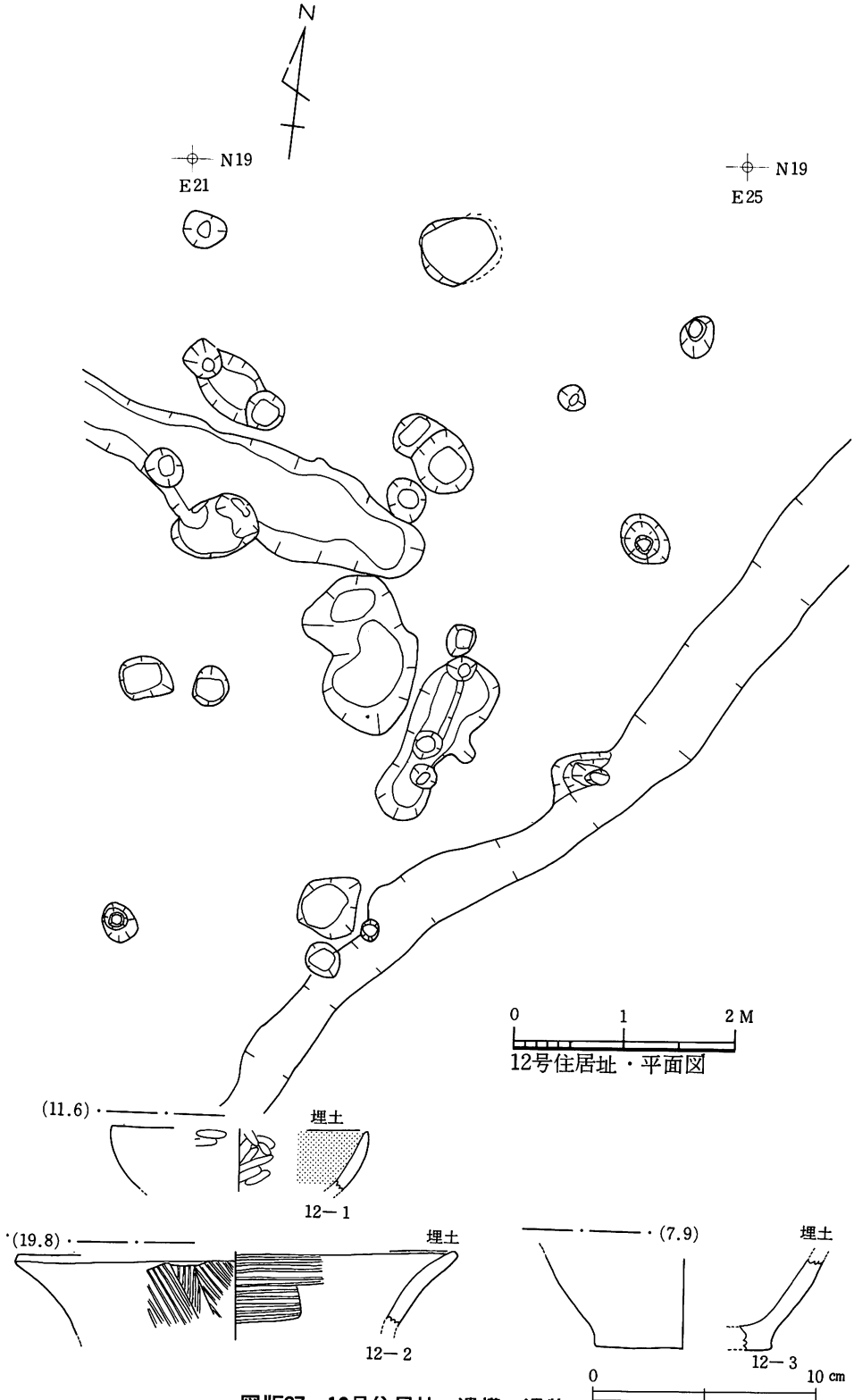


11号住居址平面図

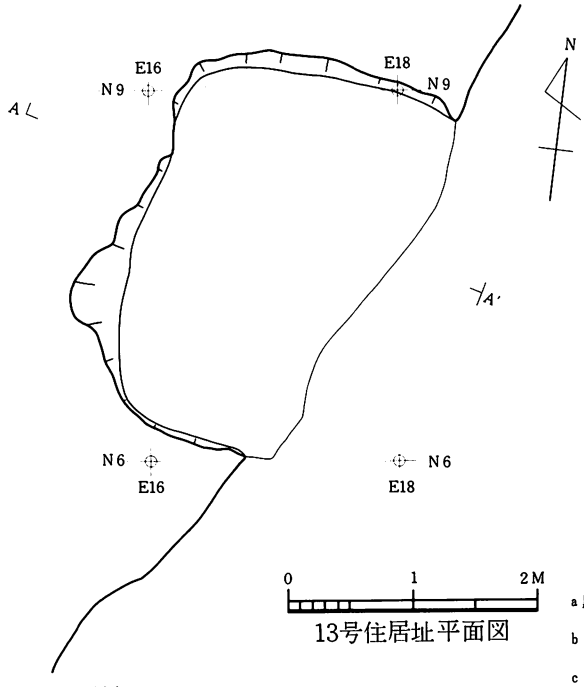
11号址注記

a	7.5YR 3/2	黒褐色	指痕つかない。粘性有。地山が細い粒子状で微量に入る。
b	7.5YR 3/2	黒褐色	指痕つかず。粘性有、粘土が細く入っている。焼土も微量混入している。
c	7.5YR 2/1	黒色	指痕つかない。固い。粘性有ひもになる。黄味おびた粘土が1ケ所見える。焼土も微量入る。
d	710YR 3/2	黒褐色	指痕わずかにのこる。粘性は少ない。全体的に炭化物、粘土、焼土が混入。
e	7.5YR 4/4	褐色	指痕少しのこり、粘性は少ないがひもになる。全体的に黄味をおび、炭、焼土が有る。
f	7.5YR 4/3	褐色	指痕つく。全体にパサパサした感じ。焼土がブロック状に入る。全体的な色としては黒い所と黄味をおびた様に見える。
g	7.5YR 2/1	黒	指痕のこり粘性が有りひも状になる。少量炭がまじり、黄色い粘土が床場に平した所にまじっている。全体的に黒い感じ。
h	10YR 3/2	黒褐色	指痕つかず、やや粘性有りひも状になる。覚乱された横で田の土粘土が入り混じっている。
i	7.5YR 3/2	黒褐色	指痕がのこる。粘性が有りひも状になる。全体的に黄褐色の混入。
j	7.5YR 2/3	極暗褐色	指痕のこらず。粘性有りひも状になる。全体に黄褐色の粘土がブロック状やつぶ状に混入。
k	7.5YR 3/3	暗褐色	指痕のこらず。固いひも状になる。黄褐色の粘土がブロック状に混入。
l	7.5YR 4/4	褐色	指痕のこらず固い。全体に黄褐色粘土がブロック状に混入。
m	7.5YR 3/2	黒褐色	指痕有、粘性有。全体に黒くわずか褐色気味で有る。
n	7.5YR 3/4	極暗褐色	指痕のこり、粘性有ひも状になる。黄褐色の粘土がブロック状やつぶ状になり混入。
o	5YR 3/4	暗赤褐色	指痕のこり、粘性有ひも状になる。黒褐色で有るが全体的には焼土がブロック状となって混入。

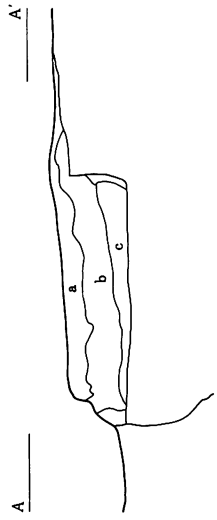
図版26　10号住居址・遺物・11号址遺構・遺物



図版27　12号住居址・遺構・遺物



13号住居址平面図

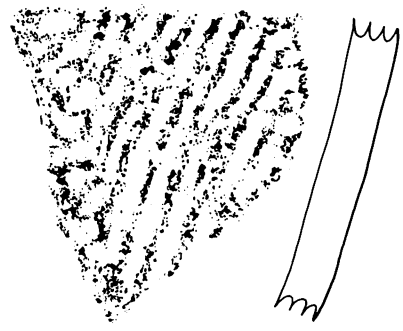


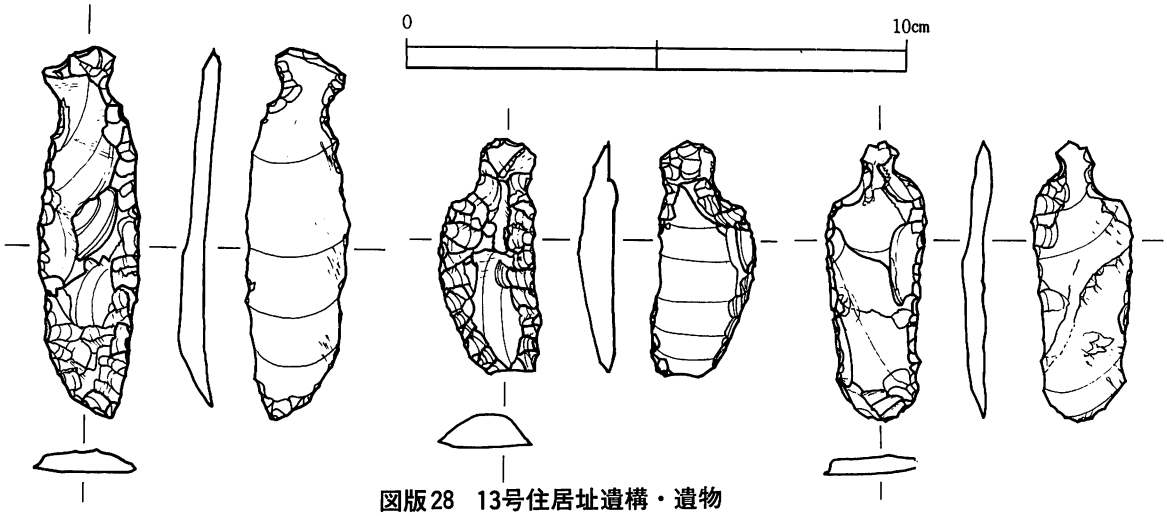
13号住居地注記

a 黒 褐 色　非常に硬いマンガン、細かく点状に著しく見られる。水田耕作の影響を受けている。

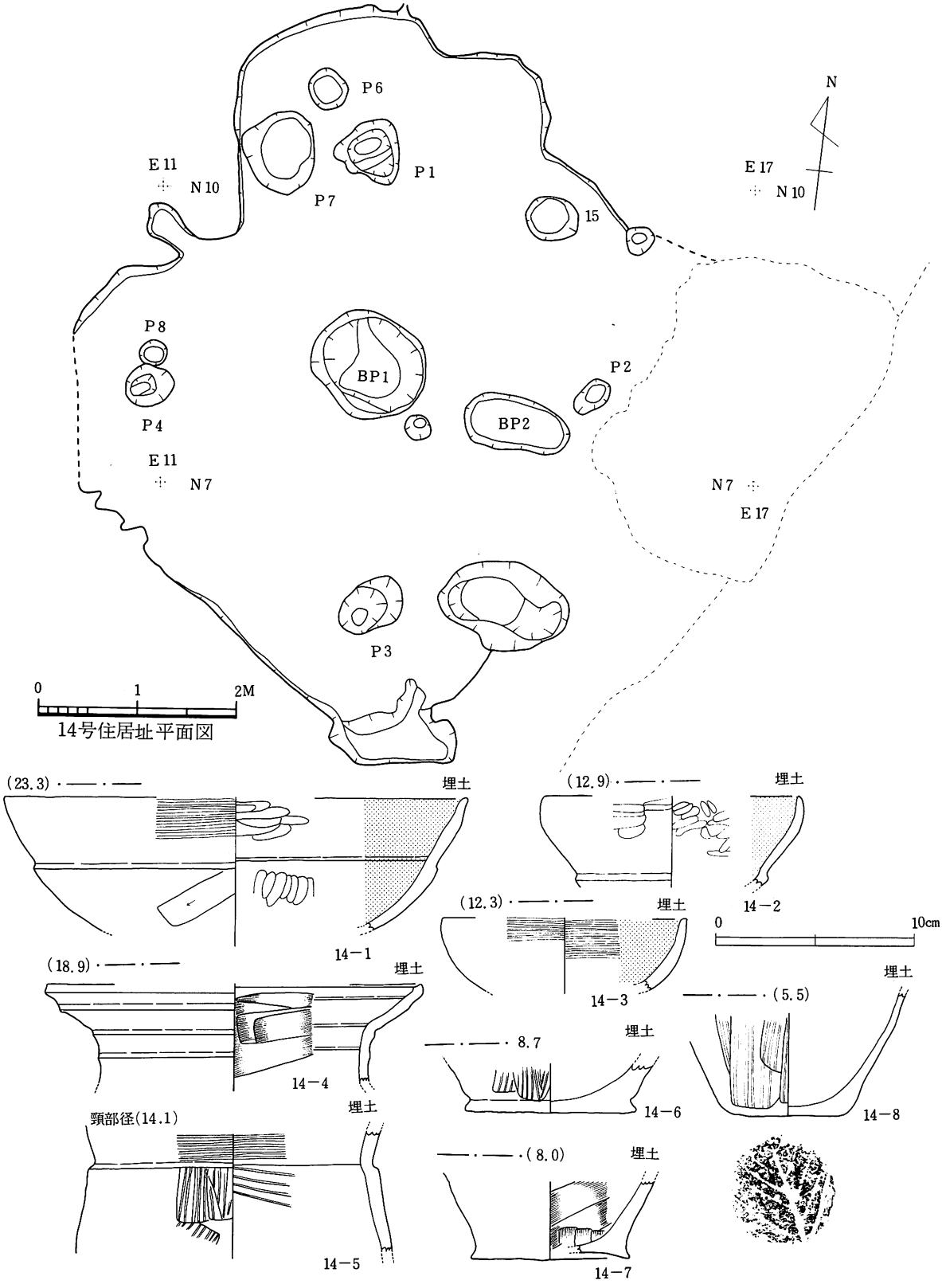
b にぶい黄褐色　粘土化しているシルト塊やマンガン斑は上層付近に多くはないが見られる。

c にぶい褐色　非常に硬いカーボン粒少量点在する。地山はシルト塊（5㎜土）若干散見される。

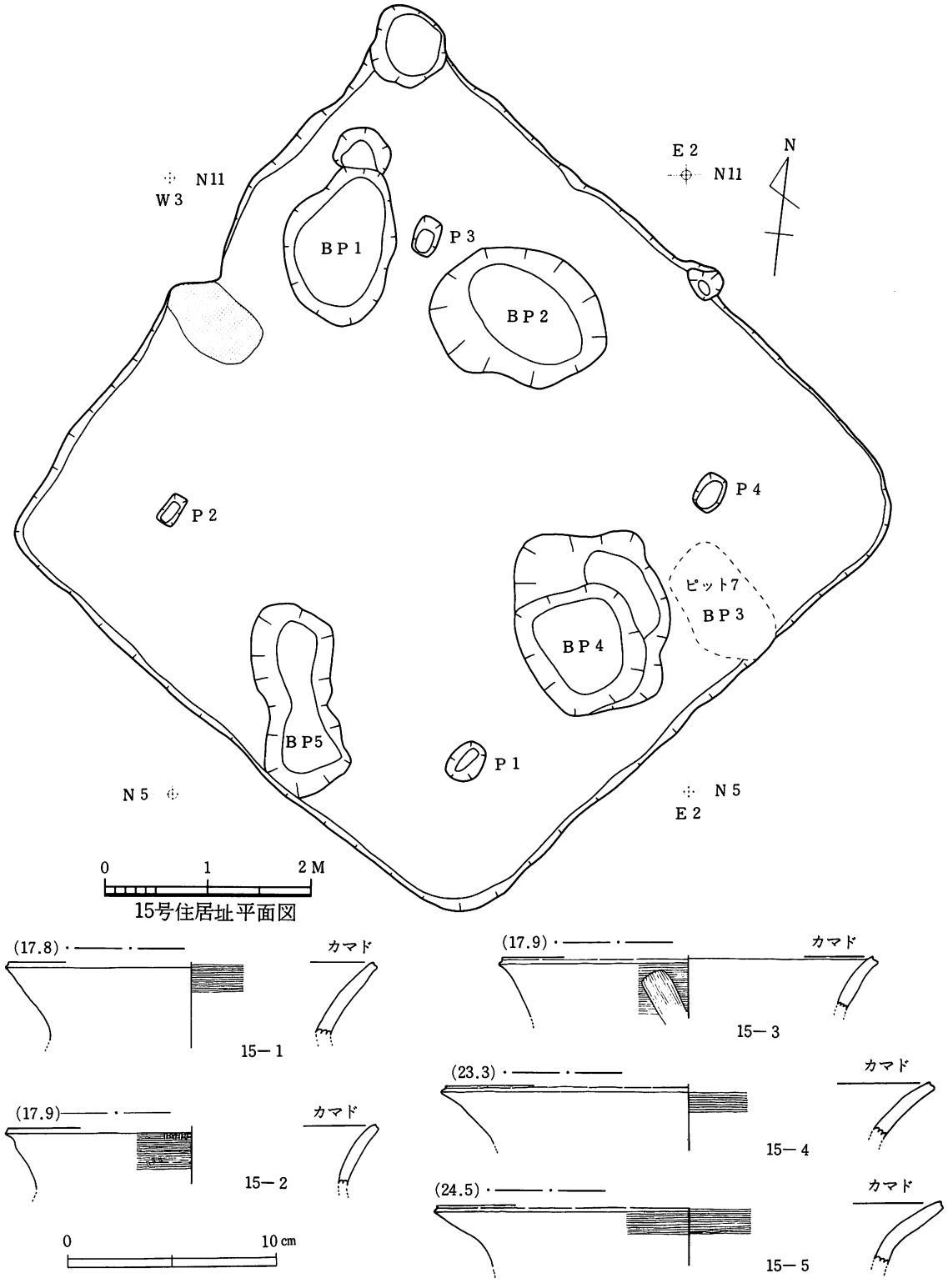




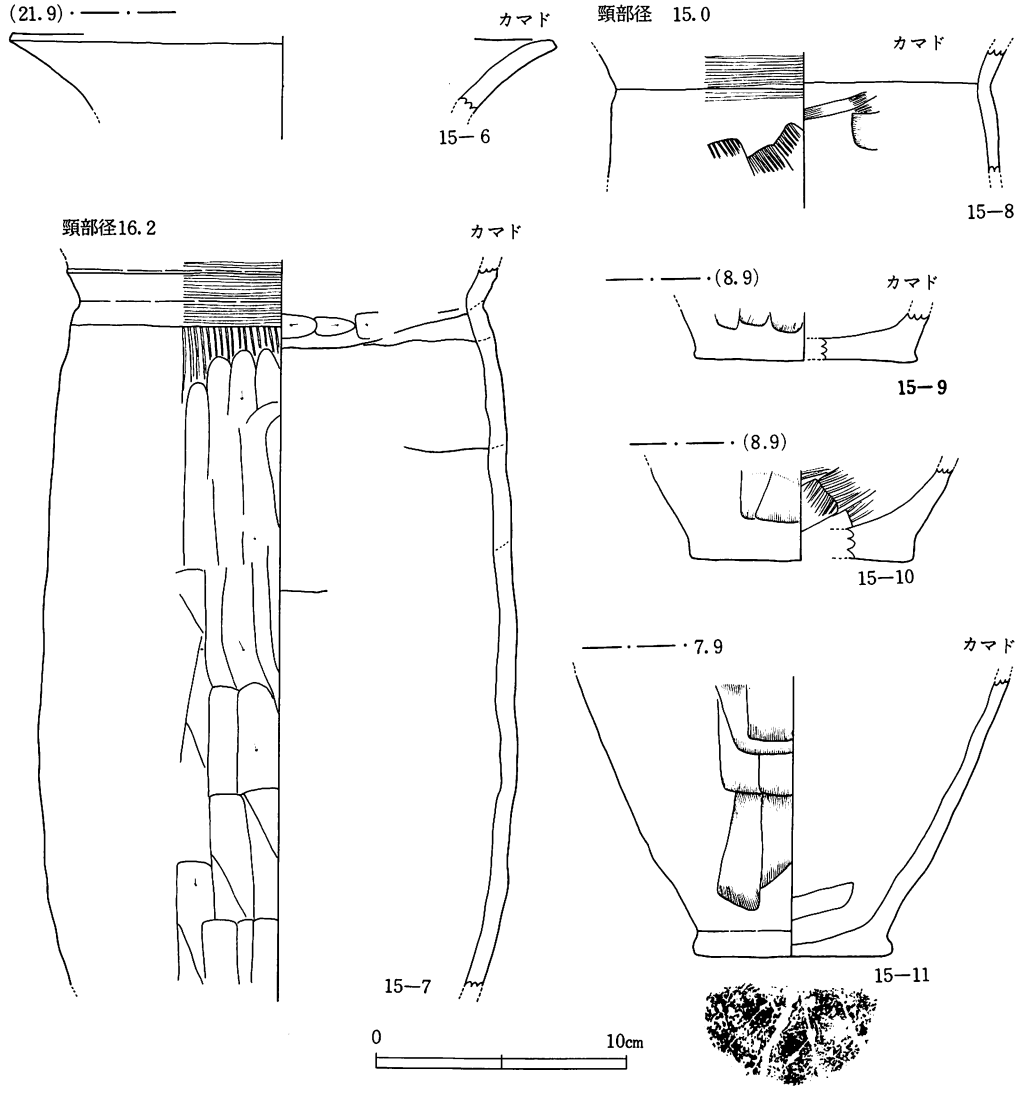
図版28　13号住居址遺構・遺物



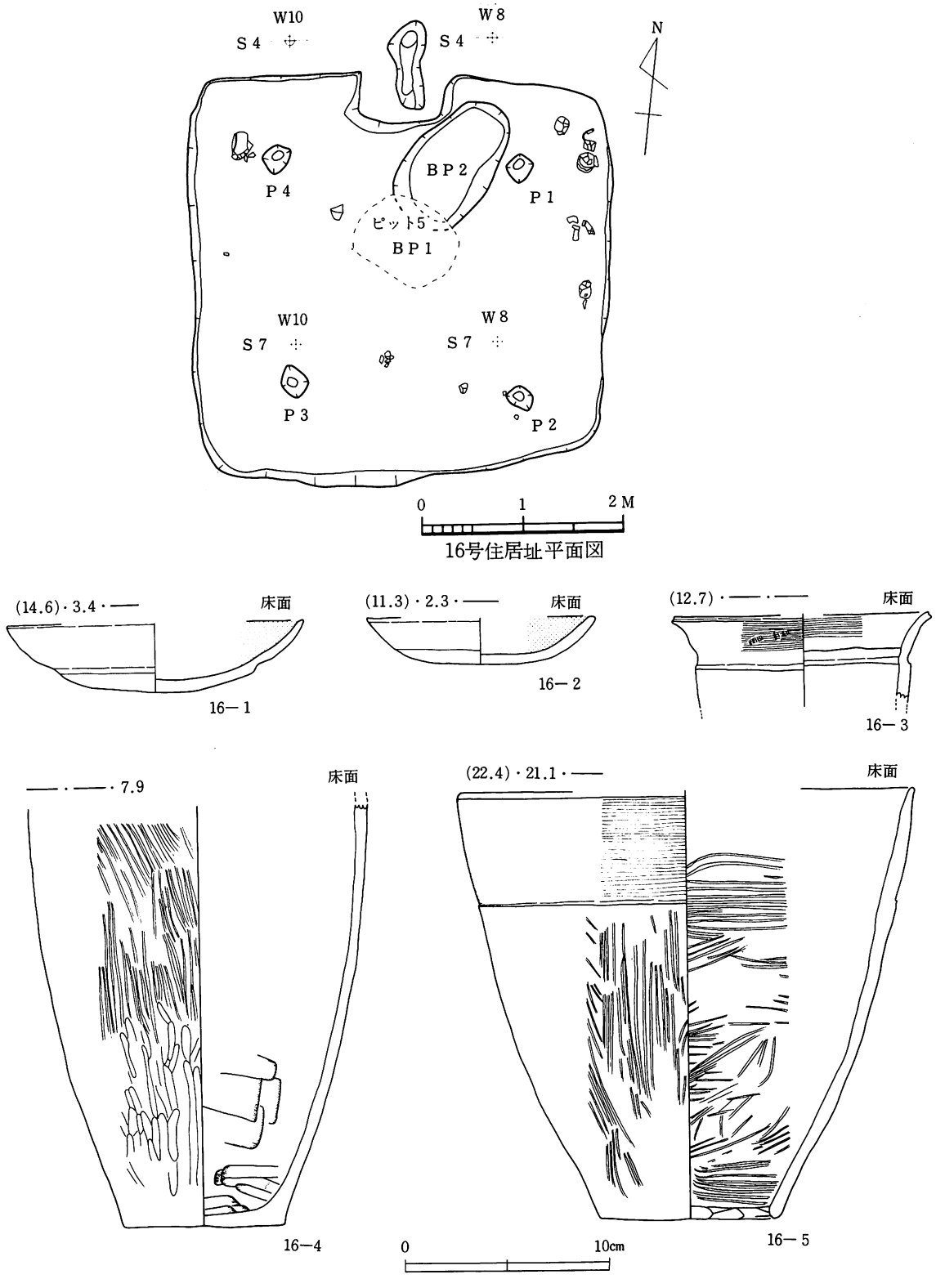
図版29　14号住居址・遺構・遺物



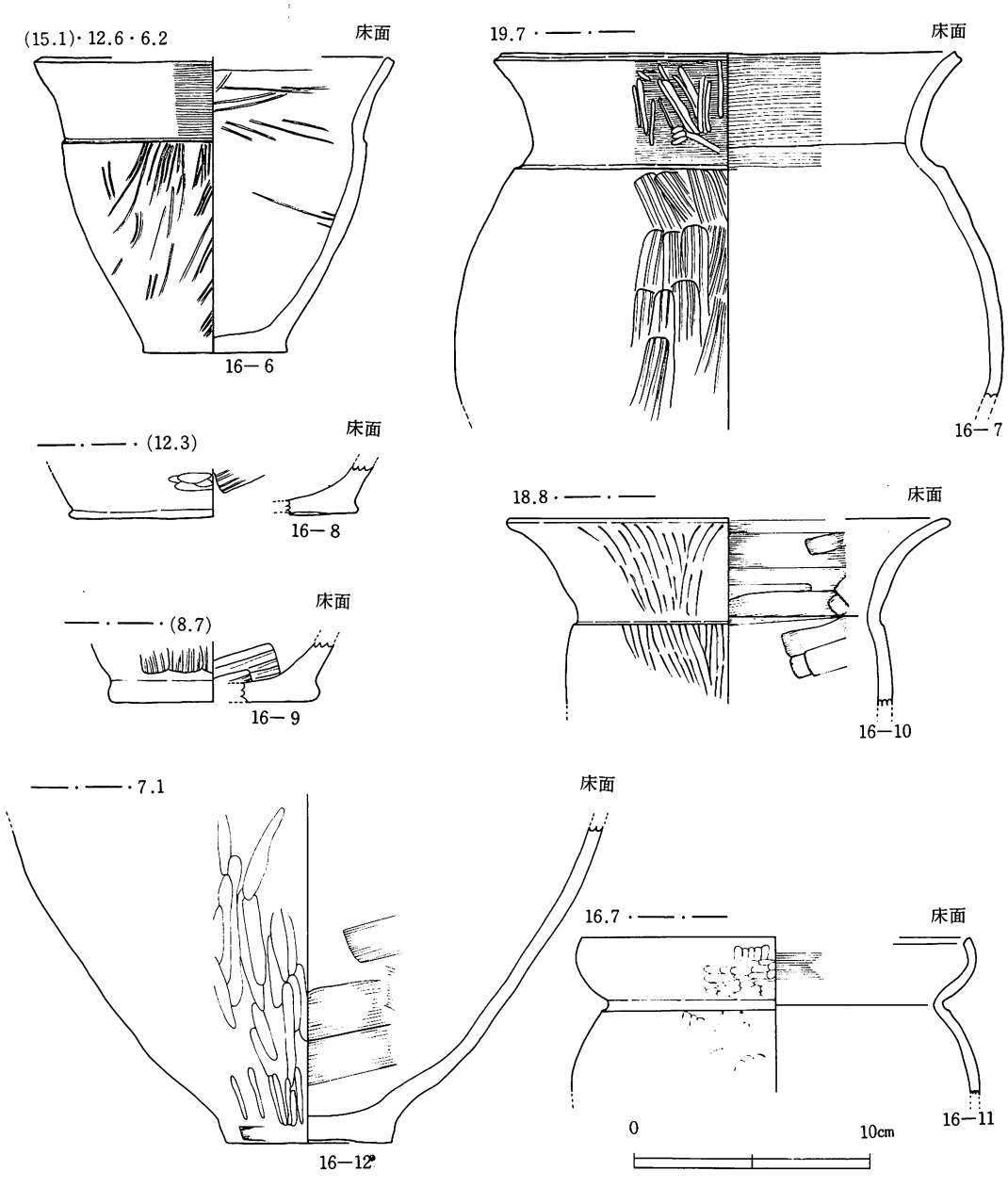
図版30　15号住居址・遺構・遺物



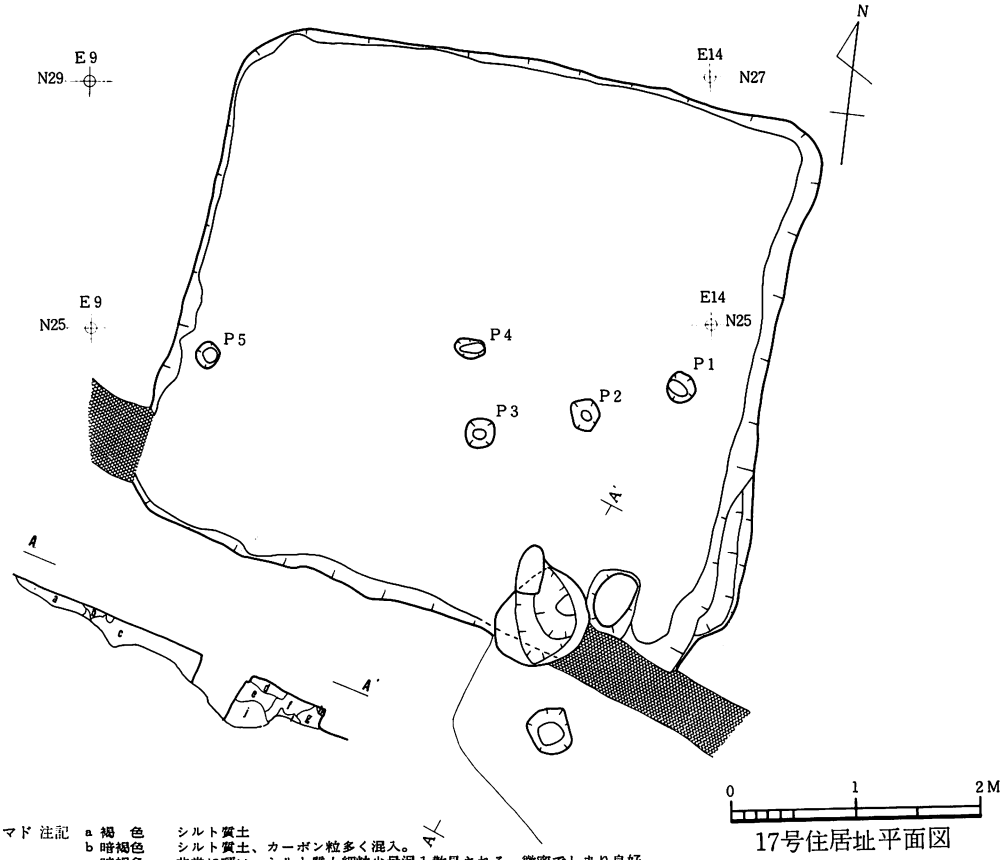
図版31　15号住居址・遺物



図版32　16号住居址・遺構・遺物

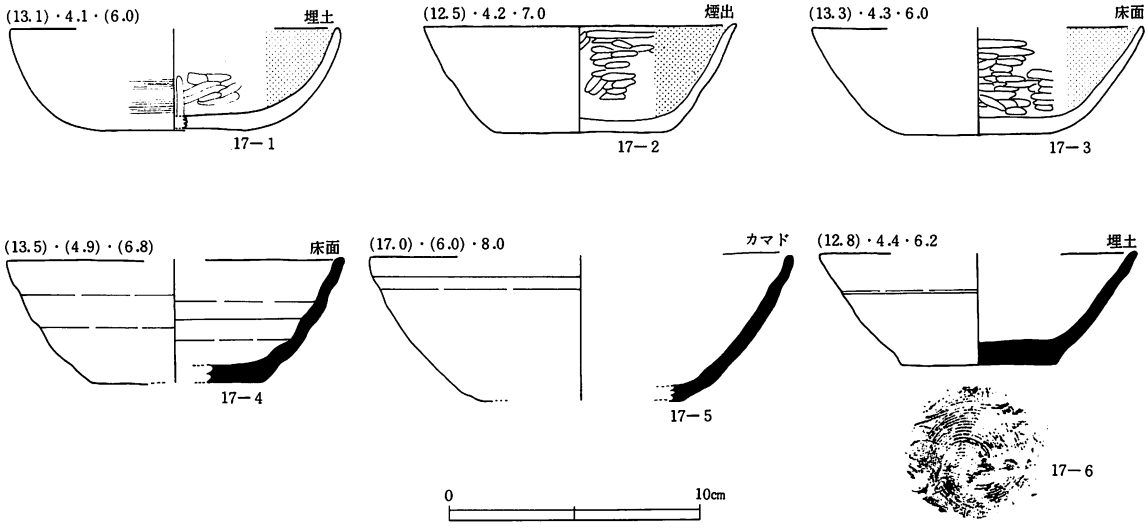


図版33　16号住居址・遺物

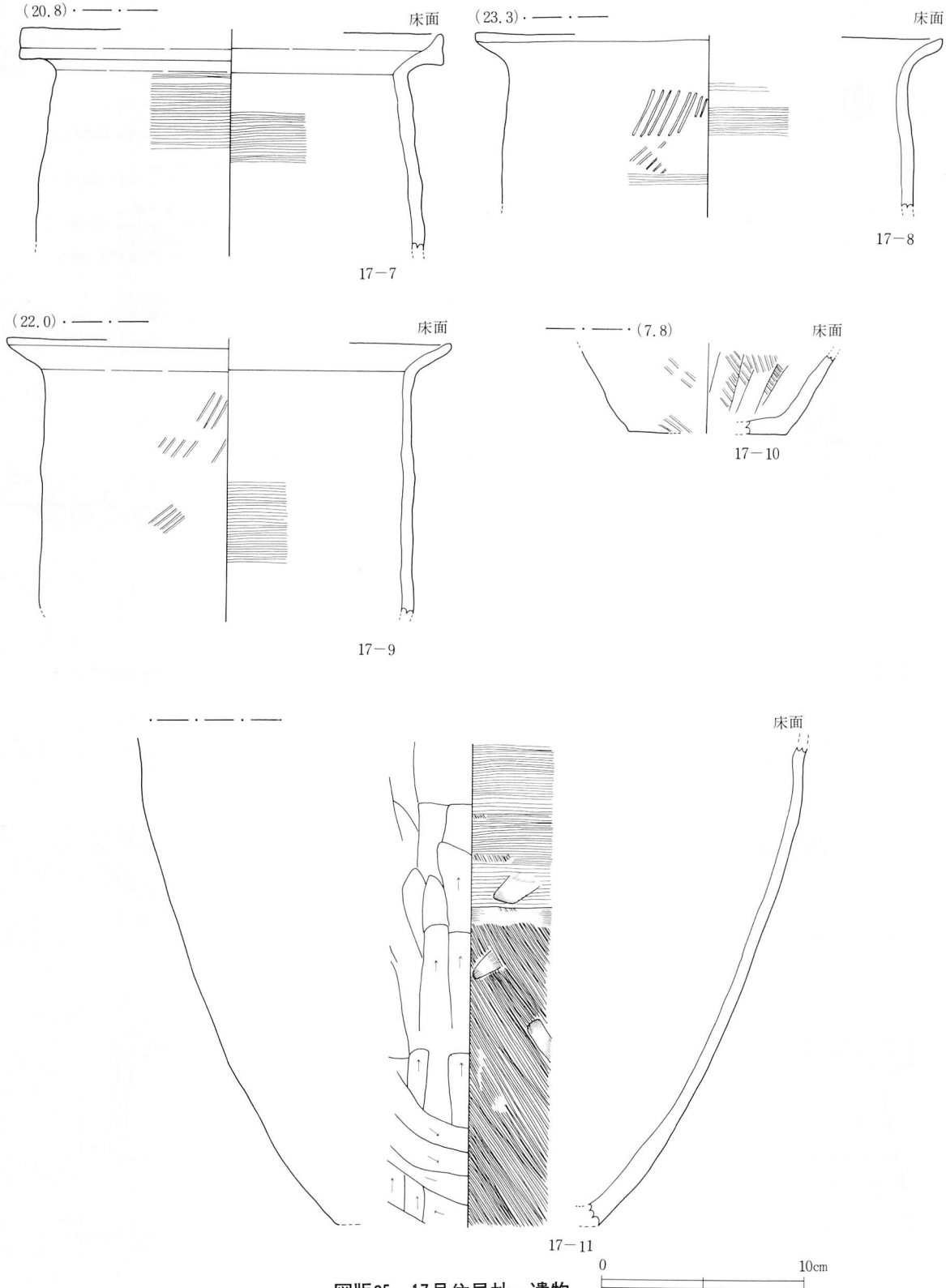


17号住居址平面図

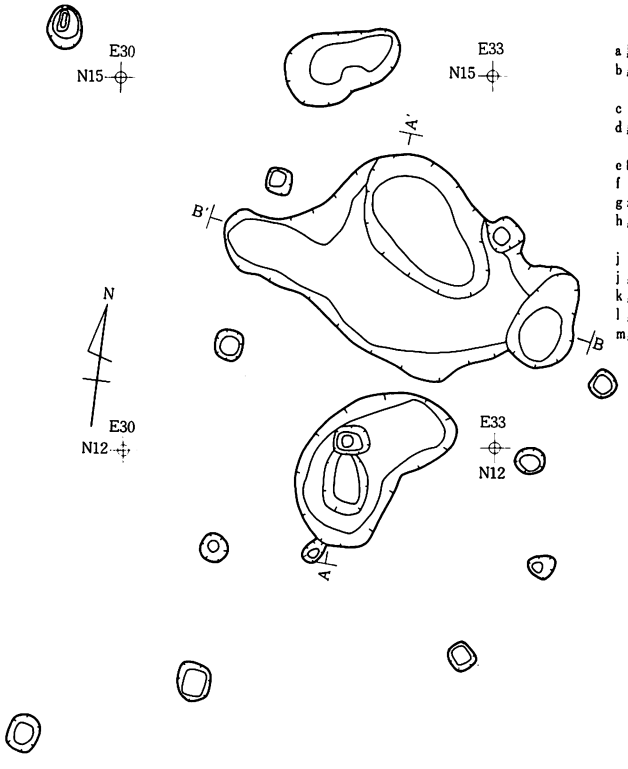
17号カマド 注記
a 褐　色　　シルト質土
b 暗褐色　　シルト質土、カーボン粒多く混入。
c 暗褐色　　非常に硬い。シルト質土細粒少量混入散見される。微密でしまり良好。
d 黒褐色　　非常に硬い。ブロック状に混入（５～７cm土）そのブロックが焼成受け赤褐色を呈するものである。
　　その他　粘土質土及び焼土の細粒少量混入するが著しくない、両袖部をつなぐものか？
e 黒褐色　　非常ひ硬い焼土粒（2.3mm～ 5mm土）大量霜降状に混入、カーボン若干入り粘性強い。
f　〃　　非常に硬いｂｓ粒とシルト質土粒が等分混入しやや顕著である。カーボン粒微量。
g　〃　　非常に硬い。ほぼe層に似るものであるが焼土粒がe層にくらべて著しく少なく粒径やや大きくなる。
h 黄　橙　　シルトの固まり、ブロック層下部、焼成受け赤褐色で硬い。
i にぶい黄褐色　　地山、シルトの固まりを胎土とし、若干上層f層土混入。
j 黒　褐　　非常に硬い。色調は暗い。混入物非常に少なくカーボン粒及びシルト質細粒微量散見される。緻密でしまり良好。



図版34　17号住居址・遺構・遺物

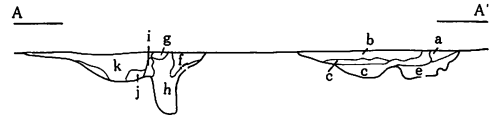


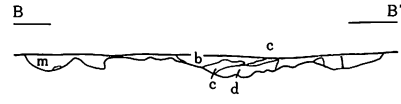
図版35　17号住居址・遺物

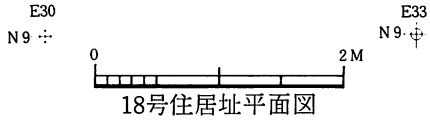


18号址　注記

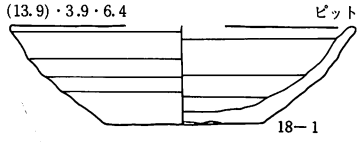
a 黒褐色	非常に硬い。シルト2、細粒若干。
b 黒褐色	非常に硬い。焼土細粒、全面に散見されるが著しくはない。炭化物粒少量入る。
c にぶい橙	非常に硬い。上層b にシルトの塊まりが多量に混じる。
d 黒　色	非常に硬い。焼土粒、シルト塊粒あまりみられる。土器片多。底面に近い方やソフトで強粘性。
e 暗褐色	黄褐シルト塊が5㎜～1㎝大粒経で全面に多量入り著しい。
f 黄橙色	非常に硬い。シルト塊を胎土とし、焼土粒（5㎜～2㎝大）の混入著しい。
g 赤褐色	胎土は非常に硬く焼土粒（1㎝±大）が大部分をしめる。
h 黒褐色	非常に硬く焼土粒（細粒～1㎝±大）少量が全体に散見される。大部分にシルト塊が混じる。
j 黄橙色	シルト塊大ブロック混人。
j 黒褐色	上部のk 層に黄橙シルト塊が5㎜～1㎝±大の粒状に入る。
k 黒褐色	非常に硬く黒い。シルトの塊まり少量入る。炭化物若干入る。
l 黒褐色	非常に硬くシルト塊が見られる。
m 黒褐色	明るい色調で焼土粒少量混入、炭化物粒は多く散見される。

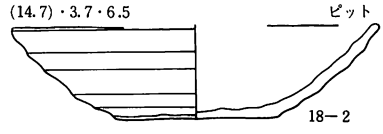


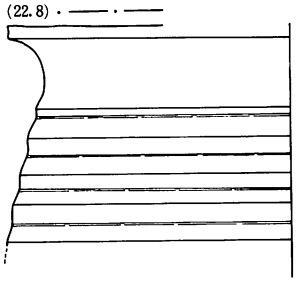


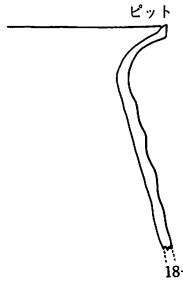


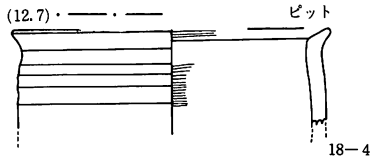
18号住居址平面図

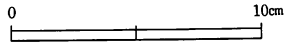




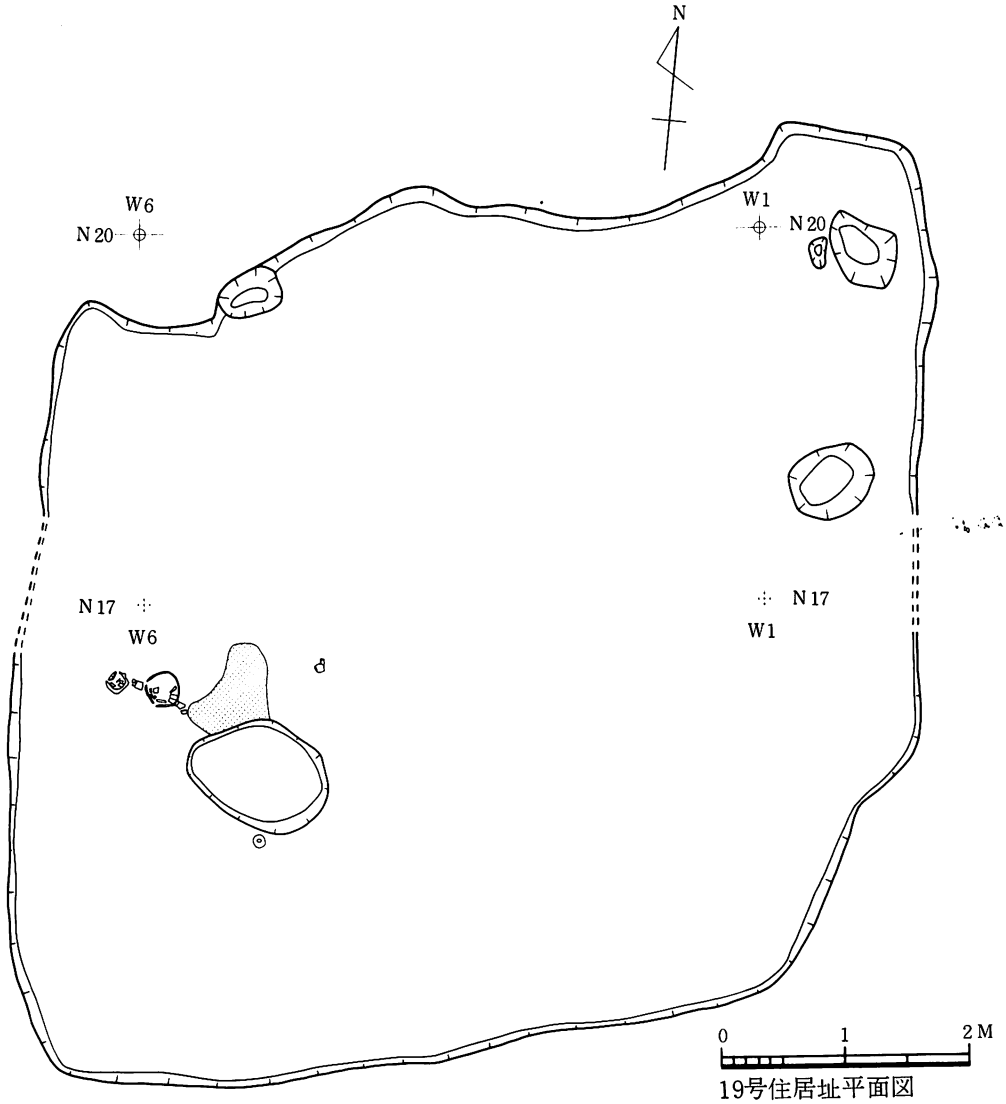




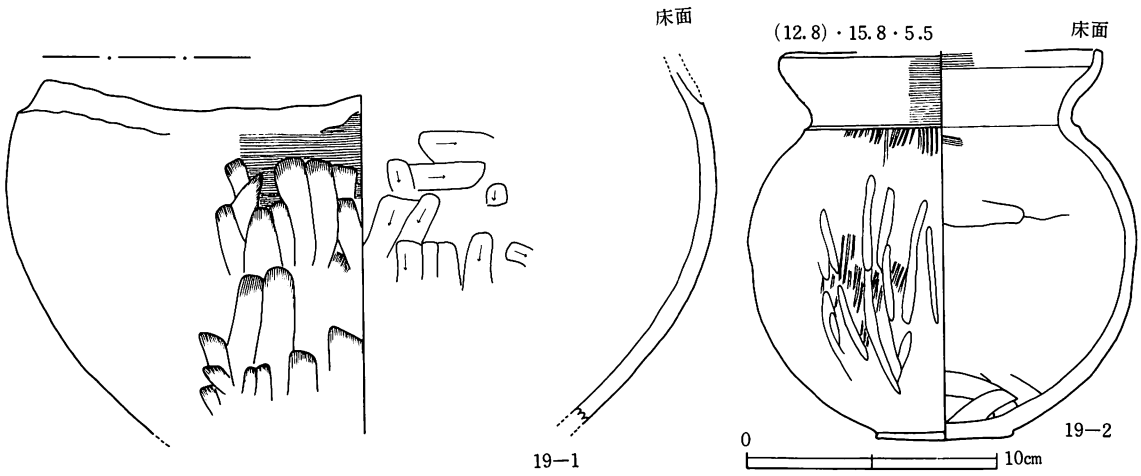




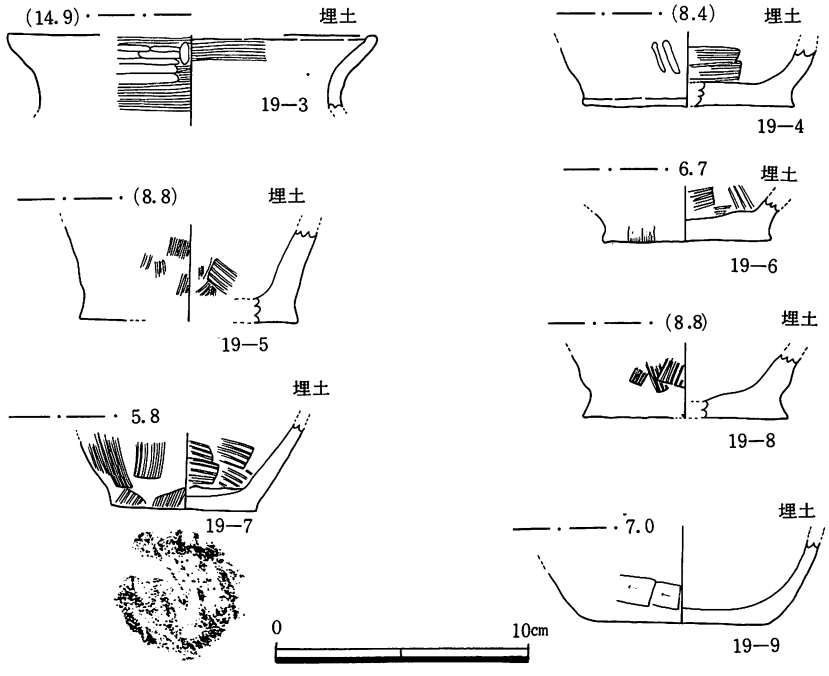
図版36　18号址・遺構・遺物



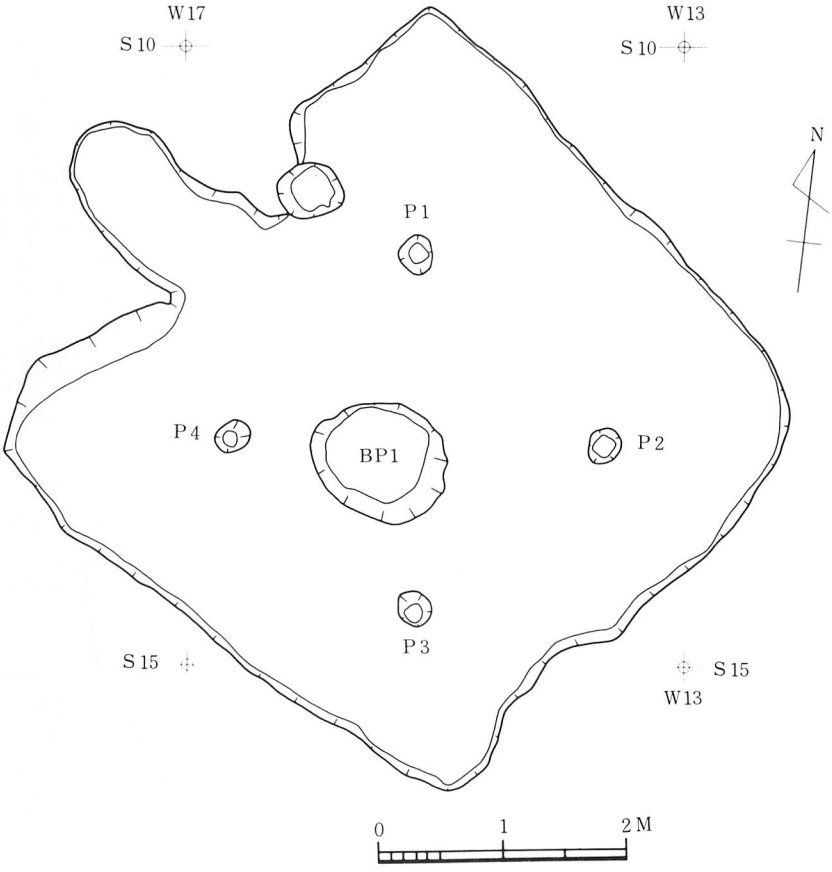
19号住居址平面図



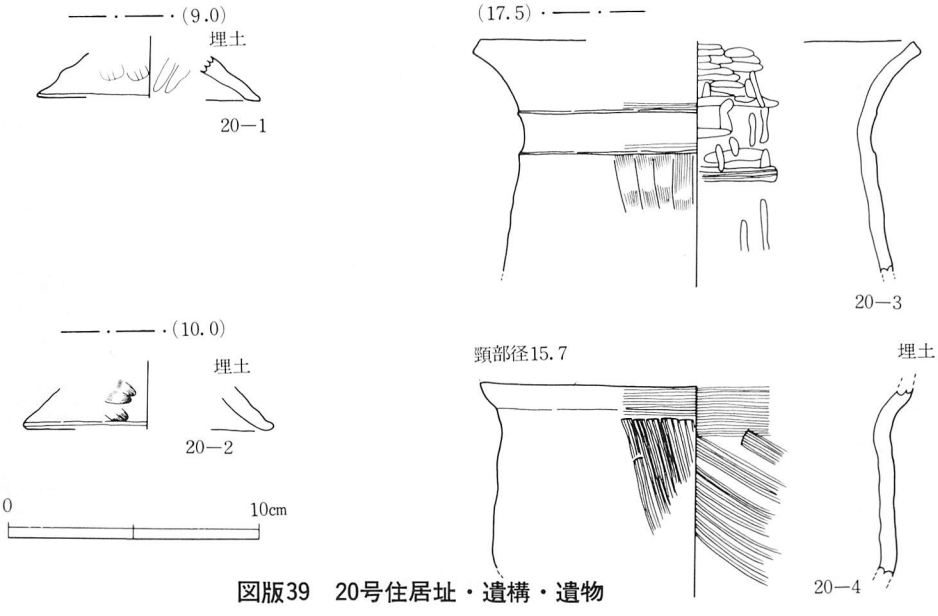
図版37　19号住居址・遺構・遺物



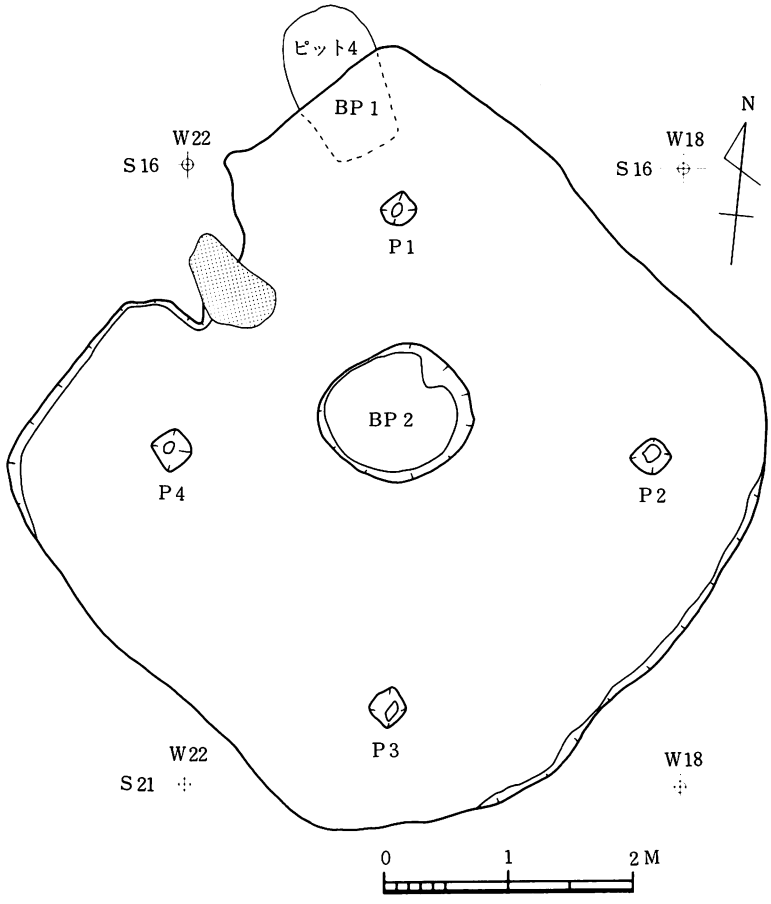
図版38　19号住居址遺物



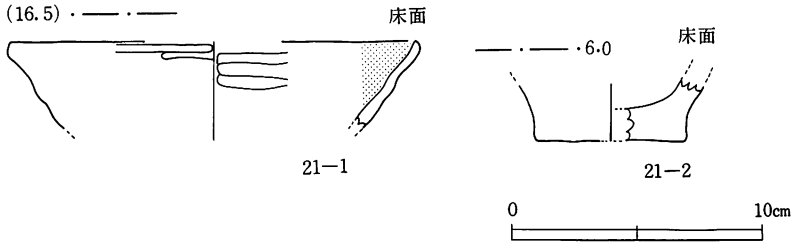
20号住居址平面図



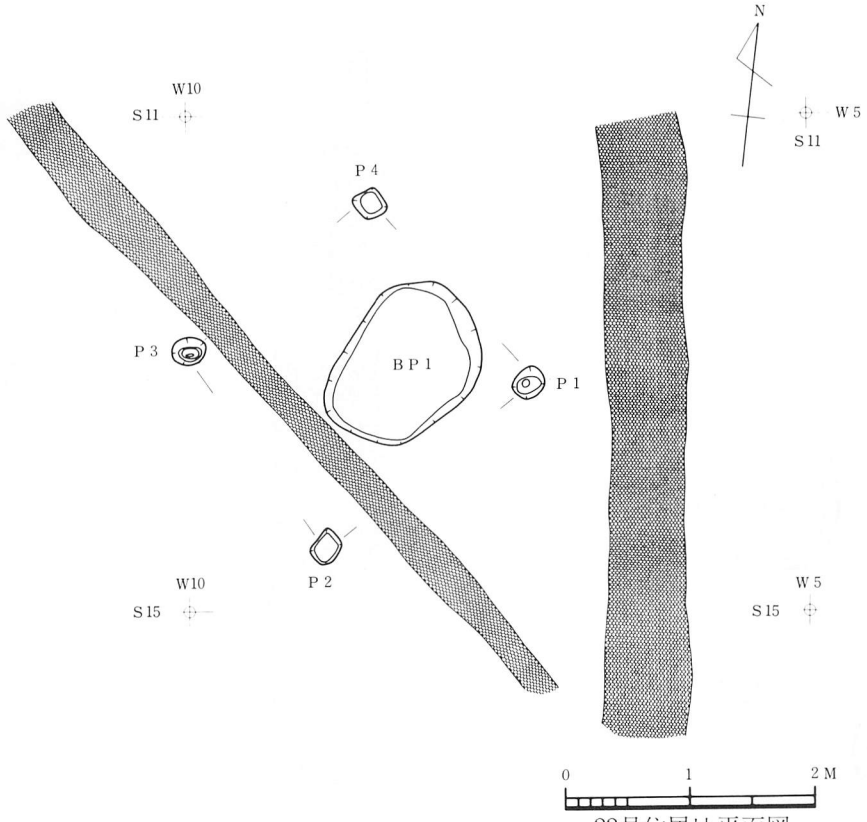
図版39　20号住居址・遺構・遺物



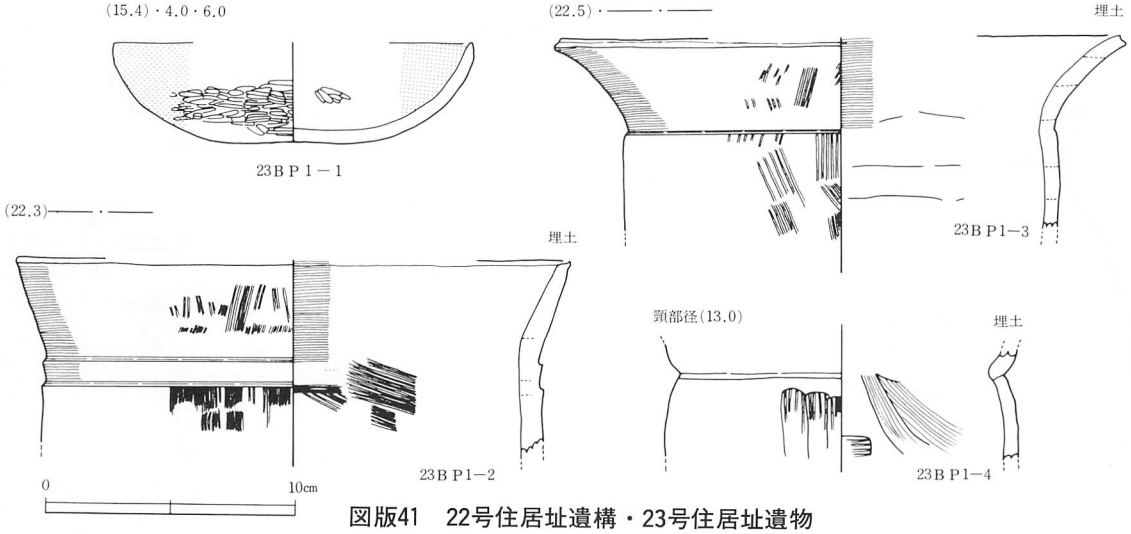
21号住居址平面図



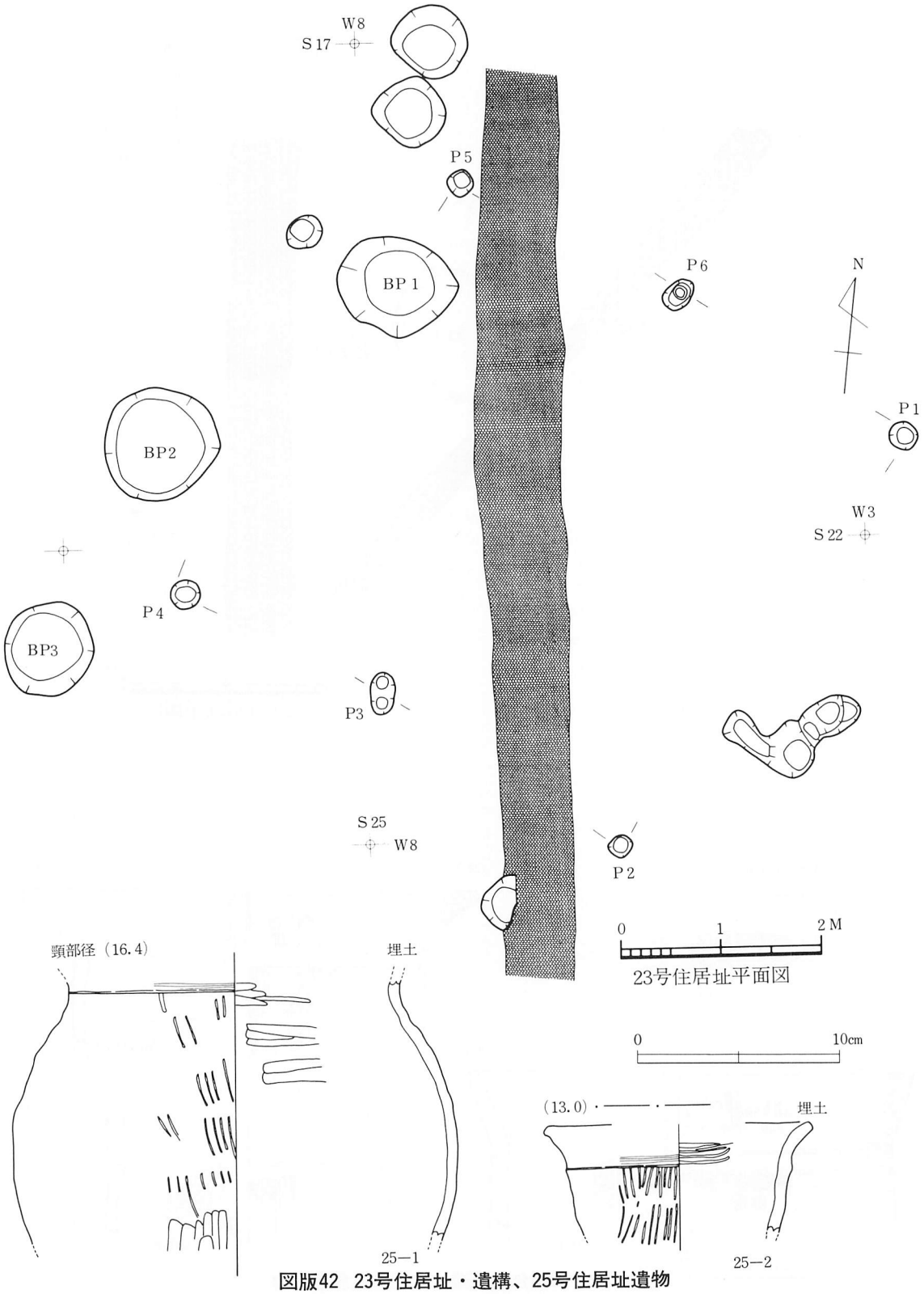
図版40　21号住居址・遺構・遺物



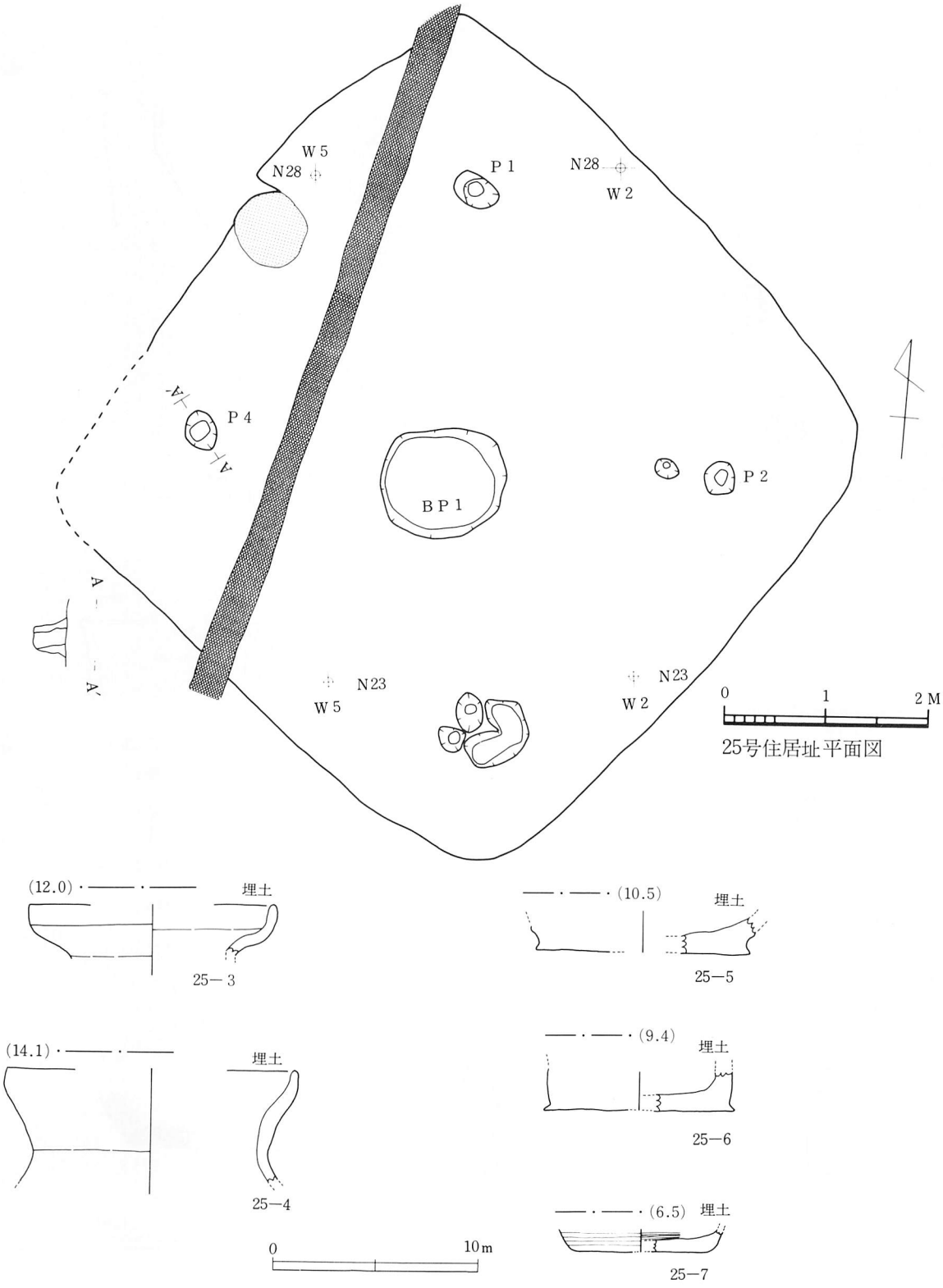
22号住居址平面図



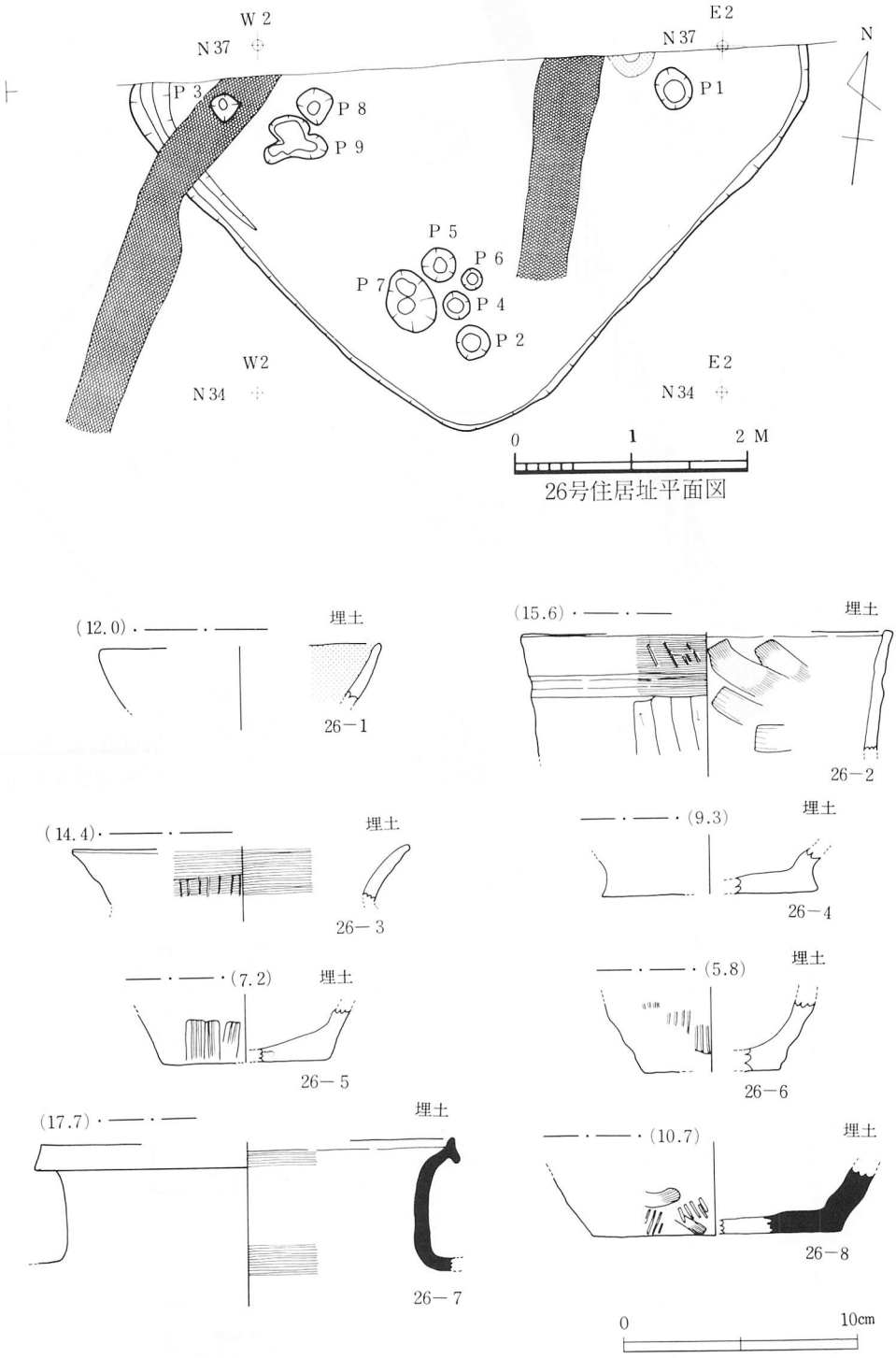
図版41　22号住居址遺構・23号住居址遺物



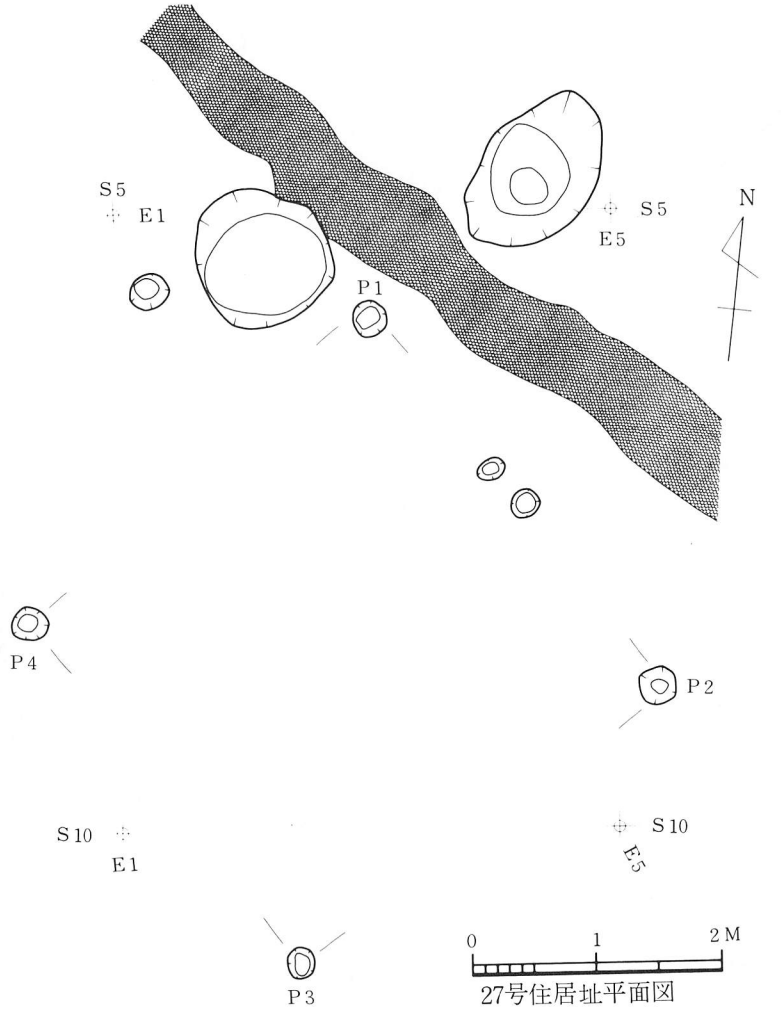
図版42　23号住居址・遺構、25号住居址遺物



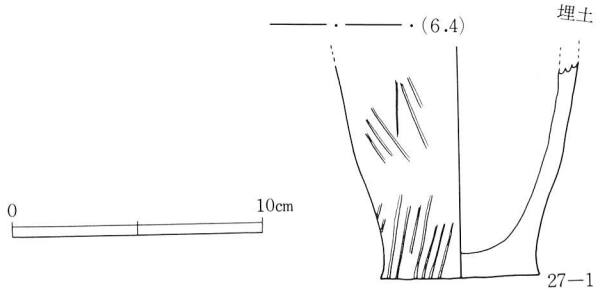
図版43　25号住居址・遺構・遺物



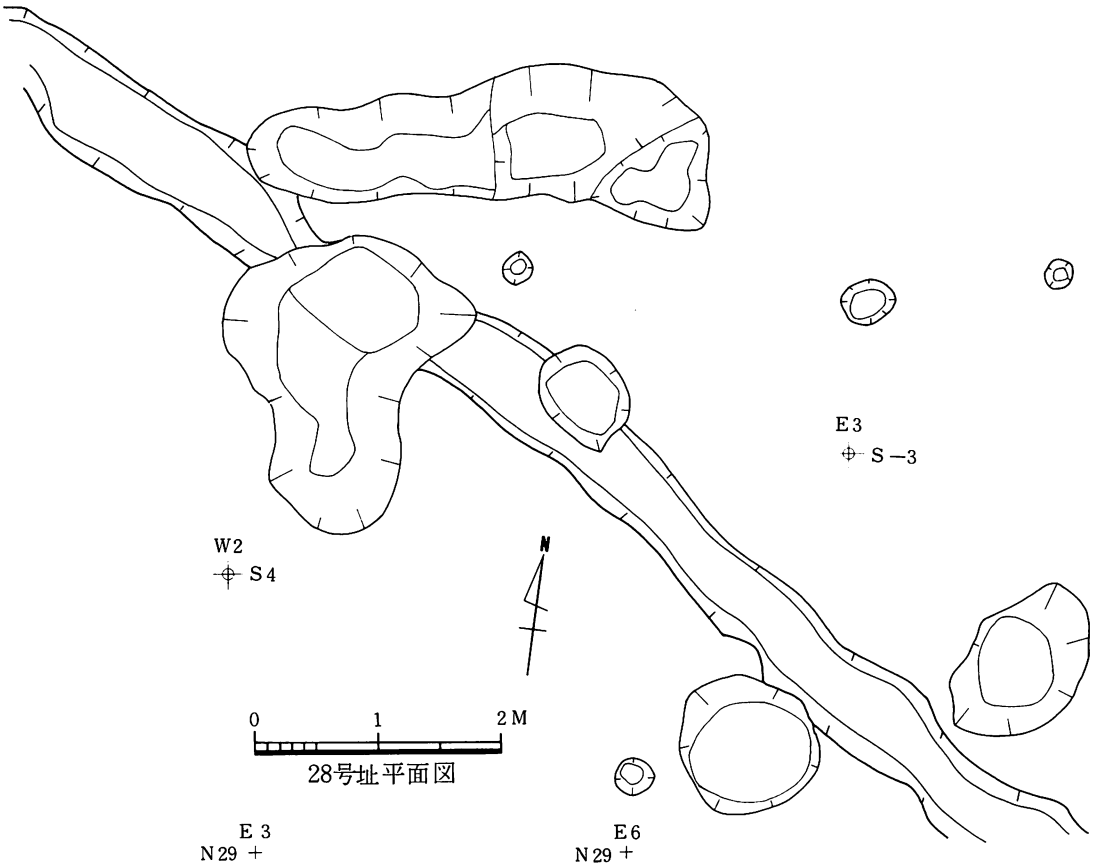
図版44　26号住居址・遺構・遺物



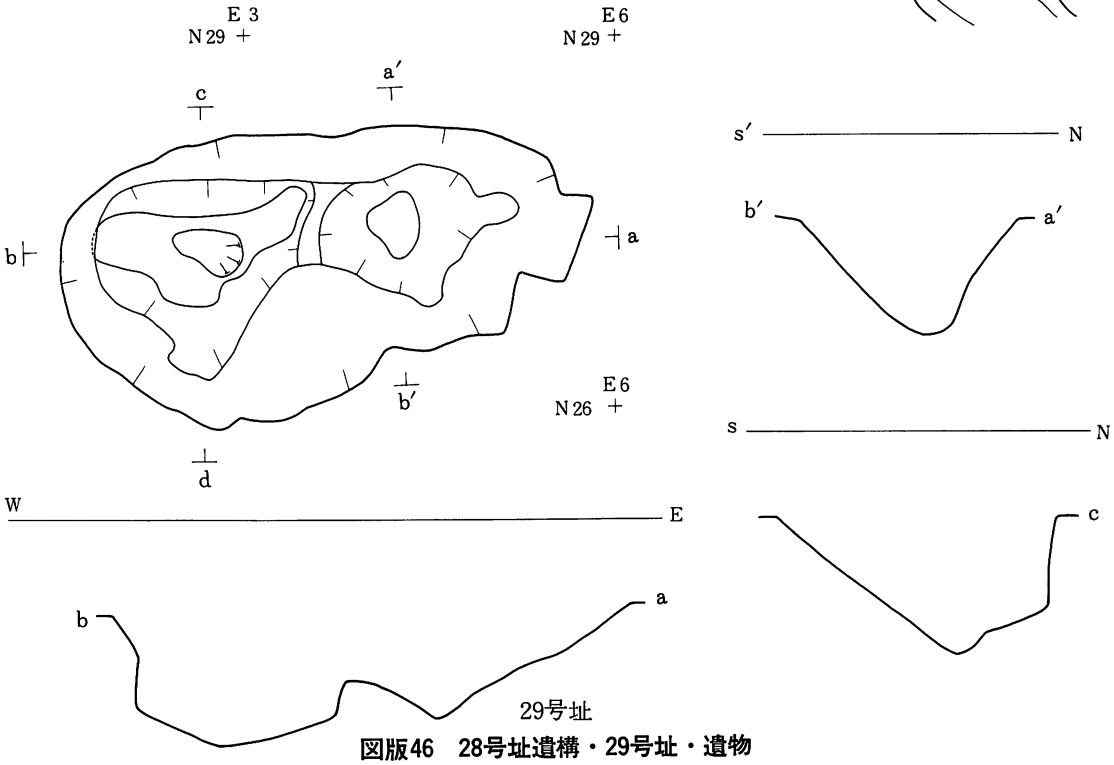
27号住居址平面図



図版45　27号住居址・遺構・遺物

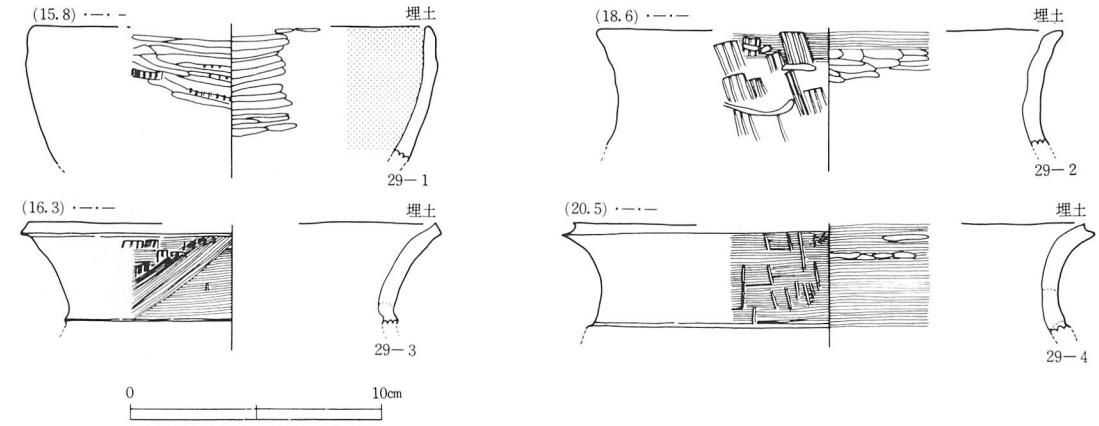


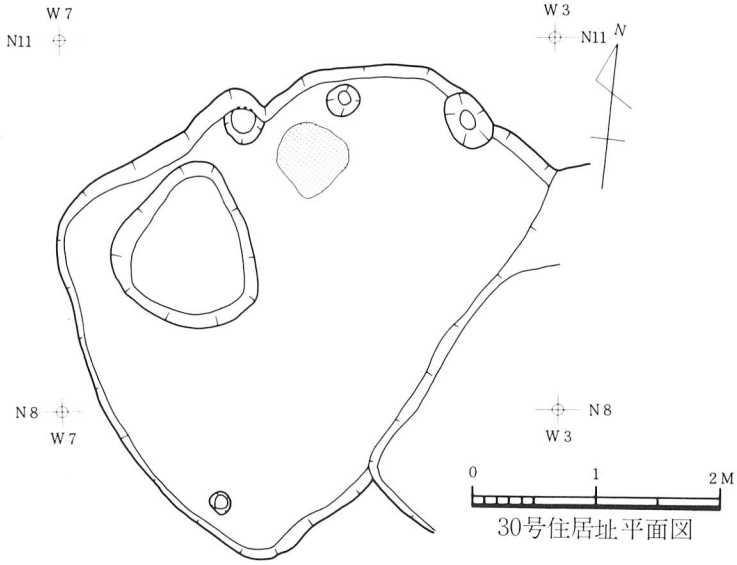
28号址平面図



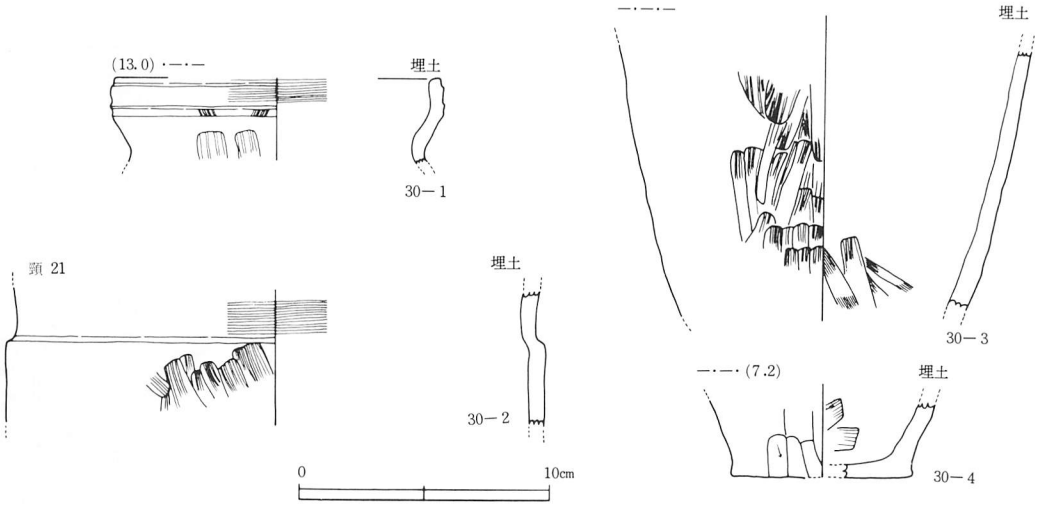
29号址

図版46　28号址遺構・29号址・遺物





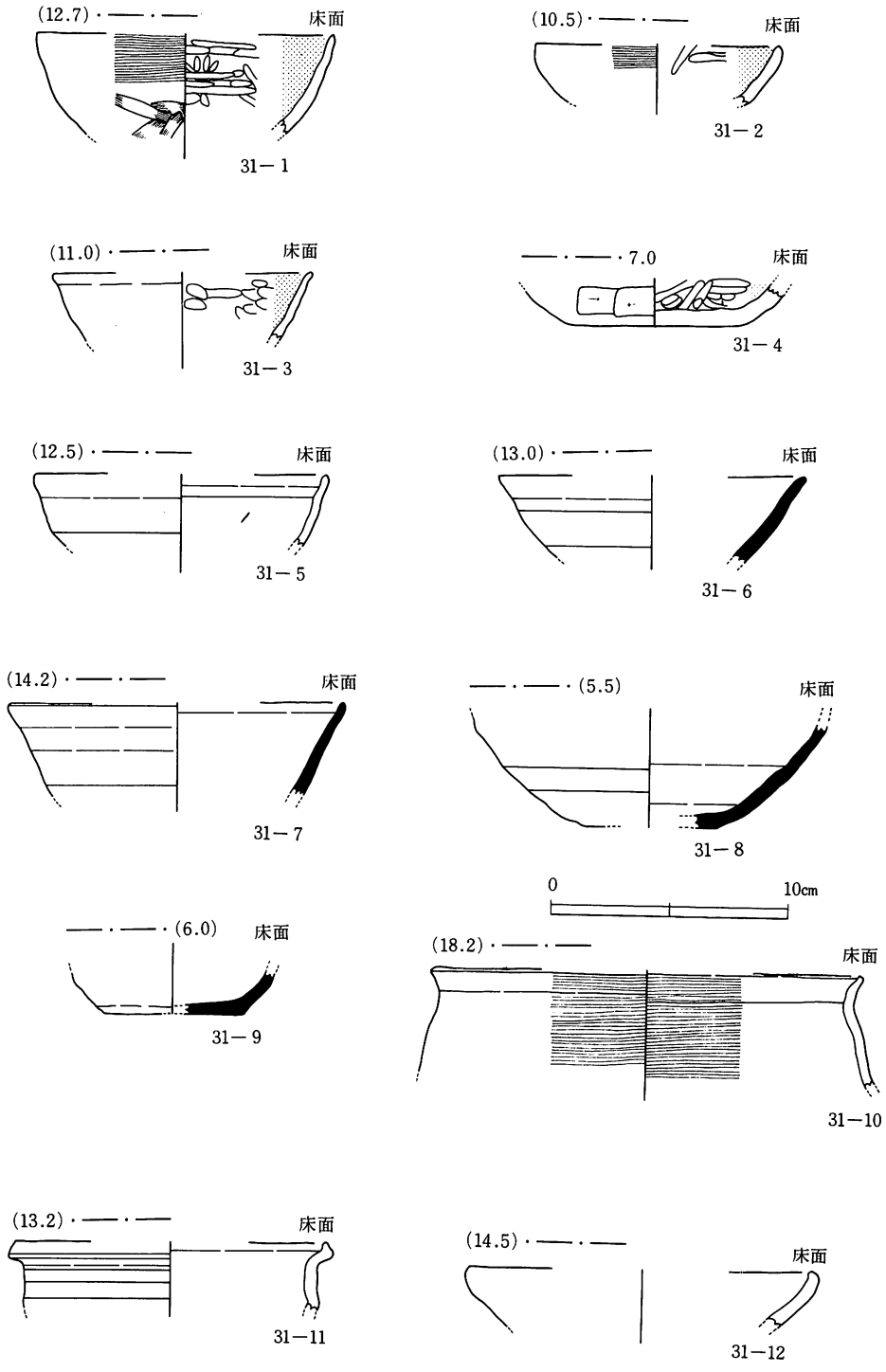
30号住居址平面図



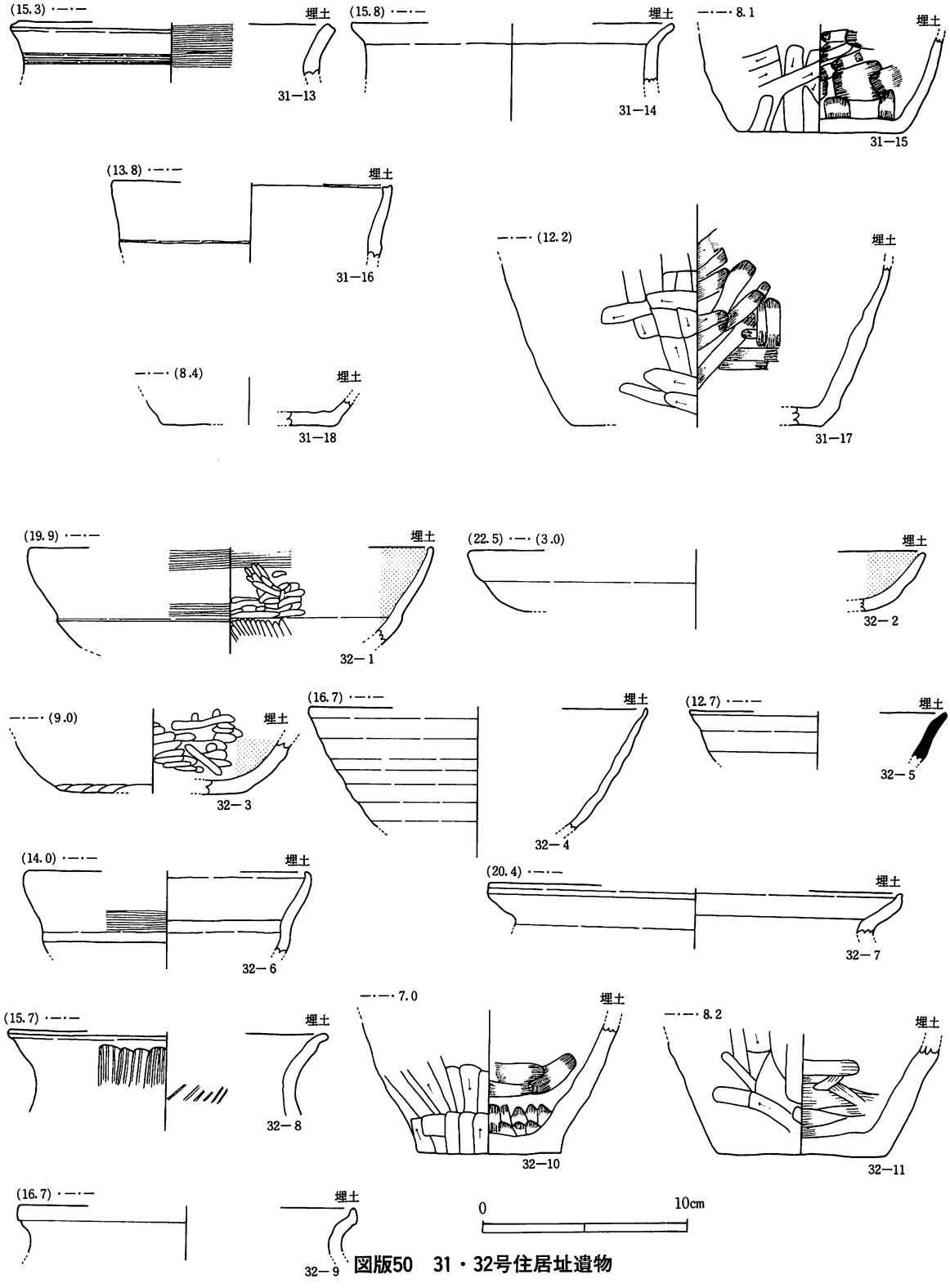
図版47　29号址遺物・30号住居址遺構・遺物

31号住居址平面図

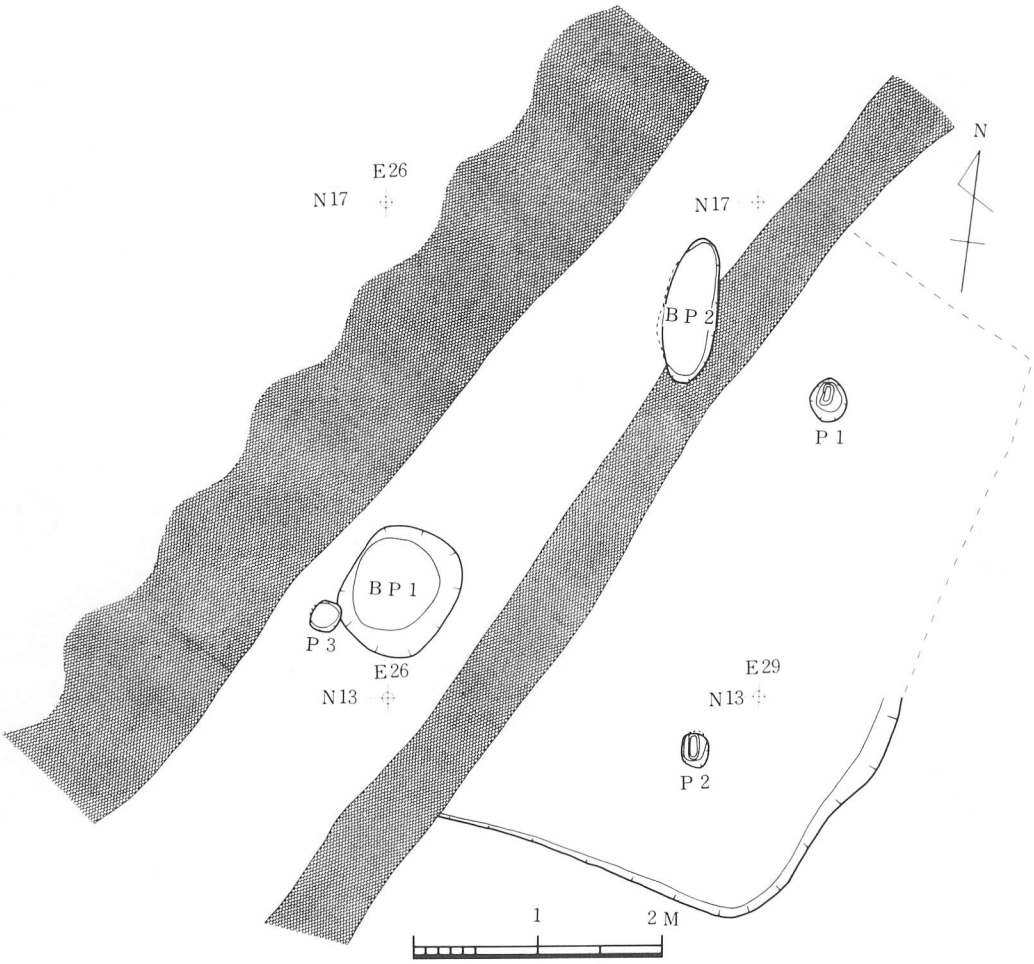
図版48　31・32号住居址・遺構



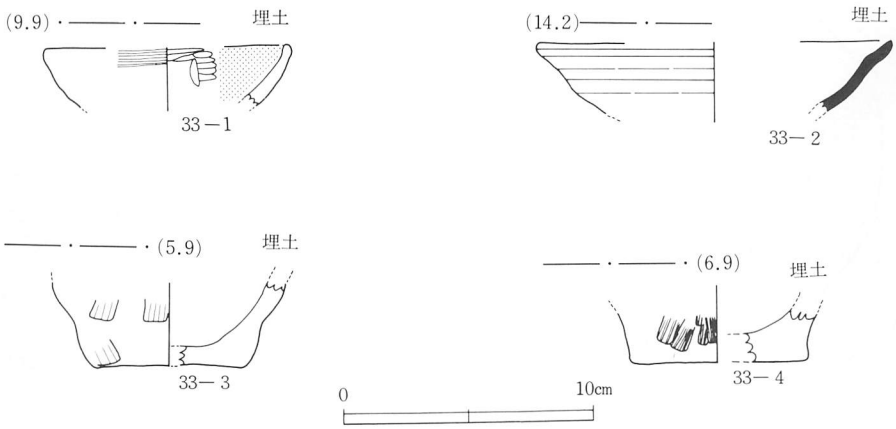
図版49　31号住居址遺物



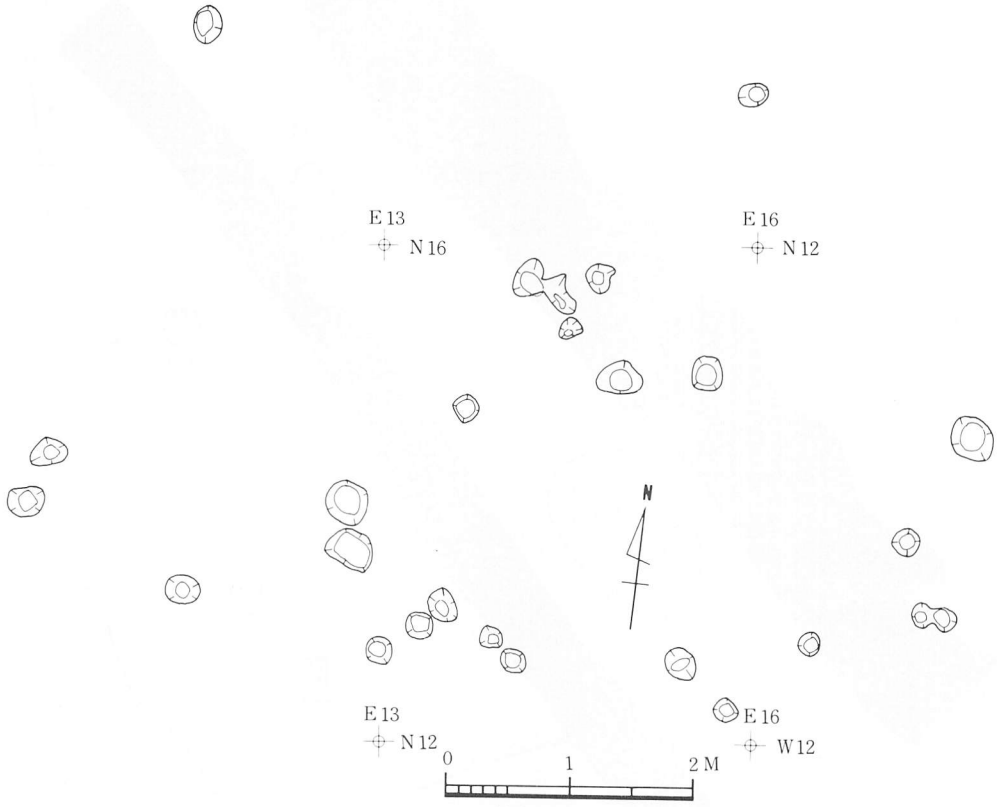
図版50　31・32号住居址遺物



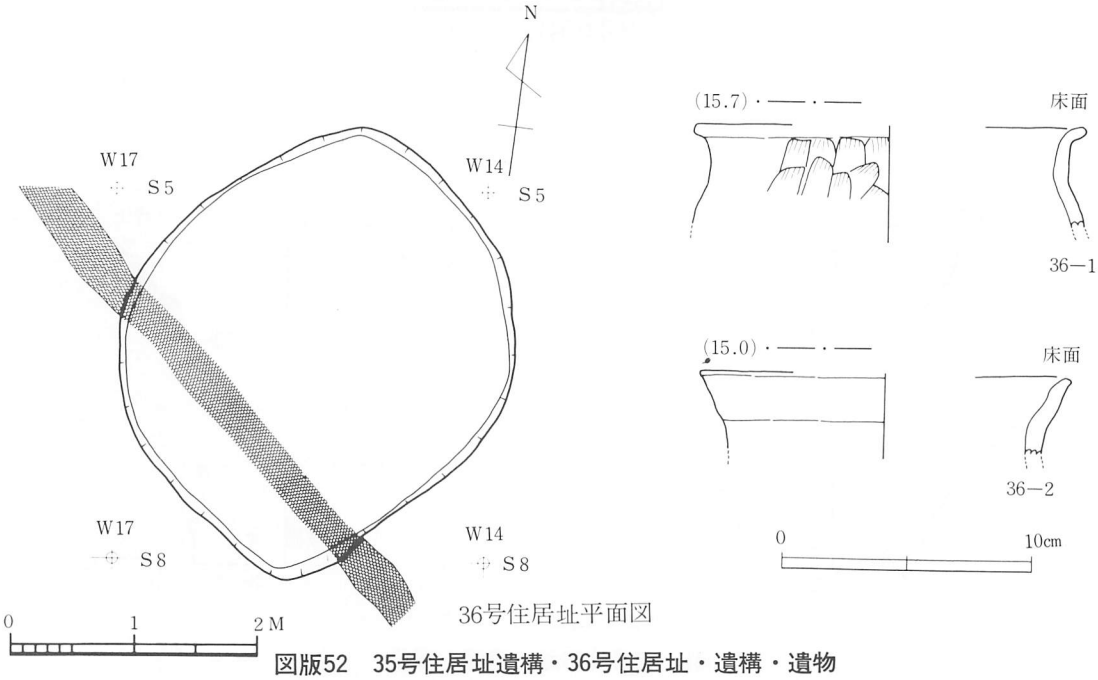
33号住居址平面図



図版51　33号住居址・遺構・遺物



35号住居址平面図



36号住居址平面図

図版52　35号住居址遺構・36号住居址・遺構・遺物

37号住居址　カマド　注記

a　地山

b　10YR 4/1にぶい黄褐色　カマド上部に使われた粘土、黒土、焼土が混じっている。固くかためられており粘性があり。

c　10YR 2/3黒褐色　黒土に焼土と炭化物の混入している層大へん軟かくネバネバしている。

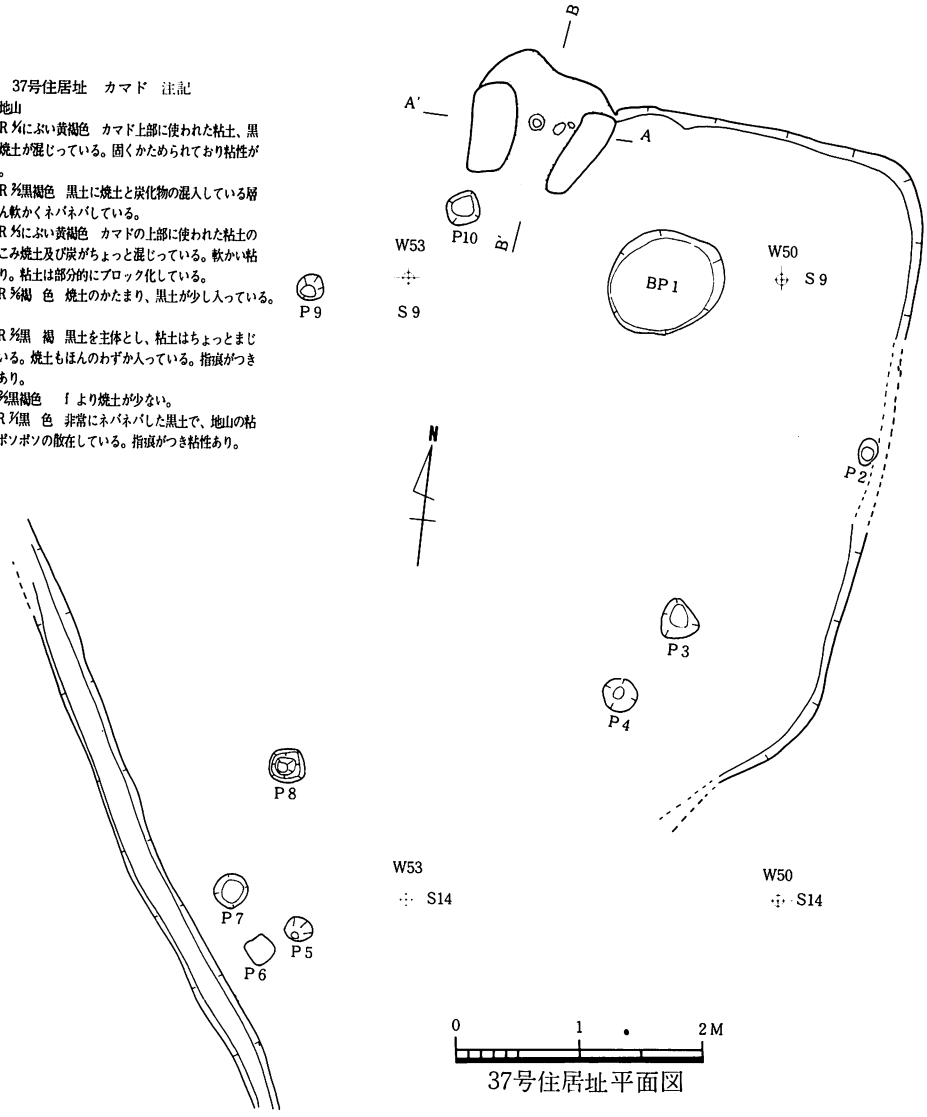
d　10YR 4/3にぶい黄褐色　カマドの上部に使われた粘土のおちこみ焼土及び炭がちょっと混じっている。軟かい粘性あり。粘土は部分的にブロック化している。

e　7.5YR 3/3褐　色　焼土のかたまり、黒土が少し入っている。る。

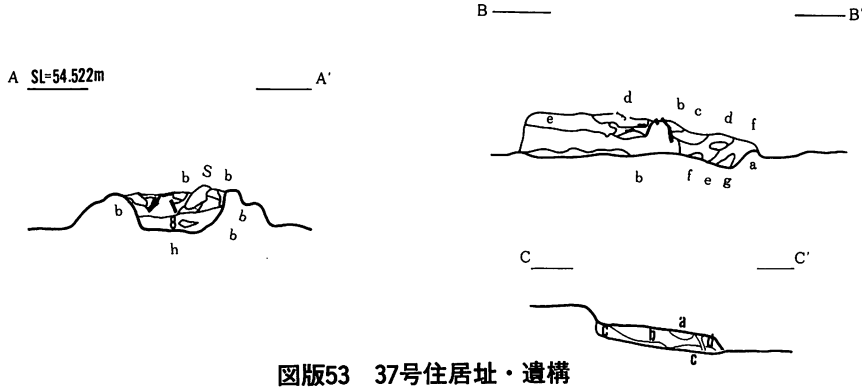
f　10YR 2/3黒　褐　黒土を主体とし、粘土はちょっとまじっている。焼土もほんのわずか入っている。指痕がつき粘性あり。

h 10YR 2/3黒褐色　f より焼土が少ない。

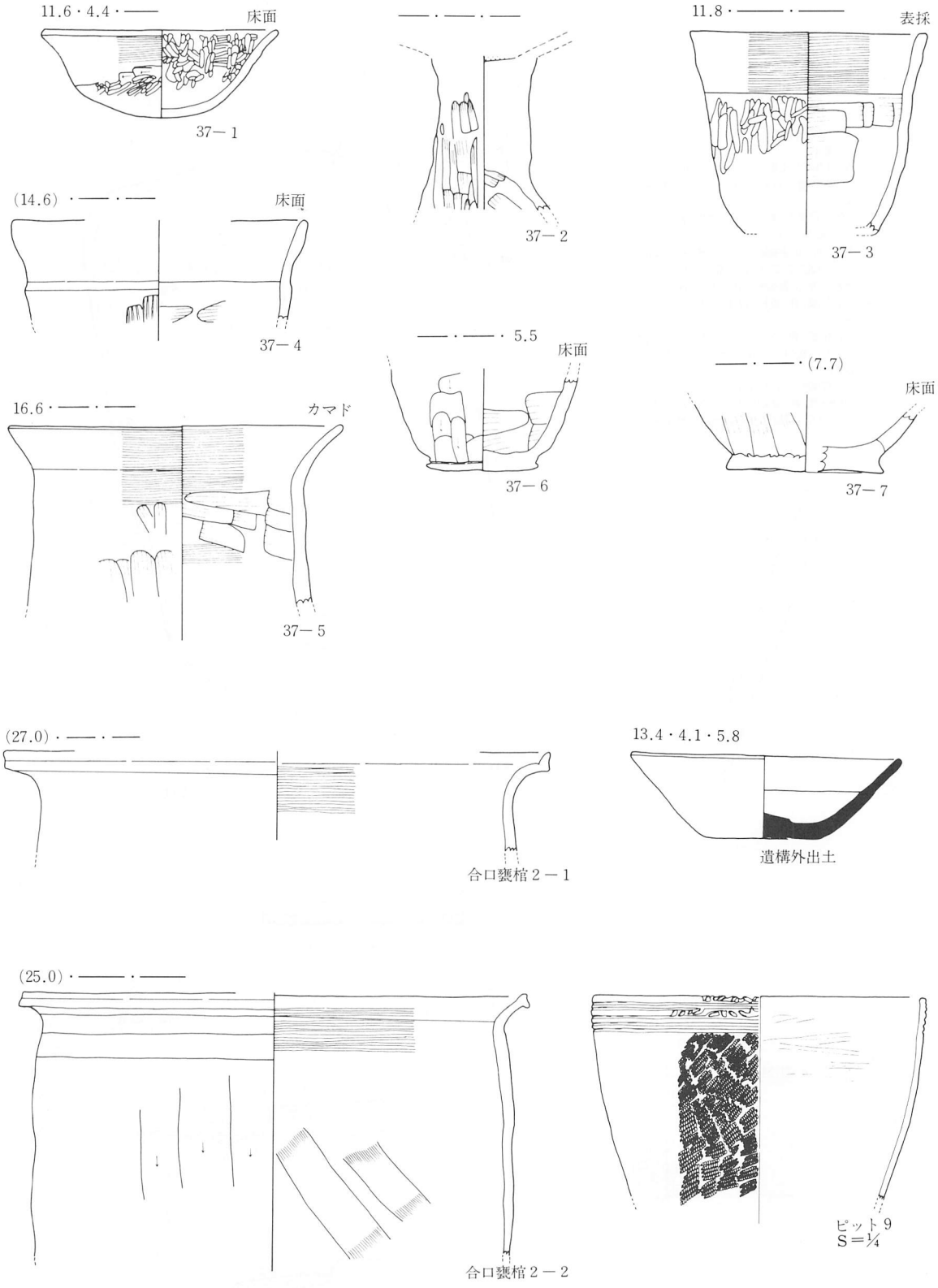
h　10YR 2/1黒　色　非常にネバネバした黒土で、地山の粘土がポソポソの散在している。指痕がつき粘性あり。



37号住居址平面図



図版53　37号住居址・遺構



図版54　37号住居址遺物・合口甕棺2—1～2 遺構外出土遺物

38号住居址注記

a 1　水田耕作土層

a 2　水田耕作土層の固くしまった層

b 1 7.5YR 2/3黒褐色　黒ボクを主体とし地山の粘土、小粒子及び　炭化粒子を含んでいる。指痕がつき、パサパサして粘性なし。

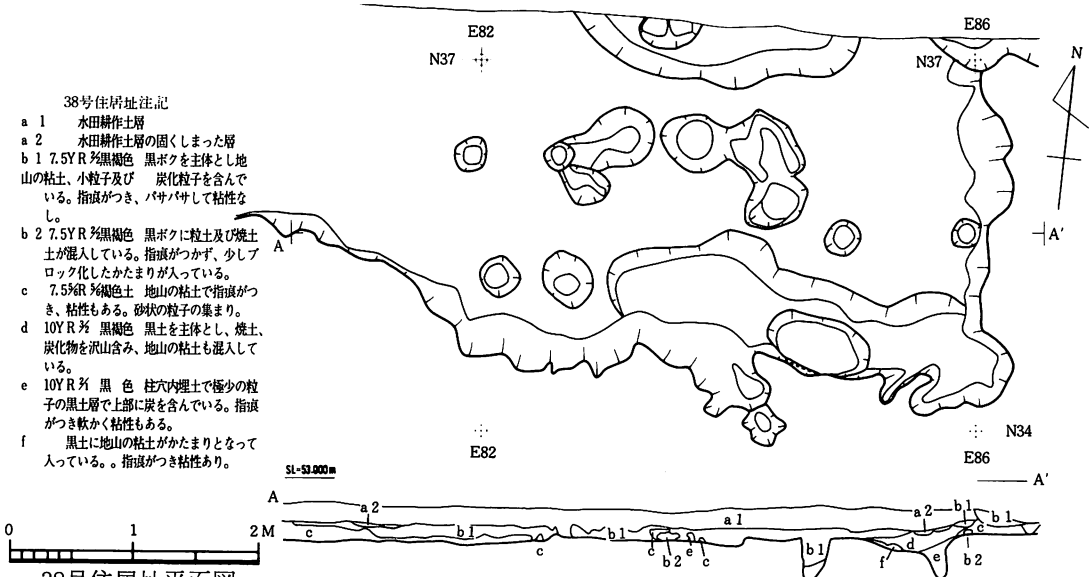
b 2 7.5YR 2/3黒褐色　黒ボクに粒土及び焼土土が混入している。指痕がつかず、少しブロック化したかたまりが入っている。

c　7.5YR 3/4褐色土　地山の粘土で指痕がつき、粘性もある。砂状の粒子の集まり。

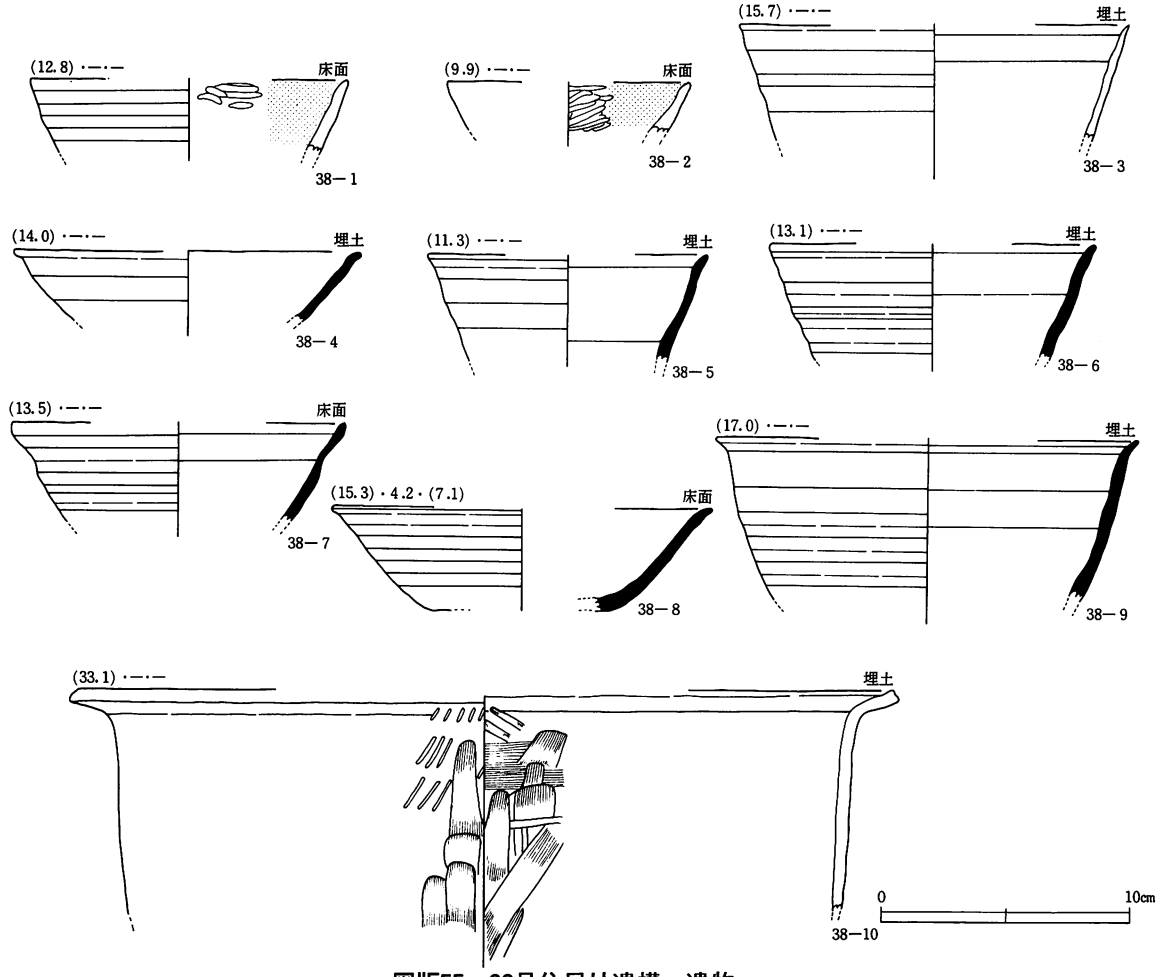
d　10YR 2/3　黒褐色　黒土を主体とし、焼土、炭化物を沢山含み、地山の粘土も混入している。

e　10YR 2/1　黒　色　柱穴内埋土で極少の粒子の黒土層で上部に炭を含んでいる。指痕がつき軟かく粘性もある。

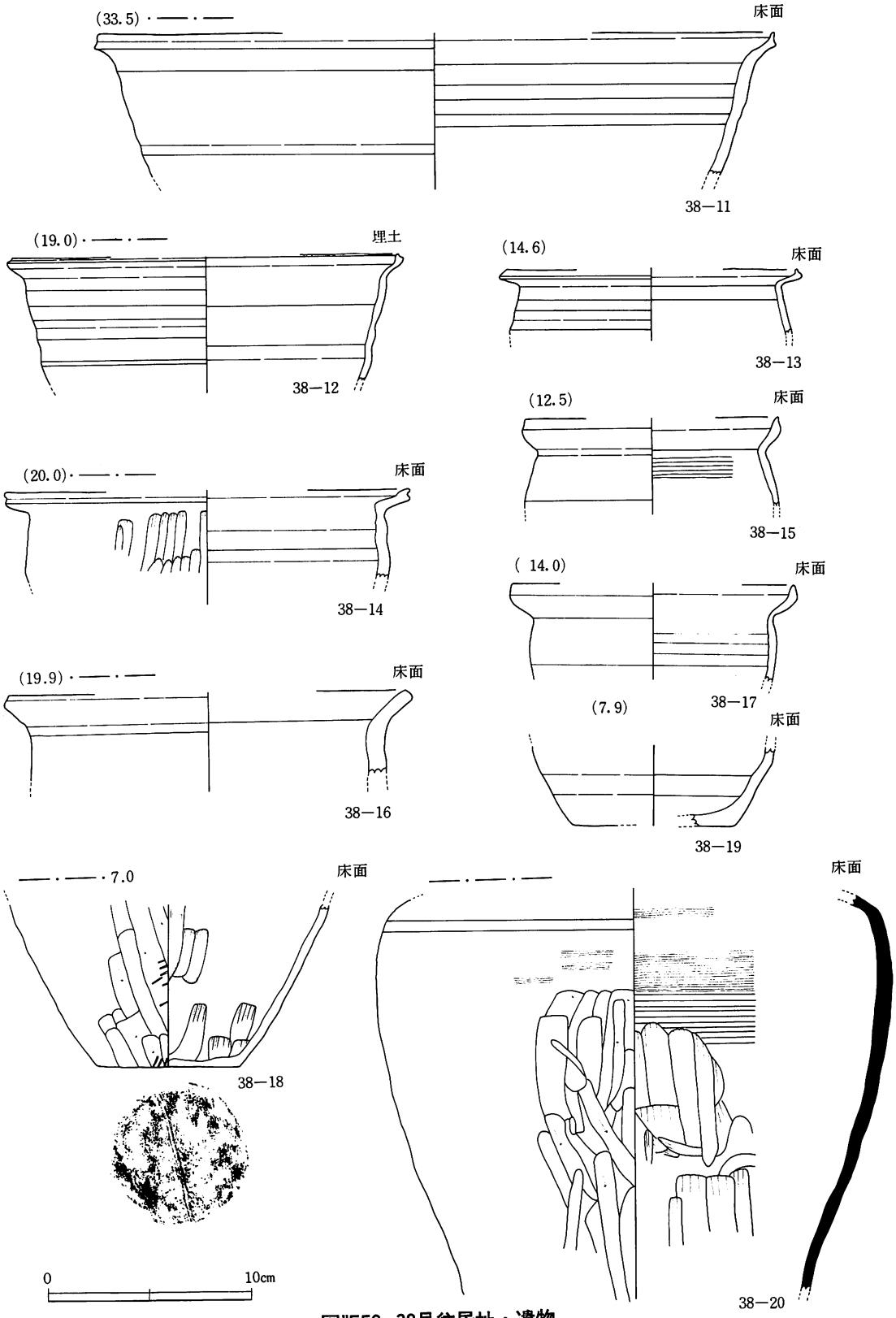
f　黒土に地山の粘土がかたまりとなって入っている。。指痕がつき粘性あり。



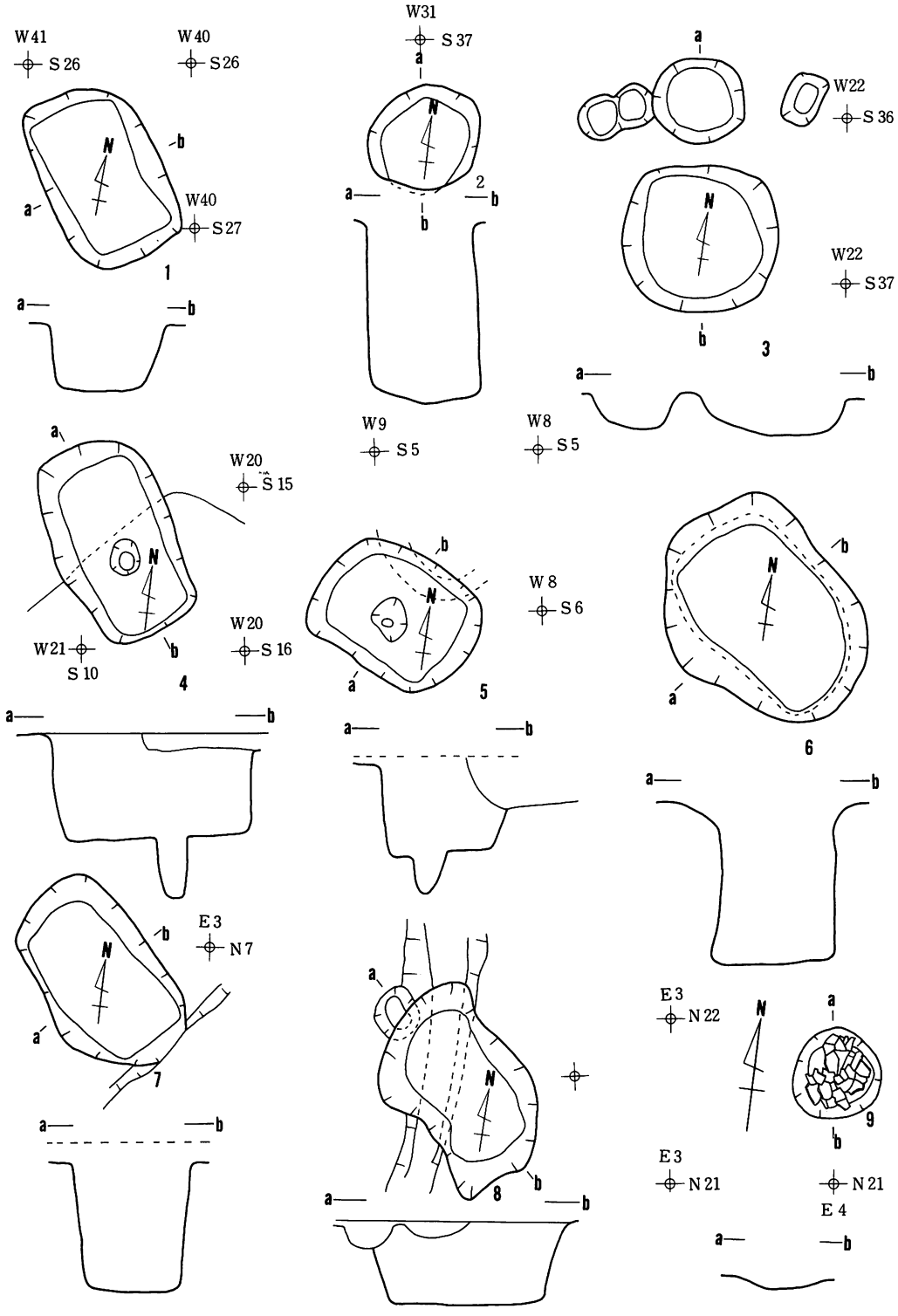
38号住居址平面図



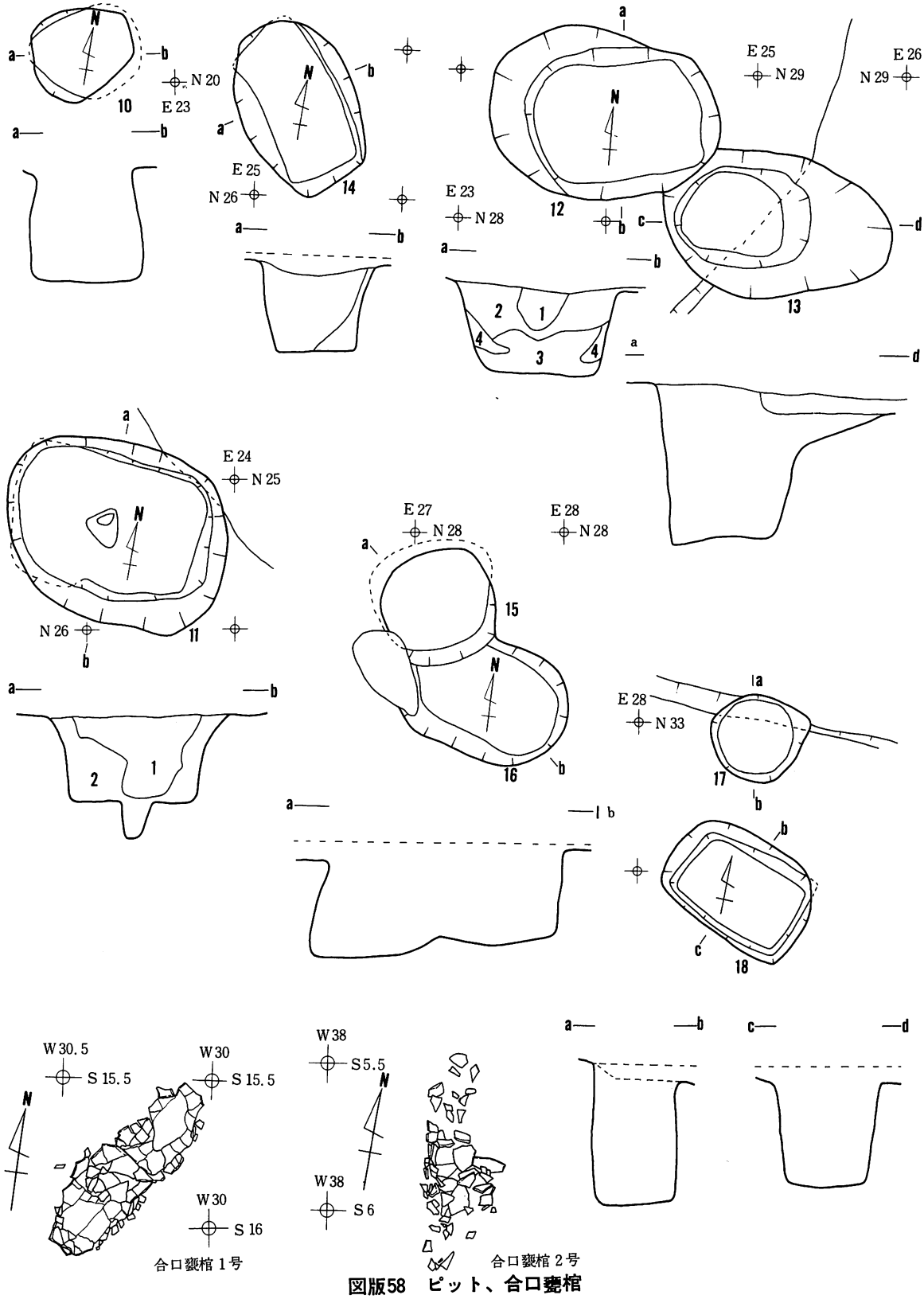
図版55　38号住居址遺構・遺物



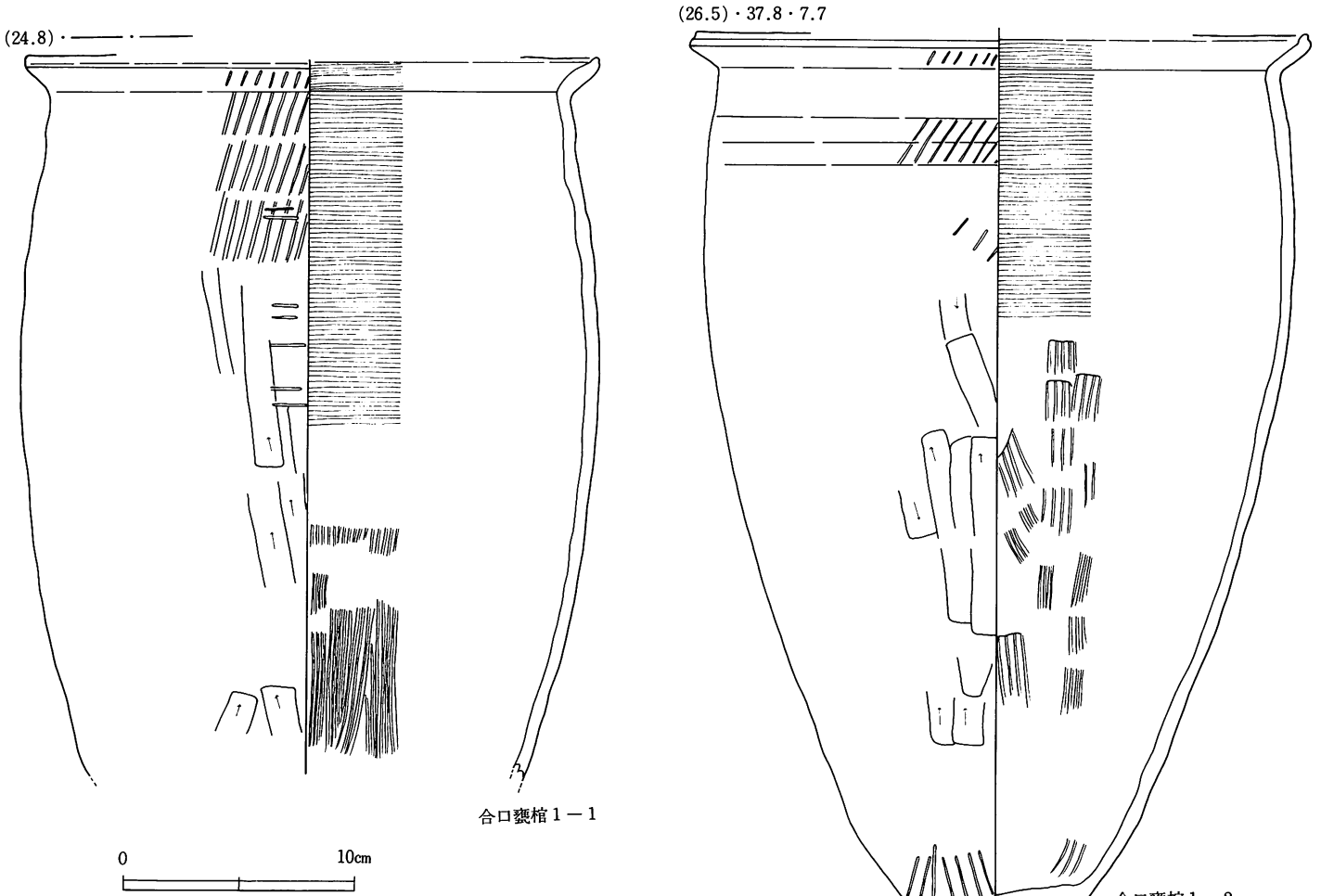
図版56　38号住居址・遺物


W41
S 26
W40
S 26
W40
S 27
1
W31
S 37
2
W22
S 36
W22
S 37
3
W9
S 5
W8
S 5
W20
S 15
W21
S 10
W20
S 16
4
W 8
S 6
5
6
E 3
N 7
7
8
E 3
N 22
9
E 3
N 21
N 21
E 4

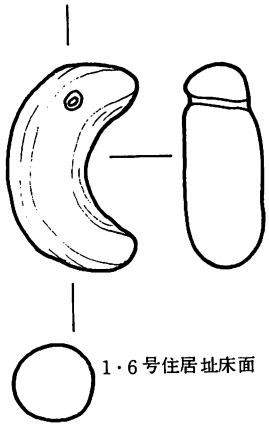
図版57　ピット



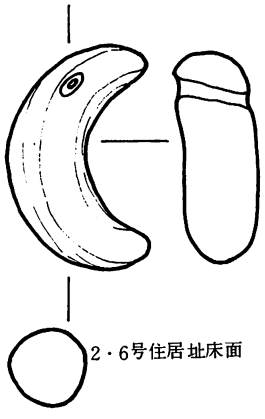
図版58　ピット、合口甕棺



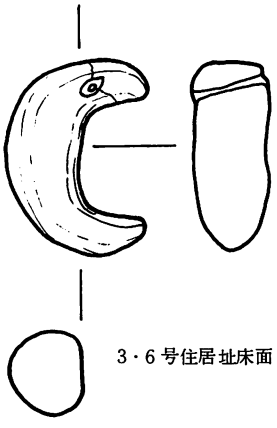
図版59　合口甕棺１～１～２



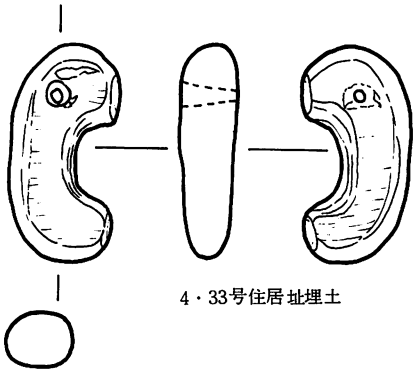
1・6号住居址床面



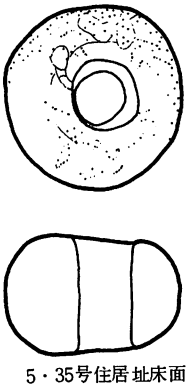
2・6号住居址床面



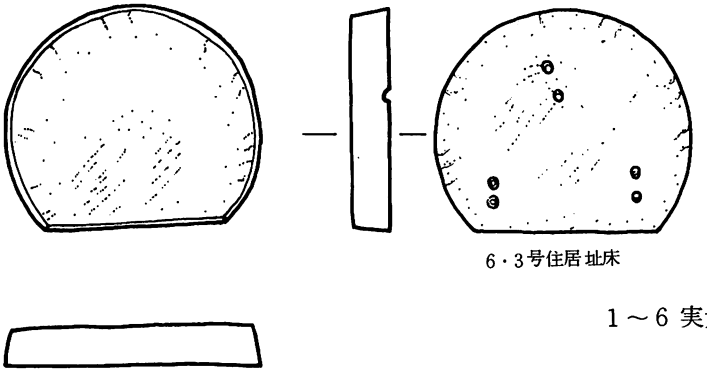
3・6号住居址床面



4・33号住居址埋土



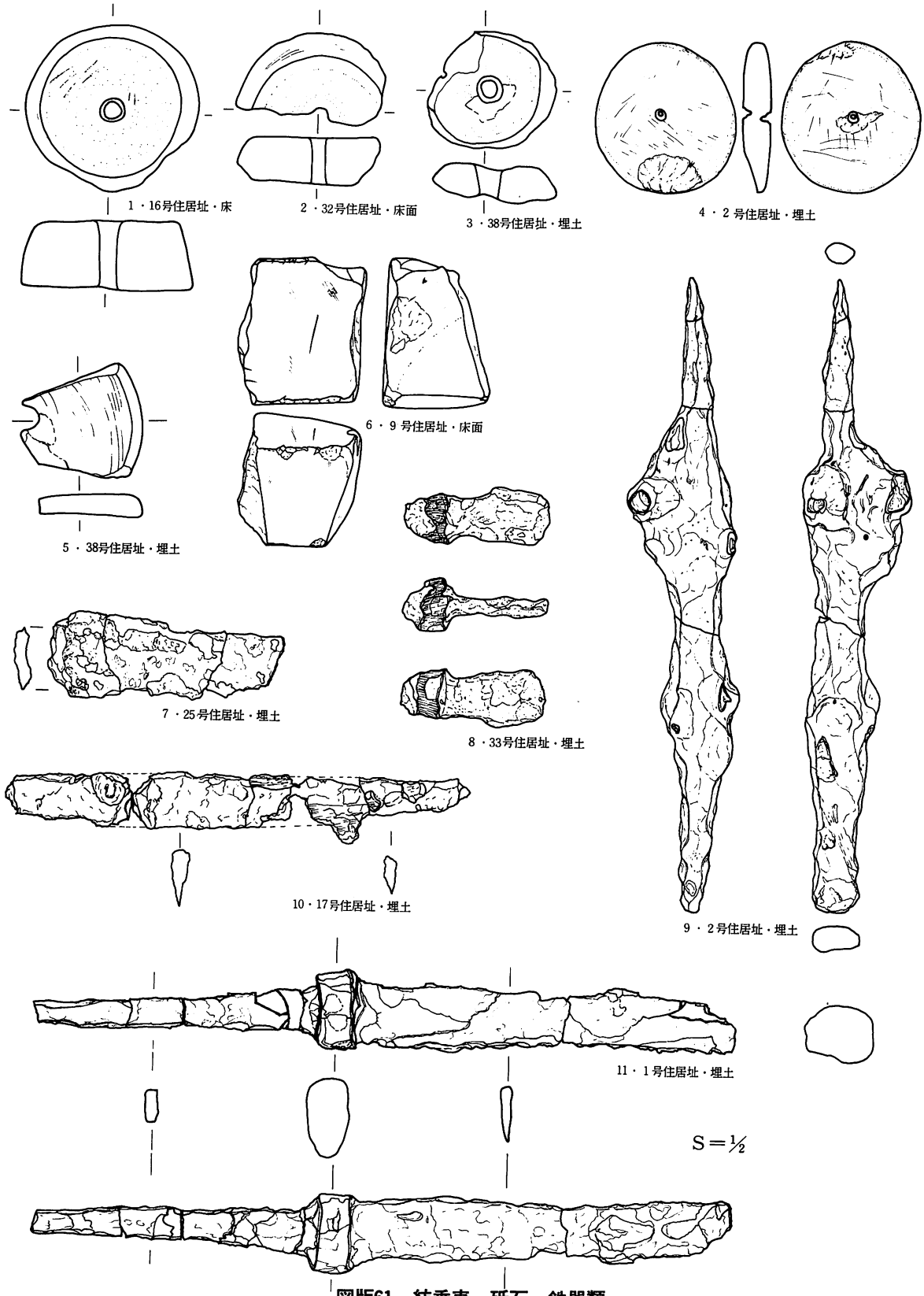
5・35号住居址床面



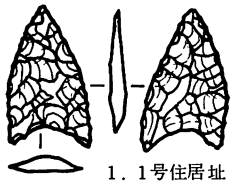
6・3号住居址床

1～6 実大

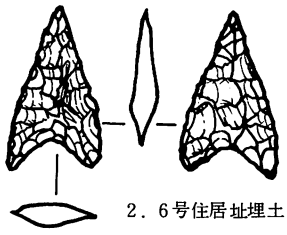
図版60　勾玉・小玉・石帯



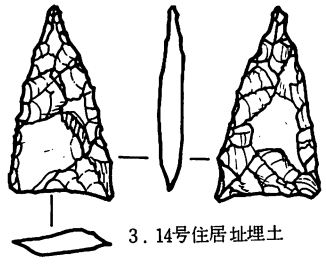
図版61　紡垂車・砥石・鉄器類



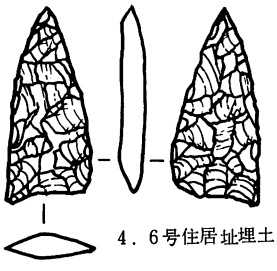
1．1号住居址



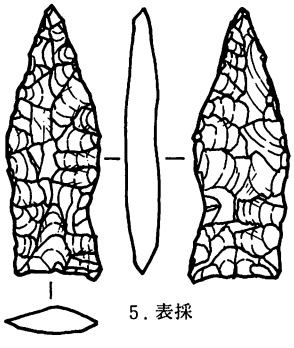
2．6号住居址埋土



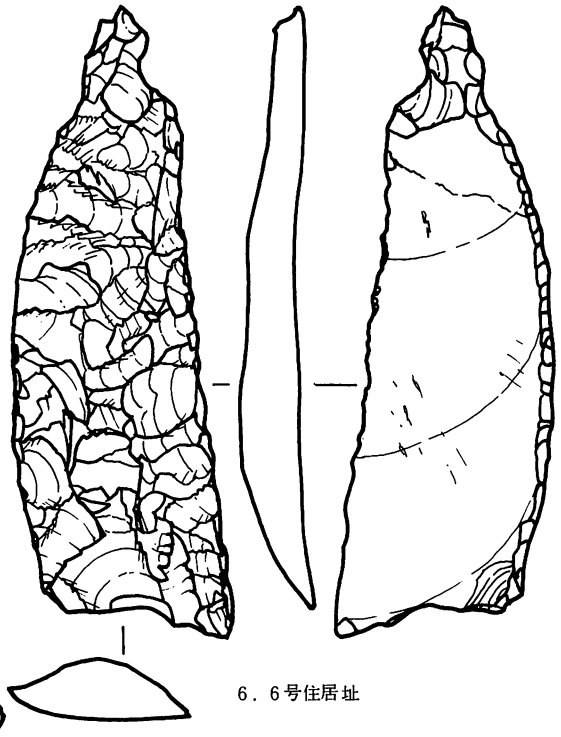
3．14号住居址埋土



4．6号住居址埋土

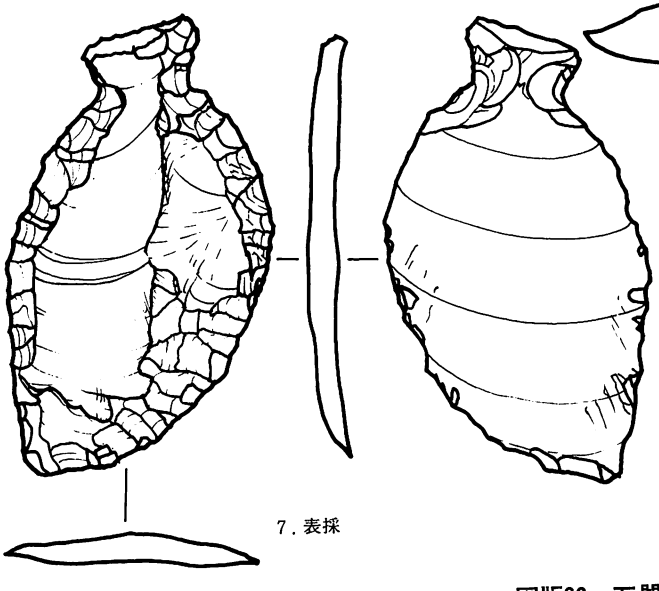


5．表採

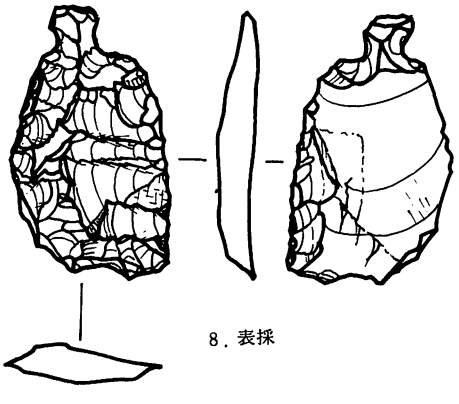


6．6号住居址

1～8実大

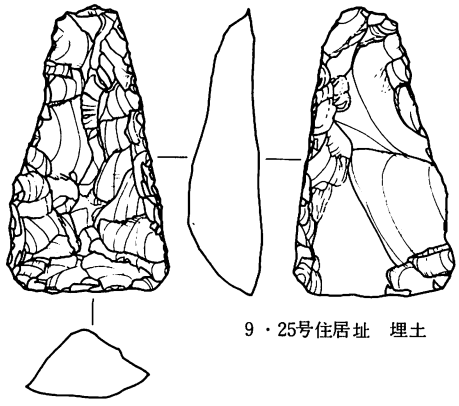


7．表採

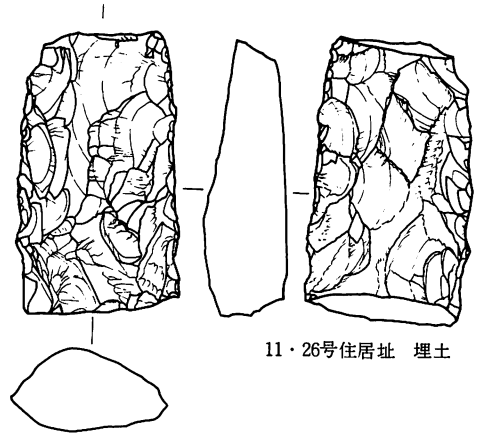


8．表採

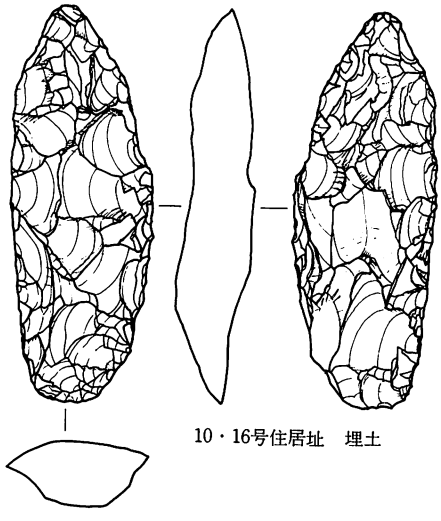
図版62　石器



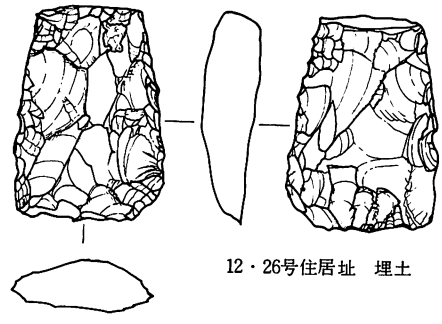
9・25号住居址　埋土



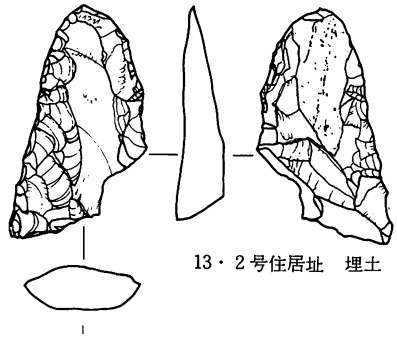
11・26号住居址　埋土



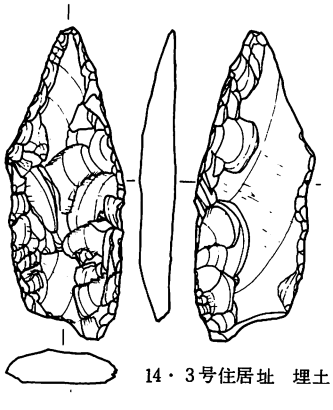
10・16号住居址　埋土



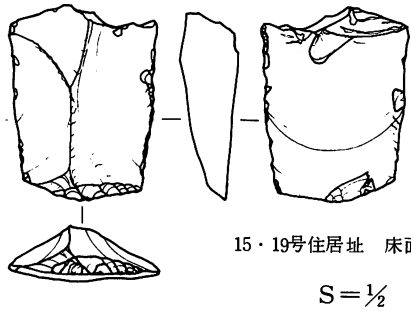
12・26号住居址　埋土



13・2号住居址　埋土

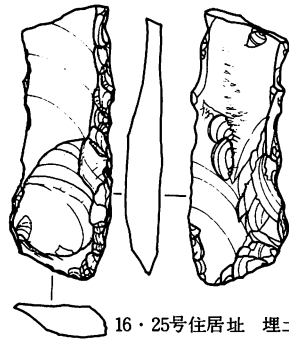


14・3号住居址　埋土



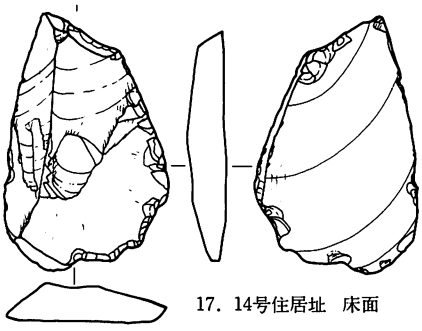
15・19号住居址　床面

S＝½

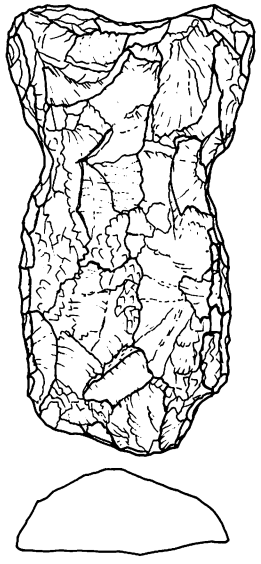


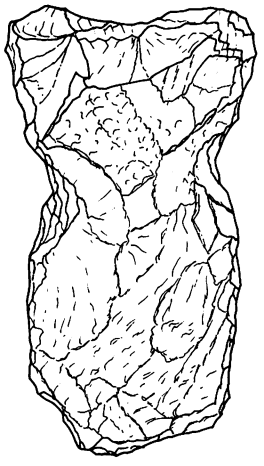
16・25号住居址　埋土

図版63　石器

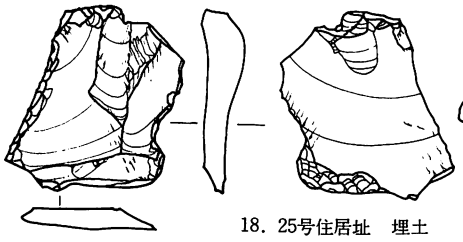


17．14号住居址　床面

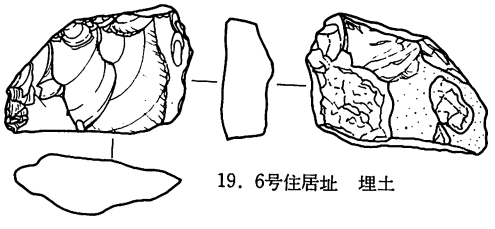




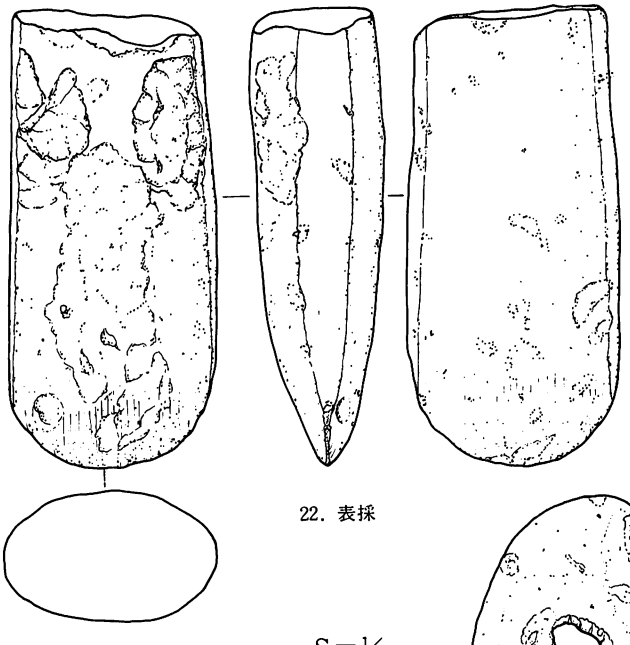
21．25号住居址　埋土



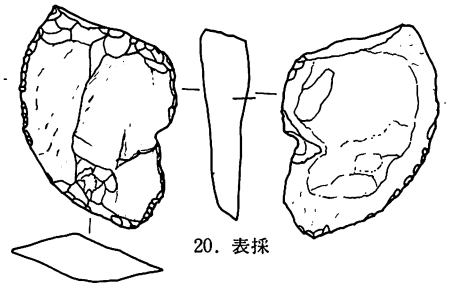
18．25号住居址　埋土



19．6号住居址　埋土

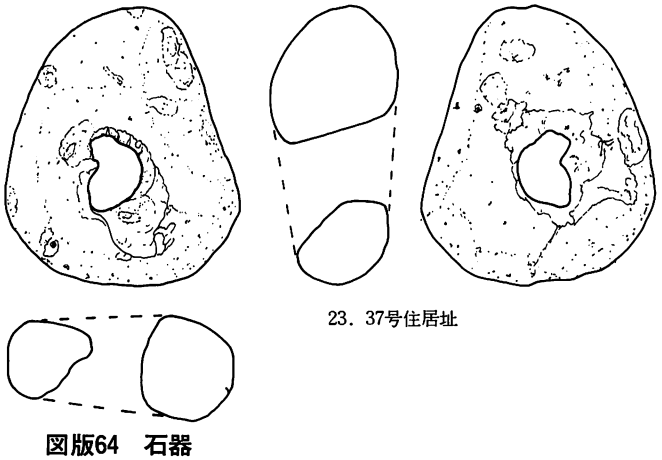


22．表採



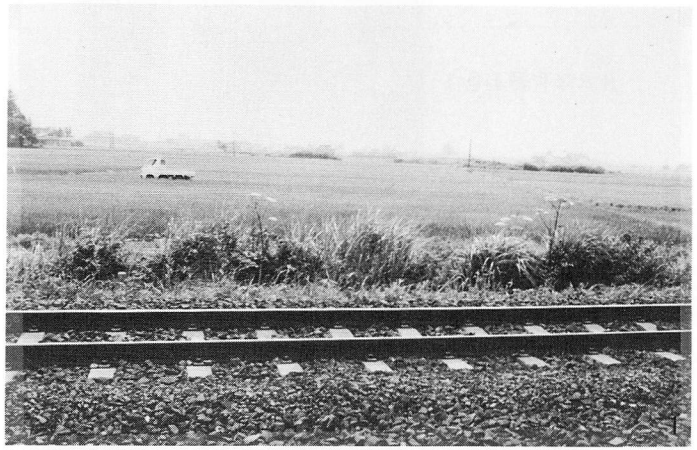
20．表採

S＝½



23．37号住居址

図版64　石器



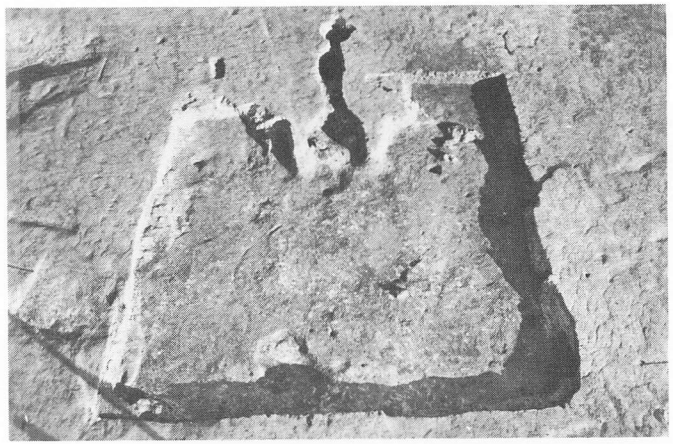
遺跡全景　東側から

遺跡全景　東から

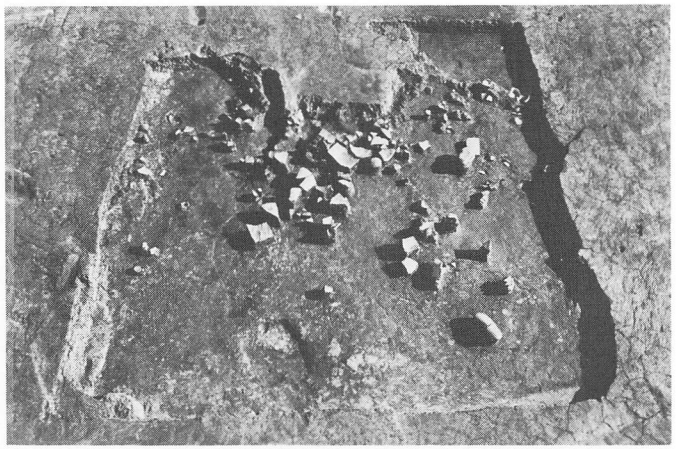
空中写真

調査状況

写真図版 1

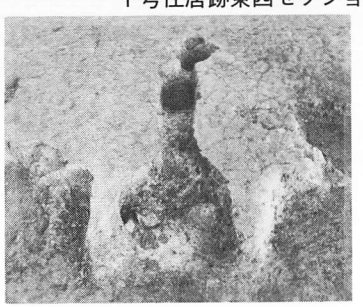


1号住居址完掘

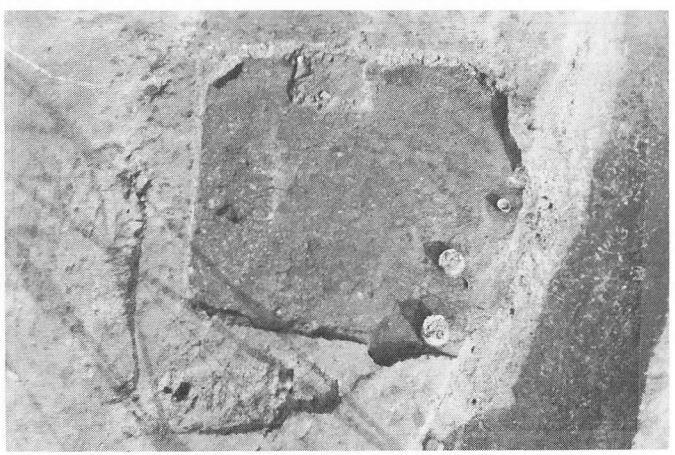


遺物出土状況

1号住居跡東西セクション

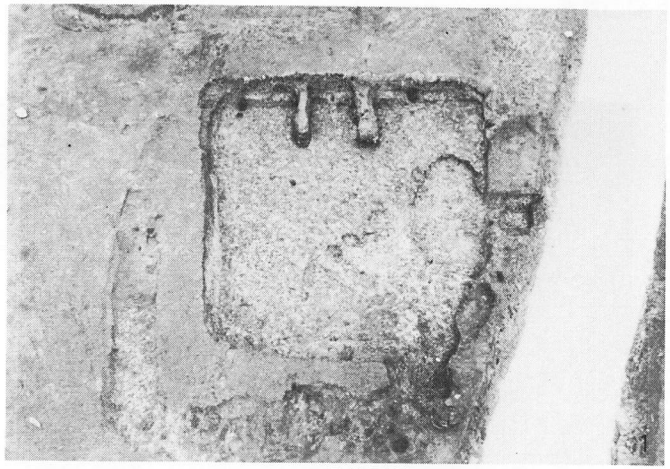


1号住居址カマド

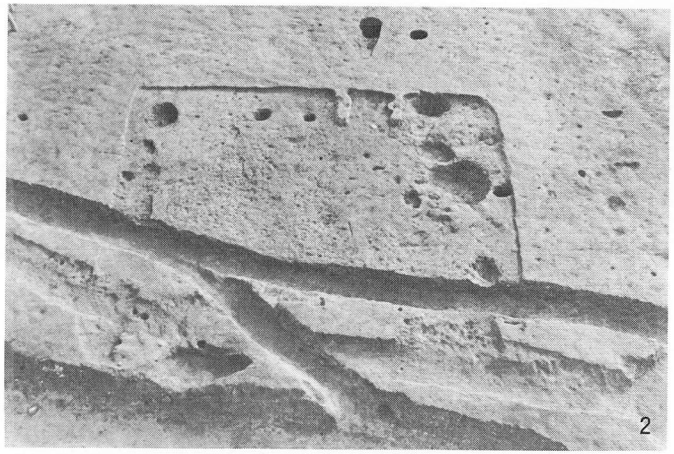


2号　24号住居址平面

写真図版2

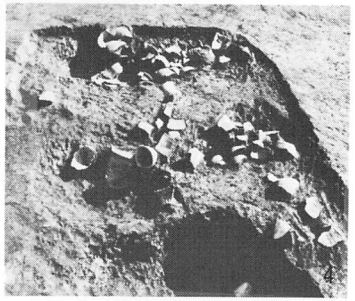


2　24号住居址

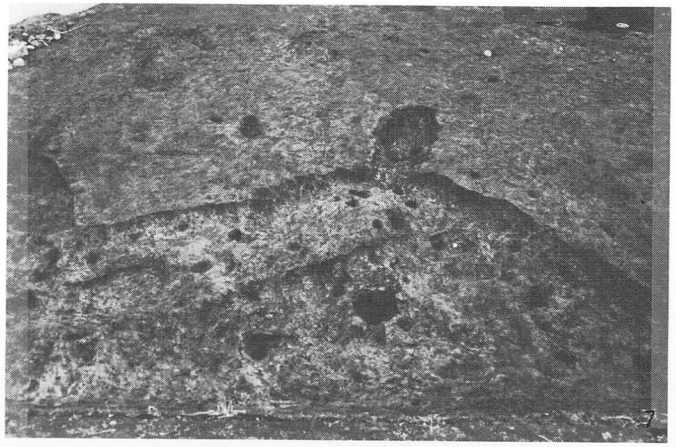


3号住居址平面

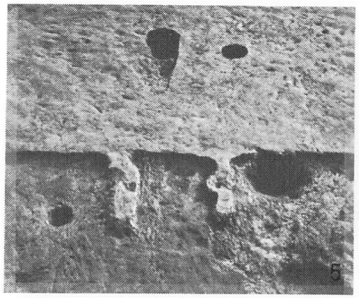
3号住居址煙出し遺物出土状況



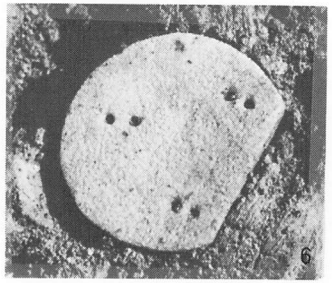
3号住居址遺物出土状況



4号住居址平面

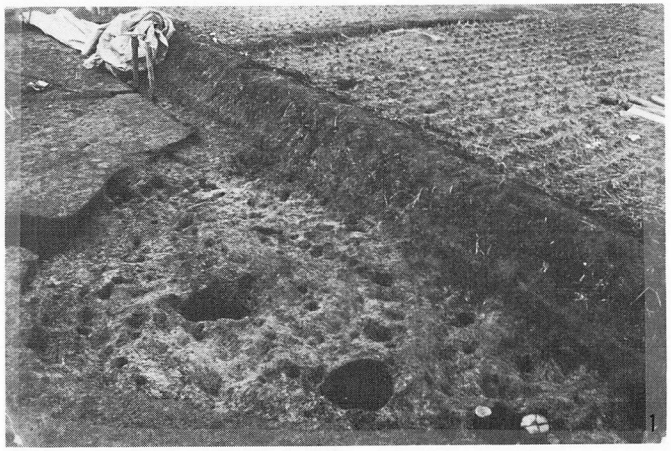


5　3号住居址カマド

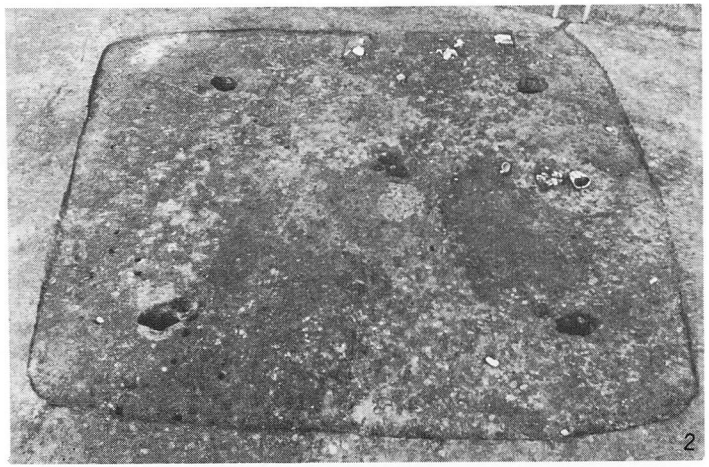


3号住居址石帯出土状況

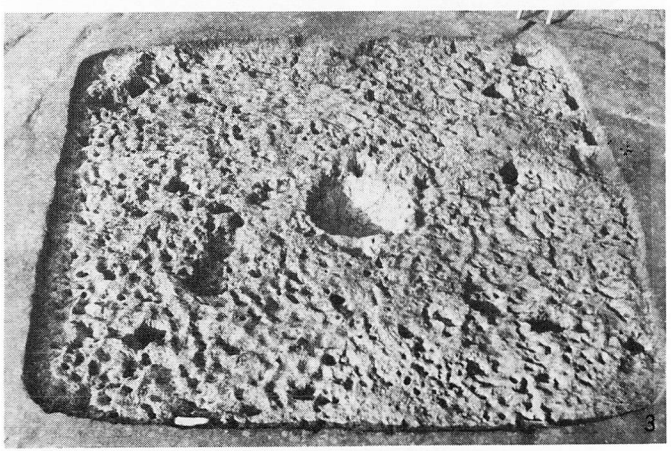
写真図版 3



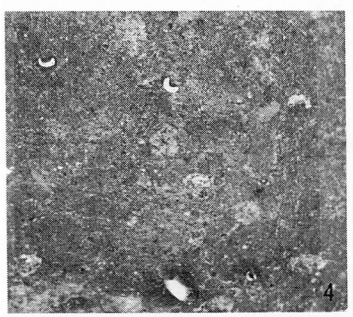
5号住居址平面

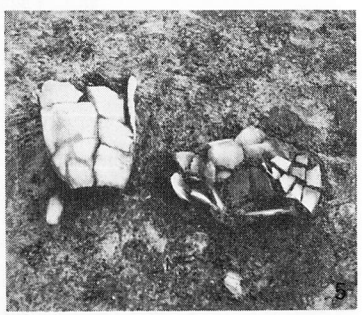


6号住居址平面



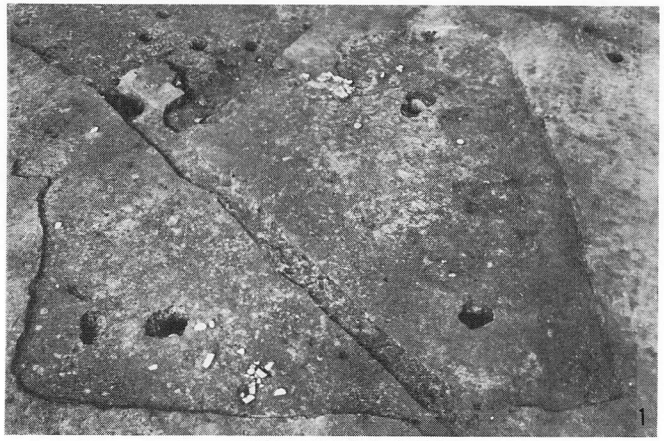
6号住居址床面下部の状況



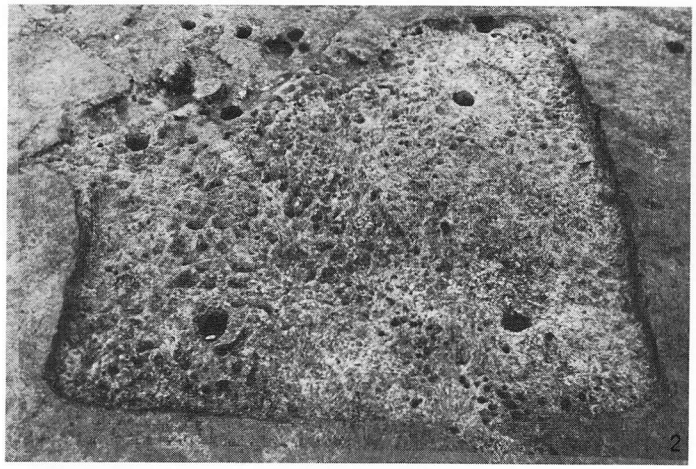


6号住居址遺物出土状況

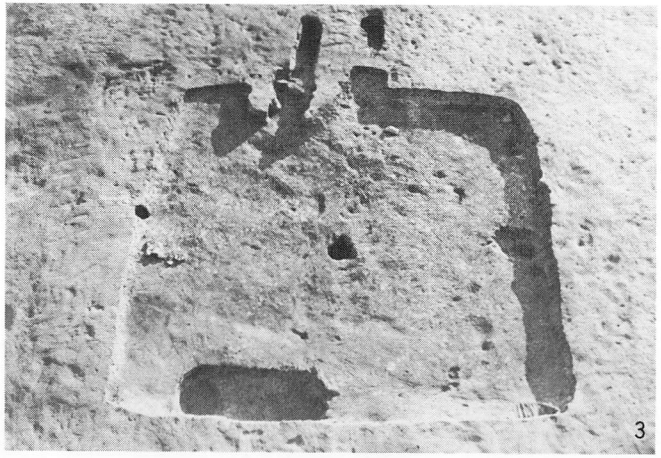
写真図版 4



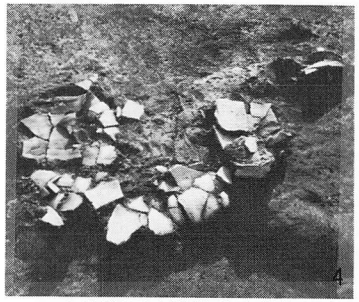
8 号住居址遺物出土状況



8 号住居址平面



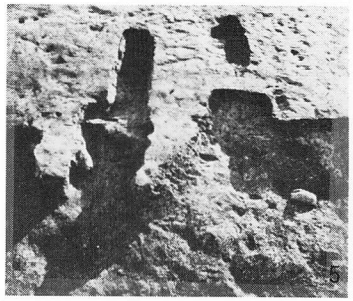
9 号住居址平面

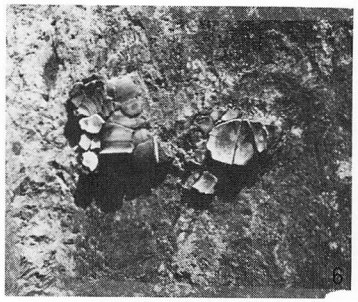


8 号住居地遺物出土状況

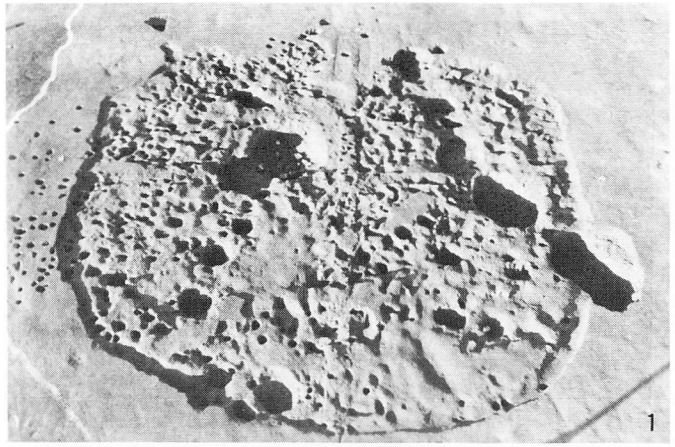
5，9 号住居址カマド

6，9 号住居址遺物出土状況



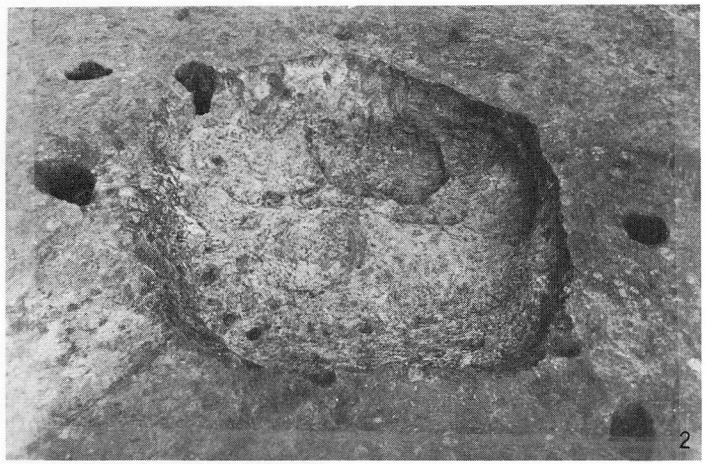


写真図版 5

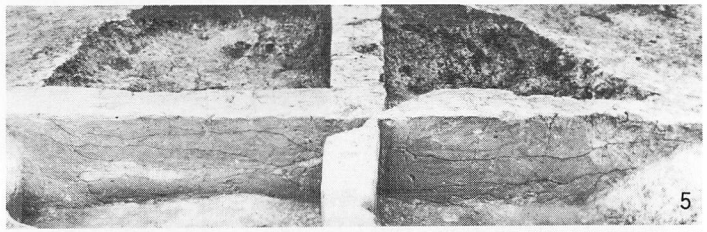


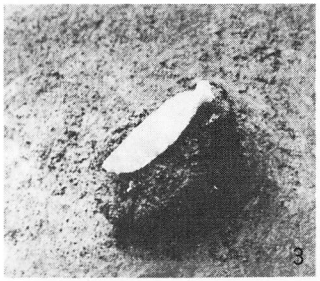
10号住居址平面

11号址平面



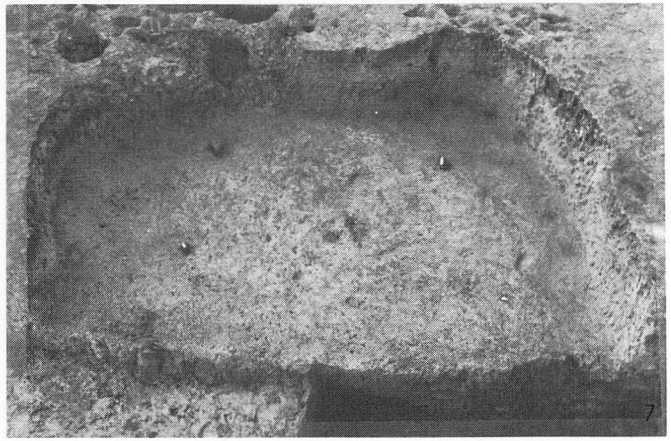
11号址断面



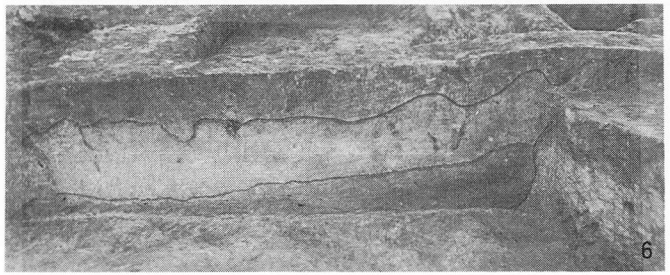


3,4,13号住居址
石ヒ出土状況

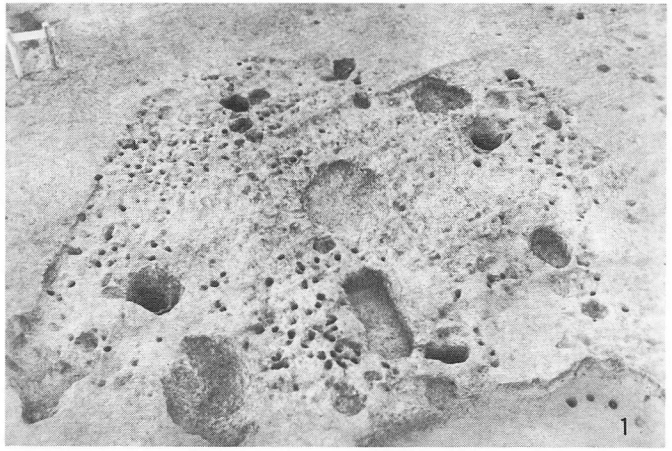
13号住居址平面



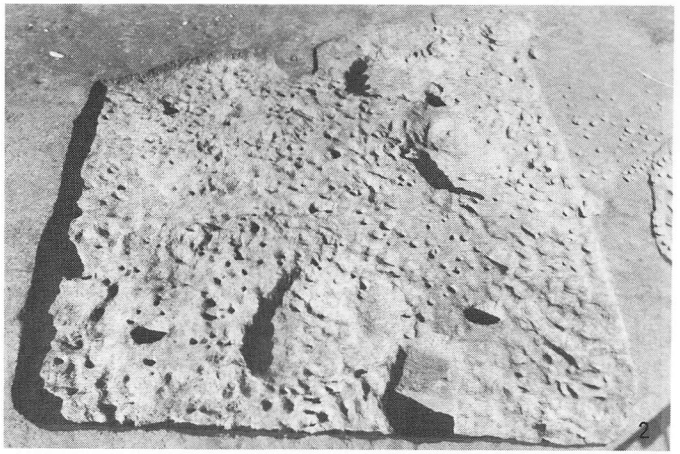
13号住居址断面



写真図版 6

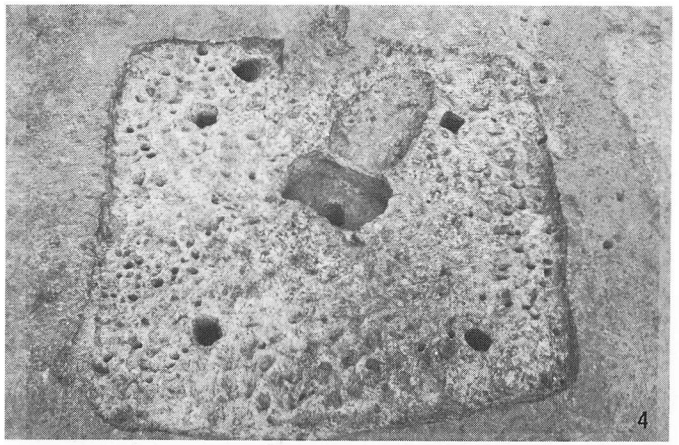


14号住居址平面



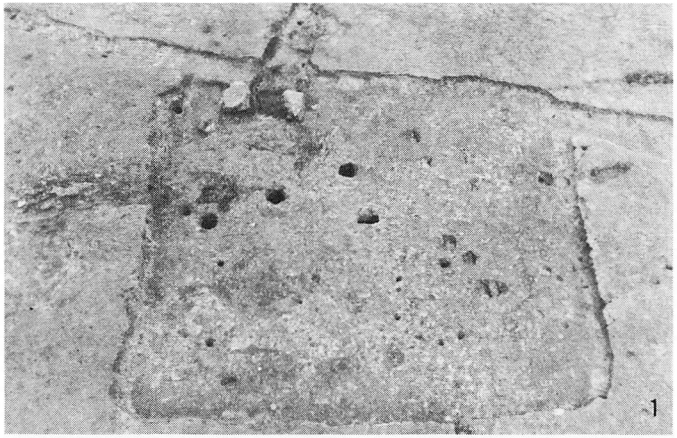
15号住居址平面

16号住居址平面

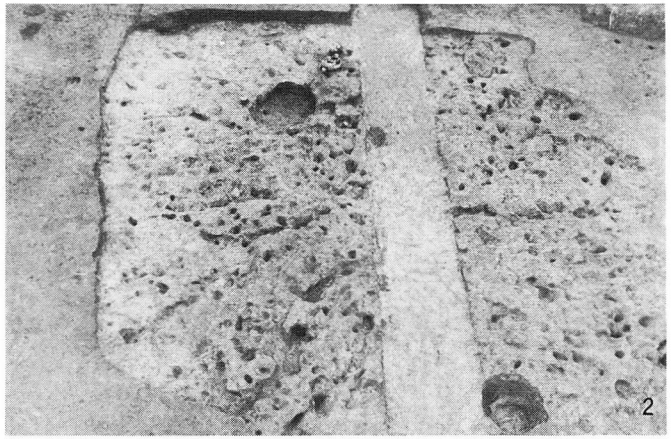


16号住居址床面下部の状況

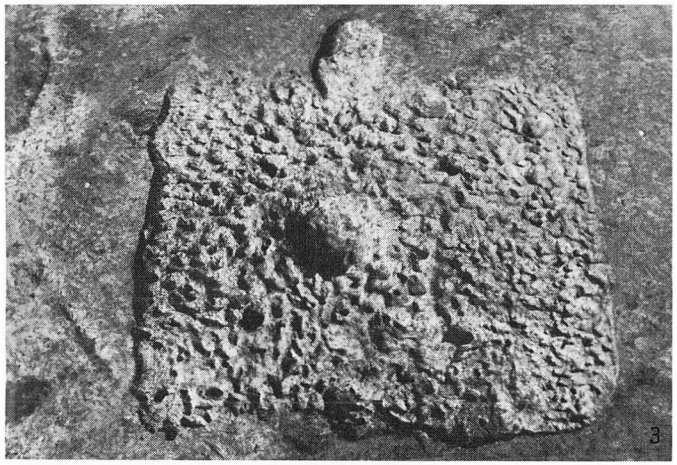
写真図版 7



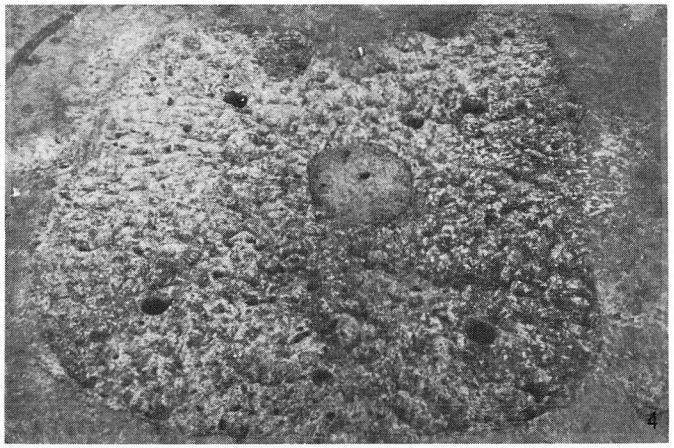
17号住居址平面



19号住居址平面

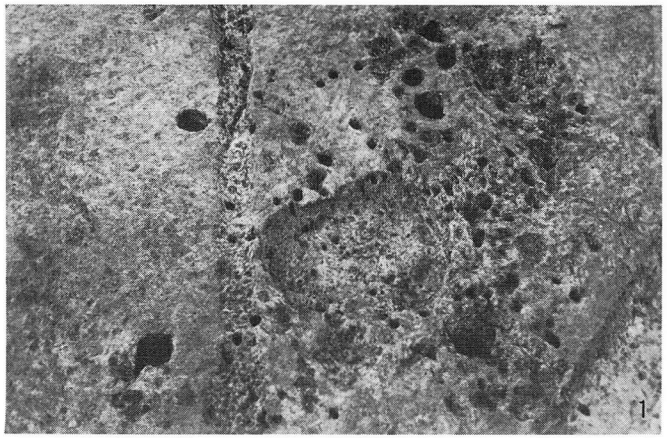


20号住居址平面

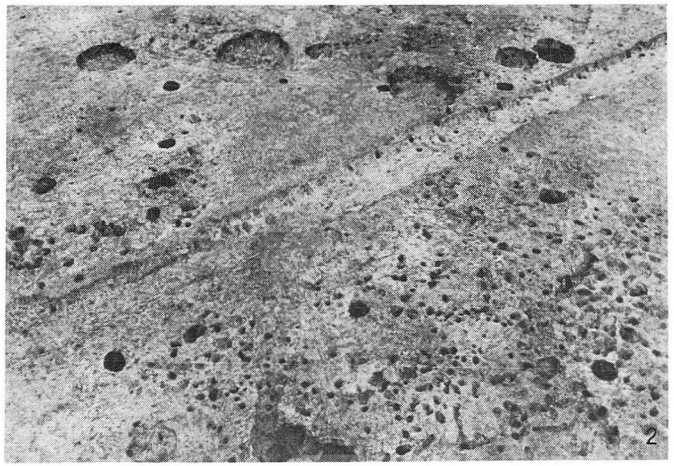


21号住居址平面

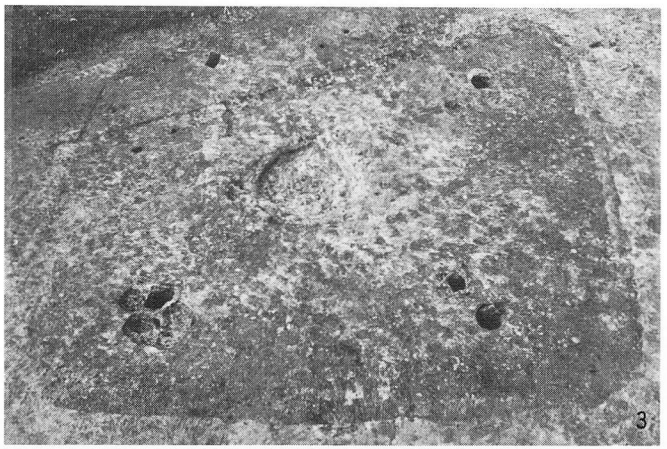
写真図版 8



22号住居址平面

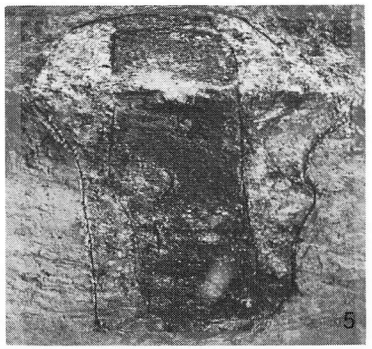


23号住居址平面



25号住居址平面

25号住居址柱穴平面

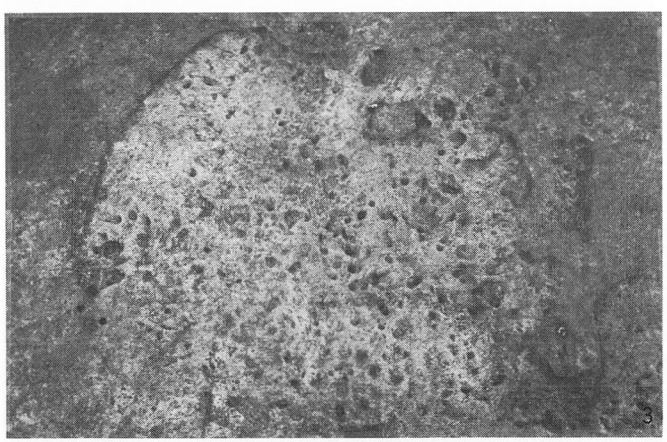


25号住居址柱穴断面

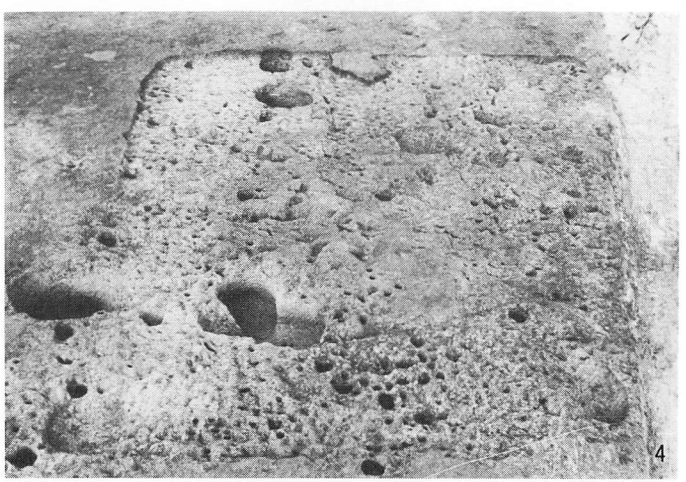
写真図版 9

26号住居址平面

27号住居址平面

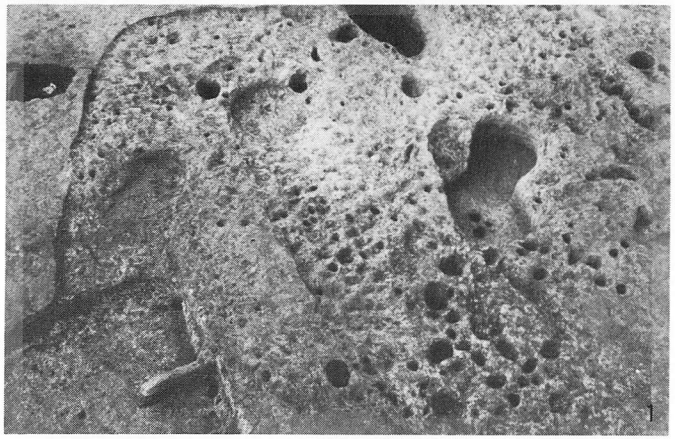


30号住居址平面

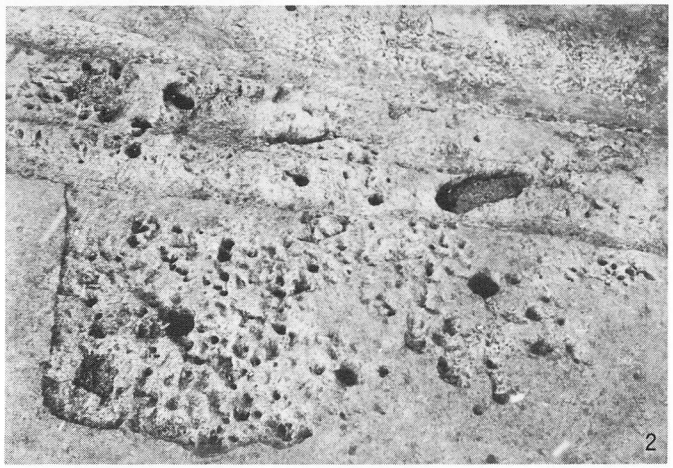


31号住居址平面

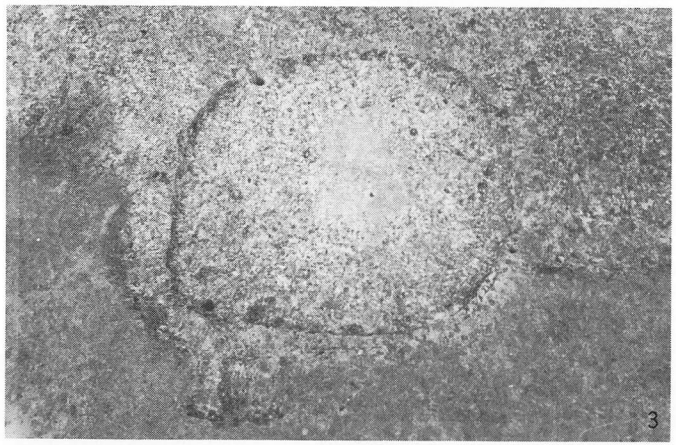
写真図版10



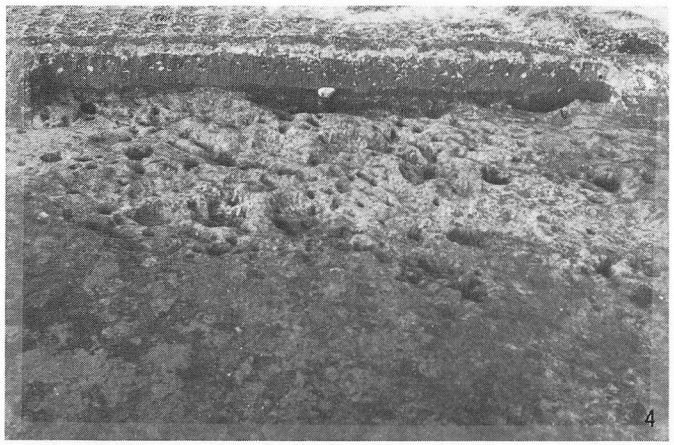
32号住居址平面



33号住居址平面

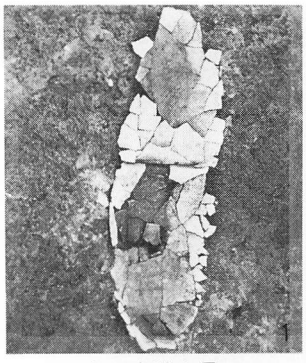


36号址平面



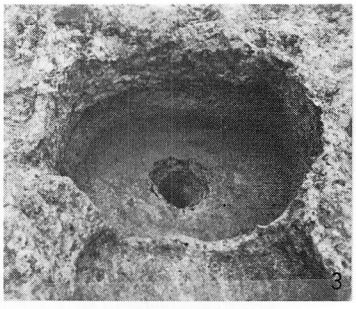
38号住居址平面

写真図版11

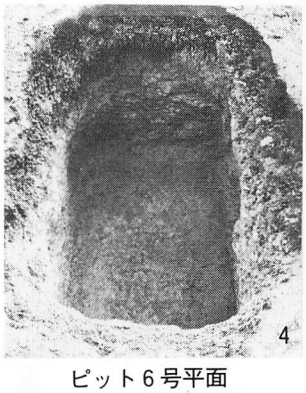


合口甕棺１号

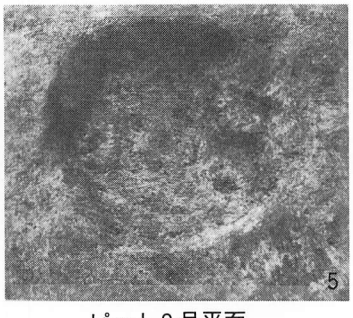
合口甕棺２号



ピット４号平面

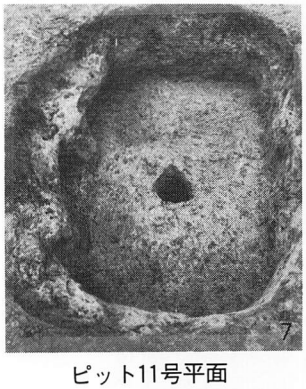


ピット６号平面

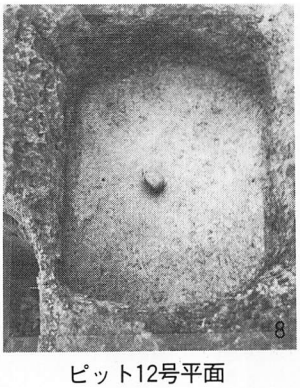


ピット９号平面

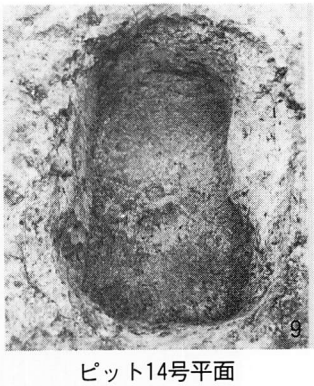
ピット９号遺物出土状況



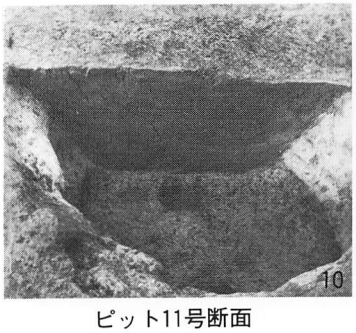
ピット11号平面



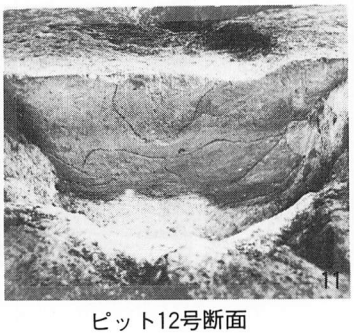
ピット12号平面



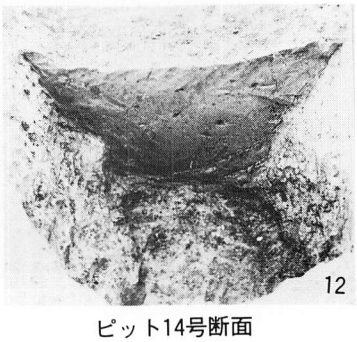
ピット14号平面



ピット11号断面

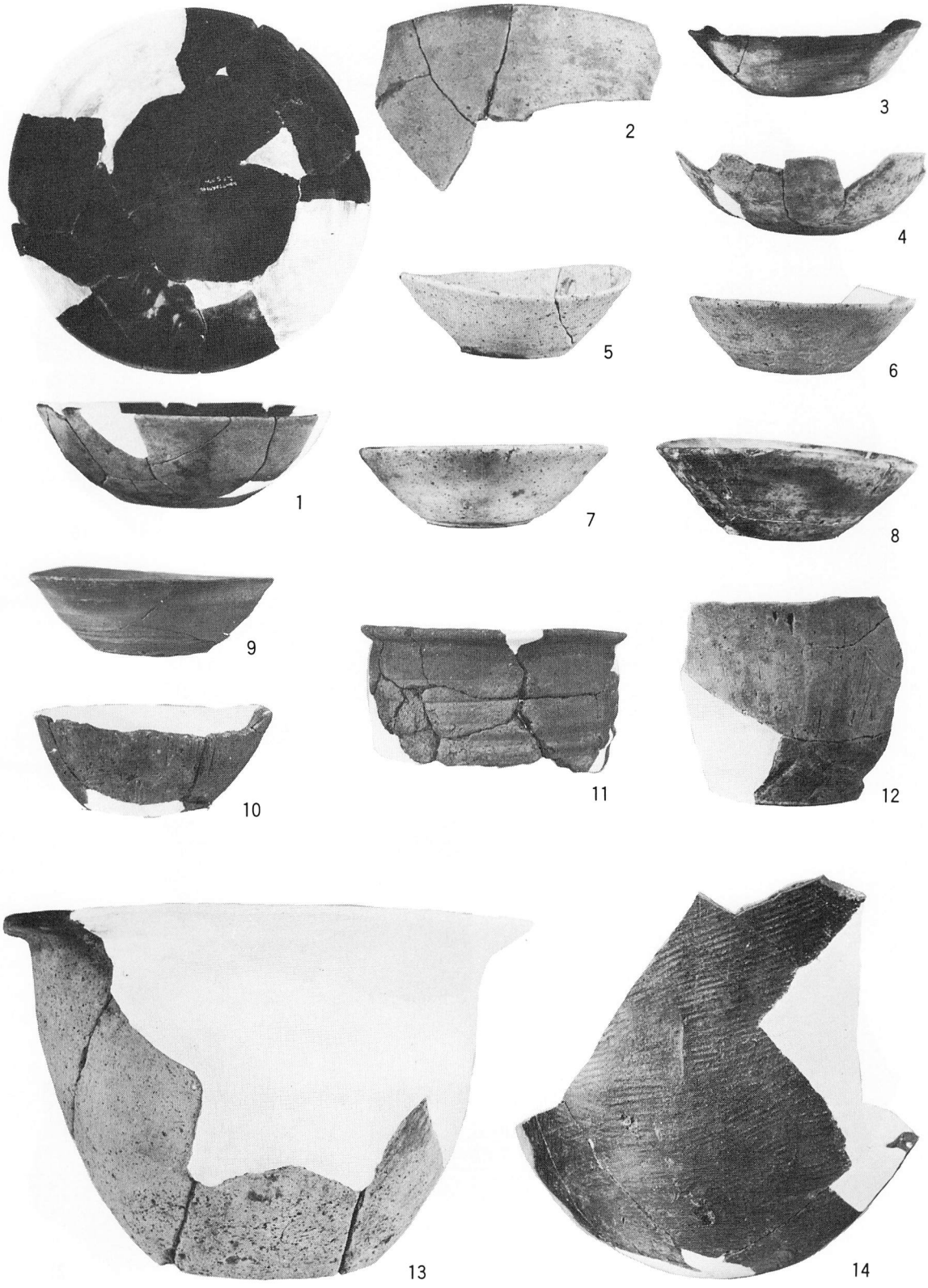


ピット12号断面

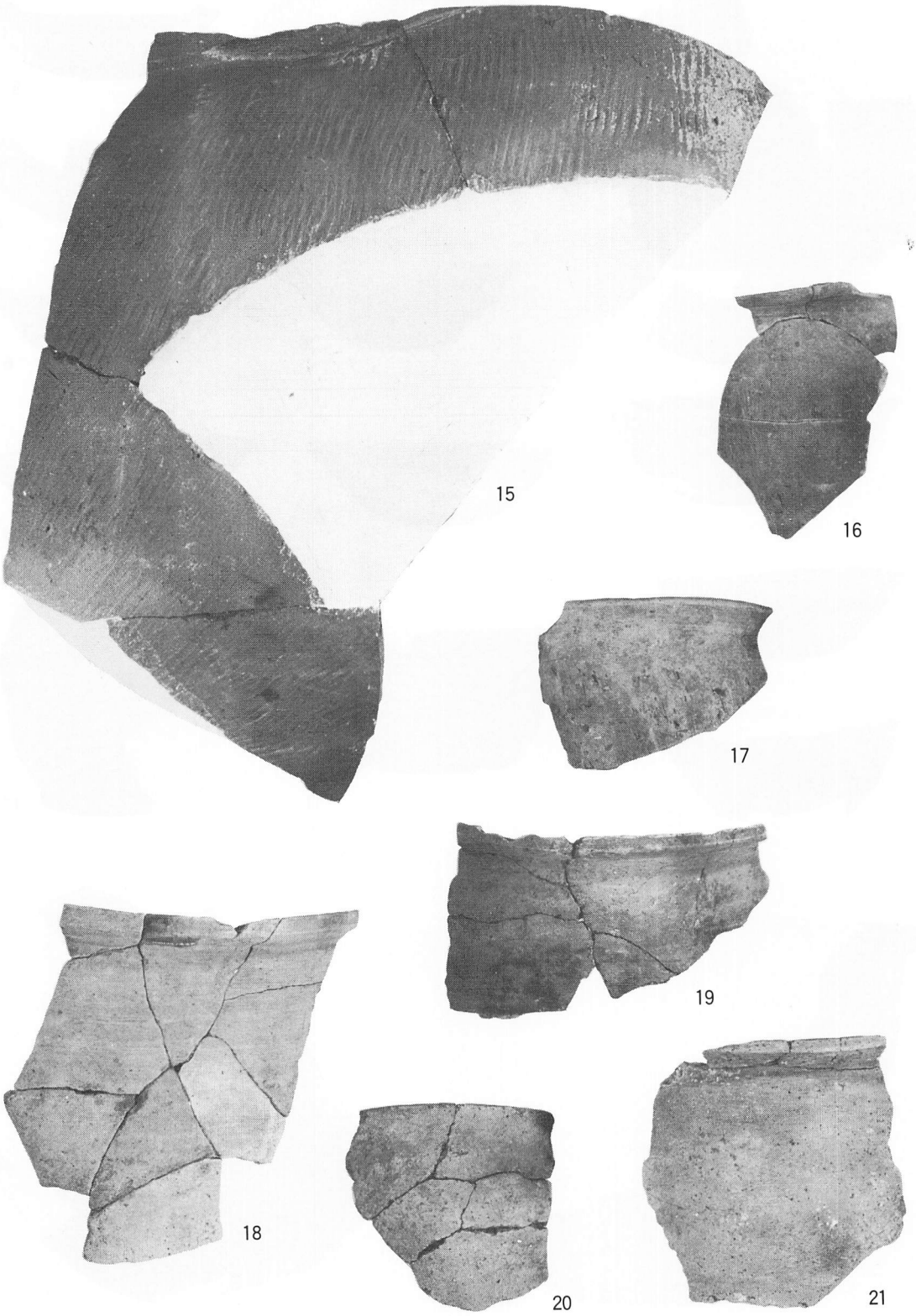


ピット14号断面

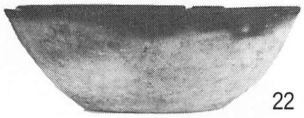
写真図版12



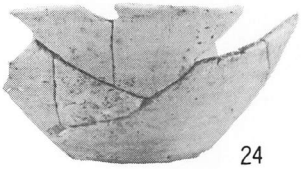
写真図版13

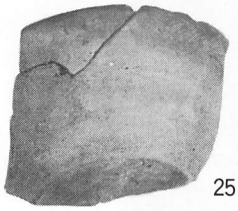


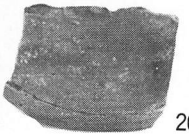
写真図版14


22

23

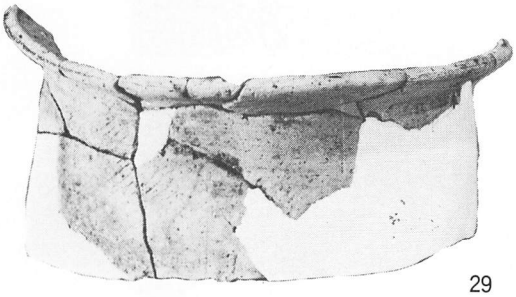

24

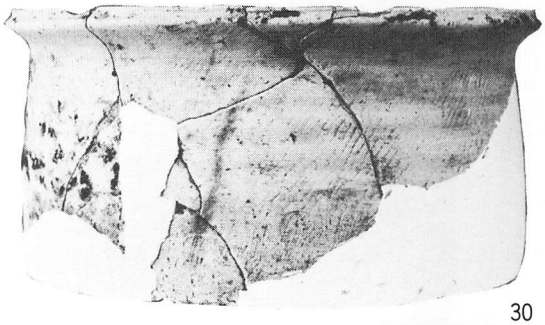

25


26

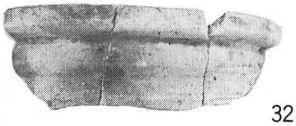
27

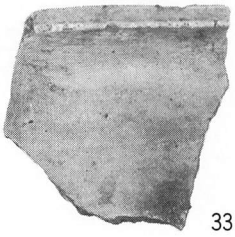
28

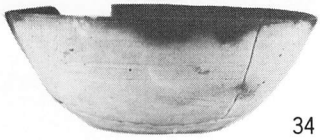

29

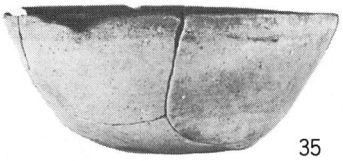

30

31

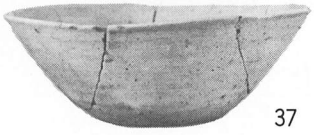

32


33


34


35

36

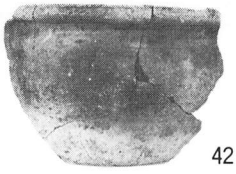

37

39

40

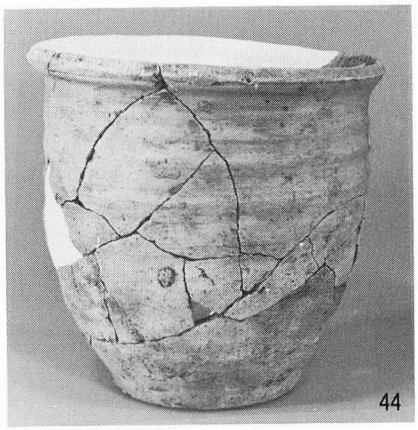
38

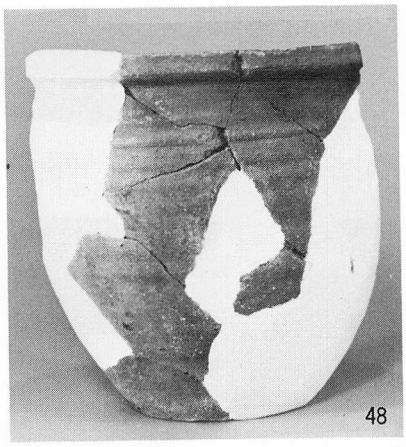
41

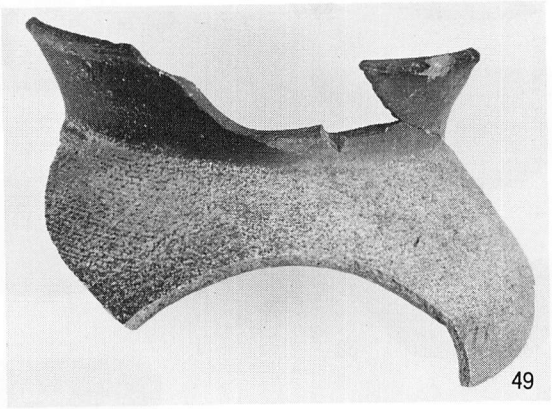

42

43

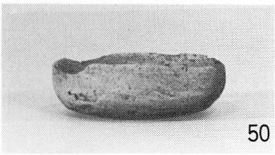
写真図版15

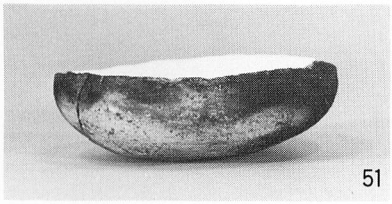




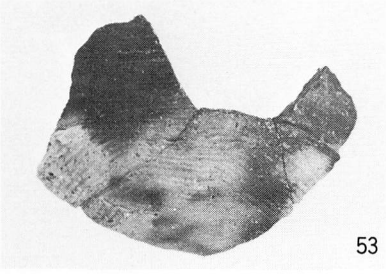


写真図版16


50

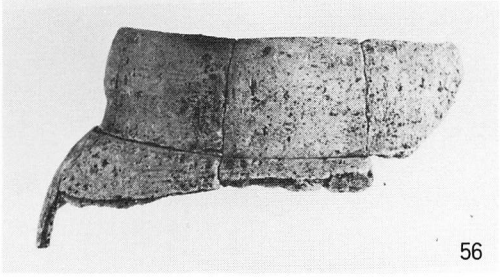

51

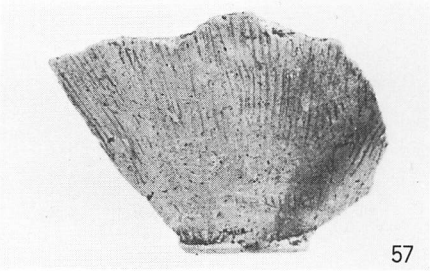
52


53

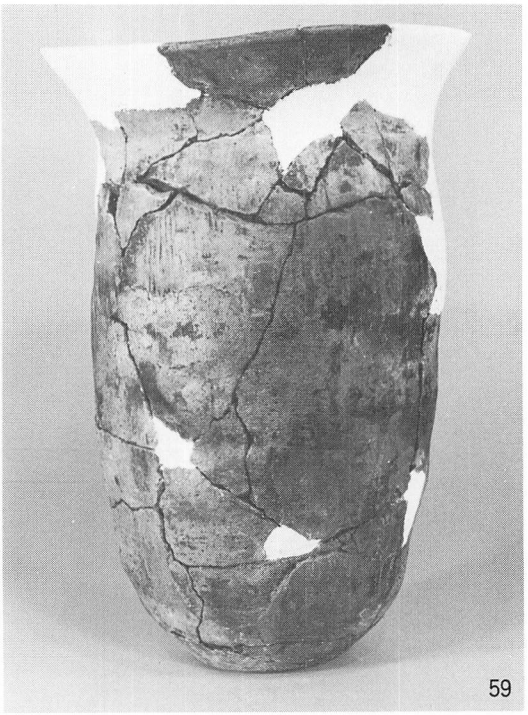
54

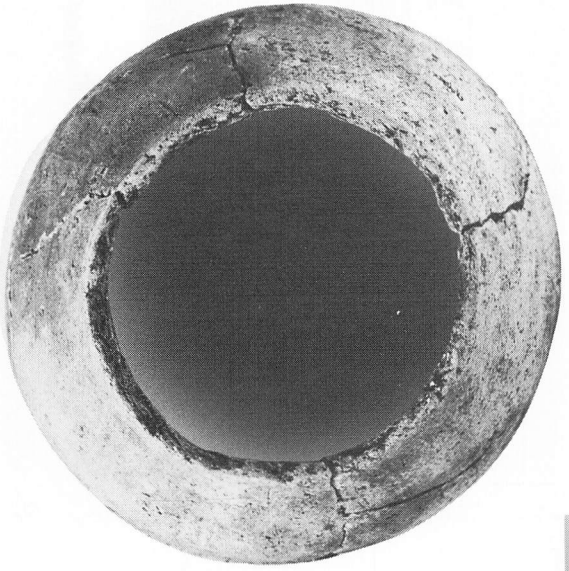
55

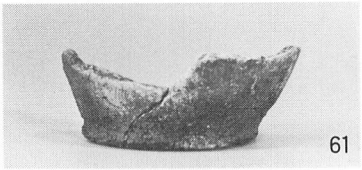

56

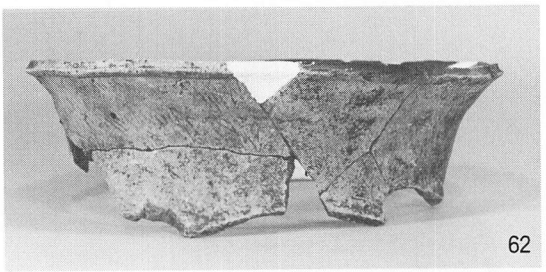

57

写真図版17

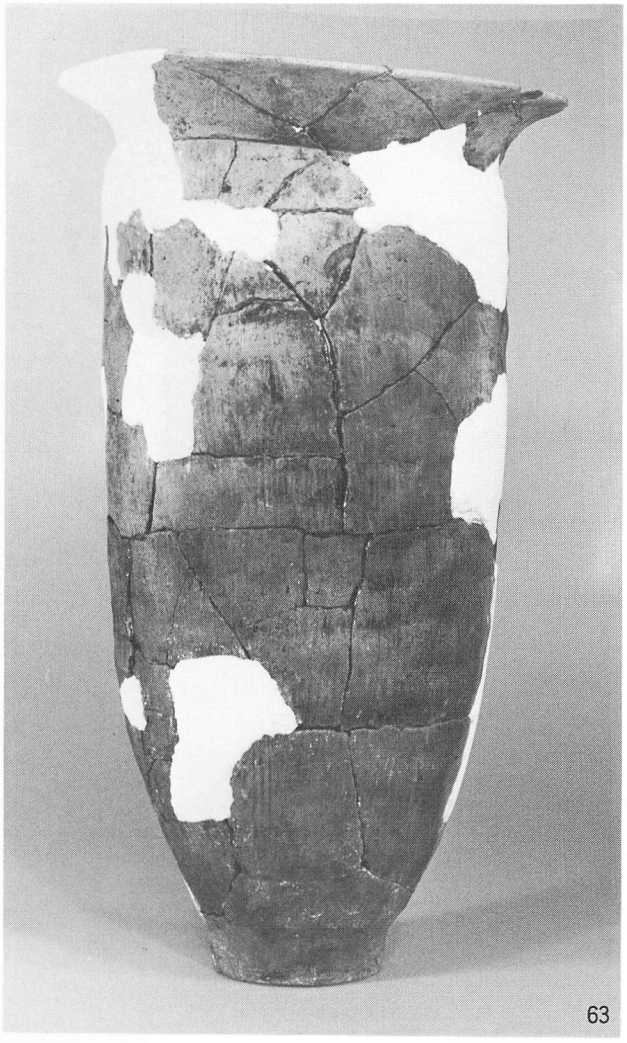


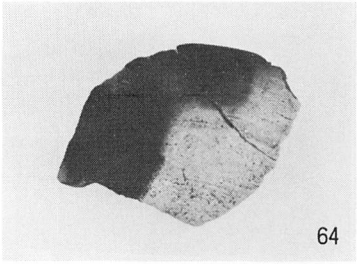


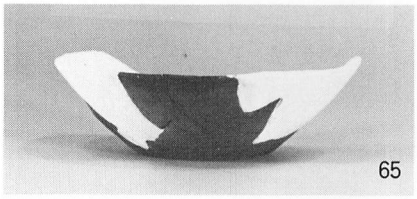


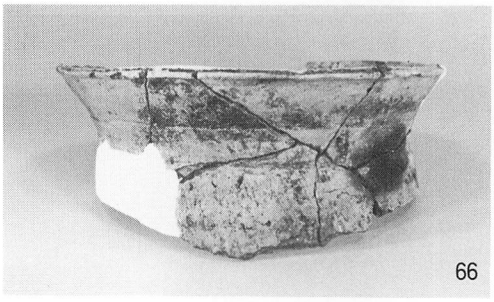


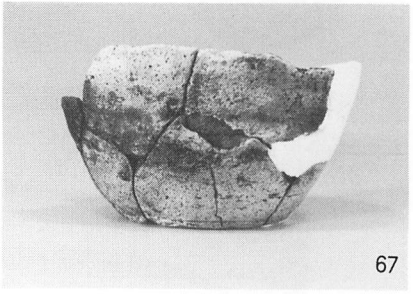
写真図版18

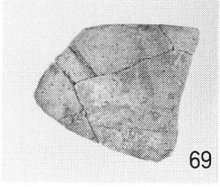

63

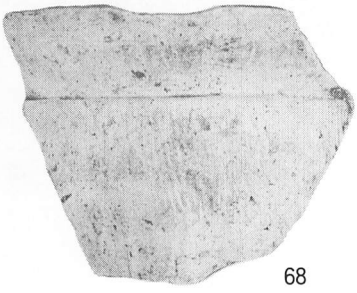

64

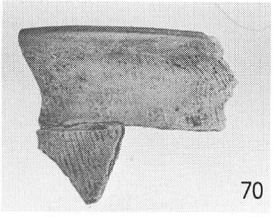

65

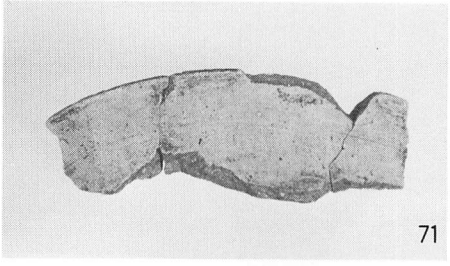

66


67


69

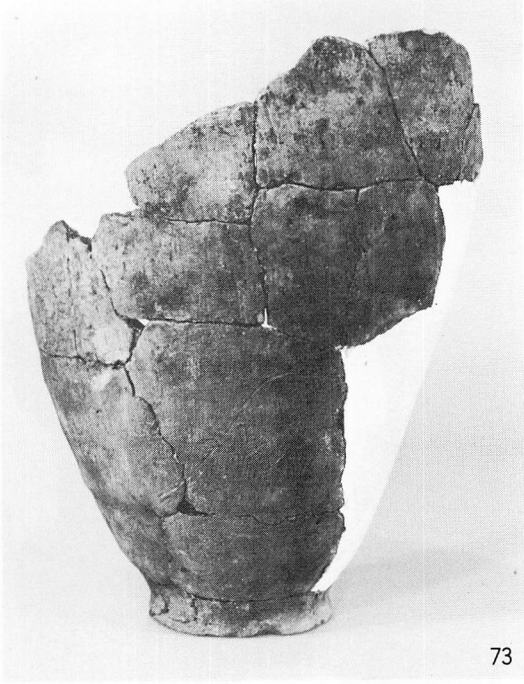

68

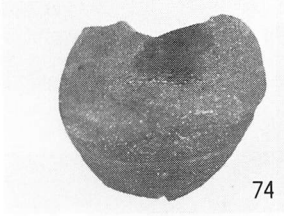

70

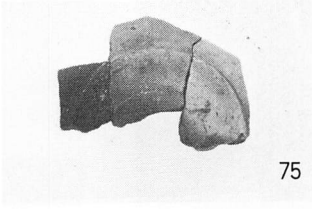

71

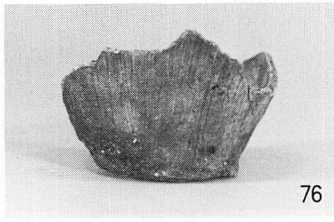
写真図版19

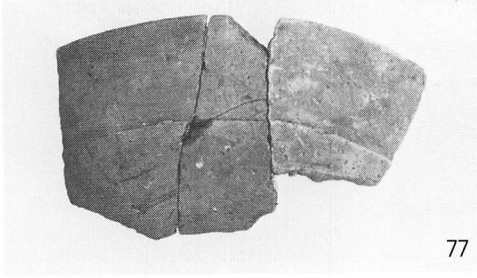
72


73

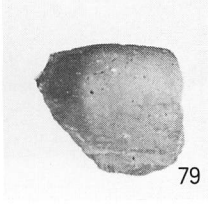

74

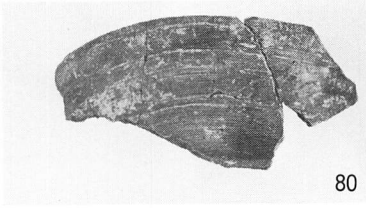

75


76

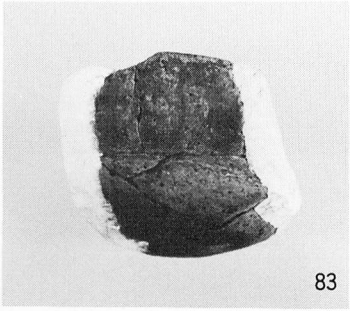

77

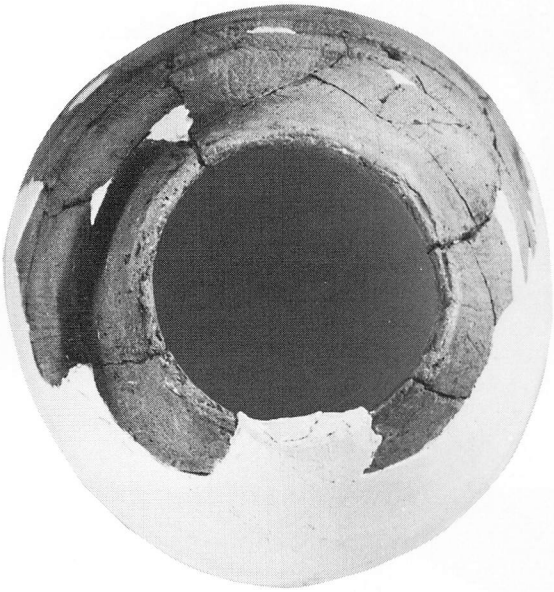
78

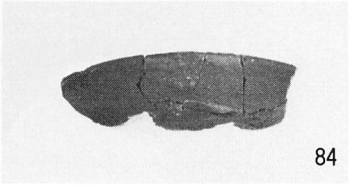

79

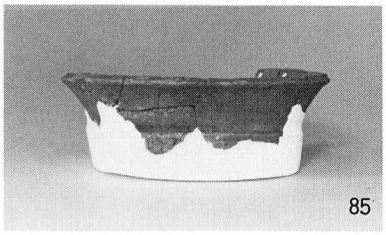

80

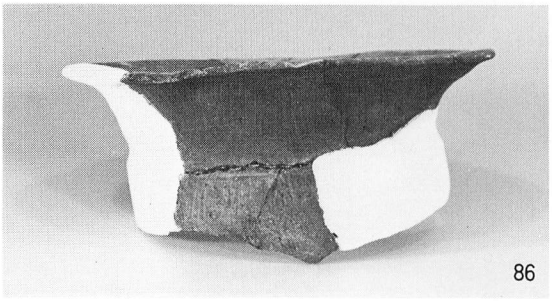
写真図版20







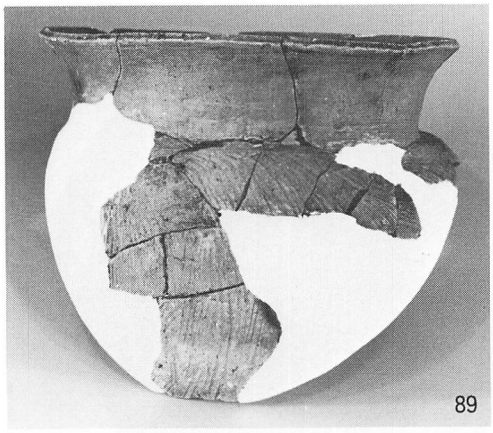


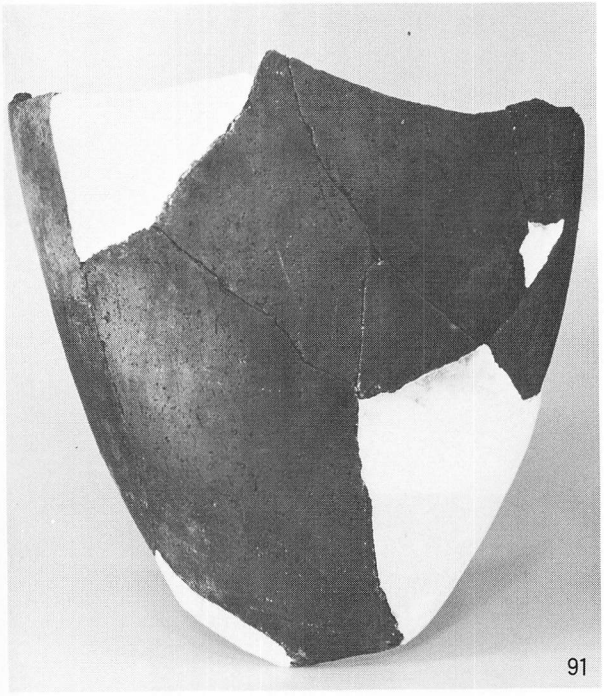


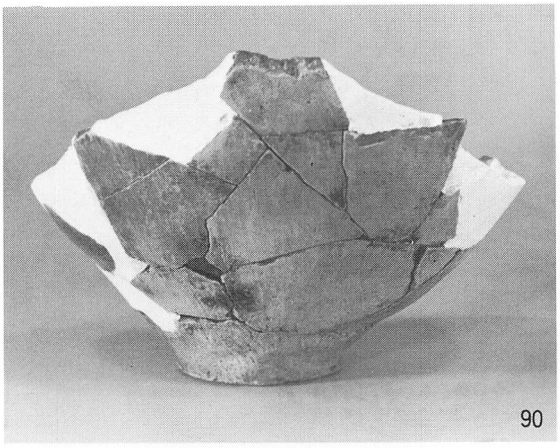
写真図版21

87

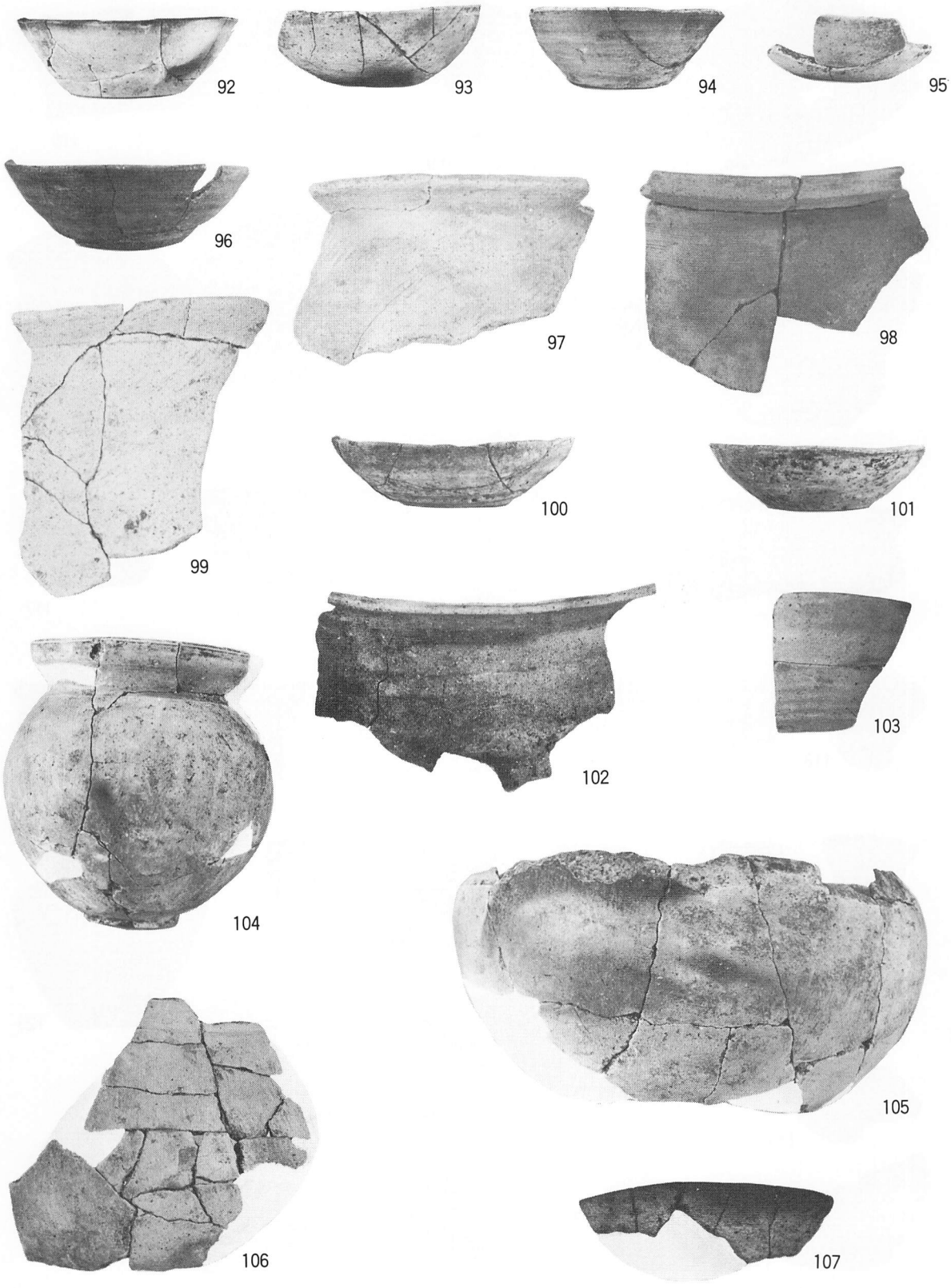
88


89

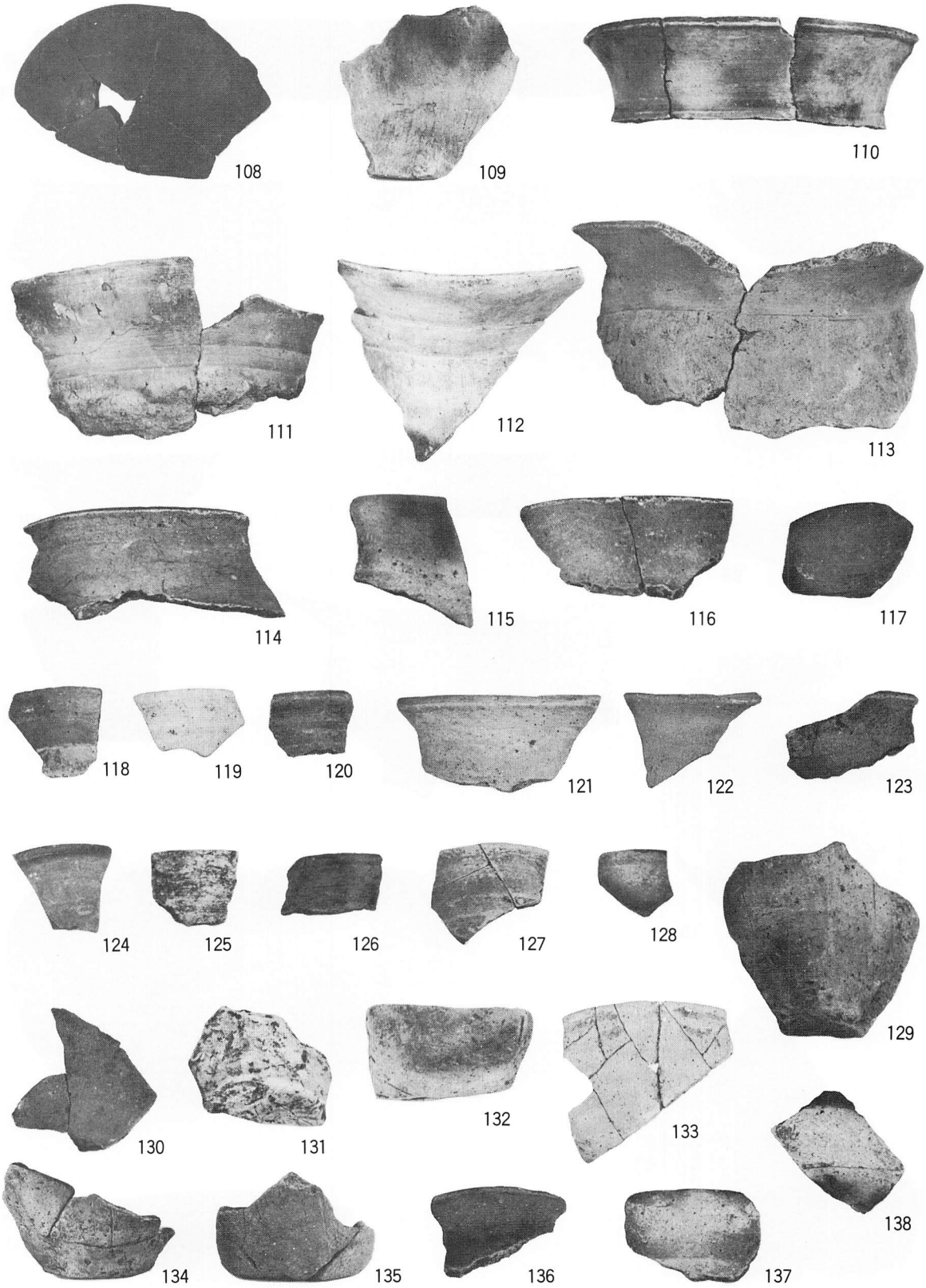

91


90

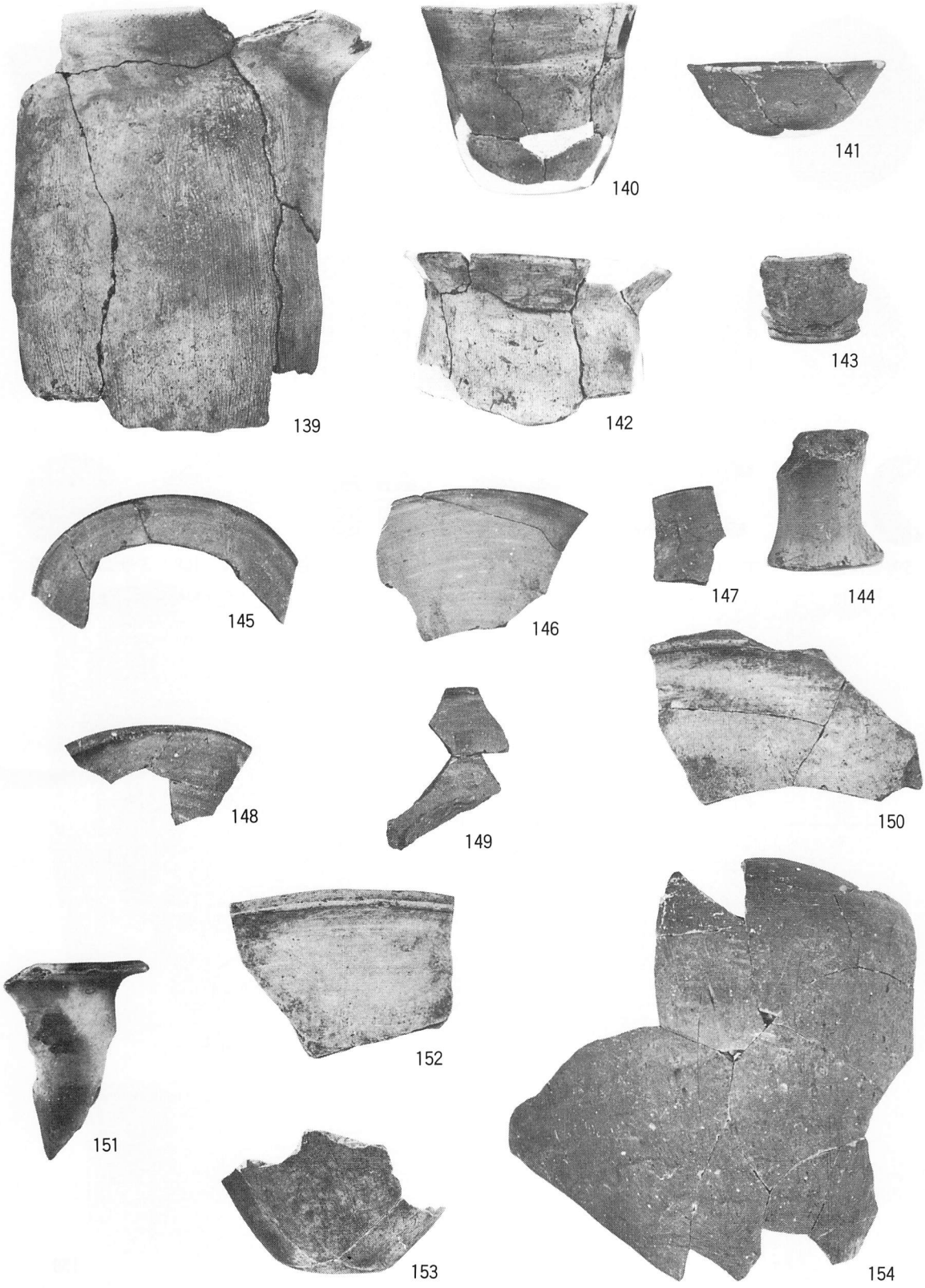
写真図版22



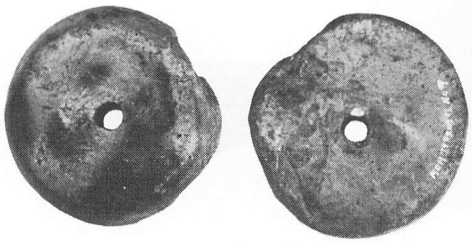
写真図版23


108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138

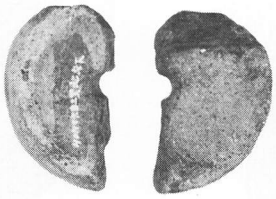
写真図版24



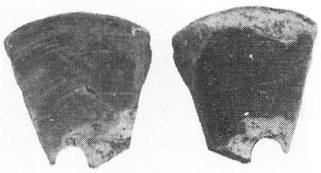
写真図版25



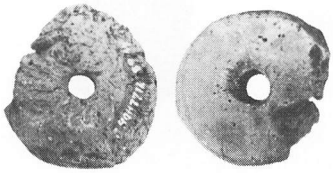
159　16号住居址床面



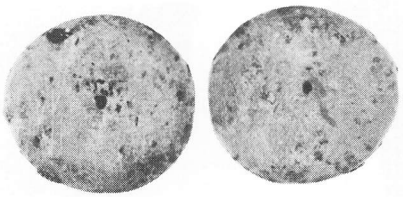
160　32号住居址床面



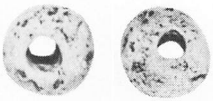
161　38号住居址



162　38号住居址



163　2号住居址埋土

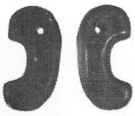


164　25号住居址床面

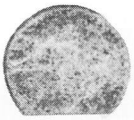
165　6号住居址床面

166　6号住居址床面

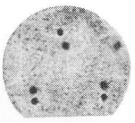
167　6号住居址床面



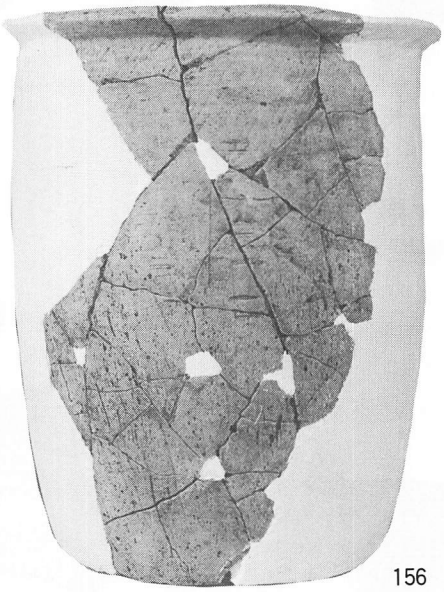
168　33号住居址床面



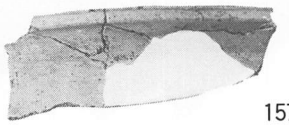
169　3号住居址床面



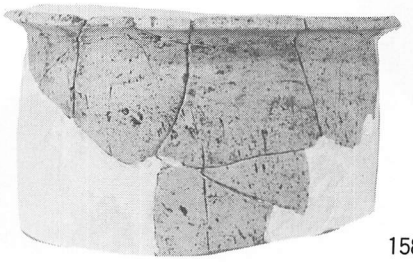
155



156

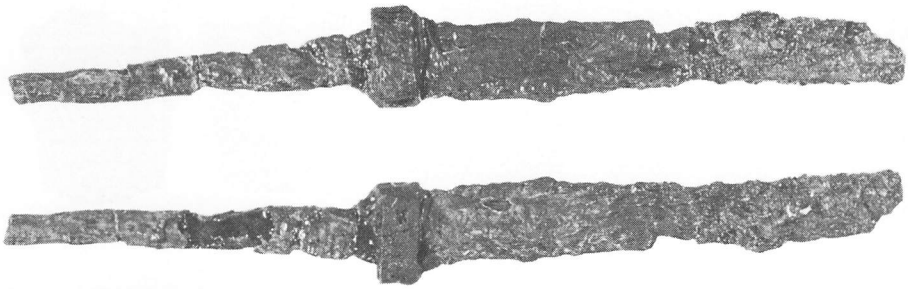


157

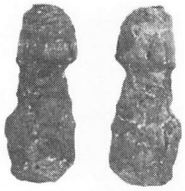


158

写真図版26



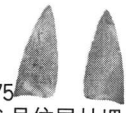
170　1号住居址埋土



171　33号住居址埋土

173
1号住居址

174
6号住居址埋土

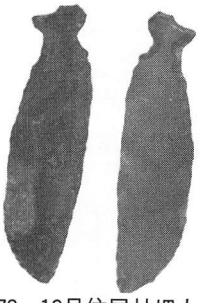


175
6号住居址埋土

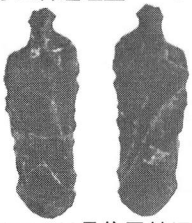
176
14号住居址埋土

177　表採

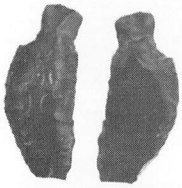
172　2号住居址埋土



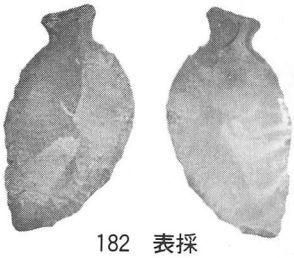
178　13号住居址埋土



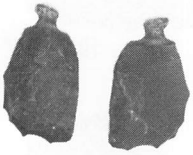
179　13号住居址埋土



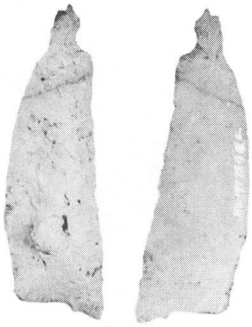
180　13号住居址埋土



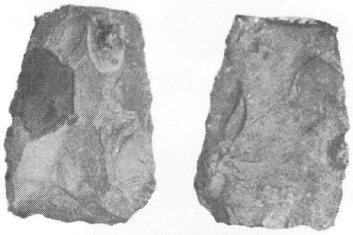
182　表採



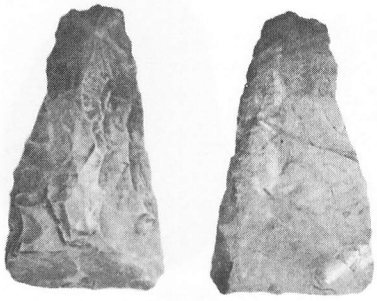
183　表採



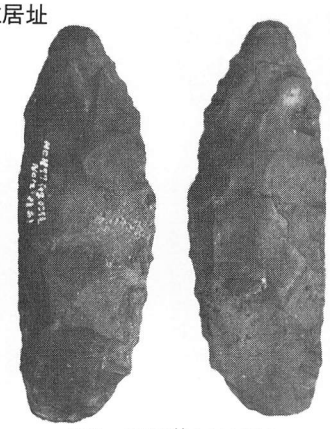
181　6号住居址



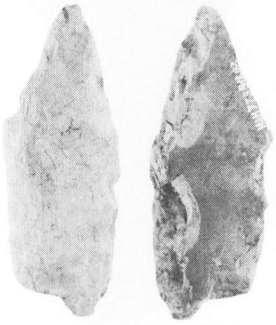
184　26号住居址埋土



185　25号住居址埋土

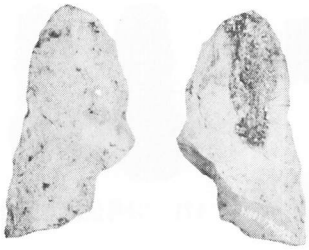


186　16号住居址埋土

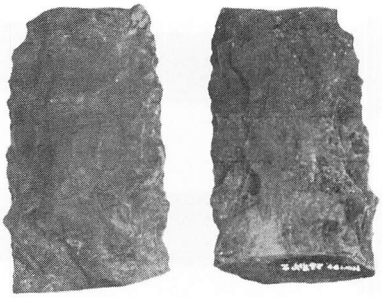


187　3号住居址埋土

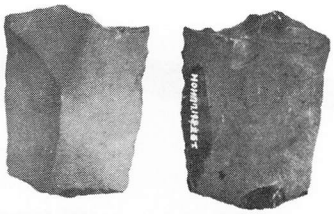
写真図版27



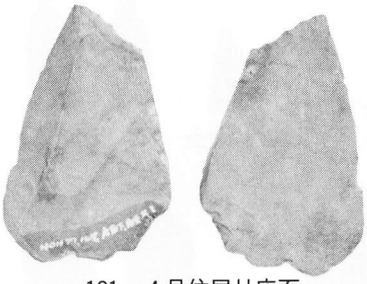
188　2号住居址埋土



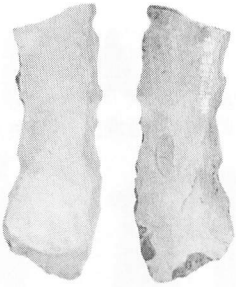
189　26号住居址上部土



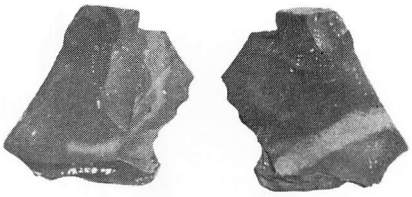
190　19号住居址床



191　4号住居址床面

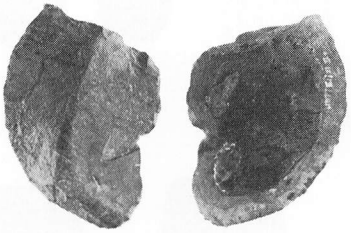


192　25号住居址埋土



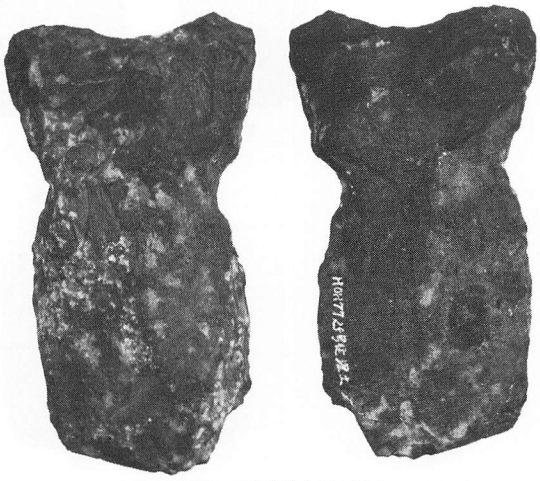
193　25号住居址埋土

194　6号住居址埋土

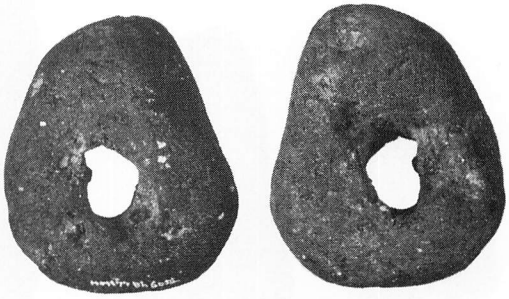


195　表採

196　表採



197　25号住居址埋土



198　37号住居址

写真図版28

大曽根遺跡

所　在　地	水沢市佐倉河字大曽根
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査主体	岩手県教育委員会文化課
調査期間	昭和51年5月24日～7月8日
調査対象面積	3,500m²
調査面積	2,400m²
遺跡記号	OS76

第１図　遺跡と調査範囲

Ⅰ はじめに

本遺跡に対する発掘調査は、金ヶ崎バイパスの建設に関連する事前緊急調査の一環として、昭和51年度に岩手県教育委員会によって行われたが、その後、昭和52年度に（財）岩手県埋蔵文化財センターの設立と同時に当該事業が県教委文化課より当埋蔵文化財センターに移管となり、その際に本遺跡の整理報告という業務も一緒に移管された。現地調査の担当者が昭和54年度までは当埋蔵文化財センターに在籍していたが、その後、定期移動により他団体へ所属替えとなったために整理報告が不可能になったことから、筆者が整理報告を担当することになったものである。実際に整理の作業を始めてみると、現地の状況をほとんど知らなかった筆者では思う様に進まなかった部分も多かった。原稿執筆の段階でも同様であった。調査担当者とは連絡をとりながらできるだけ御教示を受けたが、調査担当者の意とする所がどの程度表現できたかは不明である。以上の様なことから、本報告は事実記載を中心としていることを明記する。

Ⅱ 遺跡の位置と立地

本遺跡は水沢市佐倉河字大曽根に所在し、水沢市の中では北部に位置し水沢市役所の北方約2.5kmの地点である。

遺跡は胆沢川によって形成された胆沢扇状地の扇端部に近い部分に立地する。胆沢扇状地は高位面より一首坂段丘・胆沢段丘・水沢段丘に3大別され、西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘に対比されている。その中の胆沢段丘は上野原・横道・堀切・福原の各段丘に、そして水沢段丘も上位面と下位面に細分されている。遺跡は、その中の水沢段丘を開析する沢沿いに形成された自然堤防上に立地している。胆沢川は遺跡の北方3.0kmを東流し、北上川と合流している。北上川は遺跡の東方1.5kmを南流している。遺跡の標高約55kmで、胆沢川との比高は約9mを測り、北上川とのそれは約20mである。調査時における現状は、自然堤防上は畑地や宅地て利用され、比高約1mを測る開析された低地には水田が広がっている。

Ⅲ 調査の方法とその概要

1．調査の方法

本遺跡は、調査範囲の南側を東西方向に走る水路によって大きく二分されているため、水路南側の全域をA区とし、水路の北側については、ほぼ中央に設定した測量基準点より南をB区

北をC区とした。さらにB区・C区については前の測量基準点より東方をⅠ区としてBI区・CI区と命名し、西方についてはⅡ区としBⅡ区・CⅡ区と命名した。

遺構名については、住居址は調査範囲全体で1号住居址～5号住居址まで連番としたが、土坑類については、遺構検出が終了した時点に各調査区ごとに連番で命名した。しかし、精査によって明らかに後世の攪乱と断定された場合にはその遺構名は欠番として処理した。実際の名称は、調査区名と番号を組み合わせてA－1号土坑・BⅠ－1号土坑・BⅡ－1号土坑・CⅠ－1号土坑・CⅡ－1号土坑とした。溝跡には現用水路も含まれていることから、特別に名称を付していないらしい。

実測図は縮尺1/20を基準とし、平面図・土層図とも同じ縮尺としている。実測の方法は、1mごとの測量基準線を地表面に落す方法を採用したが、2号住居址については平板測量で行い、縮尺は1/40とした。これらの作業は調査員が行った。土層の色調は標準土色帳に依った。

2．調査の方法

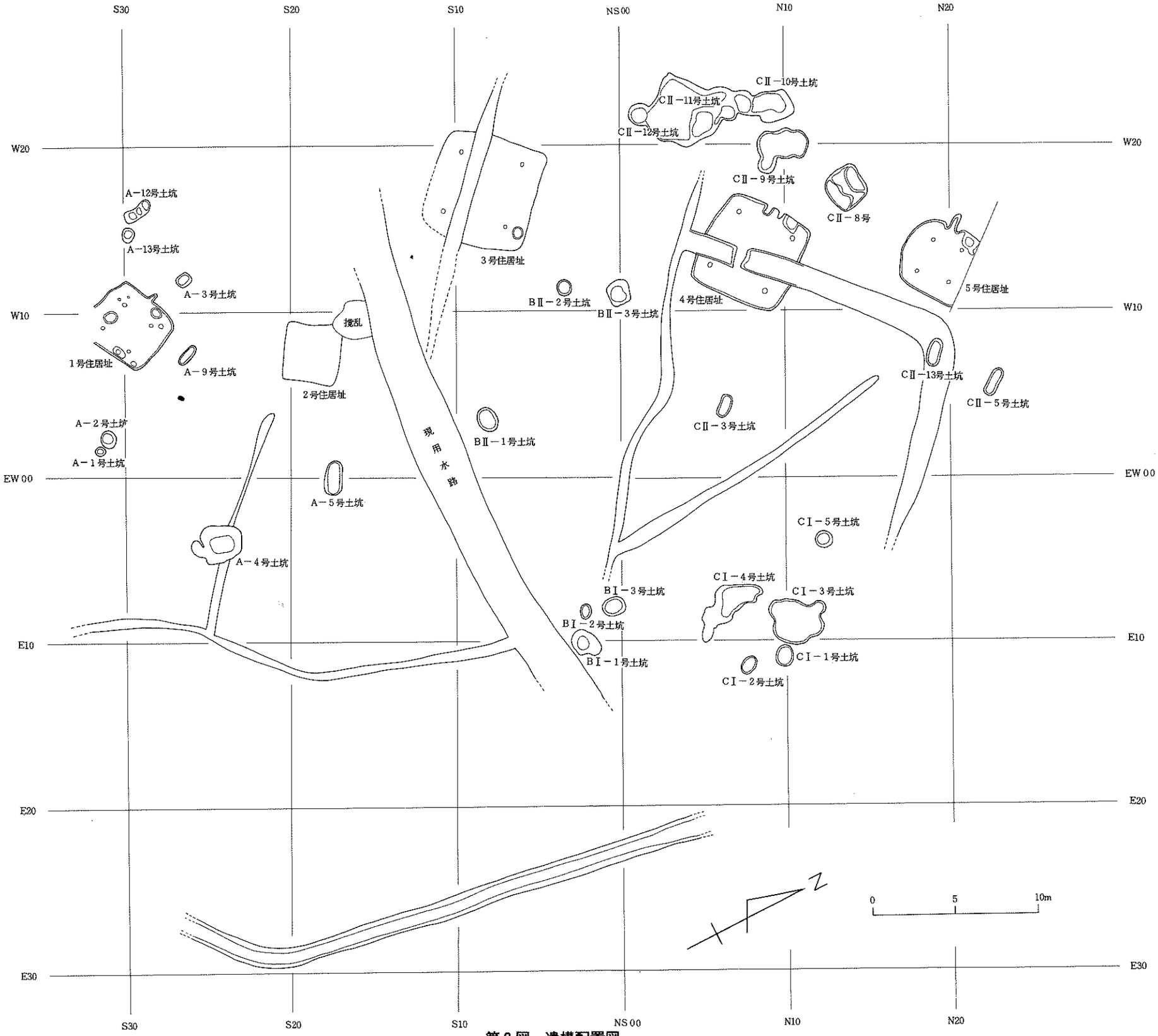
遺跡の大半が畑地として利用されているので、現地表面より20cm～30cmは耕作土として攪乱を受けていたため、この部分については、ブルドーザーを使用して耕作土を排土した。ただし、宅地の一部として利用されていた調査範囲の北端部分は、あまり攪乱を受けていなかったので人力によって表土を除去した。表土剝ぎの作業中にも若干の土器や石器が出土しているが、地点を確認の上一括して収納した。

耕作土を除去すると、シルト質の地山面（色調等は不明）が露出し、この面をクリーニングすると遺構が検出され、各時代別による確認面の差はなく、いずれも同位面で検出されている。

しかし、ほとんどの住居址は、耕作時やその他の攪乱によって壁高の大半がすでに削剝され中には床面が露出していたり、周溝や柱穴・貯蔵穴等の検出によって、辛うじてその存在を認め得る場合があった。従って、カマドの袖部は勿論のこと、焚口部・煙道部・煙出し部も確認できなかった場合が多かったが、燃焼部の焼土が微かに残存していることからカマドの存在が確認された場合もあった。

この様な状況は、長年に亘る耕作と低位面への土砂流出の繰り返しによる結果であろう。

本遺跡での基本的な層序については記録がないので不明である。遺物の出土層位からみると、表採・表土の他は遺構出土であることから、表土を除去した面がそのまま遺構検出面となったものであろう。このことから考えると、Ⅰ層ー表土　　Ⅱ層ーシルト質の地山面とでもなるものかも知れない。しかし、これは筆者の推定であることを付記しておく。


S30
S20
S10
NS00
N10
N20
W20
W10
EW00
E10
E20
E30
A－12号土坑
A－13号土坑
A－3号土坑
1号住居址
A－9号土坑
A－2号土坑
A－1号土坑
A－5号土坑
A－4号土坑
撹乱
2号住居址
3号住居址
現用水路
BⅡ－2号土坑
BⅡ－3号土坑
BⅡ－1号土坑
CⅡ－10号土坑
CⅡ－11号土坑
CⅡ－12号土坑
CⅡ－9号土坑
CⅡ－8号
4号住居址
5号住居址
CⅡ－13号土坑
CⅡ－5号土坑
CⅡ－3号土坑
CⅠ－5号土坑
CⅠ－4号土坑
CⅠ－3号土坑
BⅠ－3号土坑
BⅠ－2号土坑
BⅠ－1号土坑
CⅠ－1号土坑
CⅠ－2号土坑
N
0
5
10m

第2図　遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

本遺跡の発掘調査で検出された遺構は①住居址５棟②土坑類27基であるが、住居址は削剝が激しく平面形もやっと把握されたという状況である。土坑は全体的に平面形が不整なものが多く、いわゆる「土坑」として理解できるかどうかも疑問なものが多い。遺物は、住居址に伴うものより土坑に伴うものの方が多いとはいえ、全体的にみるとそれほどの量ではない。特に住居址は削剝が著しいのでその傾向が強い。種類では土師器、須恵器、縄文土器、石器等があるが、縄文土器と石器類が主体をなしている。ここでは遺構と遺物を別項にして記述する。

１．遺　構

Ａ．住居址

〔１号住居址〕（第３図、写真図版２）

本住居址はＳ30－Ｗ10の交点付近に位置し、調査範囲の中ではもっとも南に位置する遺構の一つである。南隅部は未確認であるが、未調査なのか、削剝によるものなのかは定かでない。

規模は約4.4m×4.4mで壁高は10cm位を測り、平面形は隅丸方形を呈している。主軸方向は、カマドの位置が明確にされていないが、北西壁より外方に延びる溝状のものを煙道部の残痕とすれば、北西－南東方向にあり、磁北に対して約48度西に偏している。

埋土については記録が残っていないので不明であるが、掘り込みが約10cm位と浅く、単層であったため、図化しなかったものであろう。また、床面は実測図によると若干起伏のあったことが窺える。周溝は検出されていない。

床面上でP_1～P_{11}までの土坑が検出され、それらの規模は以下の通りである。

P_1（32cm×34cm・－46.2cm）　P_2（30cm×35cm・－34cm）　P_3（30cm×30cm・－56.6cm）
P_4（30cm×30cm・－52.6cm）　P_5（16cm×20cm・－7.9cm）　P_6（20cm×20cm・－18cm）
P_7（90cm×95cm・－27cm）　P_8（45cm×80cm・－22.7cm）　P_9（30cm×30cm・－15.2cm）
P_{10}（25cm×25cm・－11cm）　P_{11}（60cm×70cm・－25.3cm）　以上の通りであるが、埋土の状況については記録されていない。平面形はP_8が楕円形を示すものの、他はいずれも円形を呈し、その中でも、P_7・P_8・P_{11}以外は柱穴状であるが、位置関係からみると、P_1～P_4は対角線上に在ることから、本住居址の柱穴を構成するであろう。カマドの位置が前述の位置で正しいとすればＰ－11はカマド脇の貯蔵穴である可能性が大である。他の土坑については性格が不明である。

カマドについては前述の通りであるが、床面上に焼土の堆積や焼成面の記録がない。また、

煙道部の残痕と考えられる部分は長さ50cm・巾30cmであるが、その他の状況は前述の通りであり、明確には呈示しえない。

本住居址よりの出土遺物は土師器甕形土器の口縁部～体部に掛けての破片がある。　ロクロ未使用によって成形されたもので、口縁部最大径15.2cm・残存器高6.5cmである。形態では頸部に軽い段をもち、口縁部は外反した後端部で内弯し直立気味を示している。調整技法は口縁部は内外面ともヨコナデで・体部はハケメ後スリケシである。その他に石鏃が1点出土している。

以上のことから、本住居址は奈良時代に属する住居址であろう。

〔**2号住居址**〕(第3図、写真図版2)

本住居址はS20－W10の交点の東側に位置し、北西隅部分が攪乱によって未確認である。

規模は約3.4m×3.5mで壁高は約4cmを測り、平面形は隅丸方形を呈している。主軸方向はカマドが検出されていないので定かでないが、南北方向がほぼ磁北を指している。

埋土については記録が残っていないが、掘り込みが4cmと浅かったため、図化しなかったものであろう。床面についても埋土同様記録がないので定かでないが、写真によるとあまり凹凸もなさそうである。周溝は検出されていない。

床面上ではP_1～P_6までの土坑が検出され、規模は以下の通りである。

P_1（30cm×30cm・－40.6cm）　P_2（20cm×24cm・－15.2cm）　P_3（30cm×30cm・―――）

P_4（25cm×25cm・－13.3cm）　P_5（36cm×38cm・－9.8cm）　P_6（60cm×60cm・－16.3cm）

以上であるが、埋土は記録がないので不明である。平面形はいずれも円形を呈しているが、その中でP_1～P_5は柱穴を構成するものと考えられ、北西隅部にさらに1ヶの柱穴が入り実際には6ヶで構成されるであろう。P_6の性格は定かでない。

カマドは実測図や写真にも記録されていないことから検出されていないものであろう。

刀子とおもわれる鉄製品の断片が出土している。断面が扁平で、平鉄状のものである。所属時期は不明である。しかし、柱穴配置が本遺跡で検出された他住居址のそれと比較して著しく異なる様相を示し、古代の住居址よりも中世の住居址に近似した様相を呈している。

〔**3号住居址**〕(第4図、写真図版2)

本住居址は調査範囲の中央よりやや南西寄りのS10－W20の交点付近に位置している。この付近は耕作等による削剝が激しく、本住居址も位置によっては検出面で床面が露出している部分もあり、柱穴と部分的に残存している壁とによって全体規模を推定した。また、東西に走る溝跡が本住居址の南部分を削剝している。

規模はほぼ6.6m×6.8mで壁高は部分的に4cm～5cmを測る。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は磁北に対して17.5度東に偏している。

埋土は記録がないので定かでない。単層であったために記録しなかったものであろう。床面の状況を写真でみると、ほぼ平担の様である。

床面上ではP_1～P_5までの土坑が検出され、規模は以下の様である。

P_1（30cm×30cm・－47.3cm）　P_2（25cm×28cm・－38.3cm）　P_3（28cm×30cm・－56.2cm）
P_4（25cm×25cm・－55.6cm）　P_5（70cm×70cm・－19.6cm）　以上であるが、埋土については記録がないので不明である。平面形はいずれも円形を呈し、P_1～P_4は対角線上に位置していることから本住居址の柱穴を構成するであろう。P_5はカマドと推定される北壁際床面焼土の右側に位置することから貯蔵穴となるであろう。

実測図の中にカマドが記入されていないが、北壁中央寄りの壁際に焼土の分布が記入されている。おそらくカマド燃焼部の残痕であろうと考えられるが、袖部や煙道部は残存していないので不明である。焼土範囲は径50cm位の円形を示すが層厚は不明である。

遺物の出土がないので時期を明確に呈示できないが、カマドが内設されていることから、古代に位置づけられるものと推定される。

〔**4号住居址**〕（第5図、写真図版3）

本住居址は調査範囲の中では西に位置し、N10－W10の交点に在る。この付近も耕作等による削剝が激しく、本住居址もそのほとんどが削剝を受けている。また、北より南に向かって走る溝跡が削剝しており、その部分はまったく不明である。

規模はほぼ6m×6.1m位で壁高は3cm～5cmを測る。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は磁北に対して64度西に偏している。

埋土は記録がないので不明である。おそらく、掘り込みも浅く単層であったことから作図しなかったものであろう。床面は写真によると、極端な凹凸もなくほぼ平担の様である。

床面上ではP_1～P_5までの土坑が検出され、その規模は以下の様である。

P_1（27cm×30cm・－55cm）　P_2（25cm×30cm・－50cm）　P_3（30cm×30cm・－67cm）
P_4（30cm×30cm・－54cm）　P_5（70cm×100cm・－23cm）　以上であるが、埋土については不明である。P_5の平面形は長方形気味を示しているが他は円形を呈している。その中でP_1～P_4は対角線上に位置することから本住居址の柱穴を構成するであろう。P_5はカマド右側袖部の右脇に位置し、壁際でもあることから、本住居址の貯蔵穴であろう。また、壁直下の床面では、南壁とカマド部を除いて、巾15cm、深さ10cm位の周溝が検出されている。

カマドは北西壁に設置され、ほぼ中央に位置している。袖部の状況は明確でないが、実測図

の中に礫の記入がないことから、シルトのみの貼り付けか地山削り出しによって構築されたものであろう。燃焼部内に焼土の堆積が観察されるが、範囲や層厚の明確な記録がない。煙道部は検出されていないが、最初から付設しなかったのか削剝によるものかは不明である。

遺物がまったく出土していないので時期を明確にしがたいが、内設されたカマドをもつことから古代に属する住居址であろう。

〔**5号住居址**〕（第4図、写真図版3）

本住居址は調査範囲の中ではもっとも北に位置する遺構の一つで、N20－W10の交点の西側にある。この付近も耕作による削剝を受けてはいるものの、他の遺構よりは残存程度は良好であるが、北壁部分は後世の攪乱によって深く削剝されているため不明である。

規模は、前述の様な理由により南北方向は不明であるが、東西方向は4.2mで壁高は10cm～13cm位を測る。平面形は凸辺の隅丸方形を呈し、主軸方向は磁北に対して65度西に偏している。

埋土は記録がないので不明である。おそらく掘り込みも浅く、単層であったことから図化しなかったものであろう。床面は若干起伏がある様である。

床面上でP_1～P_5の土坑が検出され、それらの規模は以下の様である。

P_1（30cm×30cm・－51cm）　P_2（30cm×30cm・－32cm）　P_3（30×30cm・－40）

P_4（30cm×30cm・－51cm）　P_5（90cm×105cm・－20cm）　以上であるが、埋土については不明である。平面形はP_5が長方形気味であるが他は円形を示している。その中でP_1～P_4は対角線上に位置していることから、本住居址の柱穴を構成するものであろう。P_5はカマド右側袖部の右脇に位置していることから貯蔵穴であろう。埋土については記録が残っていないのでまったく不明である。

カマドは北西壁で検出され、ほぼ中央付近に位置しているものと推定される。しかし、袖部と煙道部が残存しているものの、燃焼部焼土は検出されなかったのか記録されていない。カマドは全巾約1mで袖部の長さは約60cmである。袖部は礫の配置がなく、シルトのみの貼り付けか地山よりの削り出しで構築されたものであろう。煙道部は長さが80cmで巾は40cmを測る。

遺物はまったく出土していないので、時期を明確に呈示しえないが、内設カマドをもつことから古代に属する住居址として理解することができるであろう。

B．土　坑

A区

〔**A－1号土坑**〕（第3図）

この土坑は、調査範囲の中ではもっとも南に位置する遺構で、1号住居址の東方5m、A－

2号土坑の東側に位置している

規模は約55cm×60cmで深さはほぼ20cmを測る。平面形は検出面・底面ともにほぼ円形を呈し、断面形は鍋底形を呈している。埋土は以下の通りである。

1．10YR⅔黒褐色　　黒色土の中にシルトが若干混入している。

2．10YR¾暗褐色　　シルトに黒色土が若干混入し、粘質で締まっている。

以上であるが、堆積状況を観察すると、自然埋没したものと推定される。

遺物として、ロクロ使用成形された土師器甕形土器の破片が出土している。

〔**A－2号土坑**〕(第3図、写真版5)

この土坑は前記のA－1号土坑のすぐ西に位置し、1号土坑より大型の土坑である。

規模は約90cm×105cmで深さは約60cmである。平面形は検出面では楕円形を示すが、底面ではほぼ円形であり、断面形は「U」字状に近い形態を示している。埋土は以下の通りである。

1．7.5YR⅓黒褐色　黒ボクの中にシルトが若干ブロック状に混入する。

2．7.5YR⅔黒　色　黒ボクで、ボソボソと軟らかく、締まりがない。

3．7.5YR⅔黒褐色　火山灰と黒色土が混合し、粘性があり、締まりがない。

4．7.5YR⅔黒褐色　粘土と黒ボクの混合層、粘性が強く、締まりはない。

以上の様であるが、堆積状況は自然埋没した状況を示しているが、底面に8ヶの礫が密着している。

〔**A－3号土坑**〕(第3図)

この土坑は1号住居址の北西方向2mに位置し、北東－南西方向に長軸をもつ。

規模は約70cm×100cmで深さは約21cmである。平面形は、検出面では隅丸長方形気味の楕円形を呈するが、底面で長円状を示しており、断面形では南に寄るほど深くなり、北では壁の立ち上がりがないという不規則な形態を有している。埋土は以下の様である。

1．7.5YR⅓黒褐色　黒ボクの中に若干のシルトをブロック状に含む。粘性はない。

2．10YR¾暗褐色　　黒ボクとシルトの混合層。1層より粘性がない。

以上であるが、おそらく自然堆積で埋没したものであろう。

縄文土器（表裏縄文）の破片と不定形石器が1片出土している。

〔**A－4号土坑**〕(第5図、写真図版5)

この土坑は調査範囲の中では南東部にあり、S24－E4付近に位置している。

規模は約2.8m×3mで深さは約48cmである。底面の北寄りには約60cm×80cmの一段低い部

分があり、上位の底面とは比高19cmを測る。検出面の平面形は不整な方形気味であり、底面もほぼ同じ形状を示している。一段低い部分は楕円形を呈している。断面形でみると、壁が床面に対して直立状態ではなく、検出面に向かって大きく広がる形状を示している。埋土は以下の様である。

1．10YR3/3暗褐色　黒色土中にシルトが若干混入し、粘性も締まりもない。
2．10YR3/4暗褐色　サラサラし、粘性がまったくない。
3．10YR3/2黒褐色　若干シルトを含み粘性がない。
4．10YR2/3黒褐色　壁際に若干シルトを含み、締まりはあるが、粘性がない。
5．10YR3/3暗褐色　炭化物を若干含み、粘性があり、良く締まっている。
6．10YR2/3黒褐色　粘性なし。
7．10YR4/3にぶい褐色　黒色土とシルトが半々位で混合した層。
8．10YR3/1黒褐色　粘性なし。
9．10YR2/3黒褐色　茶褐色の酸化鉄粒の集積がある。
10．10YR4/3にぶい褐色　シルトの中に黒色土が混合している。
11．10YR3/2黒褐色　茶褐色の酸化鉄粒の集積がある。黒色土：シルト＝5：1
12．10YR2/2黒褐色　粘性があり軟らかく、締まりがない。
13．10YR2/3黒褐色　粘性があり軟らかく、酸化鉄の集積が観察される。
14．10YR2/2黒褐色　粘性があり締まっている。黒色土中に若干のシルトが混入している。
15．10YR3/1黒褐色　14層と同じ。
16．10YR3/1黒褐色　14層と同じ。

以上であるが、全体的にみると自然堆積による埋没と推定される。

〔**A－5号土坑**〕(第5図)

この土坑はS20－EW00の交点の北2m付近に位置し、東西方向に長軸をもつ土坑である。

規模は約95cm×200cmで深さは約84cmである。平面形は検出面・底面ともに若干歪んだ長方形を呈し、断面形では、壁の上位が若干外傾気味であるが下位はほぼ直立している。底面には若干起伏がありそうである。埋土は以下の通りである。

1－a．10YR2/1黒褐色　黒色土である。
　b．10YR2/2黒褐色　1－aに比し若干シルトを多く含むせいか、幾分明るい色を呈している。
2－a．10YR2/3黒褐色　黒色土にやや多目のシルトを含む層で、他に炭化物粒も混入している。
　a．7.5YR3/3暗褐色　シルト質の中に黒色土を含む層で非常に硬い。粘性はない。
　c．10YR2/3黒褐色　2－aよりも黒色土を多く含み、やや黒味をおびた褐色を呈する。

3－a．10YR3/4暗褐色　シルト質の中に若干黒色土を含む層であるが、軟らかくやや粘性がある。

b．10YR3/4暗褐色　3－aと同様、シルトの中に黒色土が混じっている層で、軟らかく粘性も強い。

4－a．10YR4/4褐色　やや粘土化したシルトに黒色土が若干混じった層。

b．10YR3/4暗褐色　4－aと同様、粘質の黒色土とシルトの混じった層で軟らかく粘性も強い。

c．10YR4/4褐色　粘性の強いシルトの層である。

5－1．10YR3/2黒褐色　黒色土の中に若干粘土質の土が混じった層で、軟らかく粘性も強い。

2．10YR3/4暗褐色　5－1に比し、粘土質の土が若干多い。

6－　10YR4/4暗褐色　粘土質の土で、軟らかくベタベタした感がある。

以上であるが、自然堆積によって埋没した状況を示すものであろう。

〔**A－9号土坑**〕(第6図)

この土坑は1号住居址の北方2mに位置し、北西一南東方向に長軸をもつ土坑である。

規模は約50cm×140cmで深さは約19.5cmである。長軸の中央約50cm×50cmの範囲で底面が一段低くなり比高は10cmを測る。平面形は検出面・底面ともに若干歪んだ隅丸の長方形を呈し、断面形は鍋底形を示している。埋土は以下の通りである。

1．10YR2/3黒褐色　粘性・締まりともにない。

2．10YR4/4褐　色　シルトの中に若干黒色土の混合した層で、さほど粘性がない。

以上であるが、自然堆積で埋没したものであろう。

〔**A－12号土坑**〕(第7図)

この土坑は調査範囲のもっとも南に位置する遺構の一つで、1号住居址の西方向6m位に在り、長軸を北西・南東方向にもつ土坑である。

規模は約60cm×170cmで深さは約23cmである。長軸のほぼ中央付近の約60cm×60cmの範囲の底面が一段低くなっており、比高は約6cmを測る。平面形は隅丸の長方形気味を呈し、断面形は鍋底形を示している。埋土は以下の通りである。

1－a．10YR2/2黒褐色　黒色土の中にシルト粒が若干混入している層で、粘性はない。

b．10YR2/2黒褐色　黒色土とシルトが半々位で混合し、1－aと硬さや粘性は同じ。

2．10YR4/6褐　色　シルトの中にほんの少し黒色土が混入している。

以上であるが、自然堆積によって埋没したことを示すものであろう。

〔**A－13号土坑**〕(第７図)

この土坑は前述のＡ－12号土坑の東方向１ｍに位置する土坑である。

規模は約85cm×90cmで深さは約18cmである。平面形は若干歪んではいるが、検出面・底面ともに円形である。断面形は、底面に若干凹凸があるものの、全体的にみると、半円状に近い形態を示している。埋土は以下の通りである。

１．　10ＹＲ2/2黒褐色　シルトが若干混入した粘性のない土である。

２－ａ．10ＹＲ3/4暗褐色　黒色土の中にブロック状にシルトが混入している。炭化物を含む。

ｂ．10ＹＲ5/6黄褐色　シルトの中に少量の黒色土が混入している。

以上であるが、自然堆積で埋没したものであろう。遺物が出土していないので時期が不明である。

Ｂ区

〔**ＢⅠ－１号土坑**〕(第６図、写真図版５)

この土坑はＮＳ00－Ｅ－10の交点の南３ｍに在り、調査範囲の中では中央の東端に位置している。

検出面での規模は約155cm×200cmで深さは約60cmであるが、土層でみると、若干掘りすぎのあることが判り、実際の規模は約１ｍ×１ｍで深さは前述の通りである。検出面での平面形は不整な楕円形気味であるが、掘りすぎ分を考慮すると検出面・底面ともにほぼ正円に近い円形である。断面形は、底面に若干凹凸がある様であるがほぼビーカー形である。埋土は以下の通りである。

１－ａ．10ＹＲ2/3　暗褐色

ｂ．7.5ＹＲ3/1　黒褐色

２－ａ．7.5ＹＲ5/2　灰褐色

ｂ．10ＹＲ2/3　黒褐色

２－ｃ．10ＹＲ3/4　暗褐色

３－ａ．10ＹＲ2/2　黒褐色

ｂ．10ＹＲ2/1　黒　色

以上であるが、自然堆積による埋没を示すものであろう。

ロクロ使用成形の土師器と須恵器の破片が出土している。古代の土坑であろう。

〔**ＢⅠ－２号土坑**〕(第６図、写真図版３)

この土坑はＢⅠ－１号土坑の西方向２ｍにあり、ＢⅠ－１号土坑の規模より一回り小型の土坑である。

検出面での規模は約75cm×90cmで深さは約58cmである。検出面では不整であるが、中位～底面にかけてはほぼ正円を呈し、断面は壁が若干外傾しているものの、ほぼビーカー形である。

埋土は以下の通りである。

1．10ＹＲ2/1黒色　　黒ボクで比較的粘性がある。酸化鉄の集積が認められる。

以上の単層であり、自然堆積によって埋没したものであろう。

ロクロ使用成形の土師器破片が出土している。古代の土坑であろう。

〔ＢⅠ－3号土坑〕（第6図、写真図版4）

この土坑はＢⅠ－2号土坑の2ｍ北に位置し、北西ー南東方向に長軸をもつ土坑である。

規模は約100cm×145cmで深さは約34cmである。平面形は検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は、底面が若干傾斜し壁が外傾している。埋土は以下の通りである。

1．10ＹＲ3/2黒褐色　炭化物が混入し、粘性は少ない。縄文土器の破片が混じる。

2．10ＹＲ3/4暗褐色　黒色土と粘土の混合した層。粘性がある。

以上であり、自然堆積で埋没したものであろう。底面の直上より約1/2が残存する土器が出土している。その他に石匙が1点出土している。おそらく、縄文時代に属する土坑であろう。

〔ＢⅡ－1号土坑〕（第6図）

この土坑はＳ10ーＥＷ00の交点の西方約4ｍに位置し、北東ー南西方向に長軸方向をもつ土坑である。

規模は約125cm×160cm位で深さは約24cmである。平面形は若干歪んだ楕円形を呈し、検出面・底面ともに同様である。断面形は浅い皿形に近い形態を示している。埋土は以下の通りである。

1－a．10ＹＲ3/4暗褐色　シルトと黒褐色土の混合した層である。炭化物を含み、粘性はない。

b．10ＹＲ4/4褐　色　1－aよりもシルトの量が多い。炭化物を含まず、粘性はない。

以上の様である。おそらく、自然堆積で埋没したものであろう。実測図の中に石鏃の出土（10点）が記載されているが、現在、現物が行方不明である。本土坑は縄文時代に属する土坑であろう。

〔ＢⅡ－2号土坑〕（第6図）

この土坑はＮＳ00ーＷ10の交点の約3.5ｍ南に位置している。

規模は約80cm×85cmで深さは約45cmである。平面形は検出面・底面ともにほぼ円形である。埋土は以下の通りである。

1．10ＹＲ2/3黒褐色　粘性がほとんどなく、軟らかくボソボソしている。

2．10ＹＲ2/1黒　色　黒ボクで炭化物が混入している。酸化鉄の集積がある。

3.　10YR3/4暗褐色　シルトと黒色土の混合層で、シルトがブロック状に混入している。

4－a. 7.5YR2/1黒色　シルトが若干混入し、やや粘性がある。酸化鉄の集積がある。

b. 10YR2/2黒褐色　黒色土とシルトが混じっている。3層よりもシルトの量が少ない。

5.　10YR4/4褐色　粘土化したシルトと黒色土が混じり、固く締まっている。

6－a. 10YR2/1黒色　粘土質の黒色土で、非常に粘性が強い。

b. 10YR2/2黒褐色　黒色土の中にシルトが入り込んでいる。粘性あり。酸化鉄の集積あり。

以上の様であるが、自然堆積によって埋没したものであろう。遺物が出土していないので時期が不明である。

〔**BⅡ－3号土坑**〕(第7図、写真図版5)

この土坑はBⅡ－2号土坑の北方約3.5mに在り、NS00－W10の交点の西1mに位置している。

規模は約150cm×175cmで深さは約32cmを測る。検出面での平面形は不整楕円形を呈し、底面については平面図では起伏がありそうである。断面形では中央部がもっとも低く、両方に向かって次第に広がる形態を示している。埋土については以下の通りである。

1－a. 10YR2/3黒褐色　やや粘性のある土で、若干硬く締まっている。

b. 10YR2/3黒褐色　1－aとほぼ同じであるが、シルトが若干混入し明色に感じられる。

2.　10YR3/4暗褐色　シルトと黒色土の混合層。粘性が強く1層より硬く締まっている。

以上であるが、自然堆積による埋没を示すものであろう。遺物が出土していないので時期が不明である。

C区

〔**CⅠ－1号土坑**〕(第9図)

この土坑は調査範囲内ではもっとも東に在る遺構の一つで、N10－E10の交点の東方1mに位置している。

規模は約100cm×130cmで深さは約16cmである。平面形は、検出面・底面ともに東西に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形は浅いビーカー形に近い形態を示している。埋土は以下の通りである。

1－a. 10YR2/2黒褐色　粘性があり、若干シルトが混入している。

b. 10YR2/2黒褐色　1－aとほぼ同質であるが、若干黒味が強い。

2.　10YR3/4暗褐色　シルトが多く、黒色土が若干混じっていて汚れている。

以上であるが、自然堆積によって埋没したものであろう。遺物は縄文土器（表裏縄文）の破

片が出土している。おそらく縄文時代の遺構であろう。

〔**ＣⅠ－２号土坑**〕(第７図、写真図版６)

この土坑はＣⅠ－１号土坑の南約1.5ｍに位置し、北西－南東方向に長軸をもっている。

規模は約80cm×120cmで深さは約17cmを測る。検出面での平面形では長円形であるが、底面では北西部に一段低い部分があり比高は約５cmである。断面形では、土層図をみると長軸の両端部分が掘りすぎであることが明らかであり、底面の低い部分だけが土坑であることが判る。それによると、底面は平らで外傾する壁をもっている。埋土は以下の通りである。

１．　7.5ＹＲ3/3暗褐色　シルトと黒色土の混合層。粘性はない。

２．　7.5ＹＲ3/1黒褐色　粘性のない黒褐色土の中にシルトが若干混入している。

３．　10ＹＲ3/4暗褐色　１よりシルトが若干多く、軟らかく粘性がない。

以上であるが、自然堆積で埋没したものであろう。遺物として縄文土器（表裏縄文）が出土している。おそらく縄文時代の遺構であろう。

〔**ＣⅠ－３号土坑**〕(第９図)

この土坑はＣⅠ－１号土坑の西約１ｍに位置する。

規模は270cm×340cmで、平面形は非常に不整な楕円形を呈している。深さは位置によって異なるが、その中でも北寄りと南寄りの２ヶ所に最深部をもち、その部分は約30cmを測る。断面形は、土層図でみると、底面に起伏がありそうである。埋土は以下の様である。

１．　7.5YR3/2黒褐色　粘性がなく、シルトが若干混入している。縄文土器の破片を出土した。

２－ａ．10YR4/4褐　色　シルトと黒色土が混合したもので、シルト質で軟らかく、粘性はない。

ｂ．10ＹＲ5/6黄褐色　シルトの中に黒色土が混入している。汚れているが質的には２－１と同じ。

以上であるが、自然堆積によって埋没したものであろう。遺物として、縄文土器（表裏縄文）の破片と、石鏃（１）や石匙（２）　石篦状石器（１）等の石器も出土している。おそらく縄文時代の遺構であろう。

〔**ＣⅠ－４号土坑**〕(第８図)

この土坑はＣⅠ－３号土坑の南２ｍ位の所に位置する不整形な土坑である。

規模は約180cm×470cmで深さは約27cmである。平面形は何んとも形容のしがたい形態を示しているが、断面形では底面にも凹凸がほとんどなく、浅い皿状を呈している。埋土は以下の通りである。

１．　7.5ＹＲ3/2黒褐色　炭化物や若干の縄文土器片が混入し、粘性はない。

2－a. 10YR4/4褐　色　シルトと黒色土の混合層。2－bより明色。

b. 10YR3/3暗褐色　シルトと黒色土の混合層であるが、本層の方が黒色土の混入が多い。

以上であるが、自然堆積による埋没であろう。遺物として縄文土器（表裏縄文）の破片と、石鏃・石匙・不定形石器・石箆状石器等の石器も出土している。おそらく縄文時代の遺構であろう。

〔**CⅠ－5号土坑**〕（第7図、写真図版6）

この土坑はN10－EW00の交点の北東約4mにあり、CⅠ－3号土坑の約5m西方に位置している。

規模は約100cm×110cmで深さは約75cmを測る。平面形は検出面・底面ともに円形を呈し、断面形はビーカー形を示している。埋土は以下の通りである。

1．10YR2/2黒褐色　粘性があり硬く締まっている。炭化物とシルトを若干混入する。

2．10YR3/4暗褐色　粘性の強いシルトと黒色土の混合層で、軟らかく締まりがない。

3．10YR2/1黒色　　黒ボクの中にシルトが若干混入。粘性が非常に強く軟らかい。

4．10YR5/4にぶい褐色　シルト

以上であるが、自然堆積によって埋没したことを表わすものであろう。出土遺物がないので時期が不明である。

〔**CⅡ－3号土坑**〕（第7図、写真図版4）

この土坑はN10－EW00の交点の南西方向約6mに位置している。

規模は約70cm×140cmで深さは約57cmである。平面形は検出面・底面ともに隅丸の長方形気味を示している。埋土は以下の通りである。

1－a．10YR2/3黒褐色　炭化物が若干混入し、やや硬い。

b．10YR3/4暗褐色　シルトと黒色土の混合した土とおもわれる。粘性が強く軟らかい。

2．　　10YR5/6黄褐色　シルトで若干の黒色土が混入している。

以上であり、自然堆積による埋没を表わしているであろう。出土遺物がないので時期は不明である。

〔**CⅡ－5号土坑**〕（第8図）

この土坑は調査範囲の中ではもっとも北に在り、N20－W10の交点の北東約4.5mに位置する。

規模は約80cm×140cmで深さは約82cmを測り、長軸方向を北西－南東方向にもつ。平面形は検出面・底面ともに隅丸気味な長方形を呈している。断面形はビーカー形を示している。埋土

は以下の通りである。

1．10YR 3/2黒褐色　シルトと黒色土の混合した土、粘性がなく硬く締まっている。

2．10YR 2/2黒褐色　黒色土の中にシルトが混入している。粘性やや強く、硬く締まっている。

3．10YR 2/3黒褐色　シルトと黒色土の混合した土。若干粘性あり。

4．10YR 2/3黒褐色　3層とほぼ同じである。

5．7.5YR 4/4褐色　粘土質シルトの中に若干黒色土が混入。粘性は強い。

6．10YR 3/4暗褐色　シルトと黒色土の混合層。

7．10YR 4/6褐色　砂質シルトで、粘性が強い。

8．10YR 3/4暗褐色　前層より粒子が粗い。

以上の様であるが、自然堆積によって埋没したことを表わしているだろう。

〔**CⅡ－8号土坑**〕(第8図、写真図版6)

この土坑は4号住居址の北西約3mに位置している。

規模は約220cm×260cmで深さは約21cmである。検出面の平面形は隅丸の長方形気味であるが底面が中央部で高く、北西と南東部分が若干低くなっており、その比高は7cmを測る。断面形は全体的にみると浅い皿形である。埋土は以下の通りである。

1．7.5YR 3/3暗褐色　シルトで炭化物が若干混入している。

2．10YR 5/6黄褐色　黒色土が若干混入している。

以上の様であるが、自然堆積による埋没を示しているであろう。縄文土器（表裏縄文）の破片が出土していることから、縄文時代の遺構かも知れない。

〔**CⅡ－9号土坑**〕(第9図)

この土坑は4号住居址の西方約4mにあり、N10—W20の交点上に位置している。

規模は約180cm×300cmで深さは約40cmである。検出面での平面形は2ケ所に軽い括れをもつ隅丸長方形気味を呈し、断面形でみると浅い皿形を示している。また、北に位置する底面が南のそれより若干低くなっている。埋土は以下の通りである。

1．10YR 2/3黒褐色　酸化鉄の集積で赤味をおびている。

2．10YR 4/3にぶい黄褐色　シルトと黒色土が混合した、粘性のない粒子の粗い土である。

以上である。縄文土器（表裏縄文）の破片が大量に出土し、他に石鏃・不定形石器・石箆状石器等も共伴していることから、縄文時代の遺構である可能性が強い。

〔CⅡ－10号土坑〕(第9図)

この土坑は、調査範囲の中ではもっとも西方にあり、CⅡ－11号・CⅡ－12号の各土坑と南北方向に連らなるもので、CⅡ－9号土坑の西方2mに位置している。

規模は約180cm×340cmで深さは約21cmを測り、長軸方向を南北にもつ。平面形は不整な長楕円形であり、断面形は浅い皿形を示す。埋土は以下の通りである。

1．10YR2/3黒褐色　酸化鉄の集積で赤味をおびている。

2．10YR4/3にぶい黄褐色　シルトと黒色土が混合し、粘性のない粒子の粗い土である。

以上である。遺物が出土していないので時期が不明である。

〔CⅡ－11号土坑〕(第9図)

この土坑はCⅡ－10号土坑の南端と接して南に延びており、南はCⅡ－12号土坑と接している。

規模は約460cm×540cmで深さは約37cmである。平面形は不整形であるため形容しがたいが楕円形の北に張り出しのでた形態である。断面形では北部の底面が他の底面より低くなってはいるものの、南部のそれはほぼ平担で浅い皿形を示す。埋土は以下の通りである。

1－a．7.5YR2/2黒褐色　シルトや粘土が所々に混入し、炭化物を含む。酸化鉄の集積がある。

b．10YR5/4にぶい黄褐色　シルト・粘土・黒色土が混入している。

2．10YR3/2黒褐色　シルトと黒色土が混合している。酸化鉄の集積あり。

以上である。ロクロ使用以前の土師器の破片を出土している。古代に属する遺構かも知れない。

〔CⅡ－12号土坑〕(第9図)

この土坑はCⅡ－11号土坑の南端と接している。

規模は約130cm×130cmで深さは約37cmを測る。平面形はほぼ正円に近い円形を示し、断面形は半円状を呈している。埋土は以下の通りである。

1．7.5YR2/2黒褐色　黒色土の中にシルトが若干混入している。酸化鉄の集積が若干あり。

以上である。

〔CⅡ－13号土坑〕(第8図)

この土坑はN20－W10の交点の東約2.5mに位置し、北西－南東方向に長軸をもつ。

規模は約80cm×160cmで深さは約80cmである。平面形は、検出面・底面ともに隅丸の長方形気味を示している。断面形は、土層図がないので定かでないが、ビーカー型を呈するものであろう。埋土は記録が残っていないので不明である。

C．溝　跡

遺構配置図の中には多くの溝跡が実測されているものの、個々の単独遺構と登録した記録(実測図を含めて）が残っていない。この中には現用の水路跡も含まれているらしい。遺物を収納したポリ袋には個々の遺構名を付しているが、溝跡出土のものは遺構を特定できない。ただ、遺構配置図での他遺構との重複関係では、古代と目される住居址を削剝していることから、古代以降に掘削された溝跡であろう。

2．遺　　物

遺構が多い割に、出土遺物は少ない。これらの遺物も遺構に共伴したものが少なく、表採されたものや粗掘り中に表土より出土したものがほとんどある。遺構に共伴したとされる遺物も若干あるが、溝跡の説明でも述べたごとく、遺構配置図にない遺構名が記入されているものを含んでいる。これは遺構名が精査前にブロックごとの連番で付され、遺構にならなかった場合には欠番としたことから生じた結果であろう。前項の遺構の説明で遺物にほとんど触れていないのは以上の様な理由によるものである。従って、現段階では遺構名を特定できないものが多いので、遺物の収納されているポリ袋に記入されている名称をそのまま付して行くこととして図版では遺物一点ごとに出土地点を明記した。そして、同じ遺構名を付している遺物はほぼ同じ位置に割り付けている。但し、古代に属するものと、縄文時代の遺物は分けている。

本遺跡で出土した遺物は、時代的にみると縄文時代の遺物と古代の遺物がある。さらに、時代別にその種類をみると、縄文時代の遺物には土器と石器、古代では土器と鉄器がある。その中で古代の土器には土師器と須恵器が含まれていることはいうまでもない。ここでは時代別にし、さらにその中で器種別に説明を加えることにする。

A．縄文時代の遺物

この時代の遺物に土器と石器があることは既に述べた。ここではその種類別に説明を加えることにする。

〔土　器〕(第12～15図、写真図版８～10)

多くの破片が出土しているが、図化されたものは２点（第12図①・②）と少なく、それも完形となるものではなく、①がほぼ½・②は体部下位と底部若干をそれぞれ残すのみである。それ以外のものはすべて破片であるために、拓本図を作成して掲載した。しかし、全体的にみると小破片であるばかりでなく、器表の「アレ」がひどく、縄文も微かにその痕跡を残している

だけのものが多い。従って、拓本図は縄文の明瞭なものを中心に選択して掲載している。出土地点や出土遺構をみると、表採や表土では調査範囲のほぼ全域で出土しているが、遺構では、ＣⅠ・ＣⅡ区に位置する土坑よりの出土が多い。Ａ区やＢ区ではＡ－３土坑とＢⅠ－３土坑だけである。

本遺跡で出土した縄文土器は、底部形態から尖底のものと平底のものに細分されるが、底部形態を明瞭に残るものは前者１点・後者１点のみである。しかし、尖底のものは内外面ともに縄文を付すものが中心であり、平底のものは内面に縄文をもたないことが相違している。

尖底土器は、図化された１点（第12図①）から全体的なことを窺い知ることができるが、それによれば、口縁部径が推定23cm・残存高21cmであるが、口縁部径と器高がほぼ同じであろう。器表には撚りの軟らかい原体ＬＲを横方向に回転させて施した縄文が付されている。内面にも器表と同じ原体を使用した縄文が付されているが、器表の様に密ではなく疎らである。さらに、器表には口縁端部とその下２cm位の２ケ所に粘土紐貼り付けによる隆帯が全周し、所々竹管状のもので刺突し隆帯の脱落を防いでいる。全体的な形態は鋭角な尖底ではなく、体部に丸味をもって窄む鈍角な尖底である。胎土には砂粒が混じっているが、比較的緻密な土である。表面的には繊維を混じた形跡がないが、断面でみると、繊維の混入とおもわれる痕跡を残している。色調は茶褐色気味を呈している。その他の土器についてもほぼ大同小異のことがいえる。ただ縄文の施文に使用された原体には何種類かがありそうである。

平底のものは、明確なものが１点であるのでその実体は不明である。しかし、体部の縄文や胎土を前者のそれと比較すると明らかに差があり、前者とは時期が違うものであろう。

〔**石　器**〕（第16～23図、写真図版10～12）

石器とおもわれるもの（使用痕をもつ剥片も含めて）が全部で87点出土している。その中には器種として①石鏃――13点、②石匙――23点、③石槍――１点、④石錐――１点、⑤磨製石斧――１点、⑥打製石斧――２点、⑦掻器――１点、⑧不定形石器――31点、⑨石箆――11点⑩円球状磨石――１点、⑪棒状擂石――１点、⑫石製円板――１点等が含まれている。

これらの石器で、遺構に伴って出土したものは36点のみで他は溝跡や表土等から出土している。出土した地点や遺構では、先の土器と同じで粗掘りや表採では遺跡全面より出土しているが、遺構ではＣⅡに在る遺構からの出土が多い。次に器種別に若干の説明を加える。

※石鏃（第16図①～⑬、写真図版10）

全体で13点出土している。これらは無茎型４点（⑧～⑪）と、有茎型９点（①～⑦・⑫・⑬）に大別されるが、無茎型では凹基（⑧・⑨）のものと円基（⑩・⑪）のものに細分される。有茎型は茎部を特別に作り出すもの（④・⑦・⑬）と全体形が細長く柳葉形を示し、一端が茎部

になり得るもの（①～③・⑤～⑥・⑫）に細分される。一部を欠損するものが多いが、もっとも小型のもので現存長が2.8cmと比較的大型で最大のものは4.8cmである。巾は柳葉形のものは1cm～1.2cmが中心であるが、茎を特別に作り出すものや無茎のものは1.7cmと巾広にできている。厚みはいずれも大差がなく、6mm～8mm位のものが多い。C地点での出土が多く、遺構からも出土している。

※石匙（第16図⑭・⑮、第17図⑯～㉗、第18図㉘～㊱、写真図版10～11）

明らかに石匙といえるものは6点（⑭～⑱・㉟）のみである。その他のものは欠損しているので明確でないが、残存形態が石匙に近似していることから本種とした。これらは㉟が横型である以外はいずれも縦型である。形状や大きさともに個体差が大きく、標準的な形態を呈示することはできない。剥離調整では片面にのみ剥離加工したものと、両面に剥離したものがある。両面剥離のものは片側の側縁のみを加工するものと両側縁を加工するものがある。片面剥離のものは両側縁ともに加工している。調査範囲全域から出土している。

※石錐（第18図㊲、写真図版11）

1点の出土である。先端部を欠損しているので明確でない点もあるが、実測図での上端に何んら加工痕をもたないものである。両側縁部は両面に入念な剥離加工を施したもので先端部の断面形は菱形を呈している。つまみ部はやや大きい。

※石槍（第18図㊳、写真図版12）

先端部を一部欠損しているが、1点出土している。ほぼ左右対称形を示し、両側縁に入念な剥離調整を加えたもので、基部は円基で若干の凹みを作り出している。大きさは残存長9.2cm、巾3.8cm、厚み1.5cmである。

※不定形石器（第19図㊴～㊺、第20図㊻～㊾、写真図版11・12）

刃部に剥離調整を施しているが、形態が石鏃や石匙等の様に定形的でないものを一括したが、全部で31点出土し、本遺跡で出土した石器の約36％を占めている。しかし、これらの中には一部を欠損していると考えられるものが少なからず含まれていることから、本来は他の器種に入るべきものを含んでいる可能性がある。例えば、㊼～㊸・㊺の8点は大型の石鏃か小型の石槍に入るものかも知れない。この8点を除くと、その他のものは側縁に剥離調整を加えただけのもので、そのほとんどは片面加工である。機能的には切削具とされているものである。従って大小や形態は個体差が大きい。出土地でみると調査範囲全域で出土しているが、その中でもC区での出土が多い様である。遺構よりも表土からの出土が多い。

※磨製石斧（第21図㊿、写真図版11）

本遺跡では1点出土しているが、刃部や側縁部・頭部を若干欠損している。特に頭部の欠損が大きいことから、全長は不明である。

※打製石斧（第22図㊵・㊶、写真図版12）

石篦に入る可能性があるものの、両面剥離調整をしていることから打製石斧としたが２点出土している。大きさはそれほど大きいものではない。比較的巾広でズングリした形態である。

※石篦（第21図㉑・㉕、第22図㊽・㊾、写真図版11・12）

ここにはいわゆる一般的に石篦と呼ばれるものを入れたが、断面が三角形状で片面剥離調整だけで成形されたものである。全部で４点だけである。

※石篦状石器（第21図㉒～㉔・㉖、第22図㊷～㊹、写真図版11・12）

先の石篦に形態が近似したものであるが、いわゆる石篦とは異なるものである。名称が定かでないので一応石篦状石器としておく。全部で７点出土しているが。その中の㉔は打製石斧に入る可能性がある。

※掻器（第22図㊼、写真図版11）

縁辺部を片面剥離したもので、１点出土している。石篦とも近似しているが、石篦の場合は刃部先端が直線的なのが一般的であるが、本種は円いことから別種とした。

※石製円板（第16図㊻、写真図版12）

扁平な円礫を研磨して作ったもので、１点出土している。ほぼ全面に製作時の擦痕を残し、縁辺部が若干欠損している。

※凹み石（第33図㊻、写真図版12）

扁平な円礫の両面に凹みをもつもので、１点出土しているが、凹みは浅く微かに残しているのみである。

※棒状擂石（第23図㊼、写真図版12）

断面三角形でやや長目の礫の稜線を使用したもので１点出土している。現品は折損しているので全体的なことは不明である。

B. 古　代

該期に属する遺物としては土師器・須恵器・鉄器がある。ここでは、それぞれの種類に大別して若干の説明を加えることとする。

〔土師器〕（第10図、写真図版７）

住居址が検出されている割合にその出土量は少ない。その中の何点かは住居址より出土したと明記されているがその住居址が特定できない。成形技法でみた場合にはロクロ使用成形のものが１点含まれる以外はすべてロクロ未使用成形のものである。また、完形土器はまったくない。いずれも破片である。器種では坏形土器・甕形土器・小型土器があるので器種別に記述す

る。

※坏形土器（第10図①～④、写真図版７）

④以外はいずれもロクロ未使用成形で、その中の①と②は非常に大型となるものらしい。①と②は内外面に入念なミガキが入り、その後、内面は黒色処理されている。③は内外面ともナデのみによって仕上げられ、黒色処理はない。④はロクロ使用成形で、底部切り離しが回転糸切り無調整のものであり、内面に黒色処理はない。その他は破片であるので定かでない。

※甕形土器（第10図⑥～⑯、写真図版７）

いずれもロクロ未使用成形のものであるが、完形となるものはまったくない。口縁部形態では、外反後端部が内弯するもの、ほぼ直立で端部が外反するもの、全体的に外反するもの等の種類があり、頸部の段の有無では有るものと無いものがある。調整技法では、口縁部外面はハケメ後ヨコナデかヨコナデで、内面はほとんどヨコナデのみで仕上げている。体部は、外面がハケメ後ヘラミガキかヘラナデが一般的であるが、内面では、一部にハケメを残すものもあるが、ほとんどはヘラナデかヘラケズリで仕上げられている。底部の周囲に突出をもつものが多く、底面に木葉痕をもつものはない。

※小型土器（第10図⑤、写真図版７）

小型の鉢形を示すもので１点出土している。内外面ともヘラナデで仕上げられている。

〔須恵器〕

全部で13点出土しているが、完形のものはない。この中の一部は遺構より出土しているが、ほとんどは表土よりの出土である。器種では坏形土器と甕形土器がある。

※坏形土器（第11図①～③、写真図版８）

全部で３点出土しているが、いずれも破片からの図化である。底部切り離し技法は回転糸切り無調整で、体部～口縁部は若干内弯気味に外傾し、端部で軽く外反もしくは外弯している。器壁には明瞭なロクロ目を残している。

※甕形土器（第11図④～⑫、写真図版８）

拓本図のものも含めて10点出土しているが、いずれも破片であるため全体的なことは不明である。その中で⑤⑥は底部破片であるが、⑥は「ハ」状に踏張る高台の付されたものであることから壺形であるかも知れない。④は口縁部の破片であるが、口唇部に沈線状の凹みをもつものである。⑦～⑫についてはいずれも体部破片であるが、外面に平行叩き目をもつものと、ナデのみのものがある。内面はいずれもナデのみである。

〔鉄　器〕（第11図⑰、写真図版８）

本遺跡では１点出土している。断面が扁平で細長いものであることから刀子の可能性が大きい。

Ⅴ　ま　と　め

以上、本遺跡での調査結果について記述してきたが、若干のまとめをしておきたい。

まず、遺構についてであるが、その中に住居址と土坑・溝跡が含まれていることは前述の通りである。住居址の属する時期は、ほとんどの場合、共伴遺物を出土していないので断定資料がないが、住居址の主軸方向が北西ー南東方向に西偏し、対角線上に４ヶの柱穴をもつといった特徴をもっている。この様な特徴をもつ住居址は、現在までに調査された当遺跡の周囲に所在する遺跡の調査成果によれば、奈良時代に位置づけられる住居址の特徴と同様であるが、当地域での該期の住居址には貯蔵穴をもたないのが普通であり、当遺跡例の様にカマド右脇に貯蔵穴をもつのは稀有な例である。遺物の共伴がほとんどないことは前述の通りであるが、粗掘り中の出土遺物の中にロクロ使用成形の土師器がほとんどないことから考えても、本住居址群は奈良時代の集落址として理解することができるであろう。しかし、２号住居址は他の４棟と比較すると異なる特徴を示している。特に柱穴が壁際に寄ることと、中間にも１ヶ配置することは奈良時代に属するこの規模の住居址では今だ知られていない。決論的にいうならば、前項でも述べたごとく、いわゆる中世と目される住居址の柱穴配置と同じ様相を示している。従って、２号住居址については古代の住居址とすることには一応疑問としておく。

土坑は大別すると、平面形が円形のもの、長方形のもの、不整形のものに分類される。調査範囲内での在り方をみるとほぼ全域に散在しているが、その中でも１号住居址付近・４号住居址付近・ＣⅠ—１号土坑付近に密集している。これらの中で縄文土器のみを出土しているのはＡ—３号土坑・ＢⅠ—３号土坑・ＣⅠ—１号土坑・ＣⅠ—２号土坑・ＣⅠ—３号土坑・ＣⅠ—４号土坑・ＣⅡ—８号土坑・ＣⅡ—９号土坑の８基である。形態的には円形や楕円形そして不整形なものがある。その他に、Ａ—５号土坑・ＣⅡ—３号土坑・ＣⅡ—５号土坑・ＣⅡ—10号土坑では遺物が出土していないが、埋土の状況が縄文土器を出土した土坑のそれと同じ様相を呈していることから、縄文土器を出土した土器と同時期と考えられるという。また、土師器を出土した土坑はＡ—１号土坑・Ａ—２号土坑・Ａ—９号土坑・Ａ—12号土坑・Ａ—13号土坑・ＢⅠ—１号土坑・ＢⅠ—２号土坑・ＣⅡ—11号土坑の８基である。

以上の様なことから、前者の14基については縄文時代に属する土坑である可能性が大であるし、後者は集落址に伴う土坑である可能性が強い。遺物をまったく出土していないＡ—４号土

坑・ＢⅠ－５号土坑・ＢⅡ－１号土坑・ＢⅡ－２号土坑・ＢⅡ－３号土坑・ＣⅡ－10号土坑・ＣⅡ－13号土坑の７基については時期を明確にし得ないが、ＣⅡ－13号土坑はＣⅡ－５号土坑と形状・規模がほぼ同じであることから縄文時代に属する可能性が強い。

溝跡については性格・時期ともに断定する資料がないが、いずれも住居址を削剝していることから奈良時代以降に掘削された溝跡であることは事実である。

遺物について考えてみよう。

本遺跡で出土した縄文土器は①底部形態が尖底である。　②器表の内外面に縄文が施文されている。　③口縁部外面の端部に粘土紐貼り付けによる隆帯が２条全周している。といった特徴をもっている。また、胎土には砂粒や石英粒等の混入はあるものの、肉眼観察では繊維の混入がほとんど認められない。この様な特徴を具備している縄文土器は時期的には縄文時代早期に属することは確実であり、その中でも、器表に単節斜縄文が付され、内面にも縄文を施文していることは早期末葉に位置づけられるものとされている。本遺跡例の様に口縁端部に粘土紐貼り付けをもつものは青森県の赤御堂遺跡や早稲田貝塚・唐貝地貝塚そして岩手県では崎山弁天遺跡（大槌町）等に類例がみられ、この種の土器は器表内外面に縄文を施文する土器群に共伴して出土している。内外面に縄文を施文する土器は他に、宮城県では梨木畑貝塚・上川名遺跡・槻木遺跡・秋田県では神沢海岸遺跡・岩井堂洞窟、岩手県では関谷洞窟等その出土例は多く、いずれも時期的にほぼ併行する土器群として理解されている。以上の様なことにより、本遺跡出土の器表内外面に縄文を施文した土器はこれらの他遺跡例と同種として理解し、時期的には縄文時代早期末葉に位置づけられるものとしておく。

土師器については前述の通りであるので特別改めて記述することもないが、奈良時代に属するものである。須恵器については時期を明記できない。

本遺跡では87点の石器が出土している。これらはいずれも縄文時代に位置づけられるものであろう。本遺跡で出土した縄文土器は縄文時代早期末葉に位置づけられるものであることから、これらの石器群もまた、縄文時代早期末葉に属するものといえるだろう。この理解が正しいとしたならば、該期の石器組成を考える上で貴重な資料を提供したことになるであろう。特に石鏃の形状や石箆等はその様相を良く表わしている。また、石匙のほとんどが縦形であることも該期の特徴と良く一致している。いずれにしても、該期単独で構成される遺跡は大渡野遺跡や先の崎山弁天遺跡等その例が少ないことから、今後これらの遺跡例とも対比しながら考えてみたい。

Ⅵ さいごに

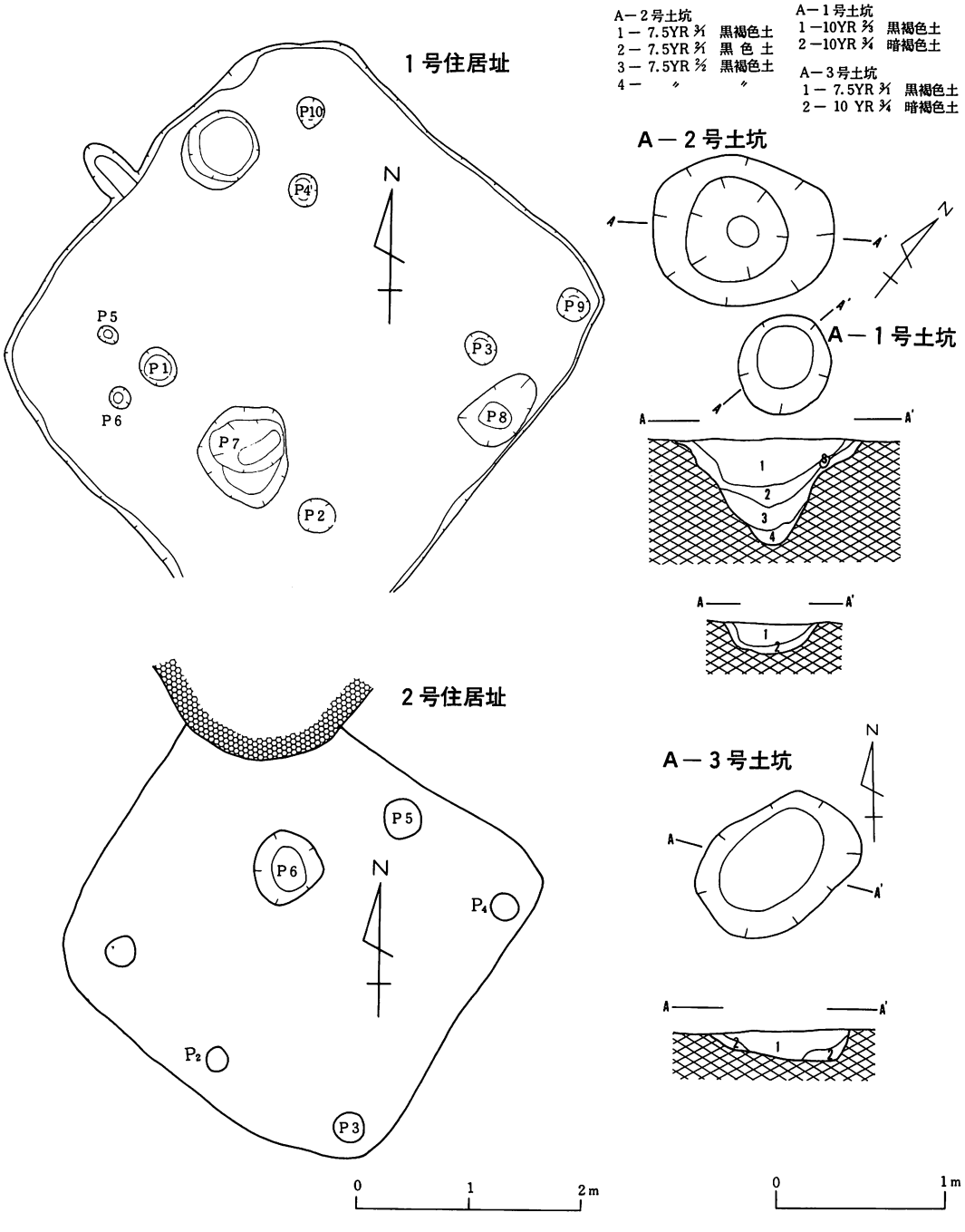
以上、本遺跡に対する調査結果と若干のまとめを記述してきたのであるが、これは、筆者が調査担当者より引き継いだ記録の範囲でまとめたものである。従って、調査担当者の意とする所と異なる捉え方をしている可能性があることを改めて付記しておきたい。もし、結果的にその様な事実があれば、それはすべて筆者の責任であることもまた、明記しておきたい。しかし、それはまた、ある意味では至し方のないことでもある。なぜならば、現地の状況をまったく知らない形でその遺跡の報告をするということは、その危険性を多分に含んでいることは誰しも知っていることである。本遺跡の報告はあえてそれを行ったのである。ましてや、現地調査後５年という時間的経過を経ている。記憶の喪失や遺物の移動という悪状件もあった。この様な状況の中で、かつての記憶をたどりながら、筆者の報告に誠心誠意の御協力をいただいた調査担当者に対し心からの謝意を表したい。

なお、本報告書を編集するに当り、遺物処理や図面トレース等は藤島ヒロ子女史以下11名の室内整理員の方々より多大の御協力があったことに謝意を表して、本報告のおわりとしたい。

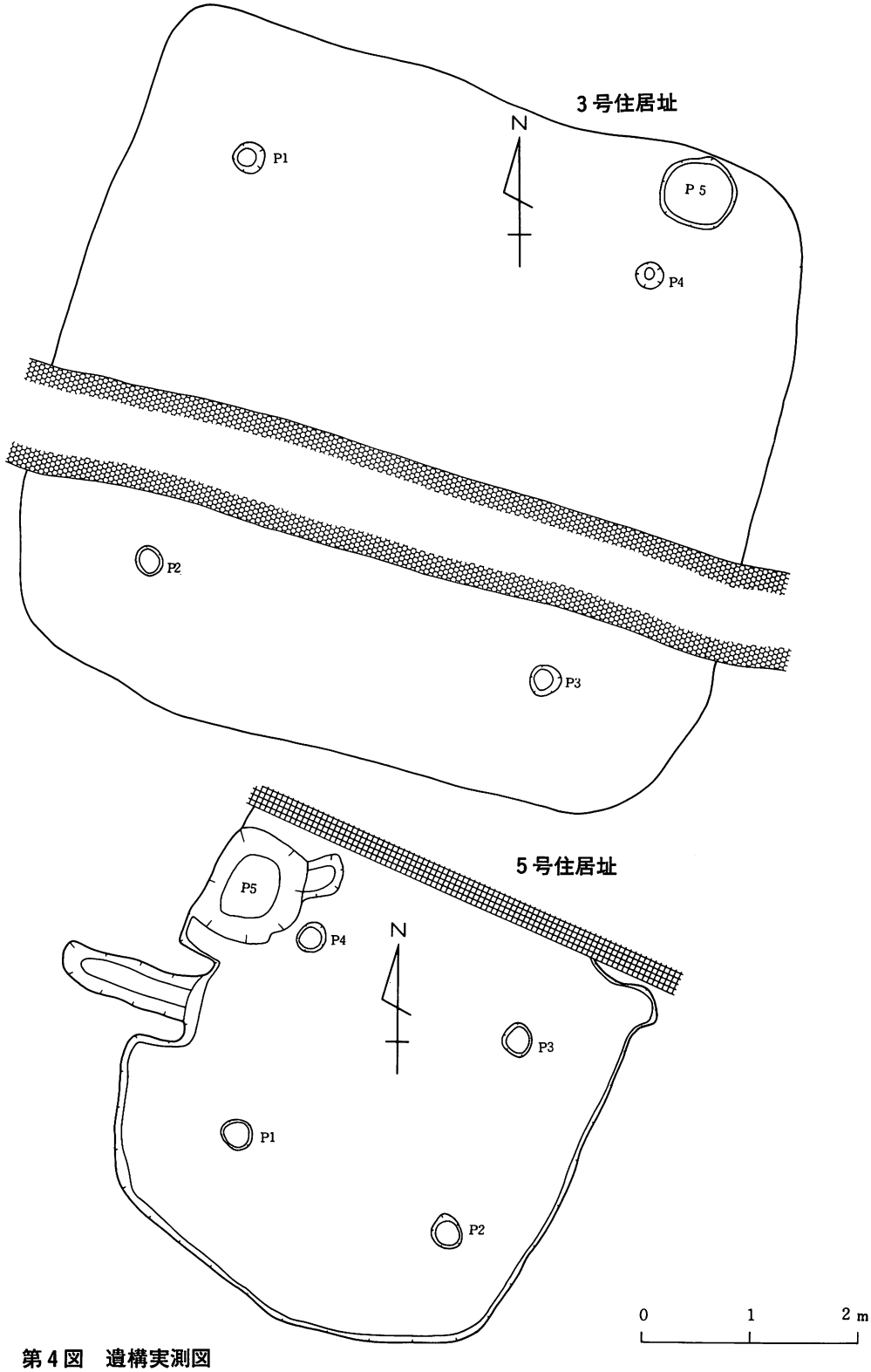
No.	遺構名	器種	法量 最大長cm	法量 最大巾cm	法量 最大厚cm	法量 重量g	石質
1	表採	石鏃	2.72	1.07	0.38	0.96	西郷石安山岩
2	A区1号住	〃	4.08	0.82	0.48	1.45	石質細粒凝灰岩
3	No.2 Pit床上	〃	3.95	1.14	0.54	1.94	
4	表採(C区)	〃	3.37	1.55	0.63	2.25	
5	C－Ⅱ－9埋土	〃	3.99	1.1	0.5	2.1	硬質泥岩
6	C区－Ⅰ－No.3	〃	3.45	1.26	0.6	2.54	
7	西側大溝	〃	4.08	1.59	0.73	3.36	
8	B Ⅱ－1	〃	2.88	1.26	0.42	1.46	石質細粒凝灰岩
9	C－Ⅱ－9	〃	2.84	1.43	0.4	1.3	石質泥質細粒凝灰岩
10	C－Ⅰ－14	〃	3.0	1.62	8.4	3.46	
11	C区－Ⅰ－No.3	〃	3.54	1.7	0.8	4.56	
12	C区	〃	7.4	1.6	0.66	4.55	粘板岩
13	C区表土	〃	3.92	1.24	0.9	4.16	
14	C区－Ⅰ－No.3	石匙	5.93	1.6	0.78	6.9	
15	C区－Ⅰ－No.4	〃	4.8	1.42	0.47	4.2	
16	B区表土	〃	6.35	1.97	1.68	9.35	石質
17	C－Ⅰ－No.4	〃	6.32	1.61	0.71	7.52	
18	C－Ⅰミゾ3	〃	7.1	2.7	0.76	13.45	石質泥質細粒凝灰岩
19	No.1遺構	〃	5.59	1.4	0.66	5.7	〃
20	表採	〃	4.95	1,65	0.6	5.12	石質細粒凝灰岩
21	A－14	〃	3.06	1.06	0.73	1.88	〃
22	C区－Ⅰ－No.4	〃	(2.05)	2.57	0.68	5.14	
23	C区表土	〃	2.86	1.42	0.84	4.45	
24	B－Ⅰ－3埋土	〃	(2.76)	2.0	0.8	3.87	石質細粒凝灰岩
25	表採(C区)	〃	3.44	2.53	0.9	8.35	
26	表採No.6	〃	(3.5)	1.56	0.68	4.9	
27	A区表土	〃	(2.77)	1.2	0.56	1.56	石質細粒凝灰岩
28	A区表土	〃	3.9	1.44	0.49	3.4	石質泥質細粒凝灰岩
29	A区表土	〃	3.5	1.8	0.74	5.25	石質細粒凝灰岩
30	C－Ⅰ表採2	〃	3.98	2.34	0.9	7.9	
31	B区表土	〃	3.41	2.0	0.96	5.06	石質細質凝灰岩
32	A－南－括	〃	(2.85)	1.66	0.56	2.95	石質泥質細粒凝灰岩
33	C－Ⅰ表	〃	4.06	1.92	0.86	5.82	
34	西側大溝	〃	(2.08)	1.04	0.3	0.75	
35	西側大溝	〃	2.6	3.46	0.78	6.9	
36	西溝以西	〃	2.86	2.88	0.9	9.3	石質細粒凝灰岩
37	C区表土	石錐	4.52	1.7	0.86	5.03	
38	表採No.12	石槍	8.88	3.65	1.38	34.22	石質細粒凝灰岩
39	表採(C区)	不定形石器	3.15	2.86	0.76	7.75	〃
40	表採No.8	〃	2.36	2.94	0.78	6.8	珪質泥岩
41	A区表土	〃	(3.02)	3.54	0.6	6.15	石質泥質細粒凝灰岩
42	A区表土	〃	2.35	3.86	0.51	4.95	〃
43	B－Ⅱ－1埋土	〃	4.31	1.22	0.5	2.76	
44	A－14埋土	〃	2.84	1.6	0.7	2.95	石質細粒凝灰岩

No.	遺構名	器種	法量 最大長cm	法量 最大巾cm	法量 最大厚cm	法量 重量g	石質
45	表採(C区)	〃	(1.9)	2.0	0.4	2.26	石質細粒凝灰岩
46	C区－Ⅰ No.4	〃	3.08	3.1	0.94	11.3	
47	A－14	〃	3.18	2.03	0.74	5.72	石質細粒凝灰岩
48	C区－Ⅰ－No.4	〃	5.0	2.61	1.12	13.46	
49	A区表土	〃	2.82	2.01	0.61	3.84	珪質泥岩
50	C－Ⅰ－ミゾ4	〃	4.4	1.91	1.26	9.55	石質細粒凝灰岩
51	表採(C区)	〃	(3.78)	3.0	1.7	13.96	
52	C－Ⅰ－ミゾ5	〃	(3.16)	2.0	0.08	4.65	石質細粒凝
53	C区表土	〃	3.82	1.7	1.3	6.98	
54	C－Ⅰ－No.4	〃	(4.3)	3.41	1.1	21.6	
55	C区Ⅱ	〃	5.17	2.33	1.9	11.29	石質泥質細粒凝灰岩
56	A区表土	〃	42.6	3.52	0.6	14.72	石質細粒凝灰岩
57	A－Ⅰ－3	〃	2.86	5.29	1.06	16.8	石質泥質細
58	B区表土	〃	5.09	2.7	1.6	17.3	石質細粒凝灰岩
59	表採(C区)	〃	5.12	4.26	1.74	39.42	石質細粒凝灰岩
60	C区Ⅱ	〃	4.5	2.12	0.98	6.23	〃
61	C－Ⅰ	〃	5.0	2.9	0.8	14.16	〃
62	B区表土	〃	5.44	2.1	0.2	11.95	
63	C区表土	〃	1.64	3.7	1.14	34.85	
64	C－Ⅱ－1住z	〃	5.2	3.62	1.58	21.64	
65	C区表土	〃	3.41	2.3	0.0	5.01	石質細粒凝灰岩
66	C Ⅱ－9	〃	3.64	3.67	1.11	12.5	〃
67	表採No.14	〃	2.3	4.3	1.09	9.82	石質細粒凝灰岩
68	A区溝跡	〃	3.7	4.0	1.78	16.2	〃
69	東西溝跡	〃	6.06	4.34	0.54	18.8	石質細粒凝灰岩
70	西側大溝	磨製石斧	6.05	4.5	1.62	8.04	
71	表採	石箆	6.44	3.88	1.78	43.19	粘板器ホルンフェルス
72	表採No.15	石箆状石器	6.5	2.92	1.3	35.1	〃
73	C区Ⅰ No.4	〃	7.5	3.16	1.78	40.0	
74	表採No.16	〃	6.92	5.72	1.42	80.02	石質細粒凝灰岩
75	表採No.10	石箆	5.1	3.2	1.36	27.2	石質細粒凝灰岩
76	C区Ⅰ－No.3	石箆状石器	7.66	3.6	1.62	42.2	
77	C－Ⅰ－No.4	掻器	8.26	4.5	1.23	80.0	
78	C Ⅱ－1住No.53	石箆	6.23	3.7	1.67	31.42	
79	C Ⅱ－2号址	〃	8.0	3.8	1.32	46.3	石質細粒凝灰岩
80	A区溝跡	打製石斧	6.58	3.0	1.86	29.1	〃
81	西側大溝	〃	7.3	4.06	1.32	51.09	
82	C Ⅱ－9	石箆状石器	12.86	5.96	2.56	22.	粘板岩ホルンフェルス
83	C Ⅰ－ミゾ2	〃	7.18	3.72	1.7	39.2	〃
84	C Ⅰ－ミゾ1	〃	11.52	3.61	1.7	90.0	〃
85	C区表土	石製円板	3.0	2.9	0.6	7.0	
86	表採	凹み石	10.0	8.9	5.3		西郷石安山岩
87	表採	棒状擂石	(8.6)	5.94	5.12		
88							

掲載石器計測表

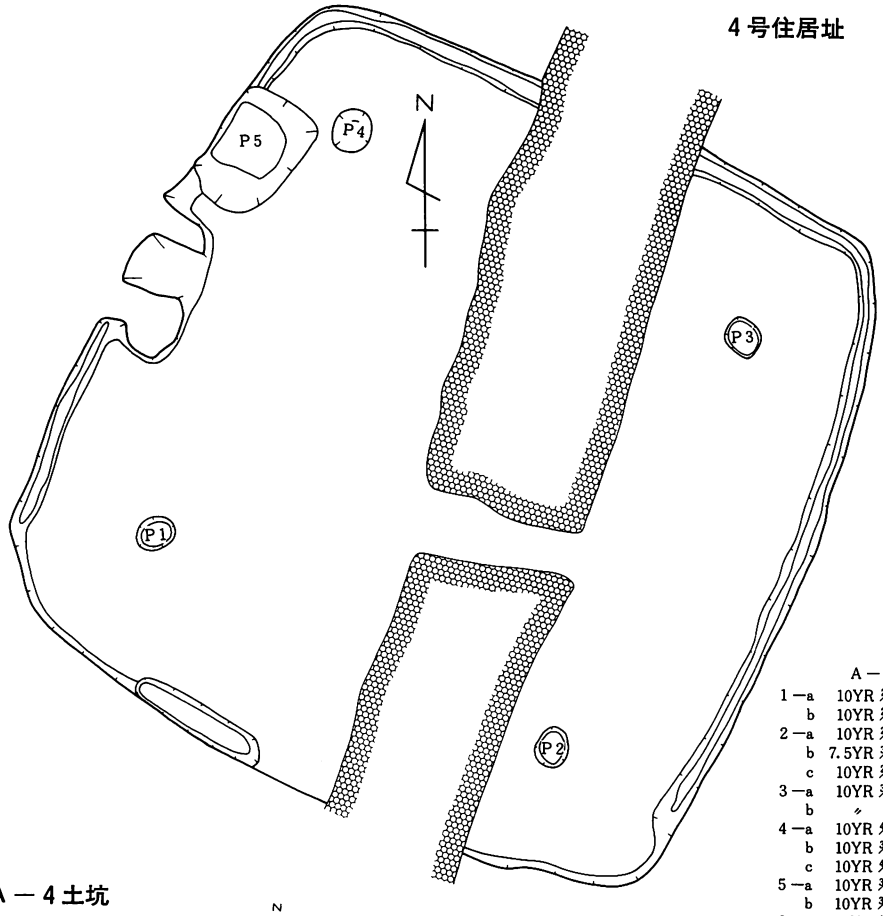

1号住居址
P10
P4
N
P5
P1
P6
P7
P2
P3
P8
P9
A－2号土坑
1－ 7.5YR 3/1 黒褐色土
2－ 7.5YR 3/1 黒 色 土
3－ 7.5YR 3/2 黒褐色土
4－ 〃 〃
A－1号土坑
1－10YR 2/3 黒褐色土
2－10YR 3/4 暗褐色土
A－3号土坑
1－ 7.5YR 3/1 黒褐色土
2－ 10 YR 3/4 暗褐色土
A－2号土坑
A－1号土坑
A－3号土坑
2号住居址
P5
P6
P4
P2
P3
0 1 2m
0 1m

第3図　遺構実測図



第4図　遺構実測図

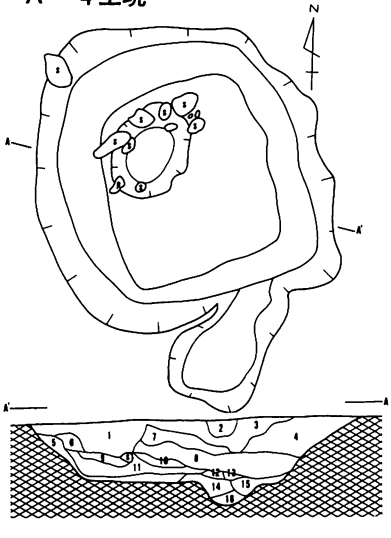
4号住居址



A－5号土坑

1－a	10YR 3/1	黒褐色土
b	10YR 3/2	〃
2－a	10YR 3/3	〃
b	7.5YR 3/3	暗褐色土
c	10YR 3/3	黒 〃
3－a	10YR 3/4	暗 〃
b	〃	〃
4－a	10YR 4/4	褐 色 土
b	10YR 3/4	暗褐色土
c	10YR 4/4	褐 色 土
5－a	10YR 3/2	黒褐色土
b	10YR 3/4	暗褐色土
6	10YR 4/4	〃

A－4土坑

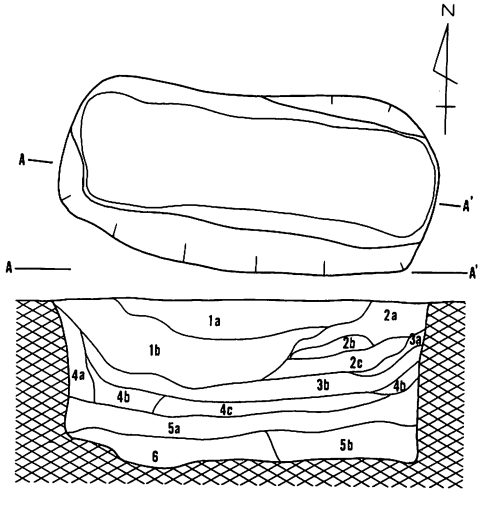


0　　2 m

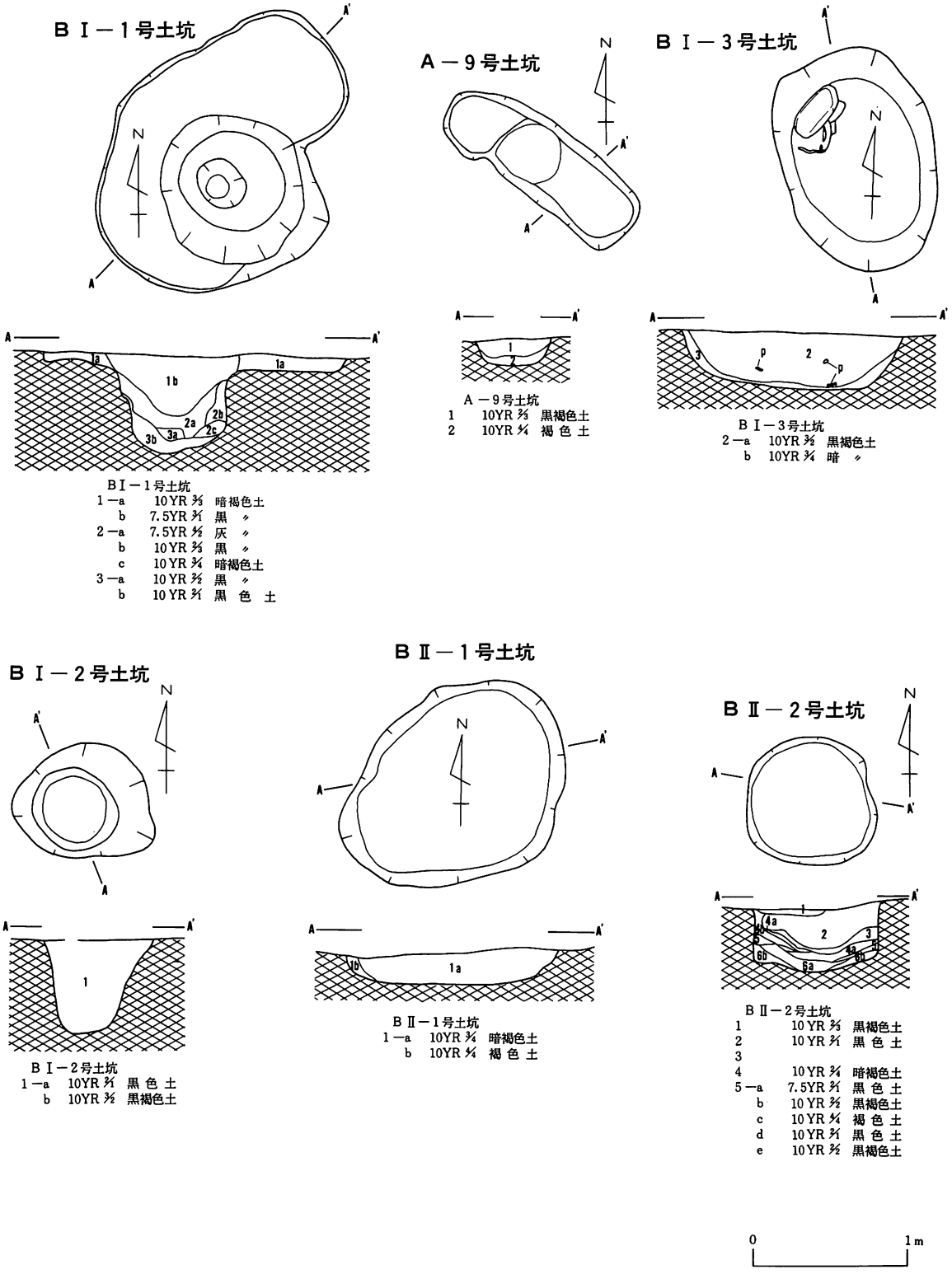
A－4号土坑

1	10YR 3/3	暗褐色土
2	10YR 3/4	〃
3	10YR 3/2	黒 〃
4	10YR 3/3	暗 〃
5	10YR 3/3	〃
6	10YR 3/3	黒 〃
7	10YR 4/3	にぶい褐色土
8	10YR 3/1	黒褐色土
9	10YR 3/3	〃
10	10YR 4/3	にぶい褐色土
11	10YR 3/2	黒褐色土
12	10YR 3/2	〃
13	10YR 3/3	〃
14	10YR 3/2	〃
15	10YR 3/1	〃
16	〃	〃

A－5土坑



第5図　遺構実測図



BⅠ－1号土坑
1－a　10YR 3/3　暗褐色土
　b　7.5YR 3/1　黒　〃
2－a　7.5YR 3/2　灰　〃
　b　10YR 3/3　黒　〃
　c　10YR 3/4　暗褐色土
3－a　10YR 3/2　黒　〃
　b　10YR 3/1　黒　色　土

A－9号土坑
1　10YR 3/3　黒褐色土
2　10YR 5/4　褐　色　土

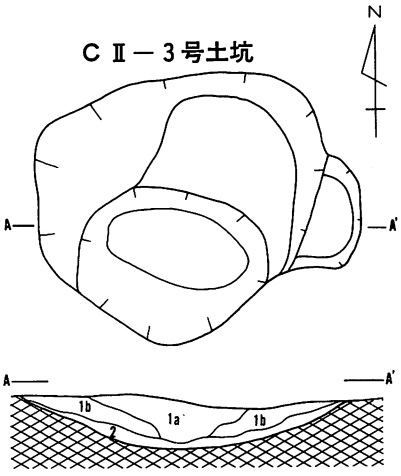
BⅠ－3号土坑
2－a　10YR 3/2　黒褐色土
　b　10YR 3/4　暗　〃

BⅠ－2号土坑
1－a　10YR 3/1　黒　色　土
　b　10YR 3/2　黒褐色土

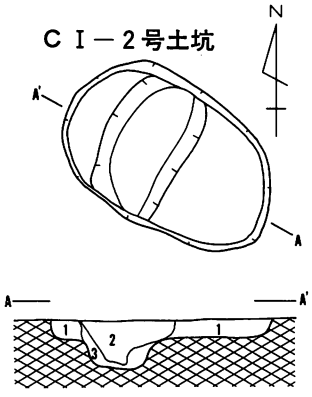
BⅡ－1号土坑
1－a　10YR 3/4　暗褐色土
　b　10YR 5/4　褐　色　土

BⅡ－2号土坑
1　10YR 3/3　黒褐色土
2　10YR 3/1　黒　色　土
3
4　10YR 3/4　暗褐色土
5－a　7.5YR 3/1　黒　色　土
　b　10YR 3/2　黒褐色土
　c　10YR 5/4　褐　色　土
　d　10YR 3/1　黒　色　土
　e　10YR 3/2　黒褐色土

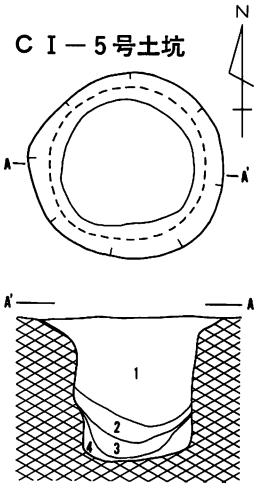
第6図　遺構実測図



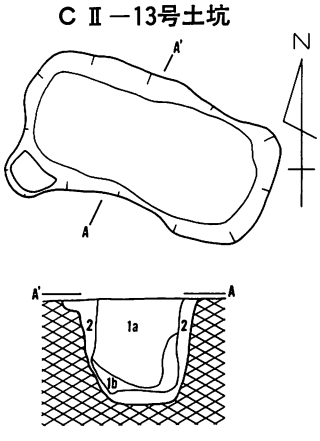
BⅡ－3号土坑
1－a　10YR 2/3　黒褐色土
b　〃　〃
2　10YR 3/4　暗褐色土



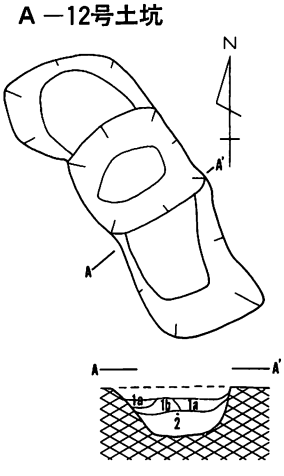
CⅠ－2号土坑
1　7.5YR 3/3　暗褐色土
2　7.5YR 3/1　黒　〃
3　10 YR 3/4　暗　〃



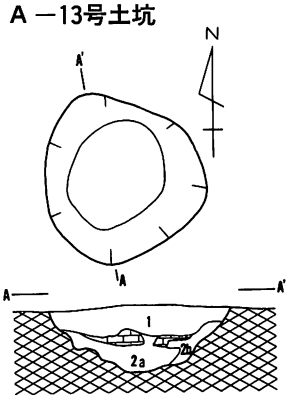
CⅠ－5号土坑
1　10YR 2/2　黒褐色土
2　10YR 3/4　暗褐色土
3　10YR 3/1　黒 色 土
4　10YR 5/4　にぶい褐色土



CⅡ－3号土坑
1－a　10YR 2/3　黒褐色土
b　10YR 3/4　暗　〃
2　10YR 5/6　黄　〃



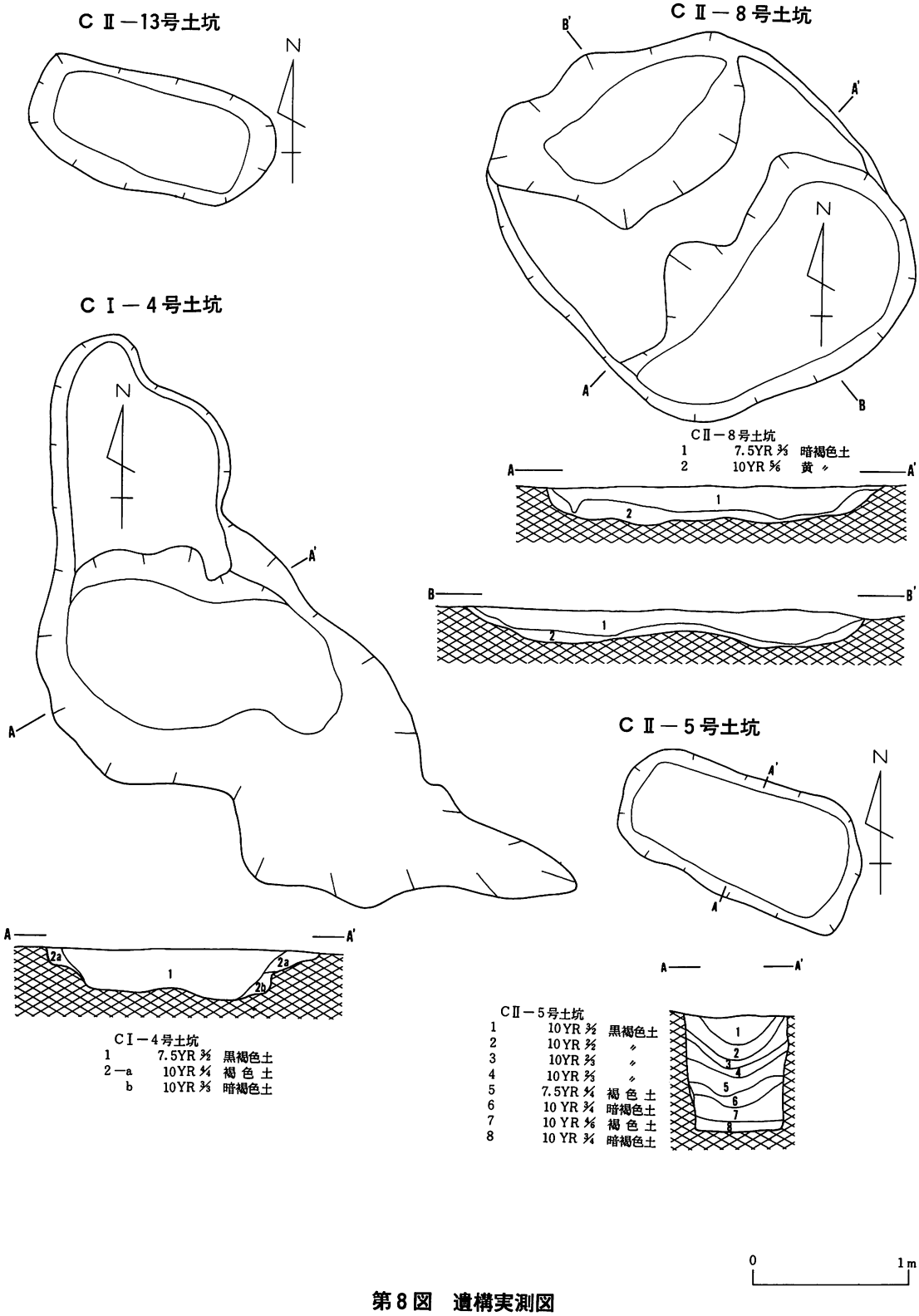
A－12号土坑
1－a　10YR 2/2　黒褐色土
b　〃
2　10YR 5/6　褐 色 土



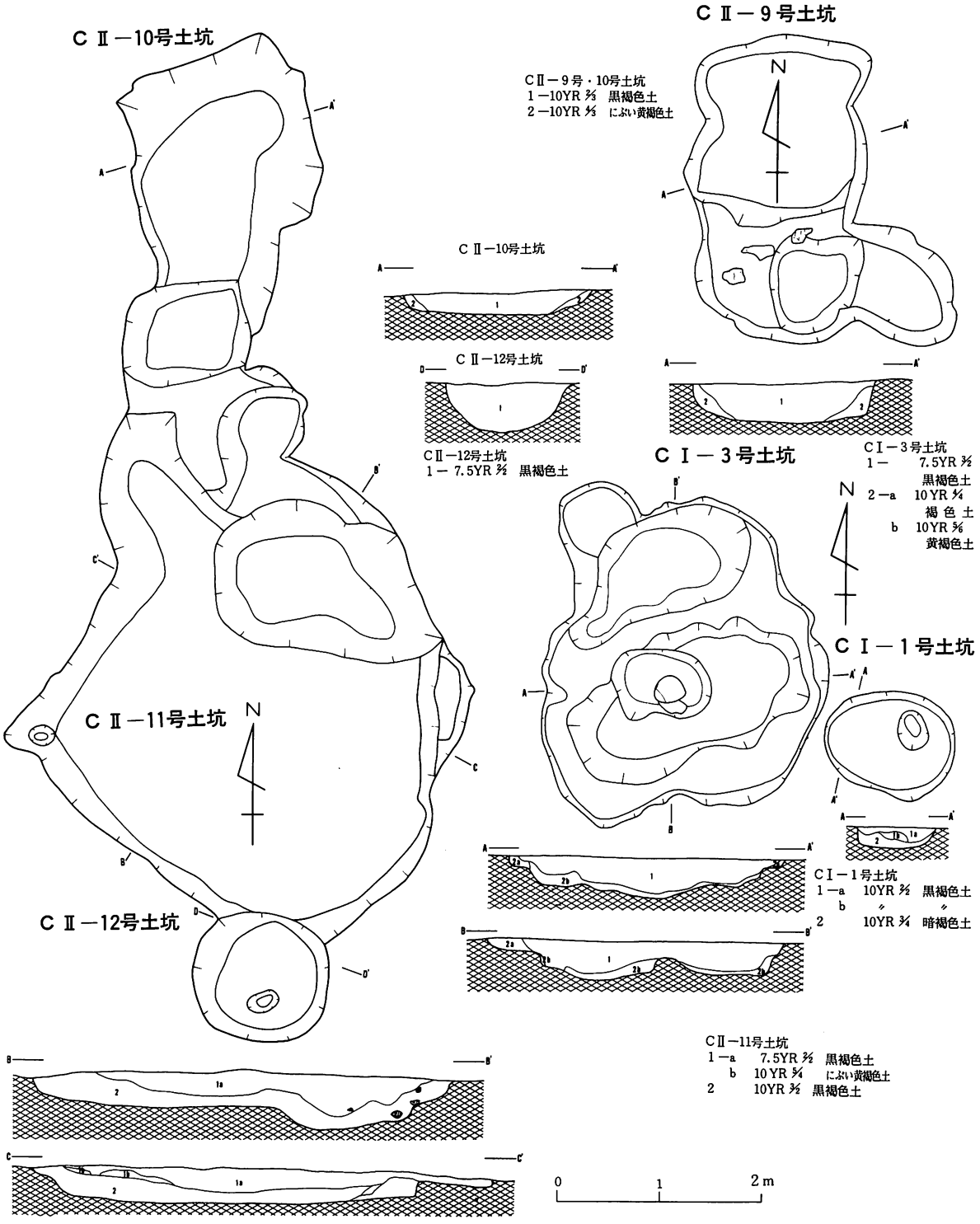
A－13号土坑
1　10YR 2/2　黒褐色土
2－a　10YR 3/4　暗　〃
b　10YR 5/6　黄　〃

0　1m

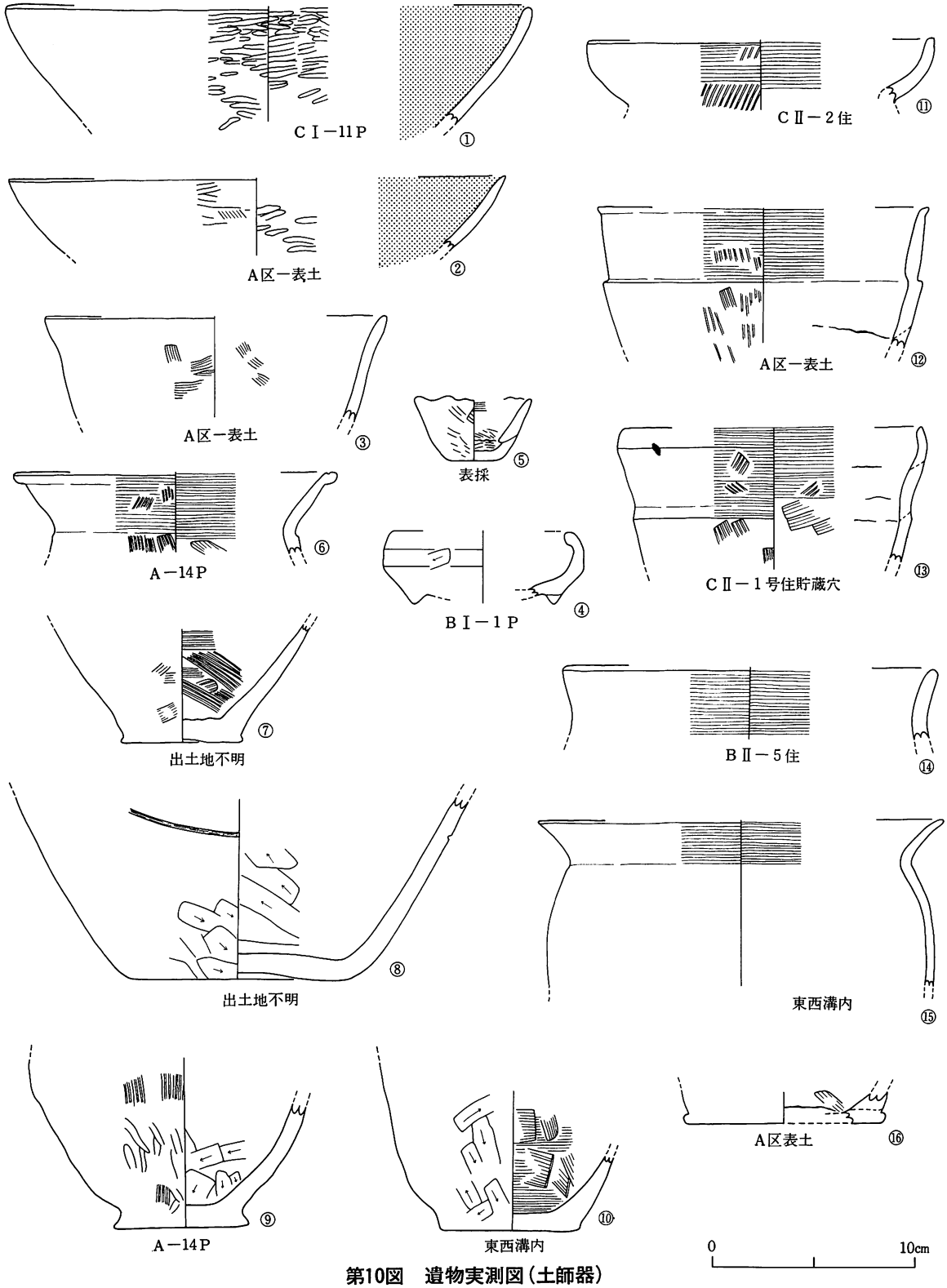
第7図　遺構実測図


C Ⅱ－13号土坑
N
C Ⅱ－8号土坑
B'
A'
N
A
B
CⅡ－8号土坑
1　7.5YR 3/3　暗褐色土
2　10YR 5/6　黄 〃
A
A'
1
2
B
B'
1
2
C Ⅰ－4号土坑
N
A'
A
A
A'
2a
1
2a
2b
CⅠ－4号土坑
1　7.5YR 3/2　黒褐色土
2－a　10YR 4/4　褐 色 土
b　10YR 3/3　暗褐色土
C Ⅱ－5号土坑
N
A'
A
A
A'
CⅡ－5号土坑
1　10YR 3/2　黒褐色土
2　10YR 3/2　〃
3　10YR 3/3　〃
4　10YR 3/3　〃
5　7.5YR 4/4　褐 色 土
6　10 YR 3/4　暗褐色土
7　10 YR 4/6　褐 色 土
8　10 YR 3/4　暗褐色土
1
2
3
4
5
6
7
8
0
1m

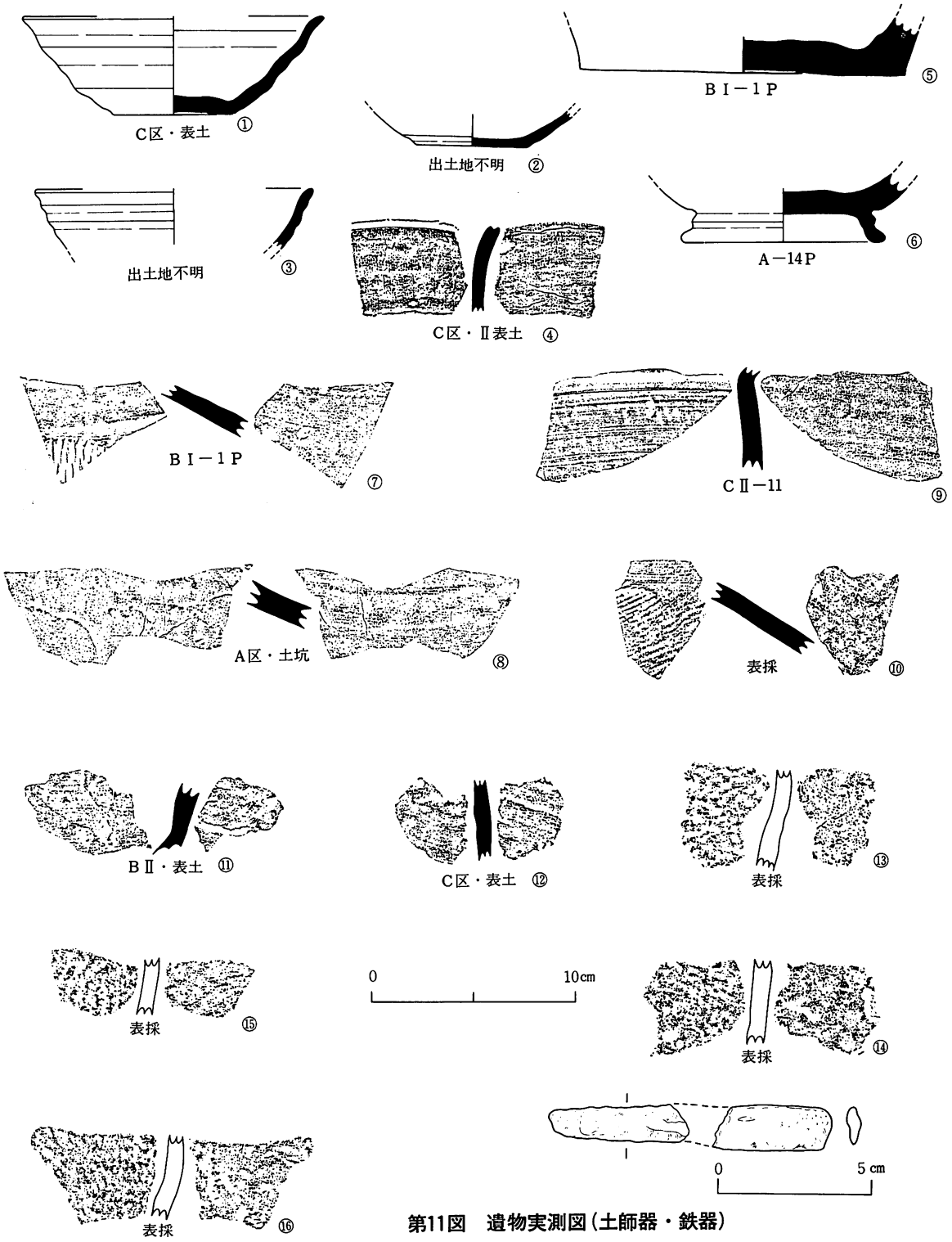
第8図　遺構実測図


C Ⅱ－10号土坑
C Ⅱ－9号土坑
CⅡ－9号・10号土坑
1－10YR 2/3 黒褐色土
2－10YR 4/3 にぶい黄褐色土
C Ⅱ－10号土坑
C Ⅱ－12号土坑
CⅡ－12号土坑
1－ 7.5YR 2/2 黒褐色土
C Ⅰ－3号土坑
CⅠ－3号土坑
1－ 7.5YR 3/2 黒褐色土
2－a 10YR 4/4 褐色土
b 10YR 5/6 黄褐色土
C Ⅰ－1号土坑
C Ⅱ－11号土坑
C Ⅱ－12号土坑
CⅠ－1号土坑
1－a 10YR 2/2 黒褐色土
b 〃 〃
2 10YR 3/4 暗褐色土
CⅡ－11号土坑
1－a 7.5YR 2/2 黒褐色土
b 10YR 5/4 にぶい黄褐色土
2 10YR 3/2 黒褐色土
N
0 1 2m

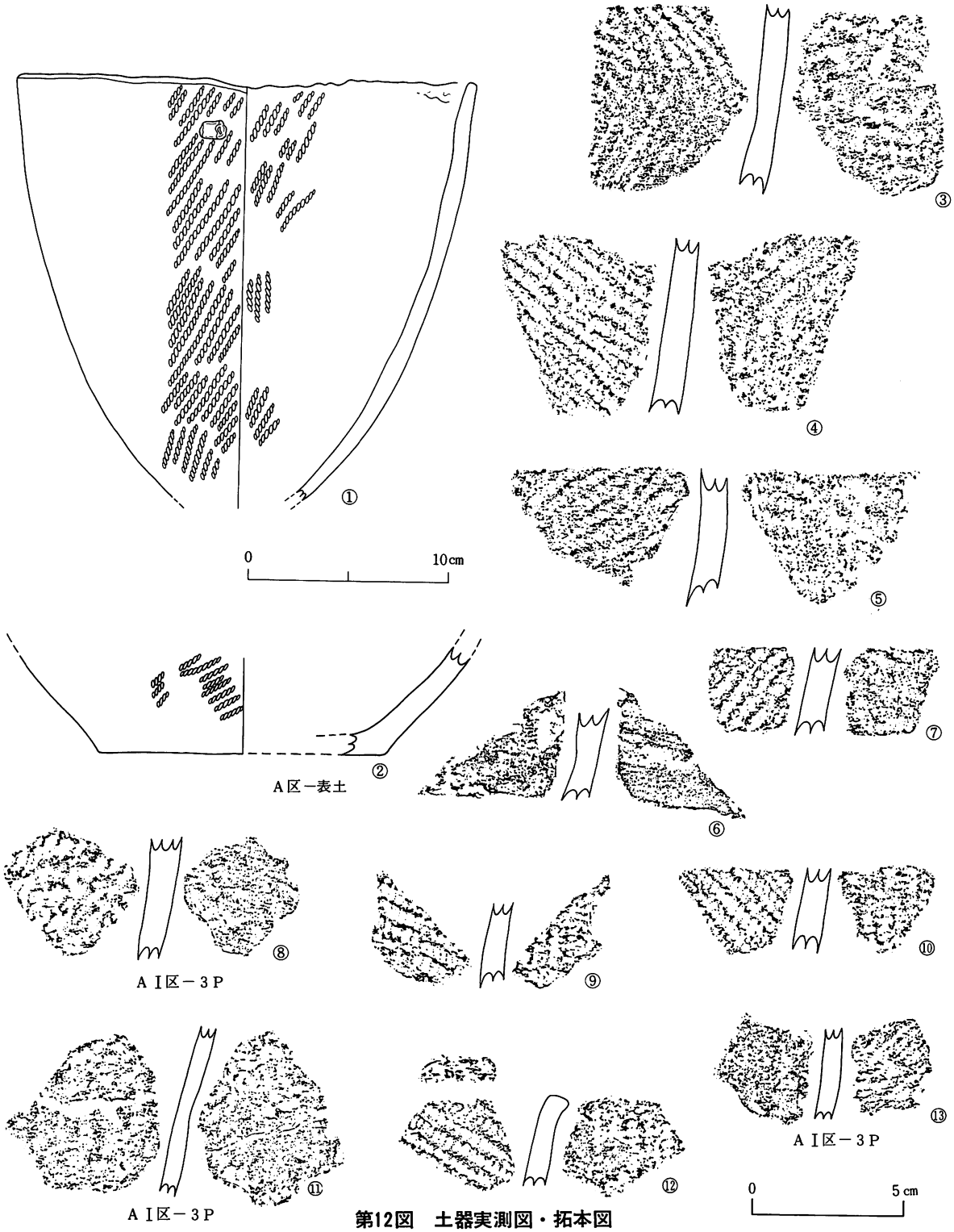
第9図　遺構実測図



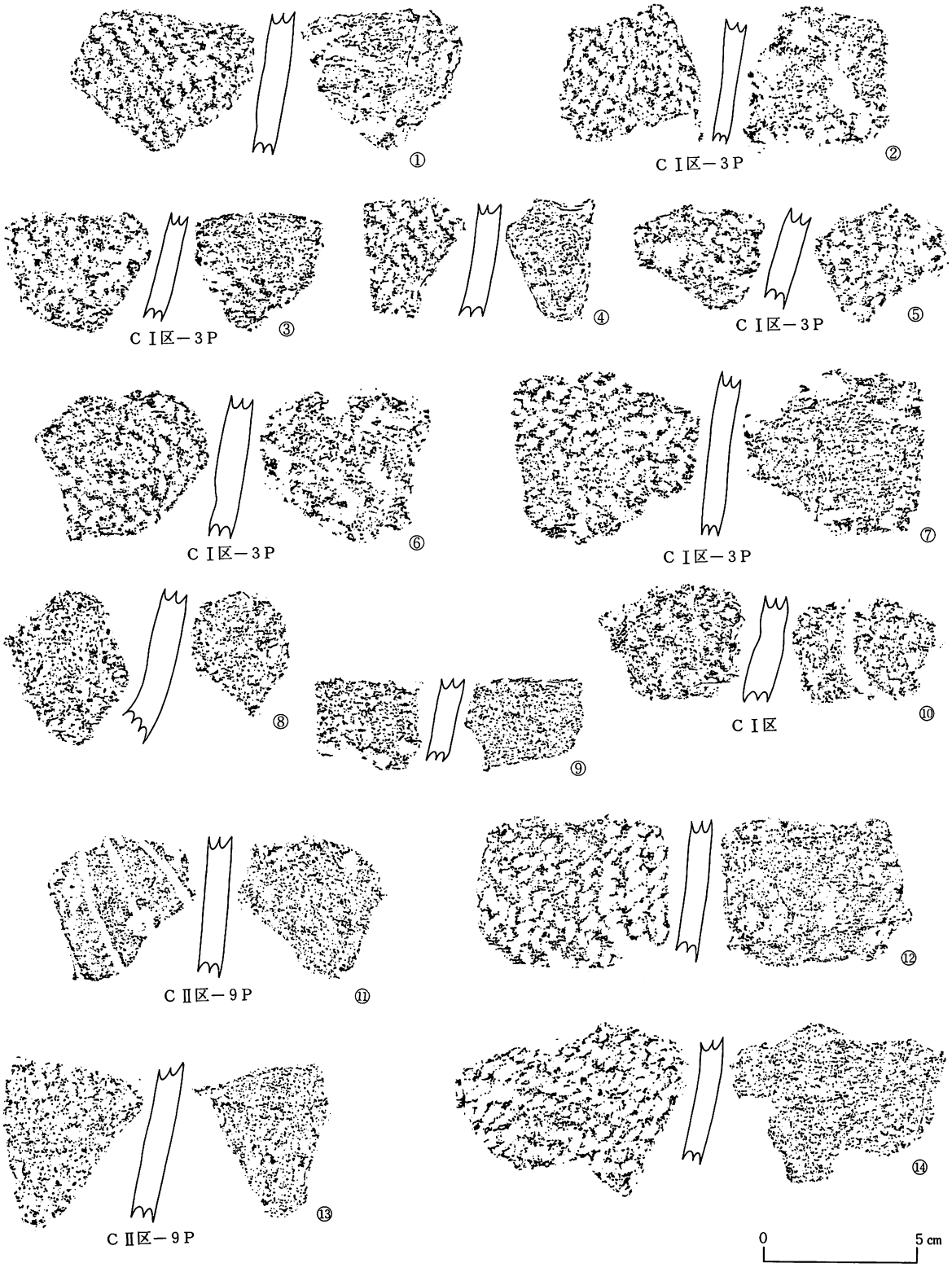
第10図　遺物実測図（土師器）



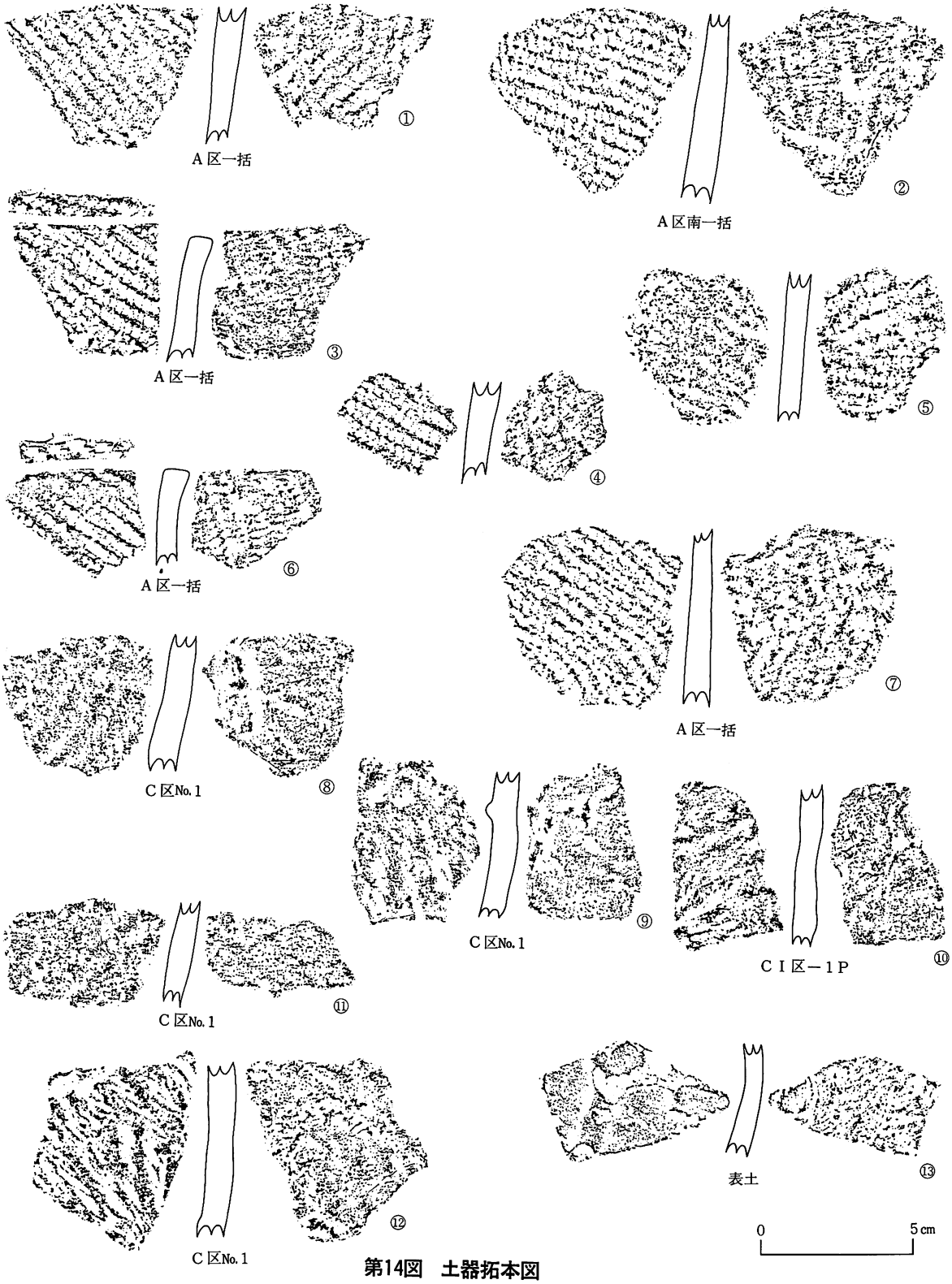
第11図　遺物実測図（土師器・鉄器）



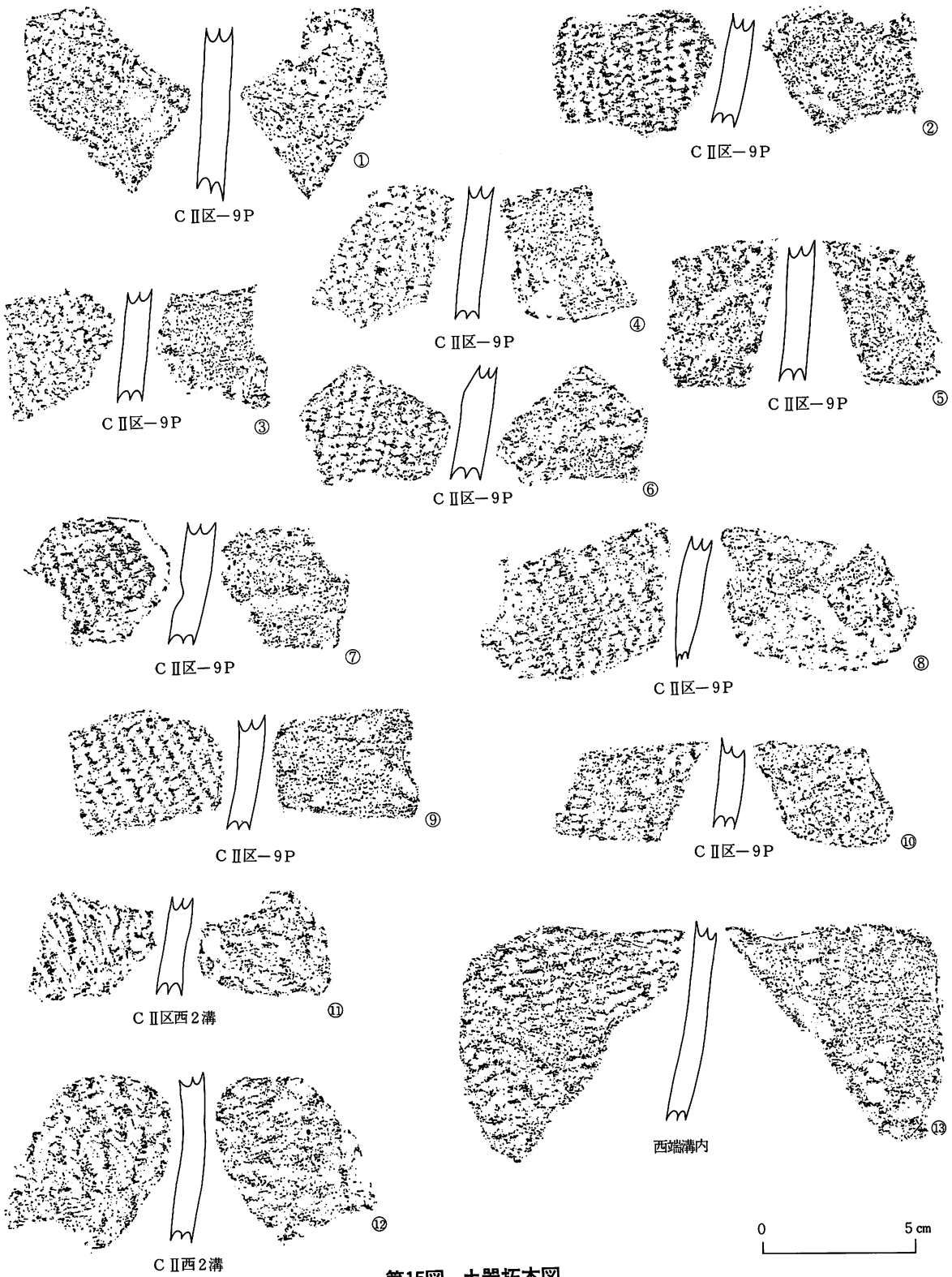
第12図　土器実測図・拓本図


①
C Ⅰ区－3P
②
C Ⅰ区－3P
③
④
C Ⅰ区－3P
⑤
C Ⅰ区－3P
⑥
C Ⅰ区－3P
⑦
⑧
⑨
C Ⅰ区
⑩
C Ⅱ区－9P
⑪
⑫
C Ⅱ区－9P
⑬
⑭
0
5 cm

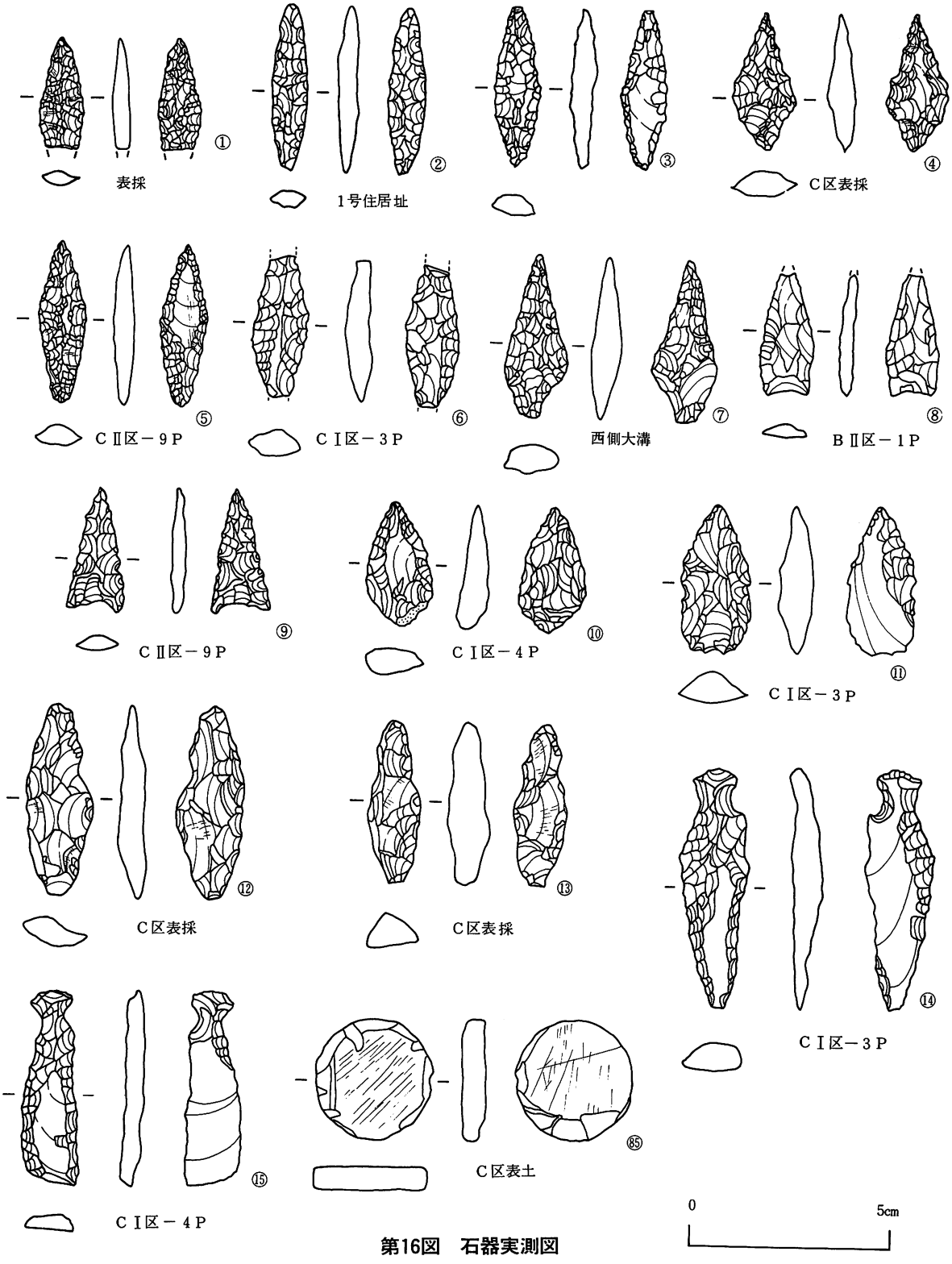
第13図　土器拓本図


①
A区一括
②
A区南一括
③
A区一括
④
⑤
⑥
A区一括
⑦
A区一括
⑧
C区No.1
⑨
C区No.1
⑩
CⅠ区－1P
⑪
C区No.1
⑫
C区No.1
⑬
表土
0
5cm

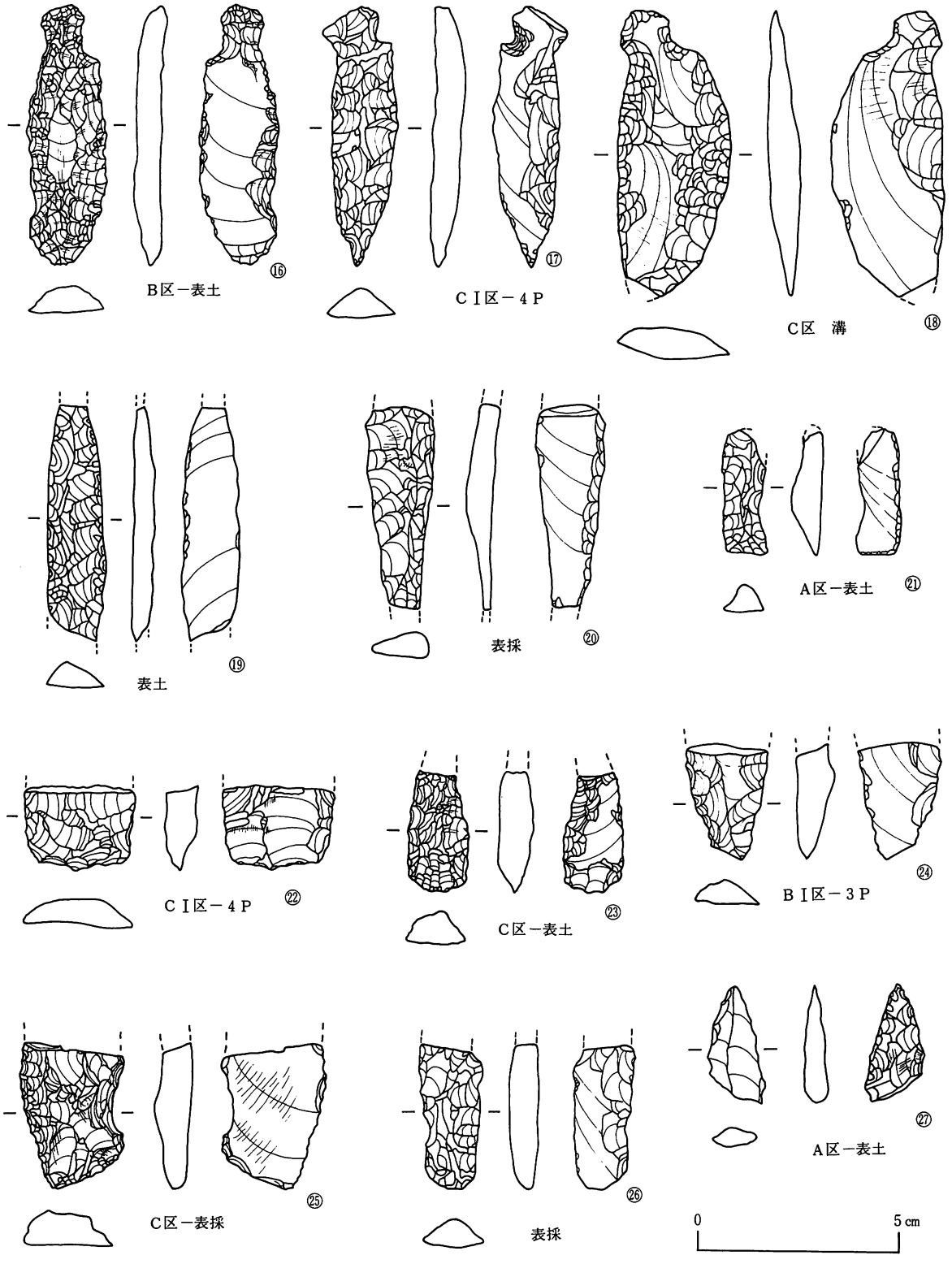
第14図　土器拓本図


①
CⅡ区－9P
②
CⅡ区－9P
③
CⅡ区－9P
④
CⅡ区－9P
⑤
CⅡ区－9P
⑥
CⅡ区－9P
⑦
CⅡ区－9P
⑧
CⅡ区－9P
⑨
CⅡ区－9P
⑩
CⅡ区－9P
⑪
CⅡ区西2溝
⑫
CⅡ西2溝
⑬
西端溝内
0
5 cm

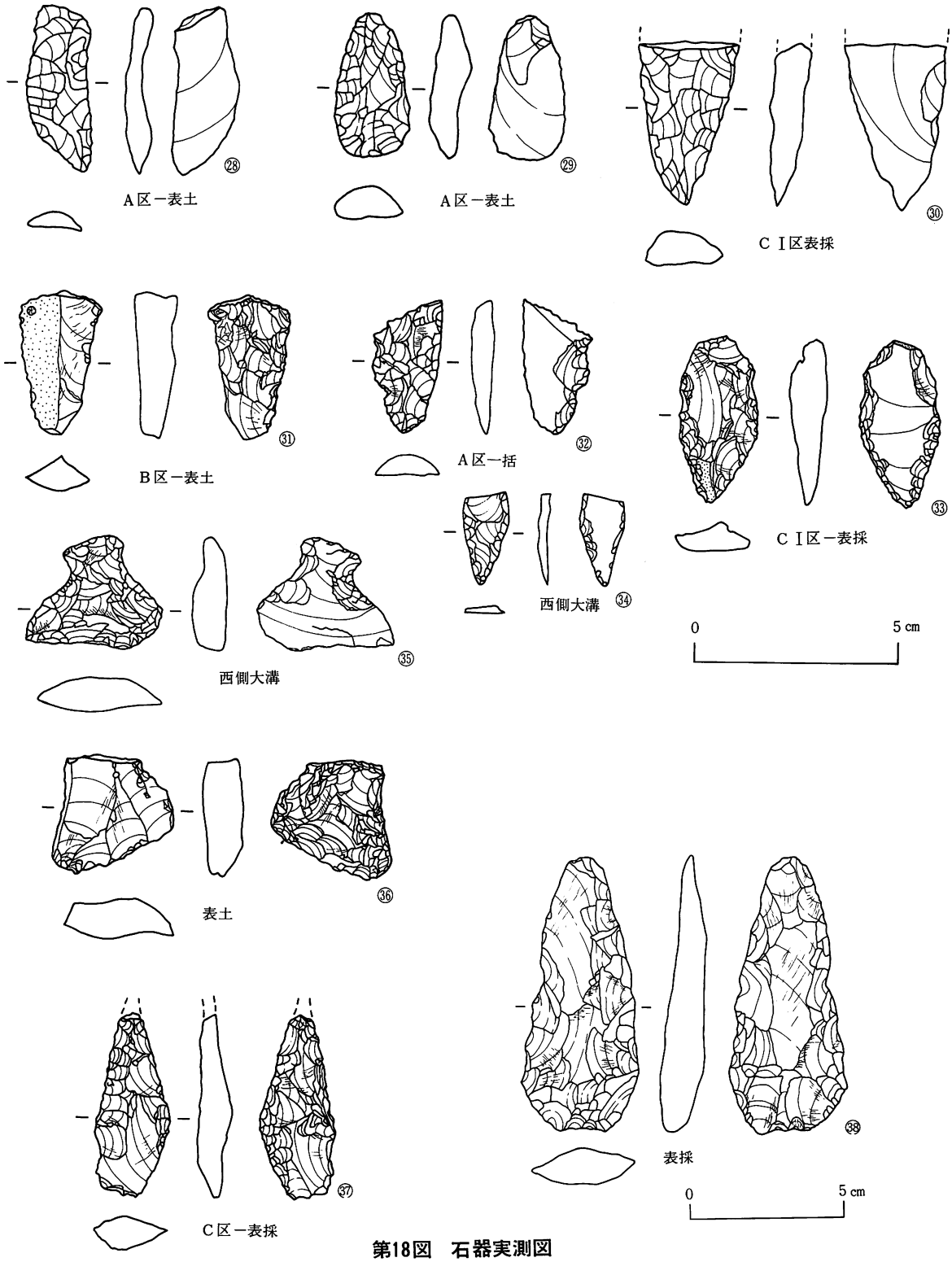
第15図　土器拓本図


①
表採
②
1号住居址
③
④
C区表採
⑤
CⅡ区－9P
⑥
CⅠ区－3P
⑦
西側大溝
⑧
BⅡ区－1P
⑨
CⅡ区－9P
⑩
CⅠ区－4P
⑪
CⅠ区－3P
⑫
C区表採
⑬
C区表採
⑭
CⅠ区－3P
⑮
CⅠ区－4P
85
C区表土
0
5cm

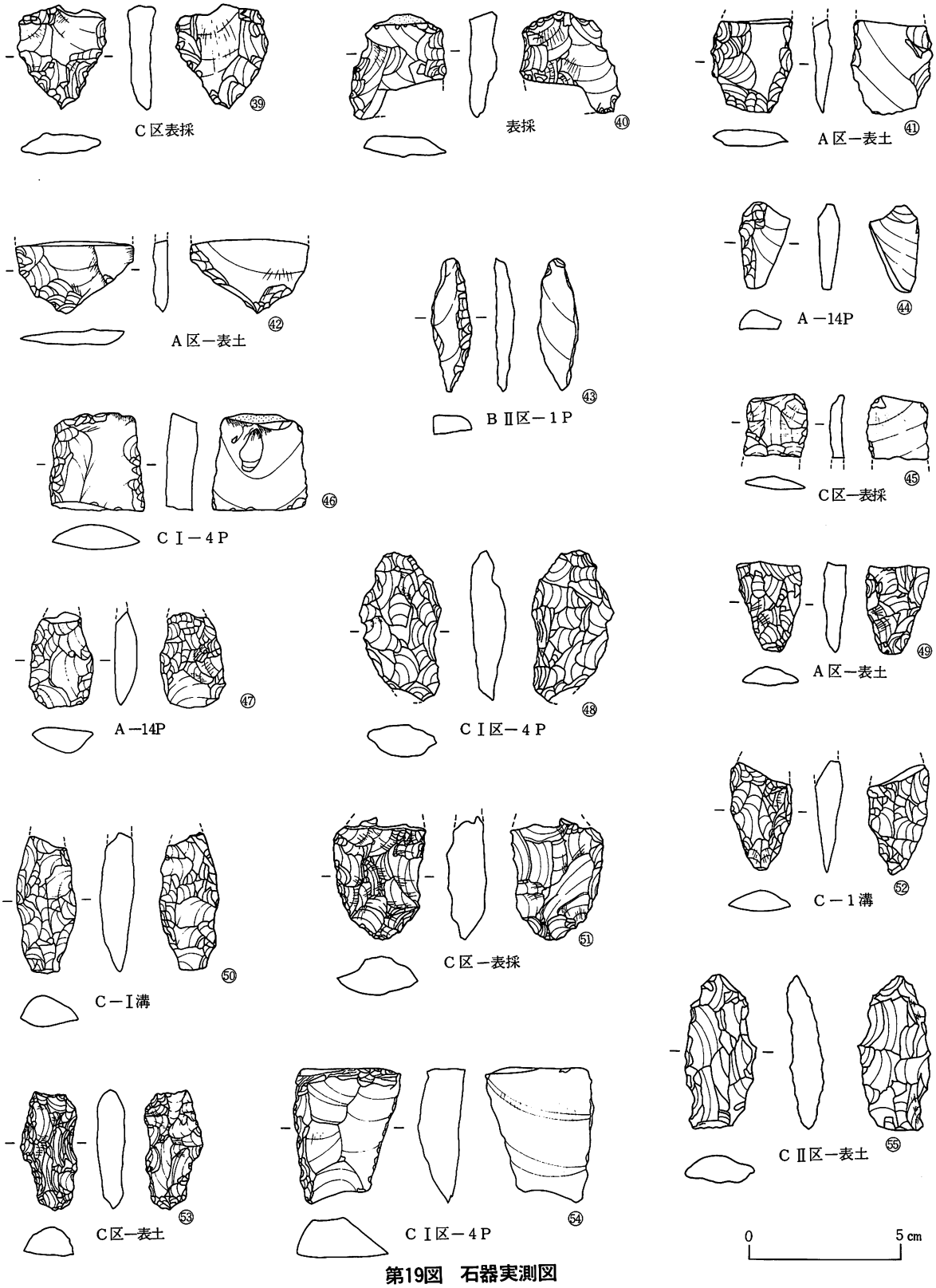
第16図　石器実測図


⑯
B区－表土
⑰
CⅠ区－4P
⑱
C区　溝
⑲
表土
⑳
表採
㉑
A区－表土
㉒
CⅠ区－4P
㉓
C区－表土
㉔
BⅠ区－3P
㉕
C区－表採
㉖
表採
㉗
A区－表土
0
5cm

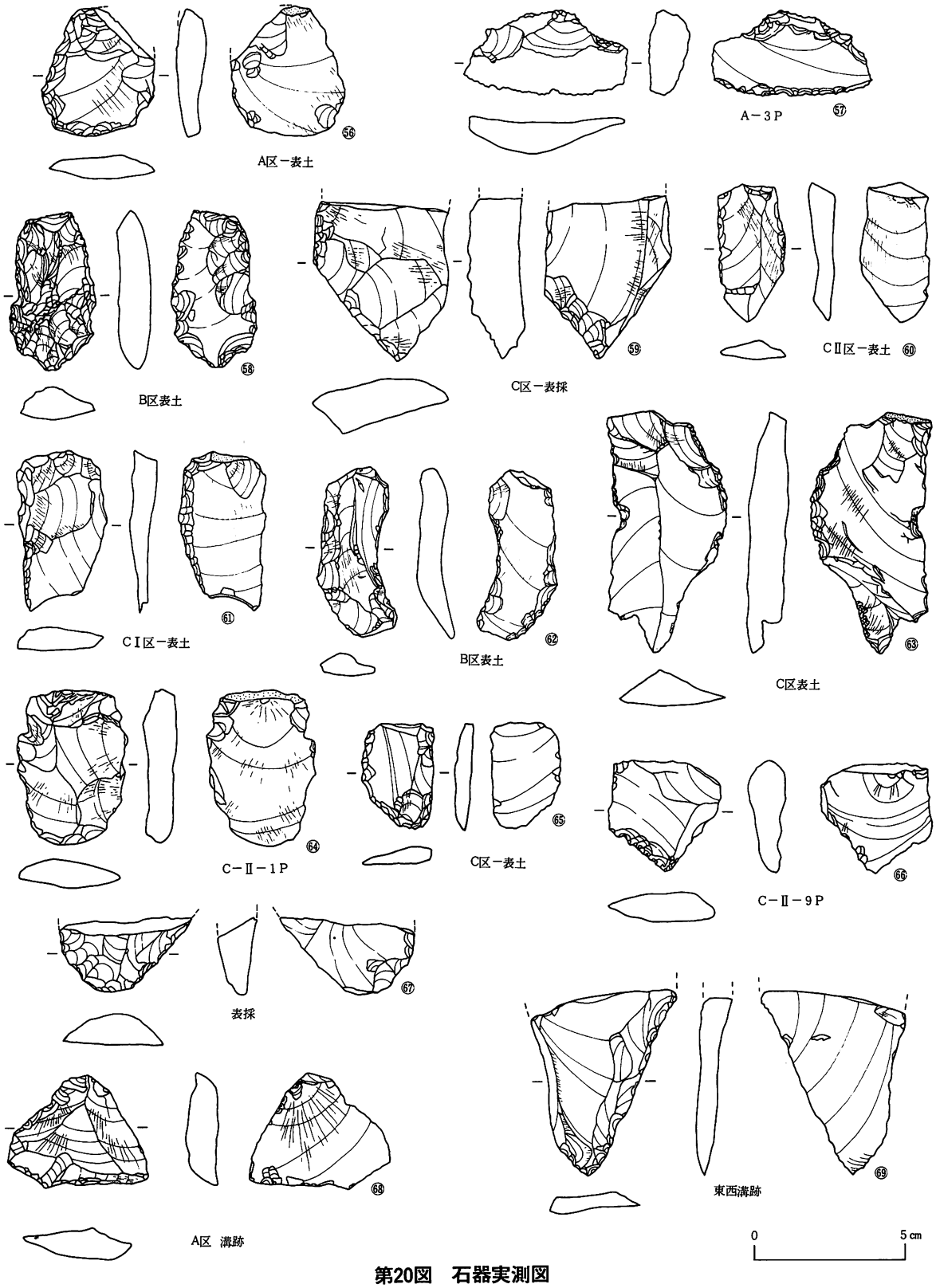
第17図　石器実測図


㉘
A区ー表土
㉙
A区ー表土
㉚
C Ⅰ区表採
㉛
B区ー表土
㉜
A区一括
㉝
C Ⅰ区ー表採
㉞
西側大溝
㉟
西側大溝
㊱
表土
㊲
C区ー表採
㊳
表採
0
5 cm
0
5 cm

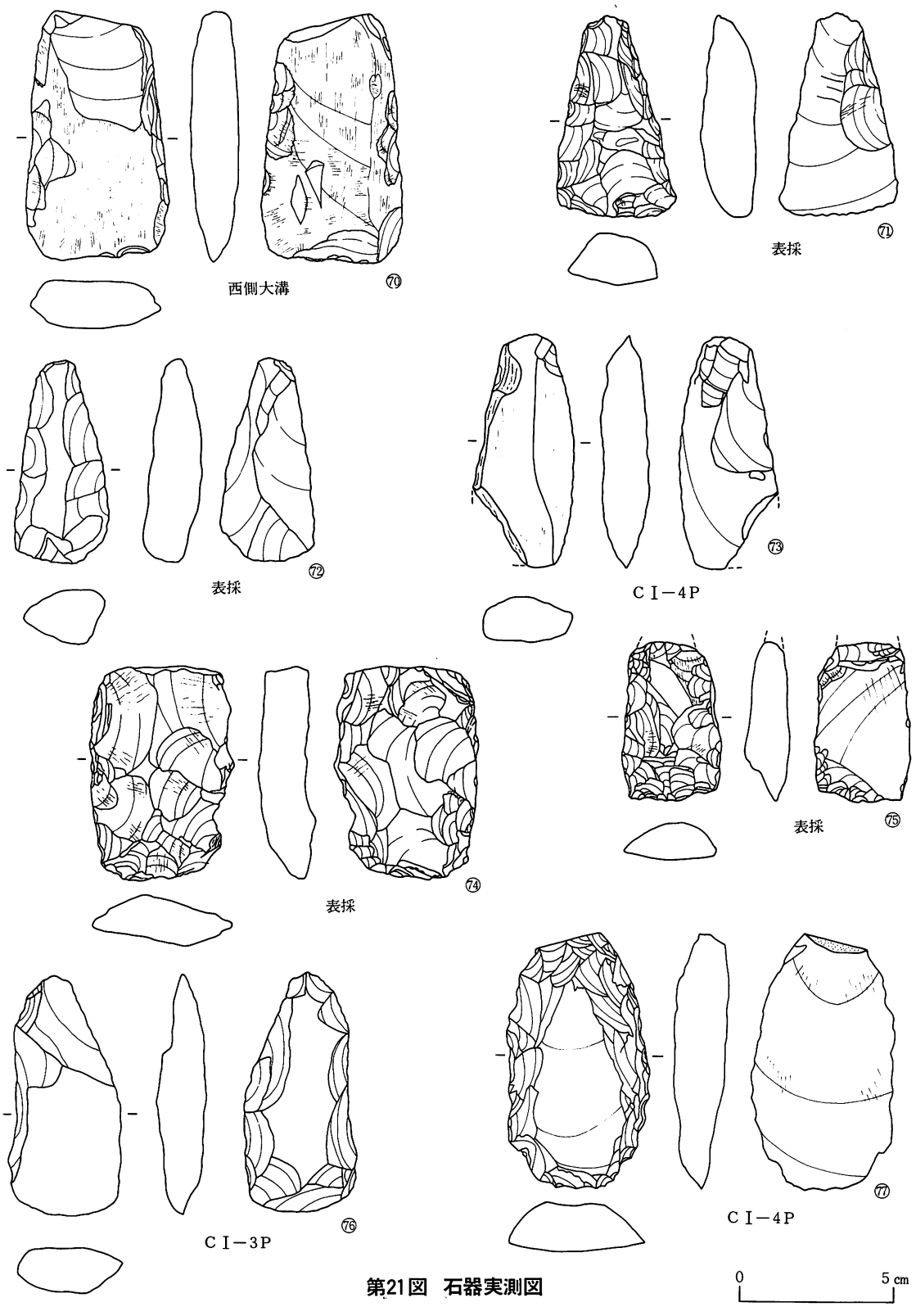
第18図　石器実測図


C区表採
39
表採
40
A区ー表土
41
A区ー表土
42
B Ⅱ区ー1P
43
A ー14P
44
C区ー表採
45
C Ⅰ－4P
46
A区ー表土
49
A ー14P
47
C Ⅰ区－4P
48
C ー1溝
52
C区ー表採
51
C－Ⅰ溝
50
C Ⅱ区ー表土
55
C区ー表土
53
C Ⅰ区－4P
54
0
5cm

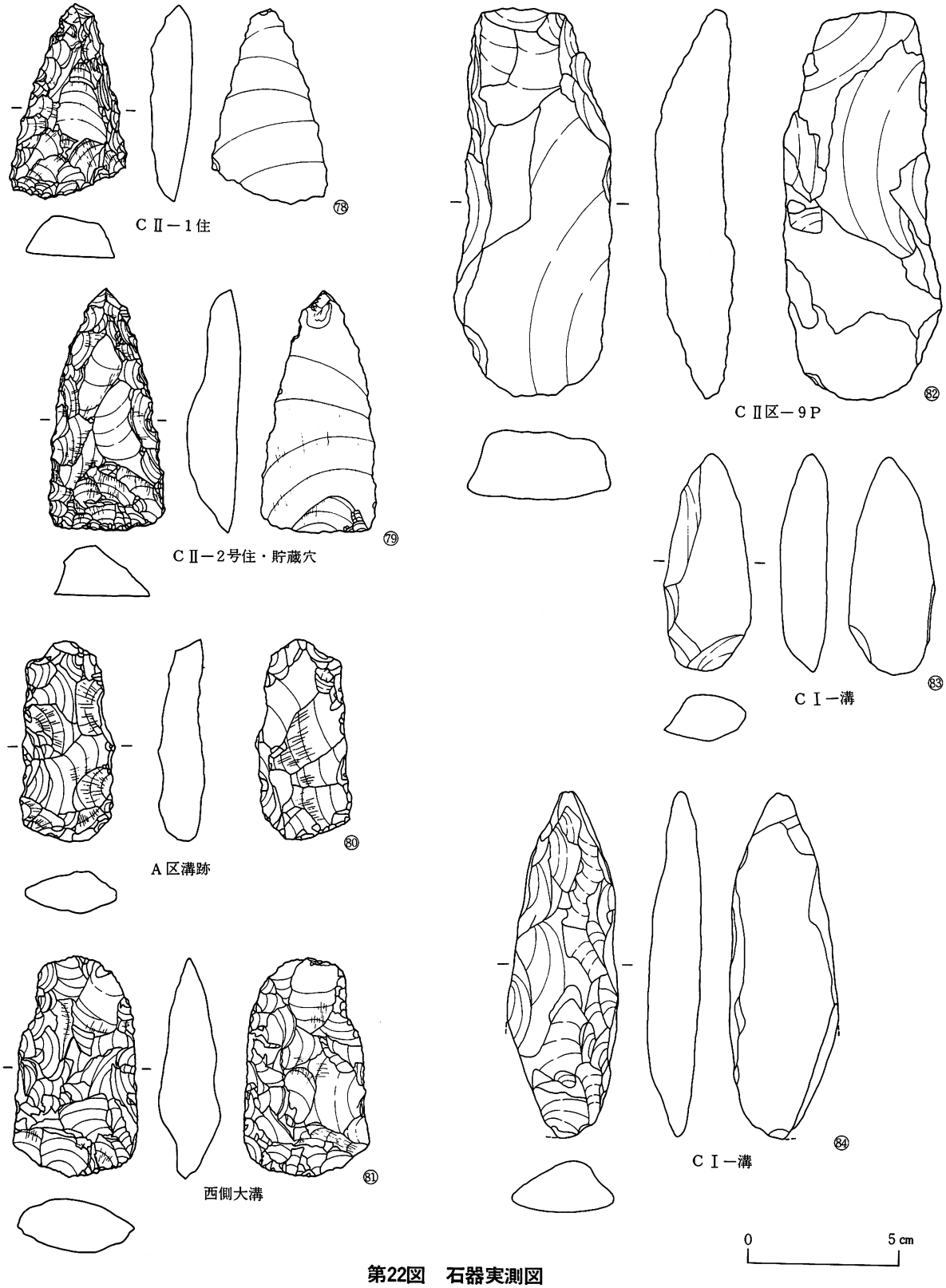
第19図　石器実測図


A区－表土
A－3P
B区表土
C区－表採
CⅡ区－表土
CⅠ区－表土
B区表土
C区表土
C－Ⅱ－1P
C区－表土
C－Ⅱ－9P
表採
A区 溝跡
東西溝跡
0
5cm

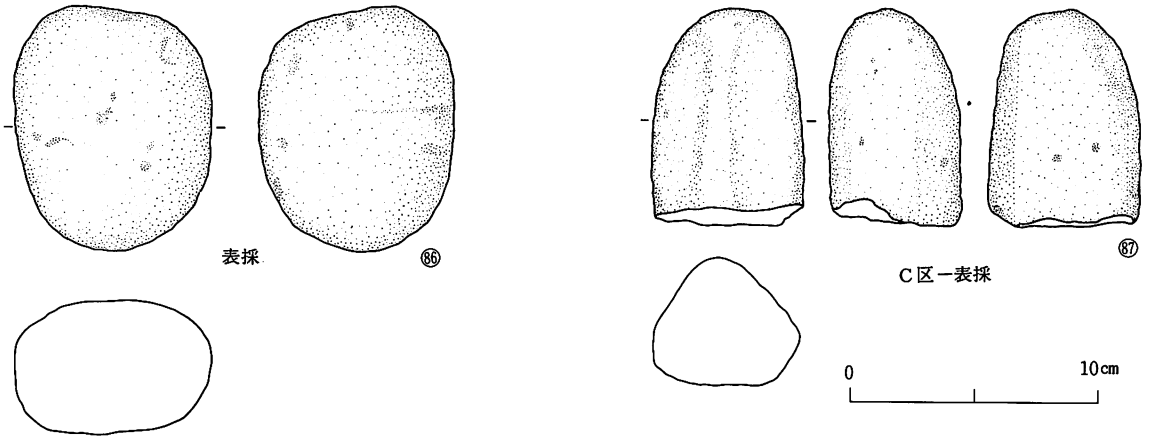
第20図　石器実測図



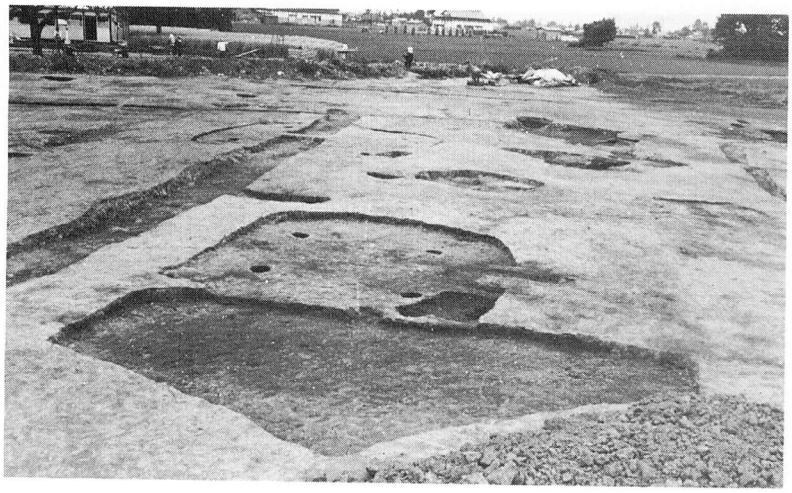
第21図　石器実測図



第22図　石器実測図



第23図　石器実測図



調査後全景

調査後全景

調査後全景

写真図版 1

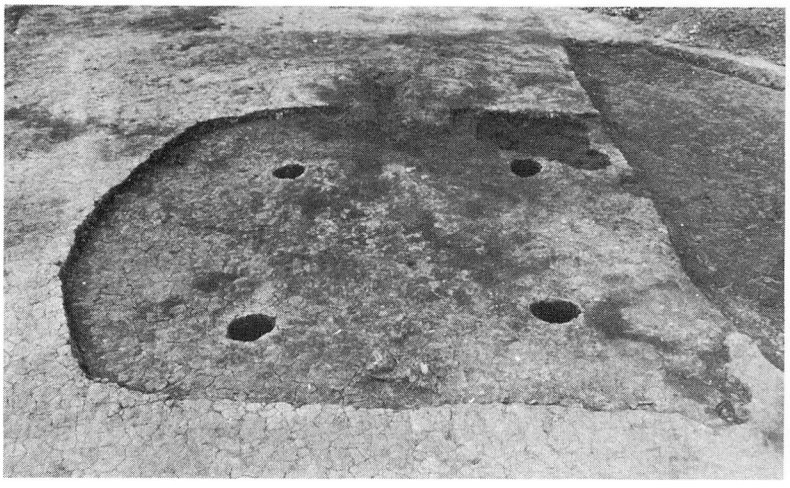
1号住居址

2号住居址

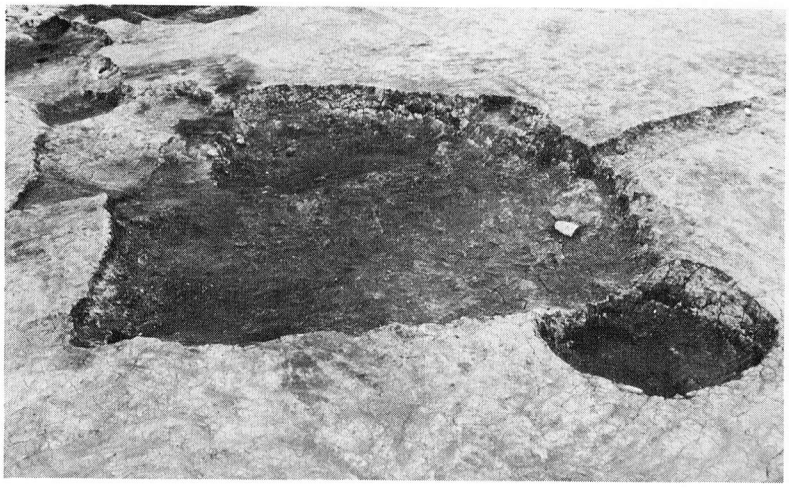
3号住居址

写真図版 2

4号住居址

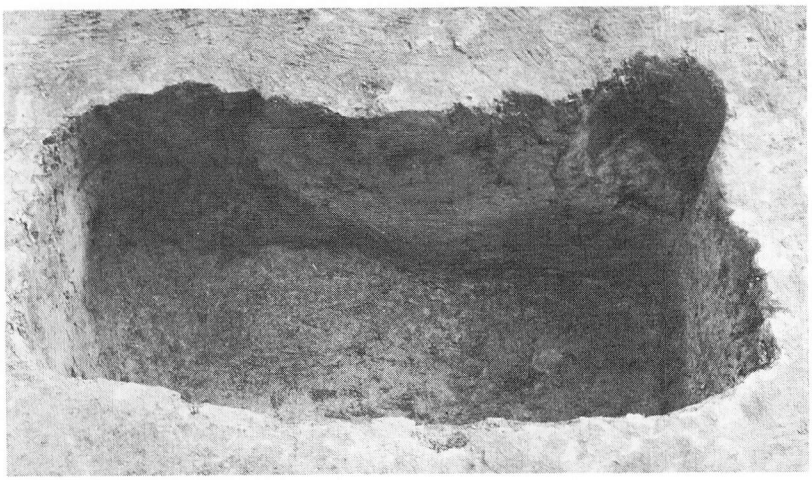


5号住居址

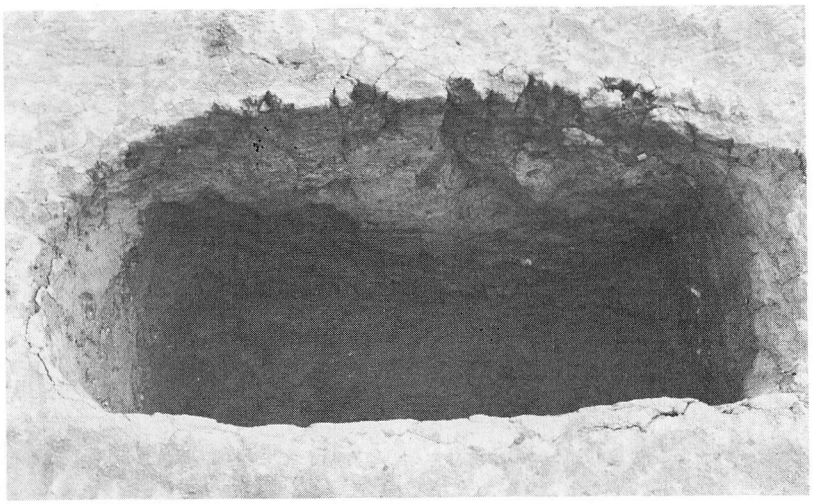


BI-2号土坑

写真図版 3



CⅡ-3号土坑

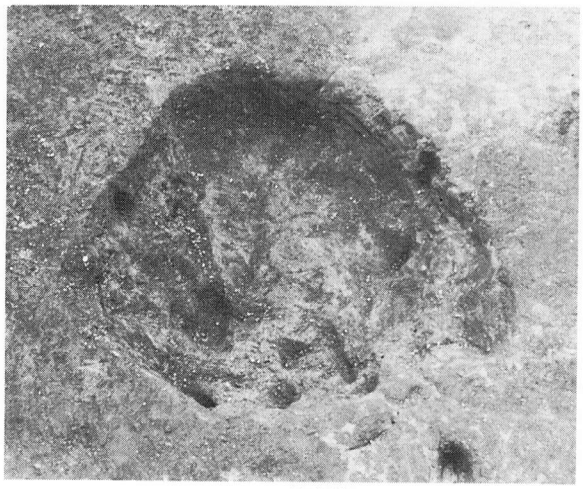


CⅡ-4号土坑

BⅠ-3号土坑

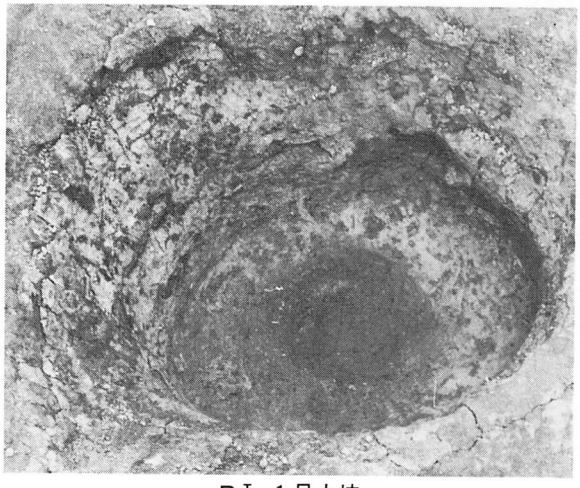
写真図版 4

A-２号土坑



A-11号土坑

A-４号土坑

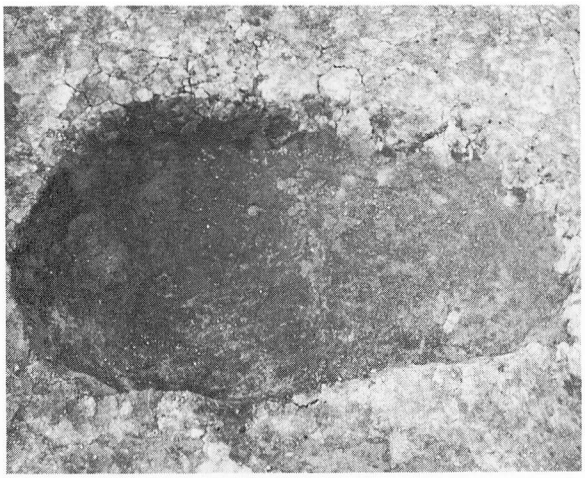


BⅠ-１号土坑

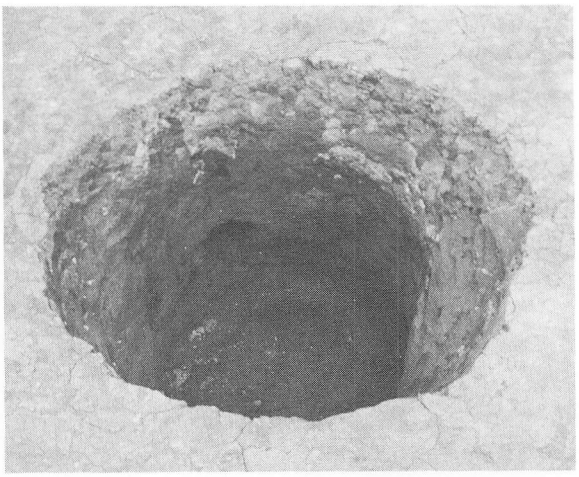
A-10号土坑

BⅡ-３号土坑

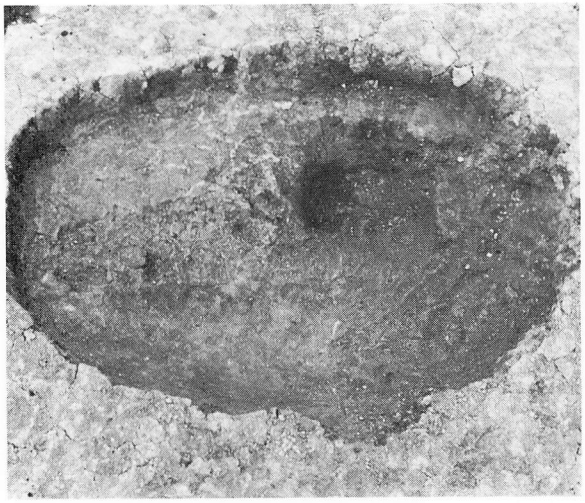
写真図版５



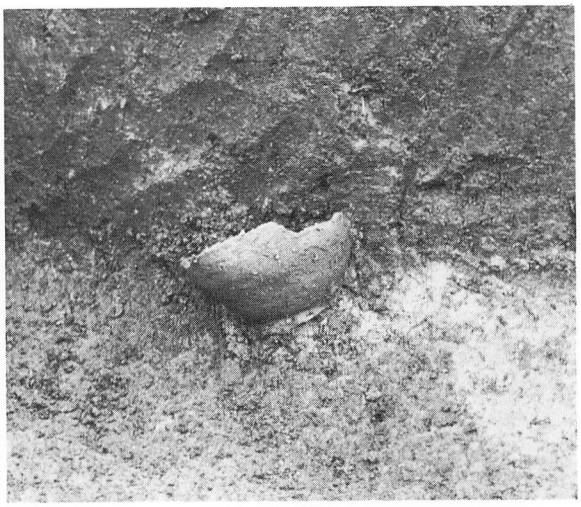
CⅠ-2号土坑



CⅠ-5号土坑

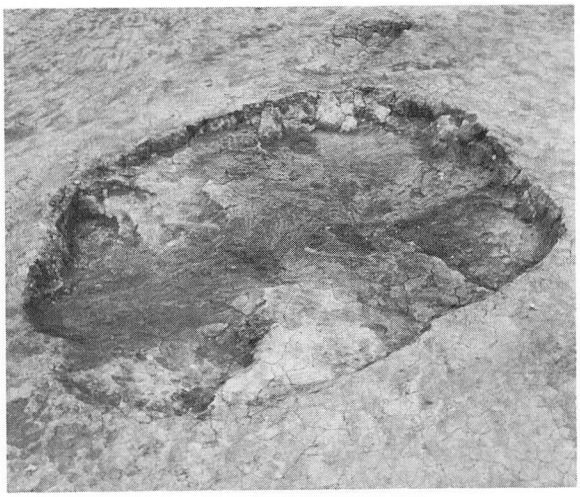


遺構名不明



A-14土坑

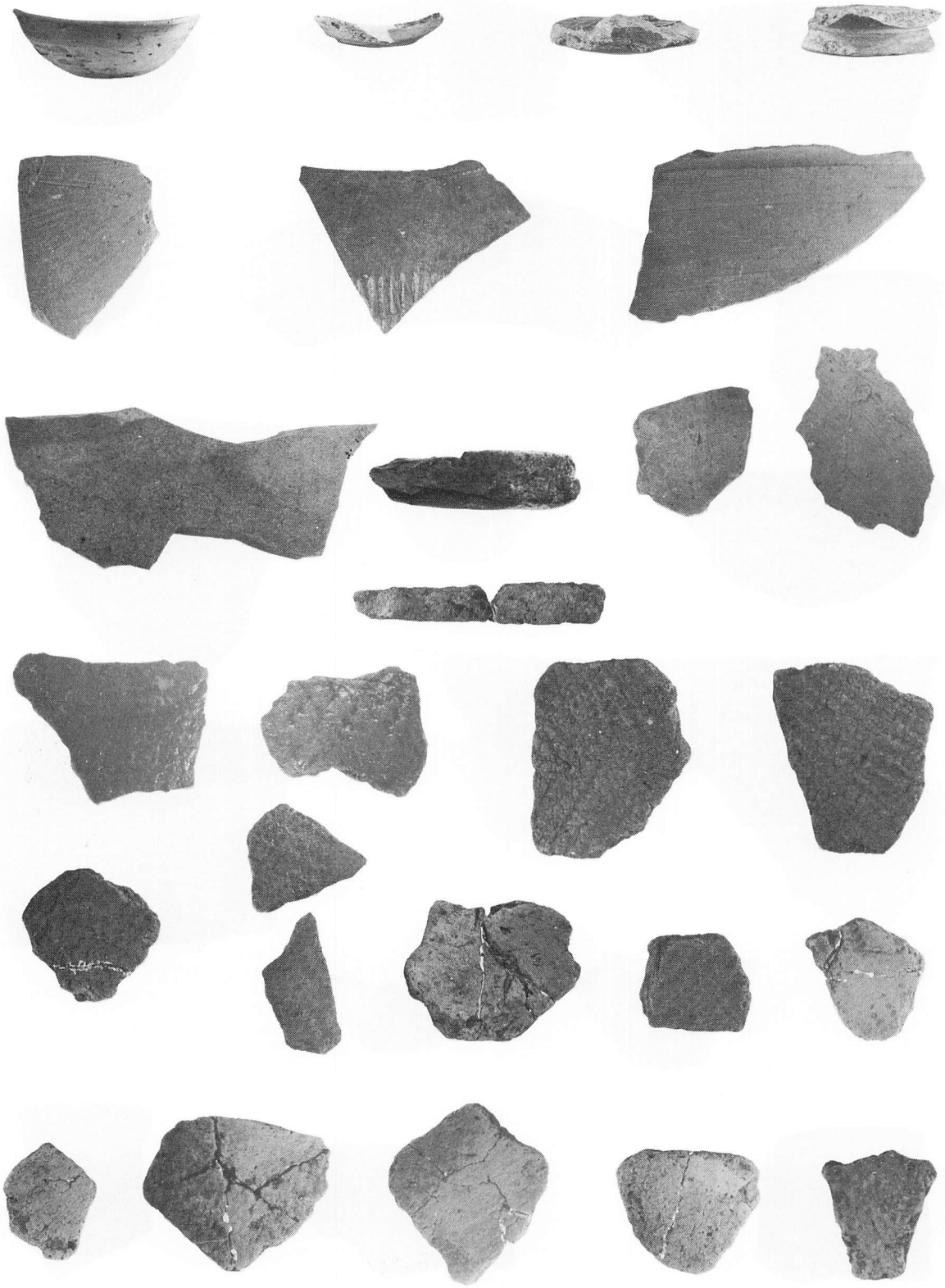
遺構名不明



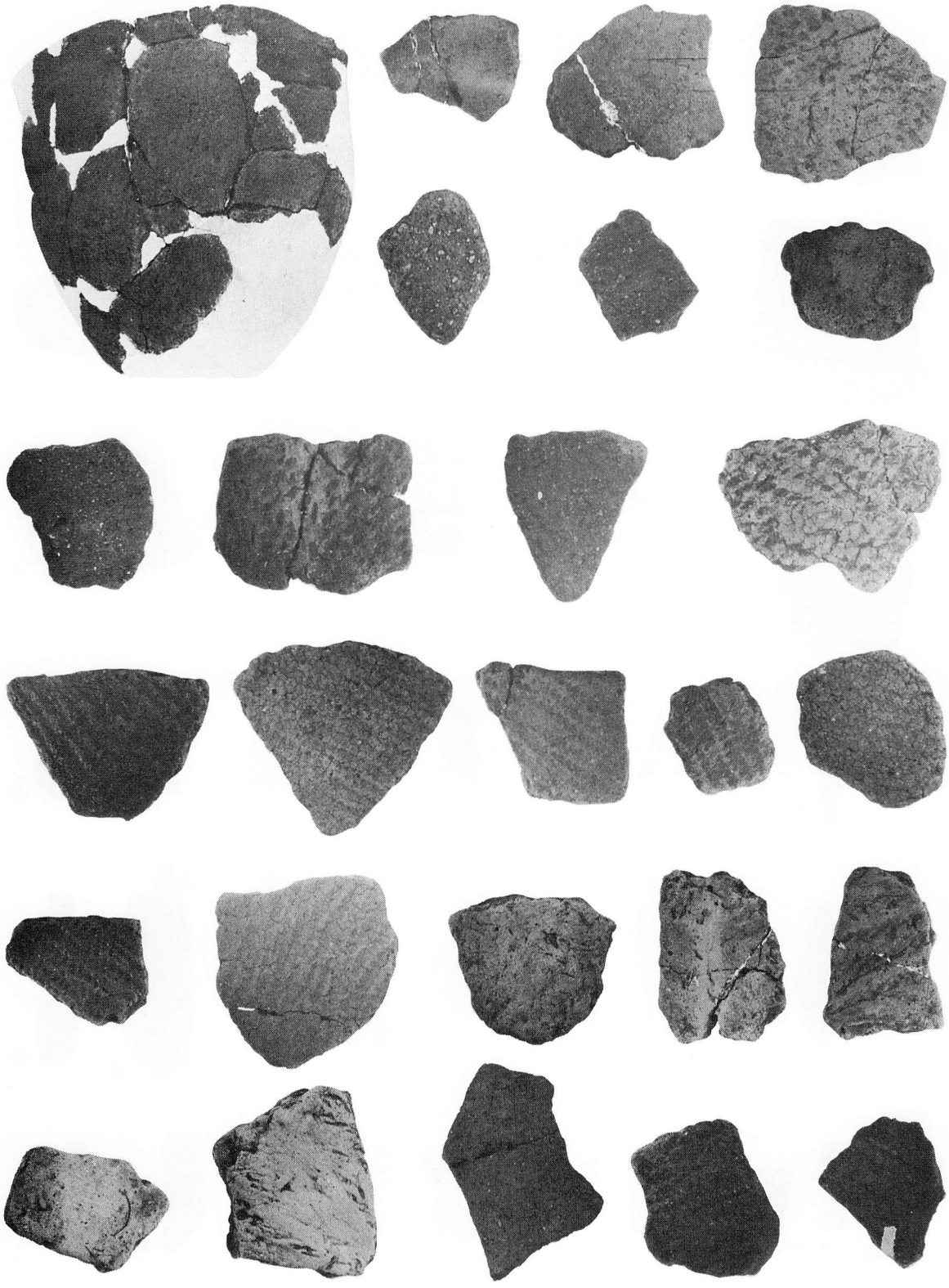
CⅡ-8号土坑

写真図版 6

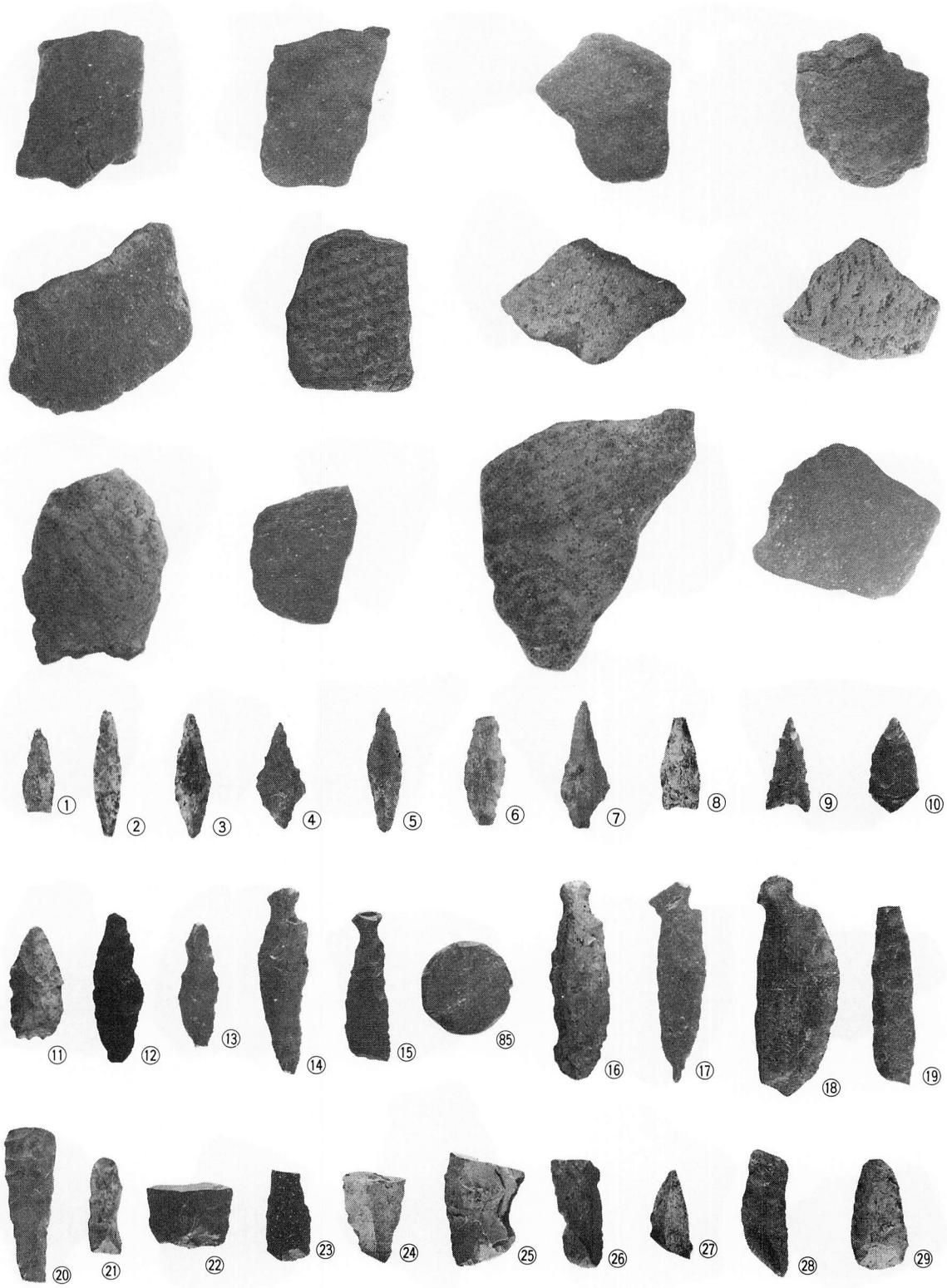
写真図版 7 （土師器）



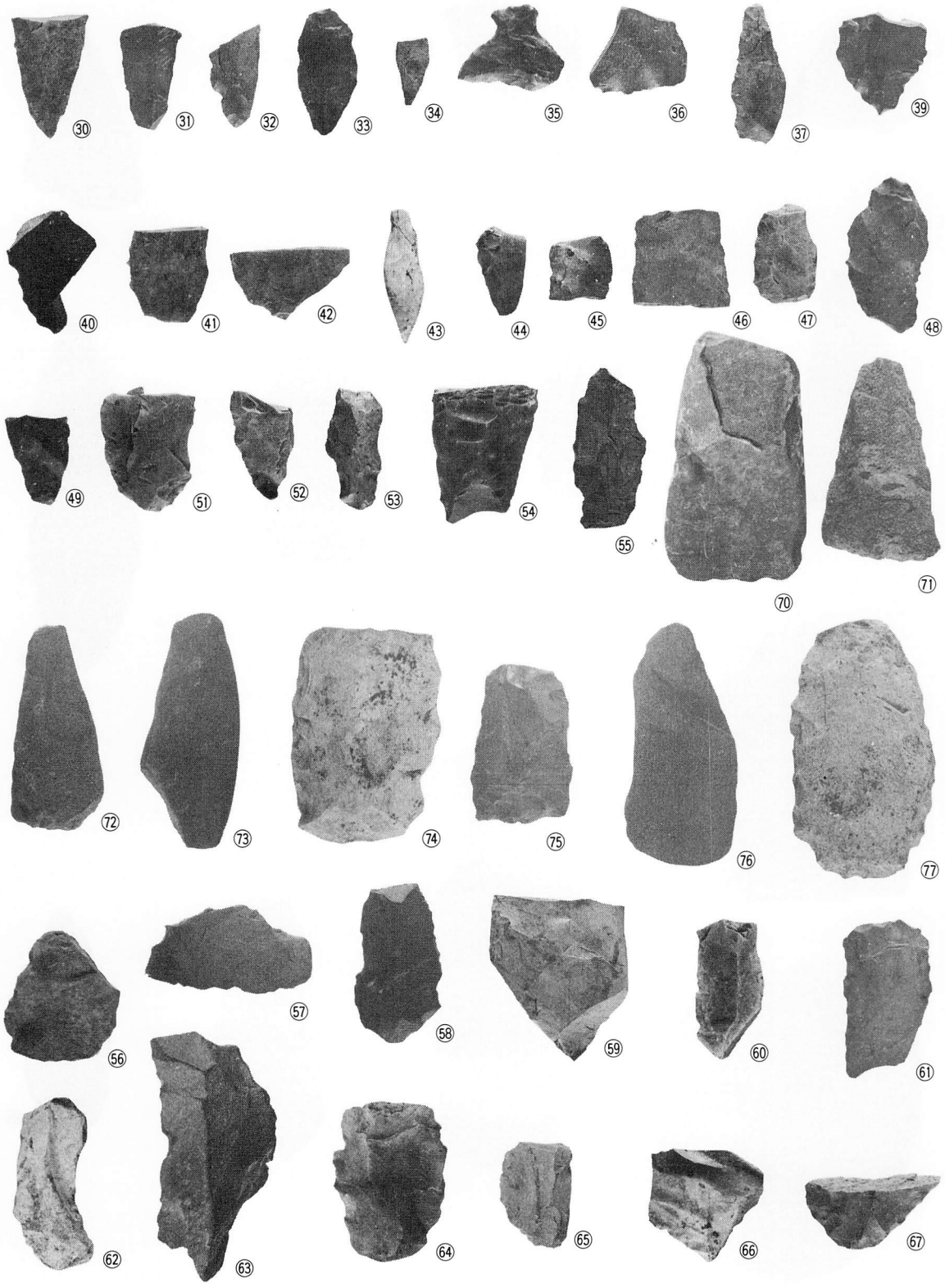
写真図版 8 （須恵器，縄文土器）



写真図版 9 （縄文土器）

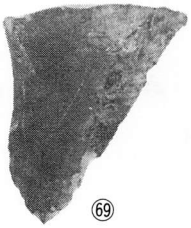


写真図版10（縄文土器・石器）


30
31
32
33
34
35
36
37
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
51
52
53
54
55
70
71
72
73
74
75
76
77
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67

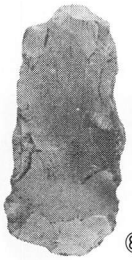
写真図版11（石器）

⑥⑧


⑥⑨

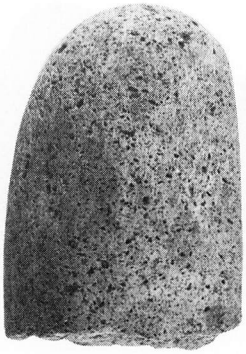
⑦⑧

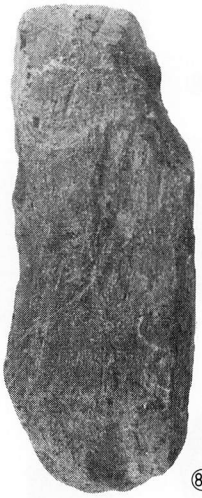
⑦⑨


⑧⓪

⑧①

⑧④


⑧⑦


⑧②

㊳

⑧③

⑧⑥

写真図版12（石器）

岩手県埋文センター文化財報告書第44集

金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)

水沢市　竈堂遺跡
東大畑遺跡
大曽根遺跡

昭和57年３月20日　印刷
昭和57年３月25日　発行

発行　(財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷
ＴＥＬ（0196）38－9001

印刷　㈱　熊　谷　印　刷

©岩手県埋文センター1982